災害情報調査研究レポート⑱

Disaster-Information Management vol.18

ISSN 1881-4247
2025

災害情報研究会

2022 年８月豪雨時の村上市土石流災害における避難行動
The Evacuation Behaviour of the Inhabitants in the Landslide Disaster 2022 in Niigata

2023 年７月豪雨災害時の秋田市における情報行動
The Behaviors of the Inhabitants in the Inundation of Akita City 2023

2024 年能登半島地震における災害情報の伝達と住民の対応
The Information Dissemination and Behaviors of the Inhabitants in 2024 Noto Earthquake

「令和６年能登半島地震」における緊急地震速報・災害情報などに関する対応と評価
―金沢・富山・新潟の住民を対象とした調査から―
Residents' Evaluation and Reaction to Earthquake Early Warning and Disaster Information in The 2024 Noto Peninsula Earthquake　―From a questionnaire survey of residents in Kanazawa, Toyama, and Niigata―

南海トラフ地震臨時情報とそれへの反応
　－全体的傾向および愛媛県下の状況について―
The Information Dissemination and its Social Response to the 'Nankai Trough Earthquake Extra Information'
- Overall trends and the situation in Ehime Prefecture -

災害情報調査研究レポート　Vol.18
Disaster-Information Management

目　次

2022 年8月豪雨時の村上市土石流災害における避難行動 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

The Evacuation Behaviour of the Inhabitants in the Landslide Disaster 2022 in Niigata

中村　功（東洋大学社会学部）

2023 年7月豪雨災害時の秋田市における情報行動 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・19

The Behaviors of the Inhabitants in the Inundation of Akita City 2023

中村　功（東洋大学社会学部）

2024 年能登半島地震における災害情報の伝達と住民の対応 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 37

The Information Dissemination and Behaviors of the Inhabitants in 2024 Noto Earthquake

中村　功（東洋大学社会学部）

中森　広道（日本大学文理学部）

「令和6年能登半島地震」における緊急地震速報・災害情報などに関する対応と評価

―金沢・富山・新潟の住民を対象とした調査から―・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・113

Residents' Evaluation and Reaction to Earthquake Early Warning and Disaster Information in The 2024 Noto Peninsula Earthquake

—From a questionnaire survey of residents in Kanazawa, Toyama, and Niigata—

中森　広道（日本大学文理学部）

南海トラフ地震臨時情報とそれへの反応

－全体的傾向および愛媛県下の状況について― ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 129

The Information Dissemination and its Social Response to the 'Nankai Trough Earthquake Extra Information'

- Overall trends and the situation in Ehime Prefecture -

中村　功（東洋大学社会学部）

森岡　千穂（松山大学人文学部）

市川　虎彦（松山大学人文学部）

2022 年 8 月豪雨時の村上市土石流災害における避難行動

東洋大学社会学部　中村　功

1. はじめに

2022 年 8 月 3 日から 4 日にかけて、南から暖かい空気が入り込んだ影響で、前線の活動が活発化し、東北地方や北陸地方で局地的な大雨となった(図 1)。この大雨で最上川をはじめとする全国 132 河川で氾濫し、206 箇所で土砂災害が発生した(国土交通省 2022a)。その結果、全国で死者行方不明 3 名、重傷者 2 名といった人的被害や、全壊家屋 28 戸、半壊家屋 285 戸といった物的被害が発生している(内閣府, 2022)。このうち土砂災害については、土石流が 89 件、地滑りが 14 件、がけ崩れが 103 件であり、負傷者 1 名、全壊家屋 10 戸、半壊家屋 6 戸、一部損壊家屋 72 戸の被害となった(国土交通省, 2022b)。

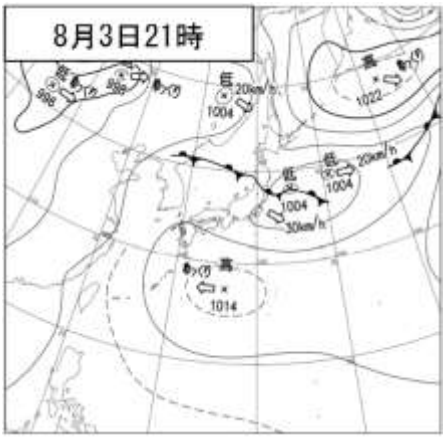

図 1 災害当日の天気図(新潟地方気象台, 2022)

図 2 小岩内地区の土石流被害

この災害で今回注目したいのは、新潟県村上市小岩内(こいわうち)地区で発生した土石流災害である。一般に土石流からの避難が成功することは稀だが、今回は事前の避難行動がなされていたからである。防災システム研究所の山村武彦氏はこれを「小岩内の奇跡」と呼んでいる。本論ではその避難の実態、および背景について、市役所・住民への聞き取りおよび住民アンケート調査もとに検討する。

村上市小岩内地区では 8 月 3 日の 21 時過ぎから大雨となり、4 日の深夜 1 時頃、地区内の大沢川という沢で土石流が発生した。この災害で 6 戸の住宅が全壊し、3 戸が大規模半壊という大きな被害となった(村上市, 2022)。大沢川は幅 1 メートル程度の沢であったが、大規模な土石流が流木を先頭にして沢の両岸の住宅を襲った。土石流の一部は沢の本流から左岸側に大きくそれて、沢沿いの住宅の反対側に流れ、土地を深くえぐるような流路を形成した。こうした物的被害の一方、大けがを負った人が 1 人いたものの、死亡した住民はいなかった。図 2 はけが人が出た家屋の様子である。全体としてみると、大きな物的被害のわりには、人的被害は少なかったといえる。

筆者は住民への聞き取りの後、アンケート調査を行った。調査の対象は小岩内集落の全世帯

34 戸[*2]の住民である。対象者は各戸の 20 歳以上の住民一人ずつの 34 人で、1 世帯に複数の住民がいる場合は誕生日が 1 月 1 日に近いほうの住民に回答をお願いした。方法は自記式の郵送法で、調査期間は 2022 年 9 月下旬から 10 月上旬、回収数は 26 票、回収率は 76.5%であった(表 1)。

表 1　アンケート調査概要

対象者:　村上市小岩内集落全世帯の住民(各世帯から 1 人ずつ)34 名
回収数・率:　26 票(76.5%)
調査方法: 自記式、郵送配布、郵送回収
調査期間:　2022 年 9 月 15 日から 10 月 1 日
調査項目:　被害状況、避難指示の聴取の有無・方法、避難の有無、避難要因、水害経験等

2. 情報伝達

気象庁では村上市に対して、3 日の 11 時 33 分に土砂災害警戒情報を発し、さらに同 12 時 3 分に記録的短時間大雨情報、13 時 9 分から 3 度、線状降水帯についての情報を出し、警戒を呼びかけた(表 2)。さらにこの時、新潟地方気象台は 3 日の 13 時 28 分、19 時 32 分、21 時 30 分、そして翌 4 日の 1 時 36 分と合計 4 回、村上市の市長に直接電話をして、危機感を伝えている(新潟地方気象台, 2022)。もっとも、小市内地区がある神林地区に記録的短時間大雨情報が出されたのは、4 日の深夜 1 時 17 分で、大雨特別警報が出たのは同 1 時 56 分と、災害発生に間に合わなかった情報もあったが、気象庁からの警戒情報はおおむね適宜流されていたといってよいだろう。

表 2　発災前後に村上市に出された気象庁の情報

8/3　11:06	大雨警報(土砂・浸水)
11:33	土砂災害警戒情報
12:03	記録的短時間大雨情報(村上市朝日南東部)
13:09	線状降水帯情報(顕著な大雨に関する新潟県気象情報)
18:09	線状降水帯情報
18:56	記録的短時間大雨情報(村上市朝日南東部)
21:19	線状降水帯情報
8/4　1:17	記録的短時間大雨情報(村上市神林)
1:36	記録的短時間大雨情報(村上市神林)
1:56	大雨特別警報(土砂・浸水)
2:07	記録的短時間大雨情報(村上市神林)

(新潟地方気象台, 2022 より作成)

各種の情報に対応して村上市でも住民に避難を促す情報を発信している。村上市役所に対する聞き取りによれば、まず 3 日の 14 時 38 分に市の北部(小岩内地区は市の南部)の 2,230 世帯に対して避難指示を出している。これは市の北部から雨雲が来ており、土砂災害を警戒して出したものだったという。すなわち 11 時 33 分には土砂災害警戒情報が出ていたし、新潟県土木部の土砂災害警戒情報システムで、スネーク曲線や危険度分布を見て発表の参考にしたという。その後、市では 19 時 30 分に追加の避難指示を出した。対象は 10,725 世帯で、市の中心部を流れる三面川の氾濫を警戒して出したものだった。その発令のきっかけは、上流部の水位が上昇し、氾濫危険水位に達したことであり、上流のダムの放流情報もあった。

一方、土砂災害のあった小岩内地区を含む市南部の荒川流域に対しては、3 日の 21 時 30 分に川沿いの 1,140 世帯を対象に避難指示を発表している。これは主に荒川の氾濫を警戒したものであったという。発令のきっかけは荒川上流の小国町などで増水があったことである。市では川の状況を県の河川防災情報システムを見て把握していたのである。その後小岩内の土砂災害が発生した後に、4 日 3 時 22 分に 6,173 世帯(神林・荒川地区)を対象に緊急安全確保を出したり、同 9 時 51 分に 79 世帯(小岩内・川部)を対象に追加の避難指示を出したりしている。災害のあった小岩内地区に対しては、21 時 30 分に上記の避難指示が出されており、川の氾濫を警戒するなど、警戒対象は異なったものの、災害の 3 時間以上前の発令がなされており、避難指示は時間的には間に合っていたといえる。

図 3　IP 告知端末*1　(村上市神林地区)

村上市ではこれらの避難情報を、基本的には防災無線と IP 告知端末の屋外拡声器や屋内受信機で住民に伝えている。小岩内地区は、2008 年の村上市への合併前までは、神林村に属していた。現在、旧神林村の地域では、ほぼすべての家庭に IP 告知端末という情報機器が配布されており、今回の避難指示もそれによって伝えられている。これはかつて有線放送電話があったような地方部で、地域情報化(インターネット化)もかねて整備されたシステムである。画面付きのテレビ電話のような屋内の端末(図 3)や屋外拡声器と接続し、行政からの音声や画像による情報伝達のほか、地区からの発信や IP 電話も可能なシステムである。接続が無線ではなく光ファイバーケーブルという違いはあるものの、防災無線の戸別受信機と同じような機能

を持っている。通常時は神林支所からの伝達が多いが、今回のような災害時には、村上市本庁舎と接続されて緊急情報が流される。屋内の受信機は屋外拡声器と異なり、大雨の中でも聞き取りやすい。それが全戸に配布され、機能していたようで、伝達メディアの面でも問題はなかったといえるだろう。

筆者が実施した住民アンケートによると市の避難指示を聞かなかった人は 8%しかおらず、92%の人は聴取していた。その聴取手段としては、屋内の IP 告知端末が最も多く(64%)、次いで消防団・市区の役員・防災士から(58%)で、そのほか緊急速報メール(23%)、屋外スピーカー(15%)、テレビ(15%)などとなっていた(図 4)。これをみると、市の IP 告知端末は正常に機能し、有効に避難指示を伝えていたことがわかる。

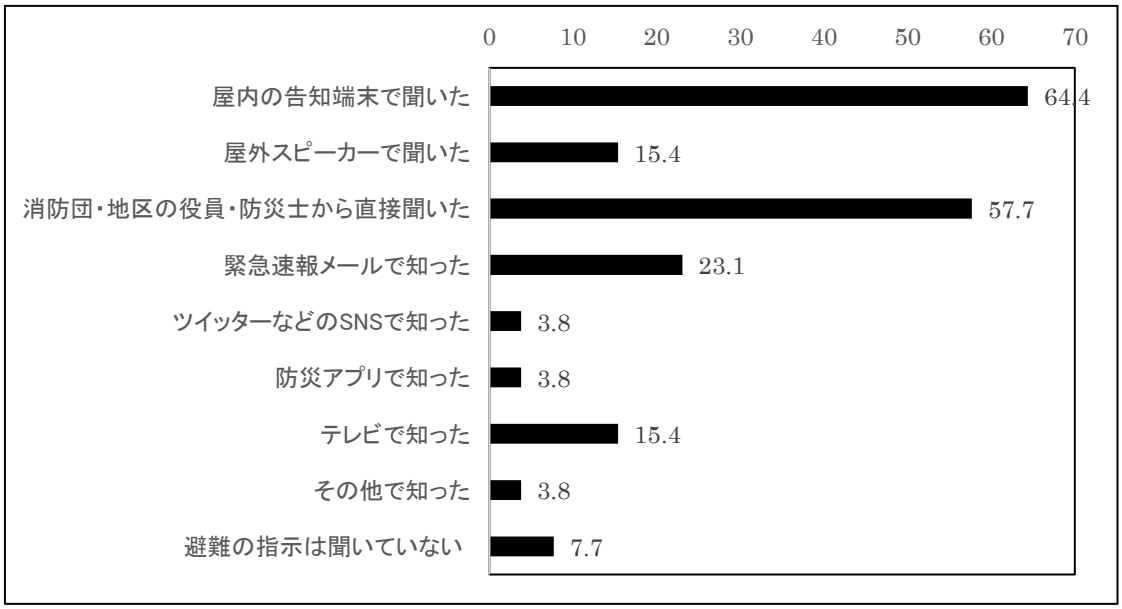

図 4 避難指示聴取手段 (%; 複数回答)

3. 成功した避難とその背景

ではこうした情報を受けて、住民はどう行動したのだろうか。小岩内の区長(自治会長)をしていた松本佐一氏に当時の話を聞くことができた。それによると、3 日の 21 時頃、市の告知端末で避難指示を聞き、その時はそれほどの雨ではなかったが、このままではいられない、ということで、消防団・自治会役員・防災士(この地区に 2 人いる)らが公民館に集まったという。そして防災士が「市の避難指示が出たので市指定の避難所に避難してください」と、地区内に告知端末を使って呼びかけをした。区長はその時はまさか災害が起きるとは思わなかったという。その後 22 時頃になると、雨が強くなってきた。「この時間ではもう寝ている人もいるだろう」ということで、消防団・自治会役員・防災士計 12～13 人で地区内の全世帯を訪問して避難を呼びかけている。全世帯は 34 世帯で全戸を回るのには 1 時間くらいかかった。大沢川沿いの世帯には特に避難を呼びかけたという。そこには高齢者や車いす使用の人もいたが、そのころには荒川(本川)沿いを下り公的な避難所へ向かう道は土砂崩れでなどで通れなく

なっていた。そこで避難先を地区内の高台の民家や公民館(地区公会堂)にした。公民館には 4～5 人ほどの住民が集まったという。その後、23 時頃　激しい雨になってきた。23 時半過ぎに大沢川沿いの公民館では危ないということで二次避難をすることにした。消防団・防災士・区長などが高齢者や車いす使用の人を避難させた。大雨で合羽を着る余裕もないので車いすの人は大型のゴミ袋をかぶせて運んだり、高齢者は車の運転操作が遅いので消防団員が代わりに運転したりした。避難先は高台の民家や高台の車の中であった。その結果、大沢川沿いの人はほとんどが避難したという。具体的には大沢川には 7 軒 17 人の住民がいたが、2 人を除いて皆避難したという(ただし今回のアンケート調査によれば沢沿いの非避難者は 3 人はいた模様である)。

松本氏が危機感を感じたのは、22 時過ぎの大雨により大沢川が増水したのを見たことだという。増水で流木も流れてきて、そうしたことは昭和 42 年の羽越水害以来、初めてのことだった。雨が強くなって、松本氏がイメージした災害は土石流だった。というのは昭和 42 年の羽越水害の時には、自身が中学生で、大沢川沿いの実家に住んでおり、突然ガラスを割ってドンと土石流が家に入ってきて、川と反対側の家の裏に逃げた経験があったからである。この時、土石流で地区内の別の沢(大小沢)で 1 人が流され亡くなっている。そして今回も昭和 42 年の時と同じ臭いがしたという。それは他に経験したことのない木が腐ったような独特の臭いであった。それで氏はあの時と同じことが起きたと分かったという。

以上の松本氏の話からポイントを整理すると、次のようになる。①土石流が起きた大沢川流域では、ほとんどの住民(17 人中 14 人)が避難していた。②避難は消防団や自治会役員の戸別訪問による呼びかけ及び戸別の避難誘導によってなされた。③消防団や自治会の活動は市からの「避難指示」によって起動した。④被災前に想定された災害は土石流であった。⑤危機感のきっかけは、激しい降雨と沢の増水及び流木だった。⑥危機感の背景には、55 年前の羽越水害で同じ場所で土石流を経験したことがあった。⑦55 年前の羽越水害では、同地域内で死者が出るほどの大きな被害を経験していた。

このような経過から、土石流の発生前に被災地域の大半の住民が避難しており、避難のしにくい土石流災害に際し、たしかに「奇跡的」な事前避難が行われたといえる。そしてその背景には、55 年前に当地域を襲った羽越水害の経験があり、それが活かされたということである。ここで、羽越水害の経験が生きた背景には 2 つの原因があったと思われる。第一は 55 年前という、経験者がまだ存命している比較的近い過去に起きた事件であったことがある。同じ場所で土石流が再び発生する周期は長いことが多く、住民が生まれる前に起きた災害の危険性は実感されないことが少なくない。たとえば、2018 年に広島市安佐北区で起きた土石流では、同地点での土石流の発生が 100 年ほど前だったので、それを知っていた住民ですら危険性を実感していなかった、という例に筆者は遭遇したことがある(中村, 2021, p284)。第二は、羽越豪雨では同地区でも犠牲者が出るという深刻な被害を経験していたことがある。以前、災害を経験したことがある地域でも、死者が出ないような被害が軽度の場合は、避難情報を出してもその経験が避難促進に役立つことはないといわれている(Sharma et al. 2012)。

1967 年の羽越水害では新潟県で 134 名の犠牲者があり、中でも荒川流域の被害は大きく 74 名の犠牲者が出ている。流域では土石流が多発し、小岩内の対岸の花立集落では被害が甚大で集落全体が移転するというほどの被害であった(村上市, 2017)。

4. 避難の実態と経験の逆機能

こうした住民の話の範囲では、今回の避難は過去の経験が生き、大変うまくいったものと考えられる。ただ、地区の全世帯に対するアンケート調査を行ったところ、それとは異なる側面も見えてきた。

まず、この地区全体の危険性についてみておこう。今回の災害でどの程度の被害があったのかを尋ねたところ、19%の家が全壊し、15%が半壊、4%が一部損壊、12%が床上浸水と、約半数の住宅で被害が出ていた(図 5)。ここからこの地区で被害を受けたのは大沢川沿いの住宅だけではなかったことがわかる。村上市の「洪水・土砂災害ハザードマップ」によると、小岩内には 4 本の土砂災害危険渓流があり、地区のほとんどの住宅が「土砂災害警戒区域」に指定されていることがわかる(図 6)。ここから、小岩内地区は地区全体が土砂災害の危険性があり、避難指示が出た際には、ほぼ全世帯が避難しなければならない状況であったことがわかる。

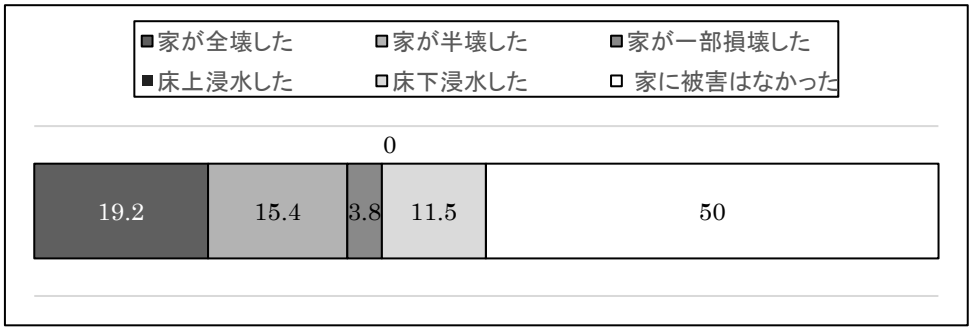

図 5　家屋被害の程度　(%) n=26

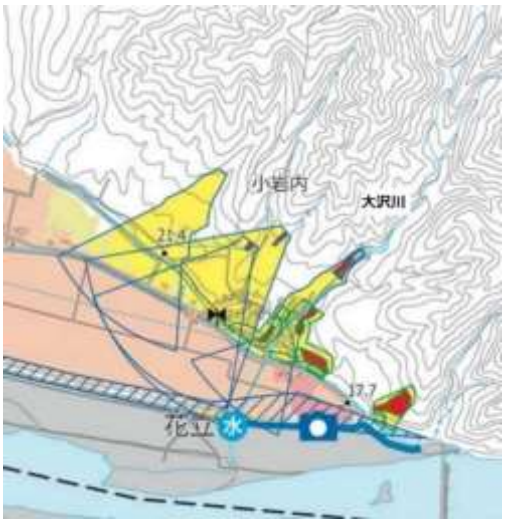

図 6　村上市のハザードマップ(一部抜粋)

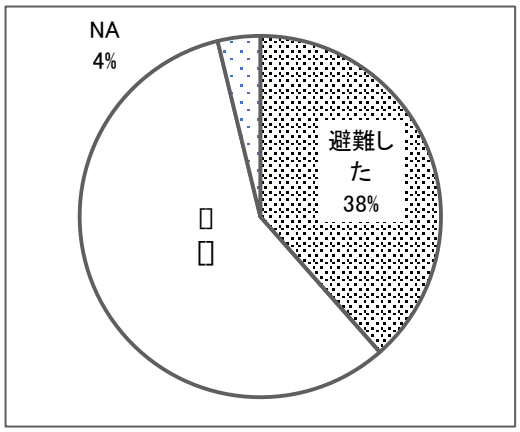

図 7　住民の避難率　(%) n=26

そうした中で今回どの程度避難したのか。アンケートによれば、避難したのは回答者の38%で、残りの 6 割の人は避難していなかったのである(図 7)。

ではなぜ 6 割の人は避難しなかったのか。まず避難指示を聞いた時の危機感をたずねると、48%の人は「それほど危険なことになるとは思わなかった」と答え、39%の人は「まだ、大丈夫だろうと思った」とし、避難指示で危機感を持った人は少なかったようだ(図 8)。雨が本格的に強くなったのは 22 時過ぎであったから、避難指示を聞いた段階ではまだ危機感を抱きにくかったのかもしれない。

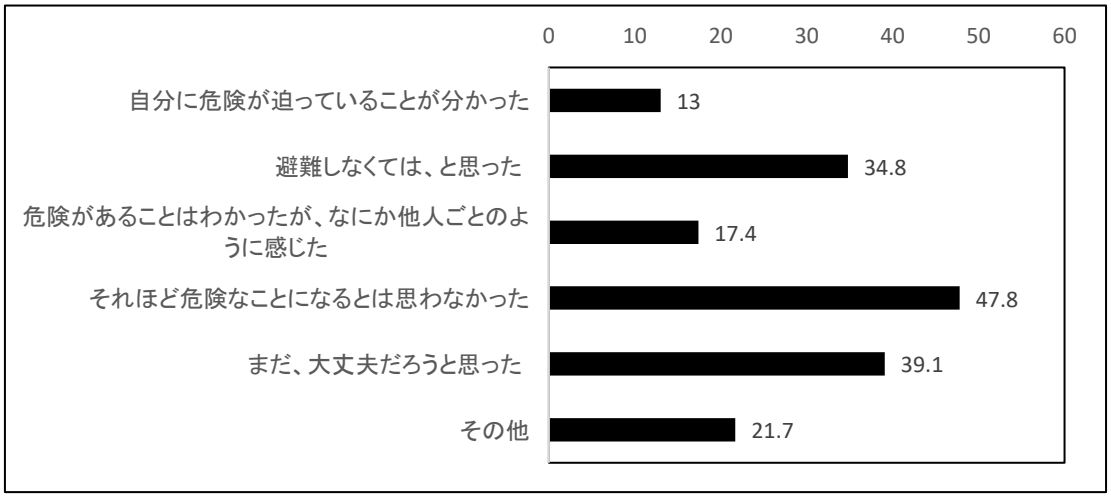

図 8　避難指示を聞いてどう感じたか　(%; 複数回答) n=23

さらに、避難しなかった人にその理由をたずねると、「自宅は高台にあるから」(60%)、「土石流が起きるとは思わなかったから(60%)、「昭和 42 年の羽越水害でも大丈夫だったから」(53%)、「大雨で避難するほうがかえって危ないと思ったから」(53%)、「市の指定避難場所は遠くて、そこまで行くのは困難だったから」(40%)などが多くなっていた(図 9)。大きくいえば、避難しなかった理由は「自宅は大丈夫だ」と思ったことと、大雨の中での避難が難しい、ということであった。

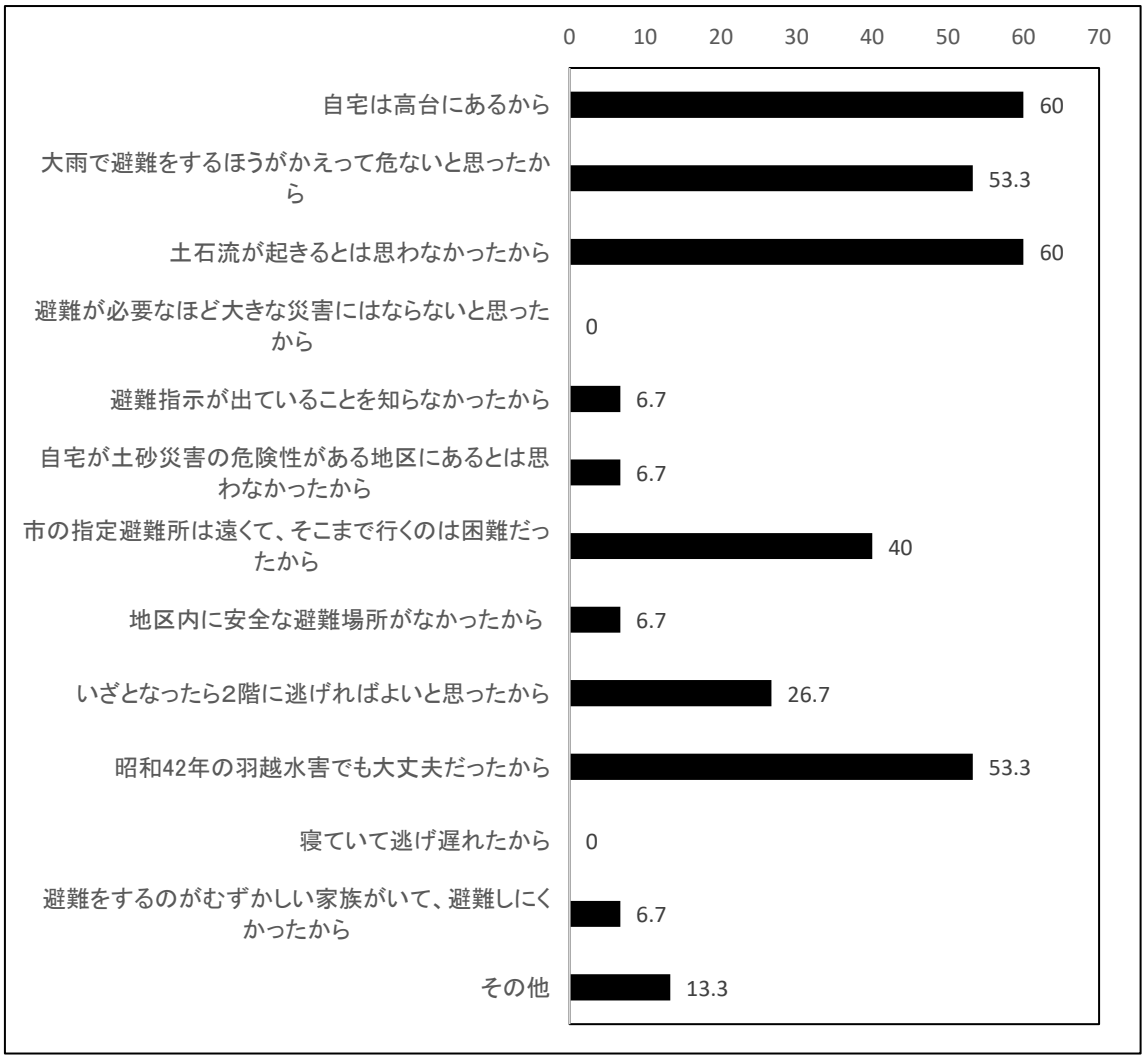

図 9　避難しなかった理由　　(%; 複数回答) n=15

ここで注目されるのは、「昭和 42 年の羽越水害でも大丈夫だったから」という回答である。過去に大きな被害を受けた地区でも、その災害時に大丈夫だったという経験は、避難を阻害する要因になりうる。これは災害社会学では「経験の逆機能」と呼ばれる現象である。すなわち経験の逆機能とは、「過去の災害経験が社会にとって適応的な災害対応を減ずること」である(中村,2021, p241)。これはあらゆる種類の災害で起きうるが、土砂災害では、とくに発生しやすい現象である。というのは土砂災害は極めて局地的な被害の様相を呈するからである。たとえば同じような傾斜の崖でもある崖では崩れたが、その隣では崩れなかったとか、土石流被害でも全壊家屋の一軒隣の家は全く無傷であった、といった被害形状となりがちである。被害の有無は偶然であることも多く、記憶に残る過去の経験だけでは安全性が証明されたとはいえないのである。しかも小岩内の場合、大沢川の右岸には 10m 近い高台があり、そこにも住宅がある。そこは大沢川沿いの低地よりは安全性は高いと思われるが、ハザードマップではそこも別の沢の土砂災害警戒区域になっており、科学的に安全とは言いきれない。それでも、過

去に大丈夫だったという経験や家が高台にある、ということが、避難しない十分な理由となっていた。アンケート調査では、今回の災害で感じたことを聞いているが、ある回答者は「今回は無事だった家屋の地区の裏の沢には途中で流木が止まっていた。今回はたまたま無事だったような気がする。」と記述している。たしかに今回大きな被害があった地域では避難が進み、犠牲者は出なかった。しかしその背後には避難しなかった住民が少なくなく、犠牲者が出なかったのは「たまたま」であった可能性も否定できないのである。

避難に対するもう一つの障害は、公的避難先が遠いことである。この地区の指定避難場所は平林小学校や神林中学校だが、川沿いの下流部にある平林小学校までは距離にして約7.5km、徒歩では 2 時間以上かかってしまう。あるいはより近いが川を越えなくてはならない荒川地区公民館でも約 5.5km 離れており、徒歩では 1 時間半以上かかってしまう。これでは遠くて雨の中避難しにくいのもわかる。苦肉の策として、今回は数名が地区内にある公民館(小岩内公会堂)に避難したが、この公民館は土砂災害が起きた大沢川沿いにあり危険なため、結局は二次避難をすることになってしまった。したがって避難を促進するためにも、地区内の比較的安全な場所に避難所を設けることが望まれる。公民館のような公的な場所が理想である。しかしそれがかなわない場合は、民家や駐車場など、比較的安全な避難場所を指定するようなアイデアもあるだろう。

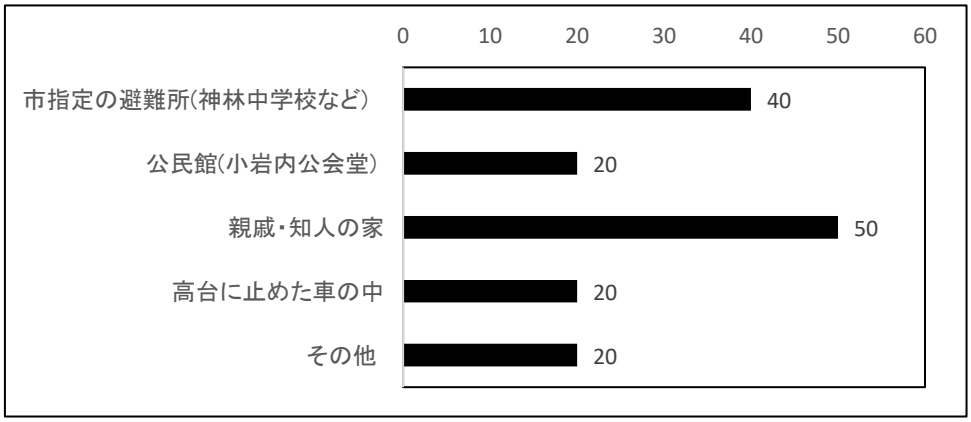

図 10　避難した人の避難先　(%; 複数回答) n=10

ちなみに今回のアンケートでは避難した人に実際の避難先を聞いている。最も多かった避難先は、「親戚・知人の家」(50%)で次いで「市指定の避難所」(40%)であった(図 10)。その他「高台に止めた車」(20%)に避難した人もいた。一般に、地域のつながりの強い地方部では、公的避難所以外の個人宅などに避難することが多いが(中村, 2021,p29)、各自がそうした避難先を確保しておくことも大事である。

他方、避難した人に、そのきっかけをたずねたところ、「消防団・自治会の人に勧められて」(70%)が最も多かった(図 11)。ついで、「羽越水害のことがあったので」(50%)、「告知端末で避難指示を聞いたから」(40%)、「雨が激しかったから」(40%)となっていた。やはり消

防団などの戸別訪問は有効であったようだ。しかも今回は、沢沿いの住民に対しては呼びかけだけでなく、物理的に住民を誘導するといったことも行われていた。ただし、今回は地域の全戸が戸別訪問されているので、必ずしも全員が戸別訪問の呼びかけに従ったわけではないこともわかる。

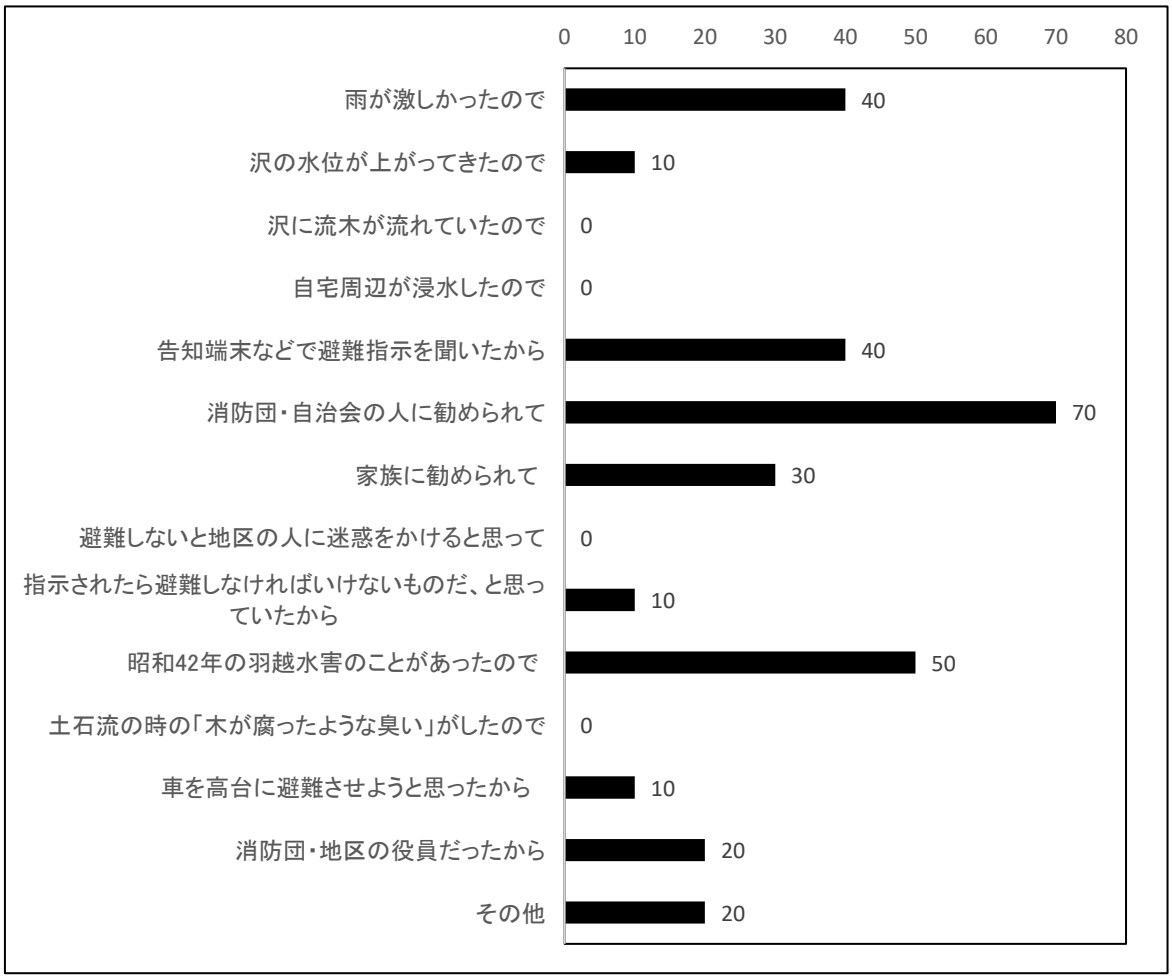

図 11　避難したきっかけ　　(%; 複数回答) n=10

5. まとめ

今回の小岩内地区の土石流災害では、自治会・消防団といった地元住民の適切な判断や避難誘導行動によって被災前の避難が実現し、人命が救われた。一般に、土砂災害からの事前避難がなされることは稀なために、たしかにこれは「小岩内の奇跡」であったといえる。この成功の原因は、55 年前の羽越水害の経験が避難の判断に活かされたことであり、また自治会・消防団が積極的に避難を誘導したことであった。またその背景には、市が避難指示を発表したり、IP 告知端末を整備したりしていたこともあった。

ここから得られる教訓は、第一に過去の災害の経験を活かすことが重要であり、第二に自治会や消防団の活動を維持することが重要であるということである。過去の経験を活かすという点では、過去の経験が 55 年前と比較的新しかったため、実際に体験をした人が住民活動の中

におり、適切な判断ができたという幸運があった。今後は災害から 100 年、200 年たった後にこうした経験をどう伝えていくか、ということも考えなくてはならないだろう。小岩内地区から荒川を下ったところにある川部地区や上流にある関川村には、羽越水害の記念碑があるが、そうしたものも経験を後世に伝える手段の一つである。

他方、今回の避難には課題もあった。一つは避難場所として選ばれた地区内の公民館が安全な場所になく、二次避難をしなければならなかったことである。土砂災害の危険地域では地区内により安全な避難場所を設置することが望まれる。もう一つの課題は羽越水害の経験があったにも関わらず、避難しなかった住民が少なくなかったことである。これは経験の逆機能の作用によるものであった。以前の災害時には大丈夫であった、という経験も一つの経験ではあるが、それと「土砂災害警戒区域」に設定されているという行政の判断とをどう折り合いをつけるか、という問題がそこにある。アンケートでは自宅が「土砂災害警戒区域」に設定されていることを知らなかった人は全体の 19%しかおらず、設定されていることはかなり周知されていた。また羽越豪雨のことは回答者全員が知っていた。地区のほぼ全域が「土砂災害警戒区域」に指定されている中では、かつて大丈夫であったからといって、次回も大丈夫だとは限らない。実際アンケートでは「羽越水害の時よりも被害が広範囲になって、今回の被害は予想外だった」と答えた人が 72%に達している。ここから、災害経験者に、かつての経験より深刻な被害が起きうる、ということを理解してもらう課題があることも明らかになった。

なお、避難とは直接関係がないのでこれまで触れてこなかったが、アンケートの自由回答欄には、大沢川上流の砂防ダムについての記述がいくつかみられた。羽越水害の後から大沢川上流には砂防ダムが設置されていたが、そこに堆積した土石の除石が行われず十分に機能しなかった、という訴えである。砂防ダムには満砂になっても川の傾斜を緩くすることで砂防するタイプ(非除石管理型砂防えん堤)もあるので、すべての砂防ダムで除石が必要とは限らないが、除石が必要な砂防ダム(除石管理型砂防えん堤)では十分な除石が必要であることはいうまでもない。

注

*1 この端末は外見上 NTT の「ひかりフレッツホン vp3000」と同機種と思われる。

*2 住民登録上の世帯数は 36 世帯だが、住宅の数としては 34 戸なので、34 戸を対象とした。

参考文献

国土交通省, 2022a, 8 月 3 日からの大雨による被害状況等について（第 24 報）
https://www.mlit.go.jp/common/001515338.pdf (2022.11.13 閲覧)

国土交通省, 2022b, 令和 4 年 8 月 3 日からの大雨による土砂災害発生状況,
https://www.mlit.go.jp/river/sabo/jirei/r4dosha/220803ooame_220930.pdf (2022.11.13 閲

覧)
村上市, 2017, あれから 50 年 羽越水害の記憶, 市報むらかみ, 2017.8.1, pp.4-8.
村上市報道資料, 2022, 8 月 24 日 令和 4 年 8 月 3 日からの大雨災害に関係する記者会見発表事項, https://www.city.murakami.lg.jp/uploaded/attachment/55202.pdf (2022.11.13 閲覧)
村上市, 2020, 洪水・土砂災害ハザードマップ(荒川地区) https://www.city.murakami.lg.jp/site/bousai/bousai-map.html (2022.11.13 閲覧)
内閣府, 2022, 令和 4 年 8 月 3 日からの大雨等による被害状況等について(令和 4 年 9 月 30 日)
中村功, 2021, 災害情報と避難 ーその理論と実際ー, 晃洋書房
新潟地方気象台, 2022, 令和 4 年 8 月 3 日から 4 日にかけての停滞前線に関する新潟県気象速報, https://www.data.jma.go.jp/niigata/menu/sokuhou/20220803_sokuhou.pdf
Sharma, U., and Patt, A., 2012, Disaster warning response: the effects of different types of personal experience, Nat Hazards , 60, 409–423.

要約

本論では 2022 年 8 月 4 日未明に発生した新潟県村上市における土石流災害について、その避難の実態、および背景について、市役所・住民への聞き取りおよびアンケート調査をもとに検討した。その結果、自治会・消防団といった地元住民の適切な判断や避難誘導行動によって被災前の避難が実現し、人命が救われたことが分かった。その背景には 55 年前の羽越水害の経験が避難の判断に活かされていた。その一方で羽越水害の経験があったにも関わらず、避難しなかった住民も少なくなかった。これは経験の逆機能の作用によるものである。ここから、災害経験者に、かつての経験より深刻な被害が起きうるということを、どう理解してもらうのかという課題があることが明らかになった。

※本論は、『東洋大学社会学部紀要』60 巻 2 号, 91-202 の原稿を再掲したものである。

【資料】

2022 年 8 月豪雨災害に関するアンケート調査票および単純集計

（村上市小岩内地区）

東洋大学社会学部　中村功研究室

対象者: 村上市小岩内地区全 34 世帯の住民の方　　回答者 26 人　回収率 76.5%(26/34)

集計単位（%), n=回答数、NA=無回答

【ご回答に際して】

１. 8 月 3 日から 4 日の**豪雨時に自宅、または自宅付近にいた方がお答えください。**

２. 調査は、20 歳以上の方が１世帯で１人がお答えください。

(複数の方がいる場合、できれば、誕生日が１月１日から数えて早いほうの方がお答えください。これは年が若い方という意味ではありません)

３. 調査は、最後まで同じ方が答えるようにしてください。

４. 黒ボールペンまたは鉛筆で記入してください。

(添付のボールペンは返却しないで結構です)

５. 答え方は、あてはまる項目を選び、その番号を〇で囲んでください。

６. 質問には、〇を「1 つだけ」つけるものと、「いくつでも」つけるものがあり、質問ごとに明記されています。

７. 集計はすべて統計的に処理されますので、回答者の個人情報が使われることはありません。

今年の８月３日から４日にかけての豪雨により、４日午前１時頃、地区内の大沢などで土石流災害が発生しました。本日は、その時の災害についてお聞きします。

お宅の被害についてうかがいます。

問１　今回の災害で、あなたの住まいには被害がありましたか。（〇はひとつだけ）

１．家が全壊した 19.2
２．家が半壊した 15.4
３．家が一部損壊した 3.8
４．床上浸水した 0
５．床下浸水した 11.5
６．家に被害はなかった 50.0

災害発生前の状況についてうかがいます。

問２　３日夕方までに、気象庁では大雨警報や線状降水帯の情報を出し、警戒を呼びかけていました。それに対して当日、災害の前に、あなたはどう感じていましたか。
（○は１つだけ）NA 3.8

１．まさか小岩内で災害が起きるとは思わなかった 53.8
２．ひょっとしたら小岩内で災害が起きるかもしれないと思った 23.1
３．小岩内でも災害が起きる可能性がかなりあると警戒していた 19.2
４．気象庁が警戒を呼びかけていることは知らなかった 0

避難の呼びかけについてうかがいます。

問３　３日の午後９時 30 分に、村上市は小岩内を含む荒川流域の地区に避難指示を出しました。あなたはこの避難の呼びかけを聞きましたか。（○はいくつでも）NA 3.8

１．屋内の告知端末で聞いた 64.4
２．屋外スピーカーで聞いた 15.4
３．消防団・地区の役員・防災士から直接聞いた 57.7
４．緊急速報メールで知った 23.1
５．ツイッターなどの SNS で知った 3.8
６．防災アプリで知った 3.8
７．テレビで知った 15.4
８．その他で知った(具体的に:　　)3.8
９．避難の指示は聞いていない　（問４へ）7.7

付問 3-1 は、問 3 で避難の呼びかけを「聞いた」と答えた方のみにお聞きします。　n=23

付問３-1　避難指示を聞いてどう思いましたか。（○はいくつでも）

１．自分に危険が迫っていることが分かった 13.0
２．避難しなくては、と思った 34.8
３．危険があることはわかったが、なにか他人ごとのように感じた 17.4
４．それほど危険なことになるとは思わなかった 47.8
５．まだ、大丈夫だろうと思った 39.1
６．その他(具体的：　　）21.7

ふたたび全員にお聞きします

問４　大沢川で土石流が起きる前に、あなたは自宅を離れて避難しましたか。（○は１つだけ）　NA 3.8

１．避難した　38.5　２．避難しなかった　57.7

問５　土石流が起きる前、お宅では何人のうち何人が自宅から避難しましたか 。自分を含めた数を記入してください。(数字を記入)　n=18

□ 人　中 □ 人が自宅外に避難した。
52　29

付問４－１と４－２は、問４で土石流前に自宅外に「避難した」と答えた方のみにお聞きします。 n=10

付問　４－１　あなたは自宅外のどこに避難しましたか。(○はいくつでも)

１．市指定の避難所(神林中学校など)　40.0
２．公民館(小岩内公会堂) 20.0
３．親戚・知人の家 50.0
４．高台に止めた車の中 20.0
５．その他(具体的に:　　) 20.0

付問４－２あなたが避難したきっかけは何ですか。(○はいくつでも)

１．雨が激しかったので 40.0
２．沢の水位が上がってきたので 10.0
３．沢に流木が流れていたので 0
４．自宅周辺が浸水したので　　0
５．告知端末などで避難指示を聞いたから 40.0
６．消防団・自治会の人に勧められて 70.0
７．家族に勧められて　30.0
８．避難しないと地区の人に迷惑をかけると思って 0
９．指示されたら避難しなければいけないものだ、と思っていたから 10.0
10. 昭和 42 年の羽越水害のことがあったので　50.0
11. 土石流の時の「木が腐ったような臭い」がしたので 0
12. 車を高台に避難させようと思ったから　10.0
13. 消防団・地区の役員だったから 20.0
14. その他(具体的に：　　)20.0

付問４－３は、問４で自宅から「避難しなかった」と答えた方のみにお聞きします n=15

付問４－３　あなたが災害の前に自宅から避難しなかった（避難できなかった）理由は何ですか。（○はいくつでも）

１．自宅は高台にあるから 60.0
２．大雨で避難をするほうがかえって危ないと思ったから 53.3
３．土石流が起きるとは思わなかったから 60.0
４．避難が必要なほど大きな災害にはならないと思ったから 0
５．避難指示が出ていることを知らなかったから 6.7
６．自宅が土砂災害の危険性がある地区にあるとは思わなかったから 6.7
７．市の指定避難所は遠くて、そこまで行くのは困難だったから 40.0
８．地区内に安全な避難場所がなかったから 6.7
９．いざとなったら２階に逃げればよいと思ったから 26.7
10. 昭和 42 年の羽越水害でも大丈夫だったから 53.3
11. 寝ていて逃げ遅れたから 0
12. 避難をするのがむずかしい家族がいて、避難しにくかったから 6.7
13. その他(具体的に：　　)13.3

ふたたび全員がお答えください

問６　災害の前、お宅は、市から「土砂災害の危険がある場所」に指定されていることを知っていましたか。（○は１つだけ）　NA 7.7

１．　知っていた	２．　知らなかった	３.自宅は指定の外にある
69.2	19.2	3.8

問７　今回の災害が起こる前、あなたは、昭和 42 年に小岩内で羽越水害の被害があったことを知っていましたか。（○はいくつでも）　NA 7.7

１．自身で羽越水害を体験した 65.4
２．自身は経験はしていないが話は聞いたことがある 36.9
３．聞いたことはなかった 0

問８　次の中で、あなたにあてはまるものがあればいくつでも選んでください。（○はいくつでも。）　NA 3.8

１．羽越水害のことがあったので、自分の避難が促進された。 15.4
２．羽越水害のことが避難する場所を決めるのに役立った。23.1
３．羽越水害の経験から、避難しなかった、あるいは避難が遅れた。19.2
４．地区中が危険なので逃げ場所がなかった。4.0
５．地区内の比較的安全な場所に住んでいたので、避難者を受け入れた。28.0
６．羽越水害の時より被害が広範囲になって、今回の被害は予想外だった 72.0
７．その他(具体的:　　) 12.5

問９　今回の災害について、国・県・市など、行政に対するご意見がありましたら、どんなことでもけっこうですからお書きください。

最後に、回答した方の性別やおおよその年齢層などをお知らせください。

Ｆ１　性別はどちらですか。（○は１つだけ）

１．　男 69.2	２．　女 30.8

Ｆ２　年齢層についてお聞きします。（○は１つだけ）

１．　２０代 0	２．　３０代 0	３．　４０代　7.7	４．　５０代 3.8
５．　６０代 42.3	６．　７０代 26.9	７．　８０代以上 19.2	

Ｆ３　あなたのお住まいは地区のどのあたりでしたか。（○は１つだけ）

１．　大沢川沿い 30.8	２．　地区の高台 26.9	３．それ以外 42.3

ご協力たいへんありがとうございました。
ご回答は今後の防災に生かしてまいりたいと思います。

2023 年７月豪雨時の秋田市における洪水と情報伝達メディアの問題

東洋大学　中村　功

1. はじめに

(1) 災害の概要

2023 年(令和５年)7 月 15 日を中心に、梅雨前線の活発化により東北地方で大雨となった。特に秋田県では 14 日から 16 日の間の総雨量が、多い所で 400 ミリを超え、たとえば秋田市仁別では日降水量が観測史上一位の 330.5mm を記録した。この大雨で秋田市内の大平川（たいへいがわ）や五城目町の内川川がはん濫した（気象庁,2023)。この豪雨では秋田県内の被害が特に大きく、五城目町で死者１名、秋田市でけが人６名の人的被害があり、さらに秋田市では住宅の全壊 11 棟、半壊 2,459 棟といった物的被害があった(秋田県,2024)。 五城目町の犠牲者は車の運転中に流されたもののようである(読売新聞，2023/07/16)。なお秋田市で、はけが人 6 名の他に、死者が 4 名記録されているが、それらはいずれも関連死によるものであった(秋田市，2024)。

図 1 秋田市大平川周辺の浸水（国土交通省，2024）

この大雨に際して、各自治体は避難情報を発出している。それらは住民にうまく伝わり、避難に役に立ったのだろうか。本稿では秋田市の被災地区で住民アンケート調査を行い、避難情報伝達の今日的課題について明らかにする。

(2) 被害地域

秋田市下水道局（2024）によると、今回の大雨で秋田市では 530 ヘクタールにわたって浸水したが、なかでも秋田駅東部の大平川の氾濫による外水はん濫と、秋田駅からその西側の旭川にかけての内水はん濫が被害をもたらした(図 2)。一般に外水はん濫は、浸水深が深くなったり、家屋の流出などを引き起こすおそれがあり、内水はん濫よりも危険性が高い現象である。

図２　秋田市内の浸水状況（秋田市下水道局，2024）

国土交通省東北地方整備局（2023）によれば、秋田市の大平川では 15 日午前 11 時 10 分に広面大橋上流右岸で越水している(図２中の左向き屈曲部の広面大橋付近)。大平川の外水はん濫はこの越水によるものと考えられる。この越水により大平川の右岸にある広面（ひろおもて）地区では浸水深が深くなっていて、深い所では２メートル以上になっていた(図 3)。

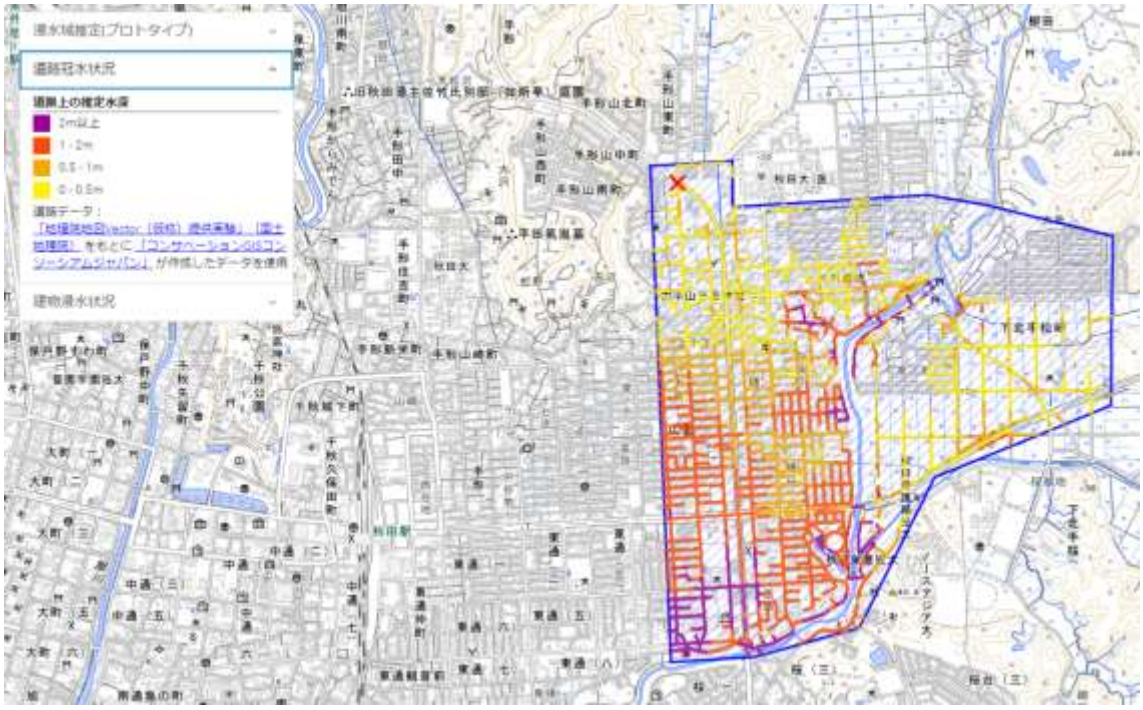

図３　秋田市広面地区の浸水深（防災科学研究所,2023）

そこで今回、大平川の越水に近い広面釣瓶（ひろおもてつるべ）地区で住民アンケート調査を行うことにした（図 4)。

図 4　秋田市広面釣瓶町

2. 調査概要

調査は広面釣瓶町の住民を対象に行った。ゼンリンの住宅地図を基に全戸建て住戸に調査票を送付した。住民が複数いる場合は、誕生日が 1 月 1 日から数えて最も早い住民（年齢が若いという意味ではない）に回答を依頼した。調査方法は自記式で、調査票を郵送により配布回収した。回収数は 112 票、回収率は 45.9%であった。調査時期は 2023 年の 11 月である。

調査主体:　東洋大学中村研究室
調査地域:　秋田市広面釣瓶町
調査対象者:　地区内の全戸建て住宅 244 戸の住民のうち各戸一名
対象者抽出方法:　ゼンリンの住宅地図をもとに地区内全戸に調査票を送付し誕生月が最も正月に近い住民に依頼
回答者数・回収率:　回答数は 112 票・回収率は 45.9%
調査方法:　自記式郵送法
調査時期:　2023 年 11 月
調査項目:　被害状況　避難状況聴取状況　緊急速報メール利用状況　避難状況

3. 避難情報の発出

秋田市内では 7 月 15 日の早朝から 20 ミリ程度の比較的強い雨が降り始め、5 時 57 分に洪水警報、6 時 20 分に土砂災害警戒情報が出されている。秋田市ではこれをうけ、7 時 15 分に猿田川・古川流域の住民を対象に「高齢者等避難」の避難情報を発出しはじめている。

大規模な氾濫を起こした大平川流域には 11 時に「高齢者等避難」を、そして 12 時 20 分に「緊急安全確保」を矢継ぎ早に発表している(表 1)。すでに述べたように大平川が越水したのは 11 時 10 分なので、高齢者等避難は越水の直前で、緊急安全確保は越水後、1 時間ほど経っ

てからのことであった。なお広面地区には避難指示は出されていない。

表 1　避難情報の発出状況

区分	土砂災害	猿田川・古川	新城川	太平川	旭川	岩見川	雄物川
高齢者等避難	15 日 08:30	15 日 07:15	15 日 07:45	15 日 11:00			16 日 03:30
避難指示	15 日 14:20 19 日 11:45	15 日 14:20	15 日 14:20		15 日 14:20	15 日 18:00	16 日 14:50
緊急安全確保			15 日 15:20	15 日 12:20			
緊急安全確保解除→避難指示			17 日　10:10				
避難指示解除	21 日 08:30						
対象世帯数	15 日 32,090 世帯 19 日 36,762 世帯	9,516 世帯	509 世帯	指示 4,538 世帯 緊急 4,766 世帯	6,749 世帯	2,561 世帯	2,559 世帯
対象人員数	15 日 63,079 人 19 日 71,440 人	20,039 人	1,057 人	指示 9,060 人 緊急 9,501 人	12,878 人	5,664 人	5,269 人

（秋田市，2024）

秋田市では、15 日 12 時 20 分に、緊急速報メールや登録メールで緊急安全確保を呼びかけた。その際の緊急速報メールの内容は表 2 の通りである。

表 2　秋田市が発令した緊急速報メール

警戒レベル 5　緊急安全確保発令　2023/07/15　12:32　大平川がはん濫したため、秋田市長が【警戒レベル 5】緊急安全確保を発令しました。危険な場所からまだ避難していない方で避難場所などへの移動が危険な場合は、自宅や近くの建物で少しでも浸水しにくい高い場所に避難するなど、ただちに身の安全を確保してください。〇発令理由　大平川がはん濫したため（秋田市）

（ツイッターに流された市民のスクリーンショットより）

4. 被害と避難行動

調査した住民に自宅の被害を聞いたところ、35.7%と、約 1/3 の住宅で床上浸水の被害があり、29.5%で床下浸水の被害があった(図 5)。図 3 の防災科学技術研究所の推定図を見ると、今回調査した大平川の右屈曲部の右岸は濃い紫（２m 以上)から黄色（0.5m 以下）となっており、

多くの部分がオレンジ色（0.5-2m）になっている。この回答はそれに沿ったものといえる。

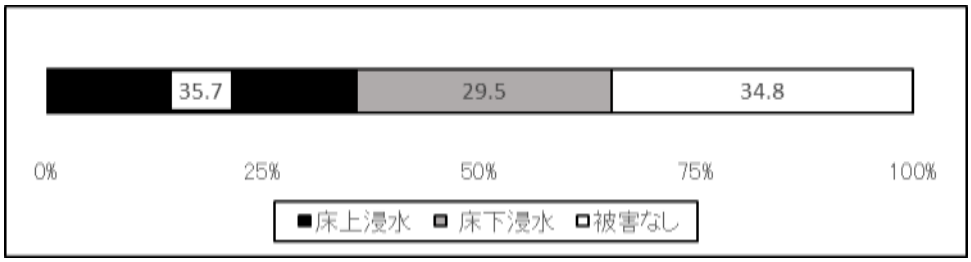

図 5　自宅の被害（%）　n=112

さらに自家用車の被害をたずねたところ、28.6%が車が水没して被害にあったと回答している(図 6)。床上浸水した家庭では、家屋の被害だけでなく、車の被害も同時に被った人が多いようだ。

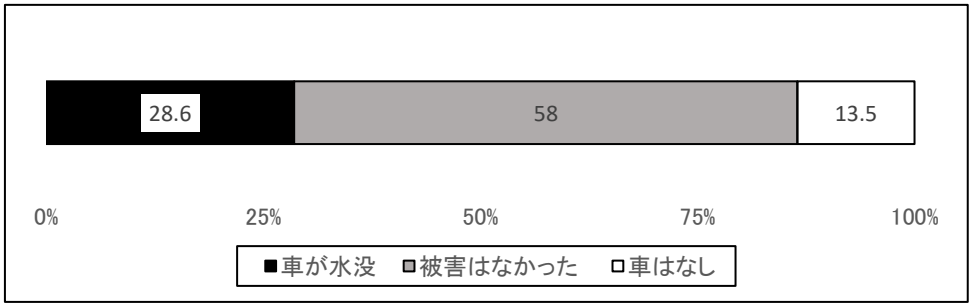

図 6　車の被害（%）　n=112

次に当日の午後にどこかに避難したかをたずねると、23.2%の人が自宅外に避難しており、29.5%が自宅の 2 階などに避難したと回答している。床上浸水が 35.7%であり、それと比べると、自宅外に避難した人は床上浸水した人の約 6 割にとどまっている。これを見ると、緊急安全確保が出されたわりには、避難が十分行われたとはいえない。

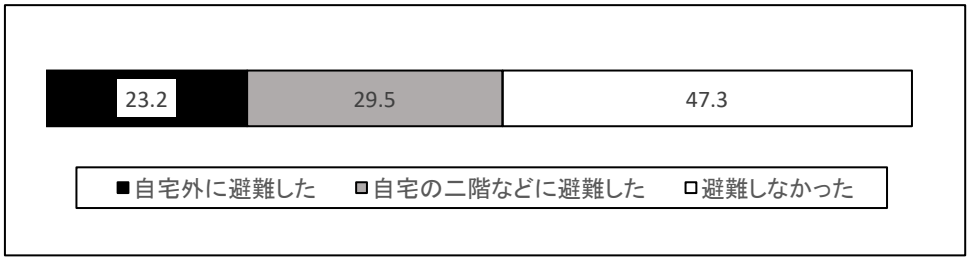

図 7　避難行動（%）　n=112

避難した人に避難のきっかけを複数回答でたずねると、自宅周辺が浸水したのでとする人が 73.1%と最も多く、それに対して「緊急安全確保を聞いたから」とした人は 11.5%と少なかった。今回、避難情報はあまり有効に機能していなかったようだ。

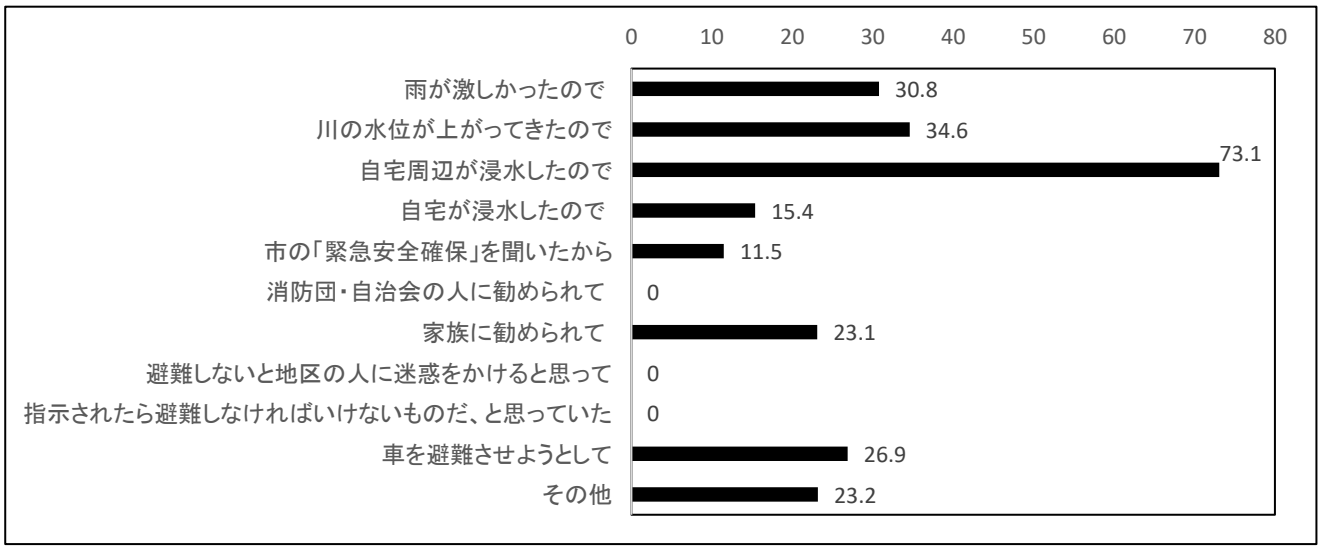

図 8　避難のきっかけ　（%）　　複数回答　　n=26

5. 避難情報の聴取と効果

緊急安全確保が有効に機能していない要因の一つは、住民への伝達が十分でなかったことが挙げられる。すなわち、当日、市の緊急安全確保を聞いた人は 56..3%と約半数に留まっていたのである。

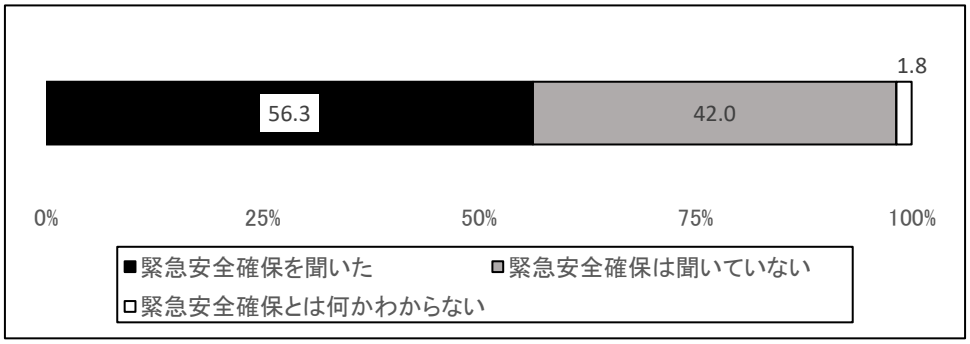

図 9　市の緊急安全確保を聞いた（知った）か（%）

さらに緊急安全確保を聞いた人に印象をたずねると、「それほど危険なことになるとは思わなかった」とした人が 54.0%もいたのである（図 10）。

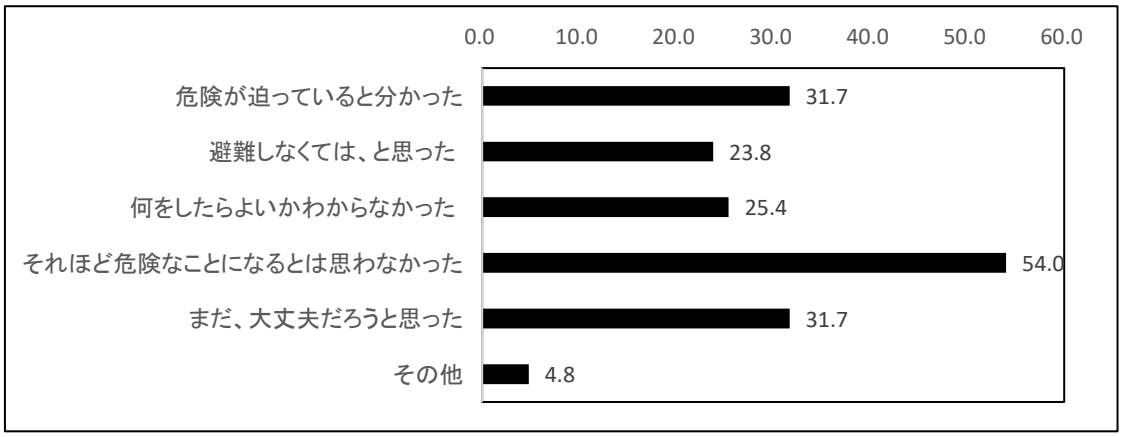

図 10　緊急安全確保の受け取り方（%）複数回答　n=63

6. 伝達メディアの問題

秋田市の緊急安全確保を聞いた人に、聞いたメディアをたずねたところ、テレビを挙げた人が 77.8%と最も多かった(図 11)。その一方で携帯電話を持っている人全員に送られているはずの緊急速報メール(エリアメール)は 30.2%と伸び悩んでいた。これはいったいどうしたことなのだろうか。

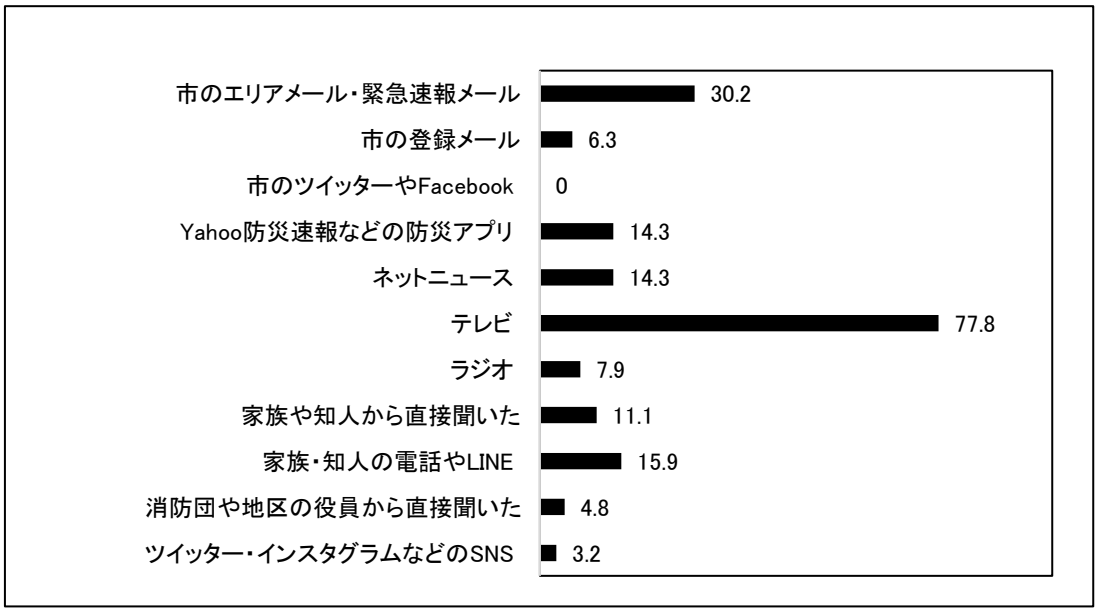

図 11　緊急安全確保の聴取手段　（%）複数回答　n=63

そこで緊急速報メールの受信率をたずねた。その結果、「受け取って利用できた」という人は全体の 11.6%しかいなかった（図 12)。「着信はあったが、うまく利用できなかった」という人が 25%、さらに「着信していない」という人が 48.2%と半数に達していた。

技術的に考えれば、緊急速報メールは「携帯電話を持っていない」と回答した 7.1%の人を除けば、全員に届いていたはずである。

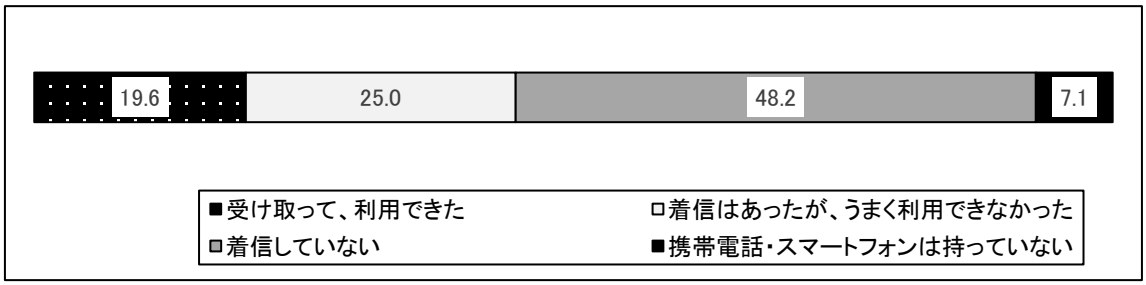

図 12　緊急速報メール(エリアメール)の受信率　（%）n=112

そこで、さらに受け取りに失敗した人に、その理由について考え、回答してもらった。その結果、「まったく分からない」という人が 26.8%いたものの、「着信時に他の活動をしていて気が付かなかった」という人が 32.9%、「着信時に携帯電話が遠くにあり、気が付かなかった」という人が 13.4%、「カバンなどにしまっていて気がつかなかった」という人が 13.4%、「マナーモードだったので気がつかなかった」という人が 8.5%、「雨音がうるさくて気がつかなかった」という人が 8.5%などと、いろいろな原因で着信に「気がつかなかった」という人が多かったのである。

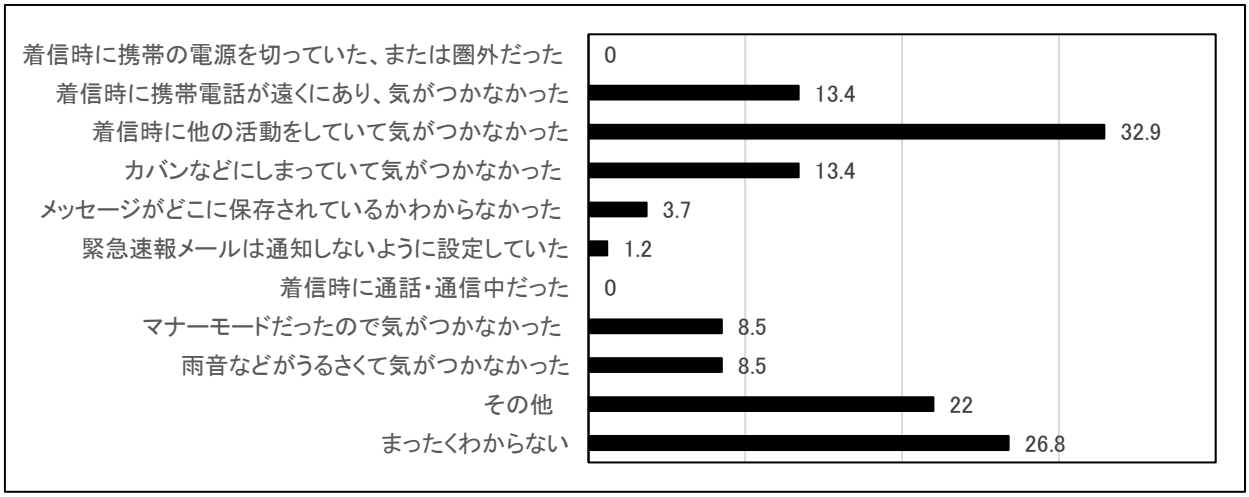

図 13　緊急速報メール(エリアメール)受信失敗理由　（%）　複数回答　n=82

緊急速報メールは、特に受信拒否の設定をしていなければ、発信とほぼ同時に各携帯電話に警報音とともに着信し、画面にも強制的にその内容が表示される。なのでその音に気つけば見逃しはないはずである。

表 2 にあるように、緊急速報メールが送られたのは、15 日の正午過ぎ、12 時 32 分である。ちょうどこの時間は昼食の時間帯だったので、受信に気がつかない人が多かったのかもしれない。

また、その後他の操作をすると緊急速報メールのメッセージは画面上から消え、「緊急速報メール」あるいは「エリアメール」のフォルダに格納されてしまう。このフォルダは、例えば「設定」→「通知」→「緊急速報メール」といったように、いつもと違う場所にある。「着信はあったが、うまく利用できなかった」という人は、メッセージが通常のメールや LINE とは

違う場所にあるので、見つけ出すことができなかったのであろう。

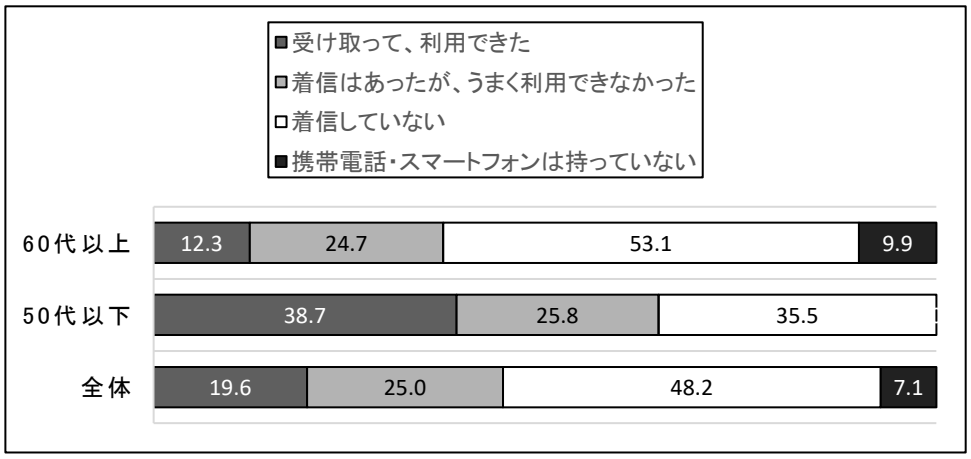

図 14　高齢者の緊急速報メール(エリアメール)受信失敗率（%）n=112

緊急速報メールは携帯電話の通知音（あるいはバイブレーション）をきっかけに伝達するものなので、聴覚が衰えてきた高齢者では見逃しが多くなってしまう。実際 60 歳代以上の高齢者とそれ未満の人を比べると、受信に成功した人は 50 歳代以下では 38.7%なのに高齢者では 12.3%と約 1/3 に低下してしまっている。高齢者では緊急速報メールの見逃しが特に多く、緊急速報メールに依存した伝達は危険であるといえる。

他方、緊急速報メールの見逃しの問題は高齢者ばかりではない。通常時メール等の通知を見逃すことがあるかを 102 名の大学生たずねたところ(1)、23.5%が「しばしばある」52.9%がたまにあると回答した（図 15)。さらにどのようなときに見逃すかをたずねたところ、「夜寝ている間に」が 69.6%、「歩行中や他の作業をしている時」が 64.7%「サイレントモード時」が 51.0%などとなっていた。また緊急速報メールの受信はデフォルトでは ON になっているが、設定によっては OFF にすることができる。同大学生に設定状況をたずねたところ、OFF にしているという学生が 21.6%、音声のみ OFF にしているという人が 18.6%おり、ON にしているとした人は 59.8%しかいなかった（図 16)。聴覚に支障がなくスマホ操作に慣れている若者なら確実に緊急速報メールが届くというわけでもないようだ。

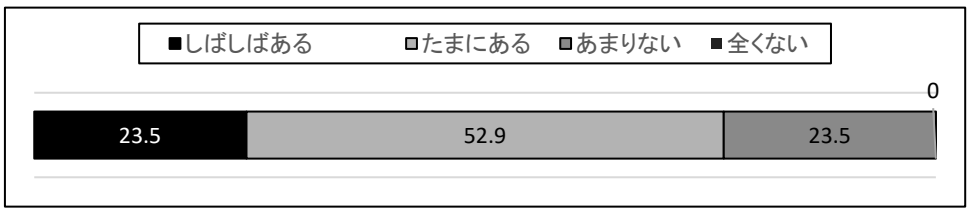

図 15　LINE 等の通知の見逃し頻度（大学生調査）（%）n=102

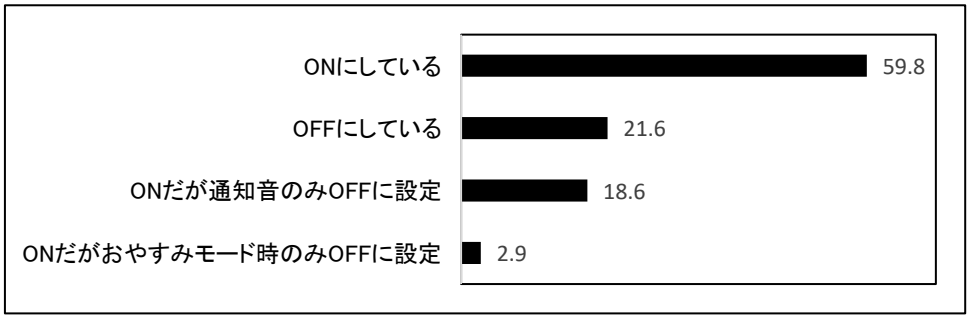

図 16　緊急速報メールの設定　（大学生調査）（複数回答 MA）

秋田市では避難情報の伝達には緊急速報メールや市の登録メールが使われているが、同報無線(防災無線同報系)はない。川沿いの浸水危険地域や土砂災害警戒区域では、今後は、防災無線、特に戸別受信を整備したり、消防団による巡回広報をしたりするなど、伝達手段の整備をさらに行っていくべきであろう。

注

(1)　大学生調査は、2023 年 11 月に、東洋大学社会学部の授業参加学生 102 名に対して行われたものである。

文献

秋田県，2024，令和５年大雨災害の検証と今後の対応

秋田市，2024，令和５年７月豪雨災害対応 検証報告

防災科学研究所　水・土砂防災研究部門,2023，2023 年 7 月 15 日の東北での大雨，
https://mizu.bosai.go.jp/key/20230715（2025.3.31 閲覧）

気象庁，2023，災害をもたらした気象事例 令和５年８月８日

秋田市上下水道局，2024,令和６年度全国下水道主管課長会議資料,令和５年７月の豪雨災害と浸水対策について，
https://www.mlit.go.jp/mizukokudo/sewerage/content/001741457.pdf（2025.3.31 閲覧）

国土交通省，2024，秋田県で統計開始以来最大の水害被害 ～令和５年の水害被害額（暫定値）を公表～

国土交通省東北地方整備局，2023，令和 5 年 7 月 15 日からの梅雨前線による大雨に係る出水の概要《 第 1 報 7 月 18 日 17 時時点 》，
https://www.thr.mlit.go.jp/Bumon/B00097/k00360/saigai-info/230715_zensen/shussuisokuhou230718.pdf（2025.3.31 閲覧）

【資料 1】

2023 年 7 月豪雨災害に関するアンケート調査　調査票及び単純集計

（秋田市広面字釣瓶町地区）

n=112

東洋大学社会学部　中村功研究室

【ご回答に際して】

1．7 月 15 日から 16 日の**豪雨時に自宅またはその周辺にいた方がお答えください。**

2．調査は、20 歳以上の方が 1 世帯で 1 人がお答えください。
（お宅に複数の方がいる場合、できれば、誕生日が 1 月 1 日から数えて早いほうの方がお答えください。これは年が若い方という意味ではありません）

3．調査は、最後まで同じ方が答えるようにしてください。

4．鉛筆またはボールペンで記入してください。

5．答え方は、あてはまる項目を選び、その番号を〇で囲んでください。

6．質問には、〇を「1 つだけ」つけるものと、「いくつでも」つけるものがあり、質問ごとに明記されています。

7．集計はすべて統計的に処理されますので、回答者の個人情報が使われることはありません。

今年の 7 月 15 日から 16 日にかけての豪雨により、15 日の昼頃から大平川が氾濫するなど市内で洪水となり、秋田市では「緊急安全確保」の呼びかけもなされました。今回、その時の災害についてお聞きします。

問 1　今回の災害で、お宅では建物の被害がありましたか。（〇はひとつだけ）

1．床上浸水した 35.7
2．床下浸水した　29.5
3．家に被害はなかった 34.8

問 2　今回の災害で、お宅では車の被害がありましたか。（〇はひとつだけ）

1．車が水没して被害にあった 28.6
2．車の被害はなかった　58.0
3．車は持っていない 13.5

問３　15 日の午後 12 時 20 分に、秋田市は広面字釣瓶町などに「緊急安全確保」の呼びかけを発令しました。あなたはこの呼びかけを聞きましたか。○はひとつだけ）

１．当日、市の「緊急安全確保」の呼びかけを聞いた(知っていた) 56.3
２．当日、市の「緊急安全確保」は聞いていない(知らなかった)(問４へ) 42.0
３．市の「緊急安全確保」とは何のことかわからない(問４へ)　1.8

付問 3-1 と 3-2 は、問 3 で「緊急安全確保」の呼びかけを「聞いた」と答えた方のみお答えください。　n=63

付問３-1　あなたは市の「緊急安全確保」の呼びかけをどのようにお知りになりましたか。（○はいくつでも）

１．市のエリアメール・緊急速報メール 30.2
２．市の登録メール 6.3
３．市のツイッターや Facebook 0
４．Yahoo 防災速報などの防災アプリ 14.3
５．ネットニュース 14.3
６．テレビ 77.8
７．ラジオ 7.9
８．家族や知人から直接聞いた 11.1
９．家族・知人の電話や LINE 15.9
10．消防団や地区の役員から直接聞いた 4.8
11．ツイッター・インスタグラムなどの SNS 3.2
12．その他で知った(具体的に:　　) 0

付問３-2　「緊急安全確保」の呼びかけを聞いてどう思いましたか。（○はいくつでも）

１．自分に危険が迫っていることが分かった 31.7
２．避難しなくては、と思った 23.8
３．緊急安全確保と言われても何をしたらよいかわからなかった 25.4
４．それほど危険なことになるとは思わなかった 54.0
５．まだ、大丈夫だろうと思った 31.7
６．その他(具体的：　4.8　)

ふたたび全員にお聞きします

問４　15 日の午後、あなたはどこかに避難しましたか。（○は１つだけ）

１．自宅外に避難した 23.2	２．自宅の二階などに避難した 29.5	３避難しなかった 47.3

付問 4-1 と 4-2 は自宅外に避難した方にお聞きします　n=26

付問４-1　あなたが自宅外に避難したのはいつでしたか。（○は１つだけ）

１．自宅が浸水する前 80.8	２．自宅が床下浸水した頃 11.5	３自宅が床上浸水した後 7.7

付問４-2　あなたが自宅外に避難したきっかけは何ですか。（○はいくつでも）

１．雨が激しかったので 30.8
２．川の水位が上がってきたので 34.6
３．自宅周辺が浸水したので　73.1
４．自宅が浸水したので 15.4
５．市の「緊急安全確保」を聞いたから 11.5
６．消防団・自治会の人に勧められて 0
７．家族に勧められて　23.1
８．避難しないと地区の人に迷惑をかけると思って　0
９．指示されたら避難しなければいけないものだ、と思っていたから　0
10．車を避難させようとして 26.9
11．その他(具体的に：　23.2　)

ふたたび全員にお聞きします

問５　秋田市では避難情報を伝えるのに緊急速報メール(エリアメール)や登録制のメールを利用しています。今回、あなたはそれらを利用できましたか。（○はひとつ）

１．受け取って、利用できた 19.6
２．着信はあったが、うまく利用できなかった 25.0
３．着信していない 48.2
４．携帯電話・スマートフォンは持っていない 7.1

付問 5-1 は、問 5 で市からのメールを「うまく利用できなかった」「着信していない」と答えた方のみにお聞きします。 n=82

付問５-1　あなたが緊急速報メールを利用できなかったのはどうしてだと思いますか。可能性がありそうなものをいくつでもお答えください。（○はいくつでも）

１．着信時に携帯の電源を切っていた、または圏外だった 0
２．着信時に携帯電話が遠くにあり、気がつかなかった 13.4
３．着信時に他の活動をしていて気がつかなかった 32.9
４．カバンなどにしまっていて気がつかなかった 13.4
６．着信後見直そうとしたが、メッセージがどこに保存されているかわからなかった 3.7
７．緊急速報メールは通知しないように設定していた 1.2
８．着信時に通話・通信中だった 0
９．マナーモードだったので気がつかなかった 8.5
10．雨音などがうるさくて気がつかなかった 8.5
11．その他(具体的に： 22.0)
12．まったくわからない 26.8

ふたたび全員にお聞きします

問７　今回の災害であなたがお感じになったことはありますか。当てはまるものにいくつでも○を付けてください。

１．浸水のスピードが速くて驚いた 86.6
２．市からは何の指示も連絡もなく、どうしてよいかわからなかった。17.0
３．市からの緊急安全確保は唐突で、遅かった。18.8
４．雄物川が氾濫するのではないかと怖かった 14.3
６．ボランティアの人には良くやってくれたと感謝している 25.9
７．秋田市でも防災無線があった方がいいと思った 25.9
８．大雨に警戒とはいっても、まさか自分が水害に合うとは思っていなかった 73.2
９．その他(具体的に： 10.7)

問８　今回の災害について、国・県・市など、行政に対するご意見がありましたら、どんなことでもけっこうですからお書きください。

最後に、回答した方の性別やおおよその年齢層などをお知らせください。

Ｆ１　性別はどちらですか。（○は１つだけ）

１．　男　53.6	２．　女 46.4

Ｆ２　年齢層についてお聞きします。（○は１つだけ）

１．２０代 1.8	２．３０代　4.5	３．４０代　9.8	４．５０代 11.6
５．６０代　17.0	６．７０代　34.8	７．８０代以上 20.5	

ご協力たいへんありがとうございました。
ご回答は今後の防災に生かしてまいりたいと思います。

【資料 2】

スマホアプリについての学生アンケート　調査票および単修集計

2023 年 11 月実施　東洋大学　　N=102

問 1　あなたは LINE のトークやインスタの DM など、受けたいと思っていたメッセージを見逃すことがありますか。（１つだけ）

１.しばしばある	２.たまにある	３.あまりない	４.全くない
23.5	52.9	23.5	0

問 2　あなたはどのようなときにメッセージを見逃す可能性がありますか。（いくつでも）

1.夜、寝ている間に見逃すことがある	69.6
2.充電中、スマホの近くに居ない場合がある	33.3
3.充電切れや圏外で着信しないことがある。	31.4
4.外を歩行中など、他の作業をしているときに見逃すことがある。	64.7
5.スマホをカバンに入れていて気づかないことがある	41.2
6.仕事中は、使用禁止なので着信があってもわからない	40.2
7.着信が連続して来ていて見逃すことがある	16.7
8.サイレントモードにしているので着信に気づかないことがある	51.0
9.プッシュ通知の表示機能はオフにしているので気づかないことがある	19.6
10.なぜがプッシュ通知の設定が間違っているときがある	8.8
11.バッテリーセーブ機能やデータ通信節約機能が働いで着信しないことがある	8.8
12 通話中や他の通信をしているときだったので、受信できなかったことがある。	12.7
13.夜間は「おやすみモード」にしてプッシュ通知は来ないようにしている	26.5

問 3　あなたは「Yahoo!防災速報」などの防災アプリを使っていますか。当てはまるものをいくつでも選んでください。

1.「Yahoo!防災速報」を使っている	22.5
2.「NHK ニュース・防災」を使っている	4.9
3.「特務機関 NERV 防災」を使っている	7.8
4.「LINE スマート通知」を登録している	14.7
5.行政機関の防災アプリを使っている	1.0
6.行政機関の防災メールに登録している	3.9
7.その他の防災アプリ・メールを利用している	6.9
8.防災アプリや防災メールは利用していない	52.9

問 4　あなたは「緊急速報メール」「エリアメール」の通知を ON にしていますか。
スマホの「設定」から「通知」を開いて「緊急速報メール」「エリアメール」が ON になっている確かめてください。(いくつでも)

1.ON にしている	59.8
2.OFF にしている	21.6
3.ON だが通知音のみ OFF に設定している（「設定」→「通知」→「緊急速報」→「常に警戒音を鳴らす」を OFF)にしている）	18.6
4.ON だがおやすみモード時のみ OFF に設定している　（「設定アプリ」→「集中モード」→「おやすみモード」→「通知を許可」「App」→「即時通知」を OFF にしている）	2.9

質問は以上です。お疲れ様でした。

2024 年能登半島地震における災害情報の伝達と住民の対応

東洋大学　　中村功
日本大学　中森広道

1.　はじめに

1.1 調査の目的

2024 年１月１日午後４時 10 分、石川県能登半島沖の深さ 16 キロを震源とするマグニチュード 7.6 の能登半島地震が発生した。この地震により、直接死 228 名、関連死 364 名、行方不明２人という甚大な人的被害があり、同時に全壊住戸 6,520　棟、半壊住戸 23,600 棟などという深刻な物的被害も生じている(2025 年５月 13 日現在、内閣府，　2025)。能登半島地震は東日本大震災以来、最大の災害であった。本論ではこの災害における、津波避難・通信の確保・避難生活・流言などに関する情報伝達の諸問題について、関係者への聞き取りおよび被災住民へのアンケート調査をもとに検討していく。

アンケート調査は、2024 年６月に、珠洲市および輪島市の仮設住宅およびその周辺の民家の住民を対象として行われ、珠洲市で 266 票、輪島市で 99 票、合計 365 票の回答を得た(表 1.1)。

表 1.1　アンケート調査の概要

対象者：石川県珠洲市および輪島市の仮設住宅およびその周辺の民家の住民 （対象仮設住宅　珠洲市:宝立小中学校、上戸小学校、上戸他者的広場、正院小学校、みさき小学校、三崎中学校；輪島市：門前グラウンド；避難所：宝立小中学校） 調査時期：2024 年６月 調査方法：自記式、訪問配布-郵送回収 回収数・回収率：　365 票(珠洲 267，輪島 99)　59.1%（珠洲 62.4%，　輪島 52.4%　） 主な調査項目：津波避難行動、避難所生活、情報ニーズ、報道評価、緊急地震速報への対応、流言

1.2 被害概要

この地震では、激しい揺れや津波が発生したが、大きな被害をもたらしたのは揺れのほうであった。石川県輪島市や志賀町では震度 7、そして七尾市、珠洲市、穴水町、能登町では震度６強といった強い揺れを観測している。揺れそのものにより家屋が倒壊したほか、土砂崩れが発生して家屋の倒壊

図 1.1　揺れで倒壊した家屋
（珠洲市宝立町鵜飼地区）

図 1.2 津波で打ち上げられた漁船
（珠洲市宝立町見附島付近）

や道路の寸断が発生した。他方、能登半島の東側にある富山湾一帯では津波が発生した。気象庁(2024)によれば津波の高さは、石川県能登町では 4.7m、同珠洲市では 4.3m であった(表 1.2)。

表 1.2　各地の津波高　　気象庁(2024a)

都道府県	調査地点名	推定した津波の高さ	津波高の種類
新潟県	上越市柿崎漁港	2.9m	遡上高
新潟県	上越市船見公園	5.8m	遡上高
新潟県	上越市直江津海水浴場	4.5m	遡上高
新潟県	佐渡市羽茂港	3.8m	痕跡高
新潟県	佐渡市小木港	1.9m	痕跡高
富山県	朝日町宮崎漁港	1.4m	痕跡高
富山県	射水市海竜新町	1.5m	遡上高
石川県	珠洲市飯田港	4.3m	痕跡高
石川県	珠洲市鵜飼漁港	2.7m	痕跡高
石川県	珠洲市見附公園	2.9m	痕跡高
石川県	能登町恋路海岸	1.7m	遡上高
石川県	能登町松波漁港	3.1m	痕跡高
石川県	能登町内浦総合運動公園	4.0m	痕跡高
石川県	能登町白丸	4.7m	痕跡高
石川県	能登町九十九湾	2.2m	痕跡高
石川県	能登町宇出津港	1.3m	痕跡高
石川県	七尾市鵜浦漁港	1.8m	痕跡高
石川県	七尾市下佐々波漁港	2.2m	遡上高
石川県	輪島市舳倉島漁港	2.9m	痕跡高

この地震により 228 名の直接死が生じているが、その原因は把握しにくい。たとえば警察庁が関連死以外の犠牲者 222 人を検視したところによると、「圧死」が 92 人、「窒息・呼吸不全」が 49 人、「低体温症・凍死」が 32 人、「外傷性ショック等」が 28 人、「焼死」が 3 人、「クラッシュ症候群」や「心臓死」などの「その他」が 6 人、「不詳」が 12 人、溺死はいなかったとされている(朝日新聞デジタル，2024)。これによれば「圧死」「窒息・呼吸不全」「外傷性ショック」の合計が 159 人（76.5%）と大半を占めている。圧死は即死で窒息・呼吸困難は即死をまぬかれた下敷きによるものと思われるが、その多くは揺れによる家屋倒壊と土砂災害によるものと考えられる。他方、土砂災害による死者は 36 名、行方不明が３人（内閣府 2024）となっており、下敷き被害の５分の１程度は土砂災害に伴うものと推定される。他方、津波による被害状況はよくわからない。石川県が初期の段階で発表したところによると、犠牲者 128 人のうち、「家屋倒壊」が 111 人、「土砂災害」8 人、「津波」2 人、「火災」2 人と、津

波による犠牲者が２名とされていた(朝日新聞デジタル，2024)。ただ検視によれば溺死者はいないとなっているので、ここによる津波の被害者は検視では低体温症あるいは外傷に分類されているのかもしれない。

一方、物的被害では住家の被害が著しく、各市の調査によると輪島市では 6497 棟のうち 2218 棟（34.1%)、珠洲市では 7612 棟のうち 2937 棟（38.6%）が全壊であった(共同通信 2024)。これは空き家も含んだ数字だが、前年の 2023 年 5 月 5 日にもマグニチュード 6.5(震度は珠洲市で６強)の地震が発生しており、その時のダメージが建物被害を大きくしたものと考えられる。

1.3 事前の予測情報

今回の地震は専門家の間ではマークされていたものの、その揺れに対する警戒は住民には伝えられていなかったようだ。たとえば珠洲市の地域防災計画には津波の発生が想定される断層についての記述があり、今回動いた断層は、そのうちの F43 の断層が動いたものである(図 1.3)。想定によると、この断層が動くとマグニチュード 7.57 の地震となり、加賀市から穴水町にかけて 1.7m から 6.3m（志賀町)の津波が想定されていた。位置、マグニチュード、津波高さはまさに想定通りであったが、その頻度がわからないために、陸上の被害想定やそれに対する啓発も十分されていなかったのである。

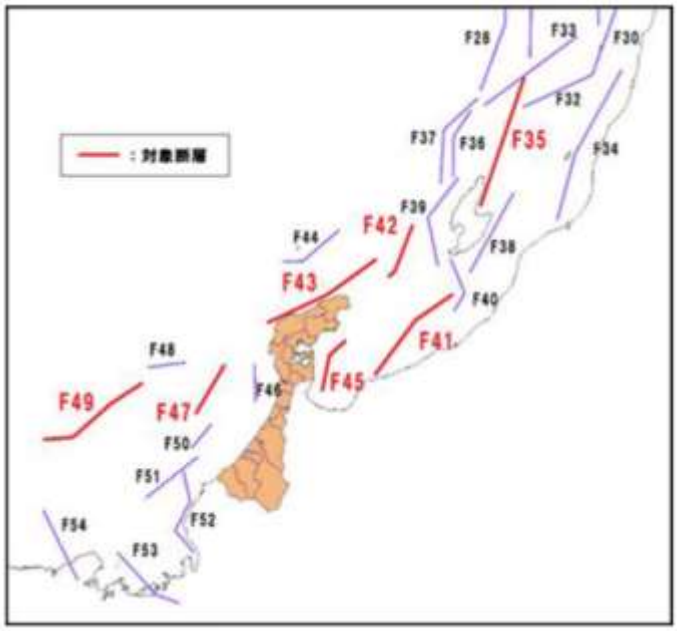

図 1.3　津波が想定される断層（令和３年珠洲市地域防災計画　総則編）

1.4 地震・津波情報の発信

16 時 10 分に発生した本震の 4 分前には、前震ともいえる災害震度 5 強（珠洲市）の地震が発生している(表 2)。気象庁(気象庁 WEB ページ)によれば本震の発生は 16 時 10 分 23 秒であるが、それとほぼ同時に緊急地震速報が 3 回発表されている。すなわち 16 時 10 分 10 秒の揺

れはじめに対して第 1 報（予測震度 5 弱～震度 5 強）が 16 時 10 分 16 秒に発信され、16 時 10 分 43 秒に第 2 報（予測震度 6 弱～7）が、さらに 16 時 11 分 7 秒に第 3 報（震度 6 強～7）が出されている。

表 1.2　津波情報の時間経過

16:06	震度５強の地震発生
16:10	震度 7 本震発生
16:10～11	緊急地震速報発表（16 時 10 分 16 秒、43 秒，16 時 11 分 7 秒）
16:12	津波警報発表（石川県能登・加賀、富山県、新潟県上中下越・佐渡）
16:22	大津波警報(石川県能登)
16:33	大津波襲来　珠洲市三崎地区（NIKKEI Film より）
16:47	大津波襲来　珠洲市宝立春日野地区(NIKKEI Film より)

（気象庁 2024b 等より作成）

津波に関しては、まず本震の 2 分後の 16 時 12 分に津波警報が出され、さらに 10 分後の 16 時 22 分には大津波警報が出されている。住民のドライブレコーダーの映像によると大きな津波が記録されているのは珠洲市三崎地区で 16 時 33 分、同宝立地区では 16 時 47 分であった。だとすると津波警報から大津波の来襲までは 10 分以上あり、津波警報は間に合っていたといえる。　　（中村功）

2.　直後の行動

ここからは今回のアンケート調査を中心に、地震後の住民の行動を明らかにしていく。

2.1　まずは避難

かつてない揺れを感じた住民がまず行ったのは避難行動であった。アンケートでは全体の 63.0％の人が直後に屋外に出ており、49.3％が津波が来るかもしれないと思い避難している（図 2.1）。激しい揺れで家屋の下敷きになることを避けるために外に出る行動は地震時に典型的な行動であるが、このことは後述するように避難情報を伝える有効な手段に関係してくる。次いで多いのが全体の 25.5％いた「情報を得ようとした」という行動である。これは震度・震源・津波の有無などを確かめようとしたのであろう。一方、安否確認の電話や LINE をした人は 15.％、出先から自宅に向かった人は 6.8％と少なめであった。さらに全体の 7.1％の人が「閉じ込められた」としている。激しい揺れに伴う家屋の倒壊が避難行動を妨げた側面がうかがえる。

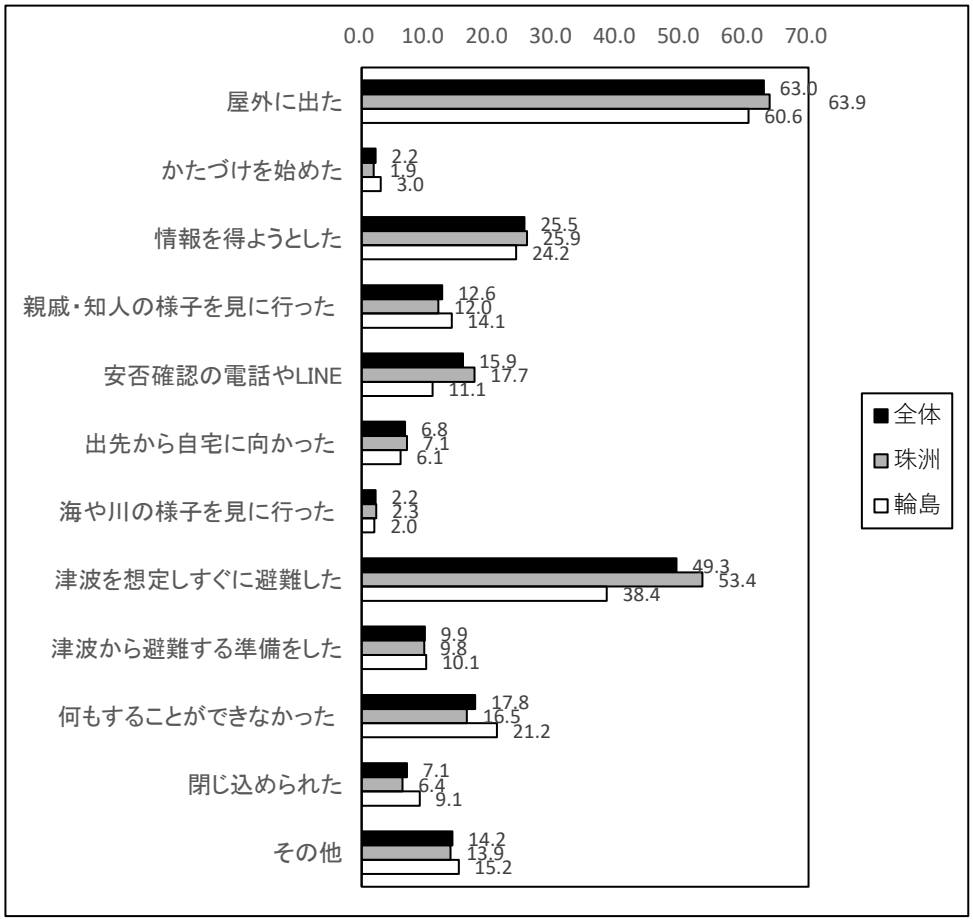

図 2.1　直後の行動　(%)　M.A.

2.2　防火行動

地震後、各地で火災が発生した。総務省のまとめによると石川県、富山県、新潟県で計 17 件の火災が確認されている(総務省消防庁 2024b)。激震地では輪島市で 4 件、珠洲市で 1 件、能登町で 1 件の火災があった。その中でも輪島市中心部で発生した火災は大規模なもので、計 240 棟、のべ 49,000 平方メートルが焼失した。この火災は、屋内の電気配線のショートが火元となったと考えられている。また珠洲市と能登町の火災は津波にともなうものであった。こうしたことから、避難する際にはブレーカーを落とすなどの火災対策が重要であることがわかる。

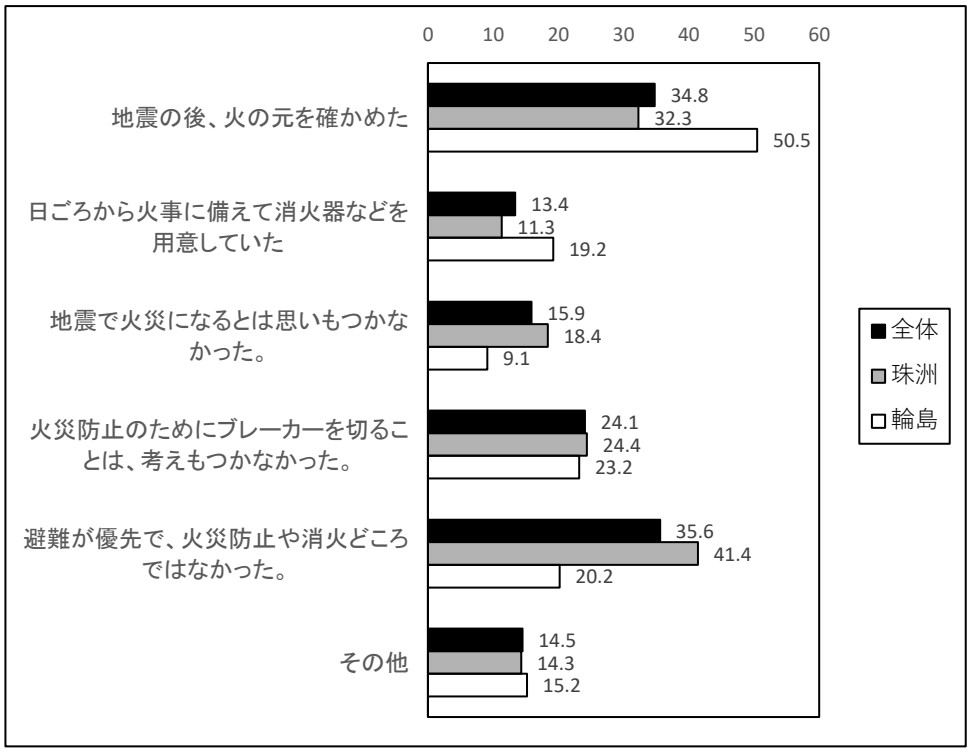

図 2.2　地震後の防火行動　（%）M.A/

アンケートでは火災に対する対策について聞いている。地震後、火の元を確かめたという人は輪島では 50.5%いたが、珠洲では 32.3%と伸び悩んでいた。これは津波からの避難が優先で火災防止どころではなかったという人が珠洲では 41.4%もいたことが原因となっている。津波避難が先か防火が先かというのは悩ましい問題である。感震ブレーカーを普及させることが一つの解決策であるが、「ブレーカーを切ることは考えもつかなかった」という人が 24.1%（全体）いることから、避難時はブレーカーを切ることをさらに啓発する必要もあるだろう。（中村功）

3.　津波避難

3.1 迅速だが伸び悩んだ津波避難率

今回のアンケート調査では、津波が来る前に避難したかをたずねている。ここではそうした行動を「津波前避難」または単に「避難」とする。他方、図 2.1 で示した地震後の行動で「津波を想定してすぐに避難した」という行動は「迅速避難」とする。全体では 73.4%（珠洲 77.4%、輪島 62.6%）の住民が津波前避難をしていて、かなりの人が津波前に避難していたことがわかる(図 3.1)。調査には海岸から離れた地区に住む人の回答も含まれているため、海沿いの住民（海から徒歩 20 分以内）だけに絞って集計すると、84.9%（珠洲 84.3%、輪島 87.5%)の津波避難率となった。

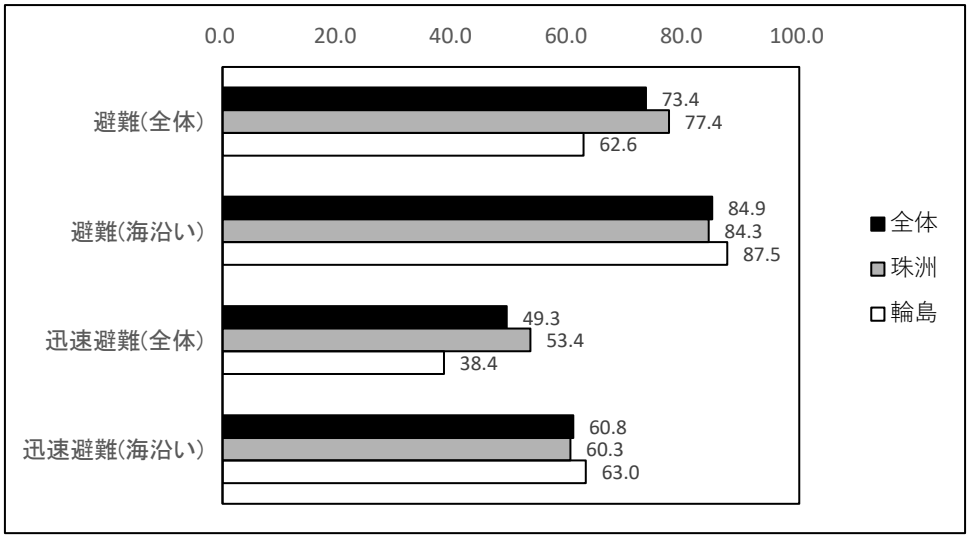

図 3.1　津波避難率　(%)

しかしこの避難率は、筆者の感覚からするとやや伸び悩んでいたのではないかと思える。というのは、第1に、この地域はかねてより津波避難が活発な地域だったからである。実は2007年にもこの地方では最大震度6強の能登半島地震があり、津波注意報が発表されている。筆者らはこの時、輪島市で住民アンケート調査をしているが、輪島市門前町黒島地区では 72.1%、同諸岡地区では79.0%の避難率を記録していた(図3.2)。津波注意報でこれだけの避難率なのだから、震度も大きく、大津波警報まで出ていた今回は、避難率はもっと高くなるのではないかと予想していたのである。

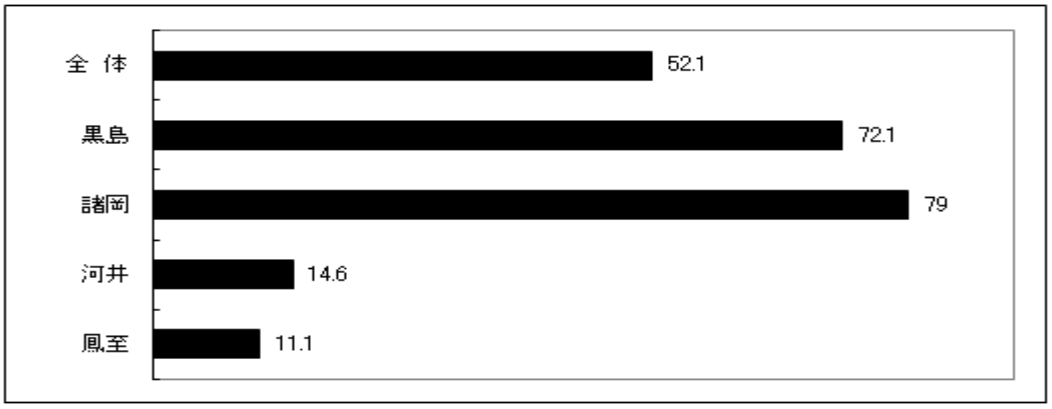

図 3.2　2007年能登半島地震における津波避難率（%）吉井,中村他,2008,p83

第2に、東日本大震災時の数字と比べても避難率は高いとはいえなかった。すなわち筆者らの調査では、津波前の避難率は陸前高田が 94.9%、南三陸が 89.6%、仙台・名取が 90.0%と軒並み約9割に達していたのである(図3.3)。

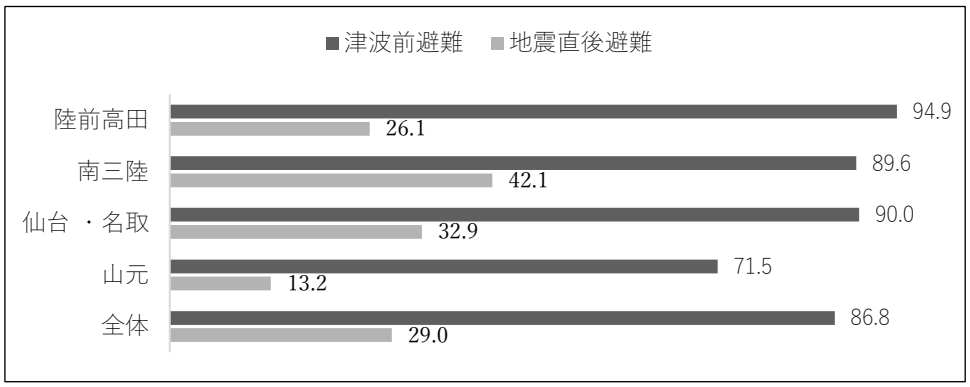

図 3.3　東日本大震災時の津波避難率　（中村，　2021）

では今回の避難が東日本大震災より不活発であったのかというと必ずしもそうとはいえない。というのは今回の調査で、揺れのあと津波が来るかもしれないと思いすぐに避難した人（迅速避難あるいは地震直後避難）の割合をみると、海沿いの人では、60.8%（珠洲 60.3%、輪島 63.0%）の人が迅速避難をしていたからである(図 3.4)。この割合は東日本大震災時の陸前高田の 26.1%、南三陸の 32.9%、仙台・名取の 32.9%を大きく上回っている。さらに今回避難した人にそのタイミングを聞いてみたところ、避難した人全体で 6.7%の人が「揺れている最中」に避難を開始し、52.6%が「揺れが収まった直後」に避難を開始していた(図 6)。今回は危機感を持って迅速に避難した人が多かったといえる。

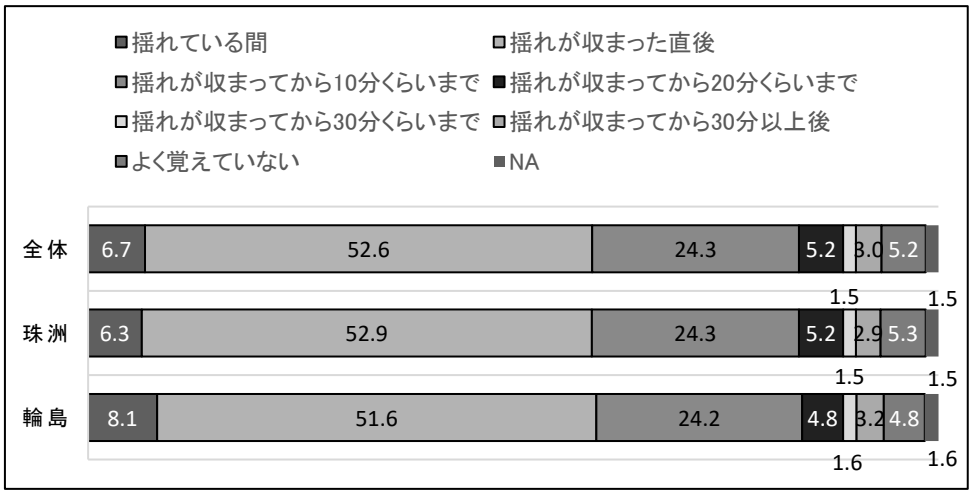

図 3.4　避難開始までの時間　（%）n=268

今回の迅速な避難の様子は、携帯電話の位置情報を使った分析にも現れている。日本経済新聞（2024.3.10 朝刊）ではソフトバンクの子会社であるアグープの位置情報のデータを分析しているが、それによると津波避難をした人（104 人）のうち、避難開始の割合が 50%を超えたのは珠洲市で 6 分、能登町で 7 分、80%を超えたのは珠洲市で 11 分後、能登町で 10 分後だったという。

3.2 家屋の倒壊が津波避難を妨げた

東日本大震災にくらべ迅速に避難した人が多いにもかかわらず、避難率が伸び悩んだのは、

家屋の倒壊が著しかったからである。避難しなかった人にその理由をたずねると、「家に閉じ込められて出られなかった」という人が 13.8%（珠洲 17.3%、輪島 8.6%）おり、さらに「道がふさがれていたので」という人が 12.6%（珠洲 11.5%、輪島 14.3%）いたのである

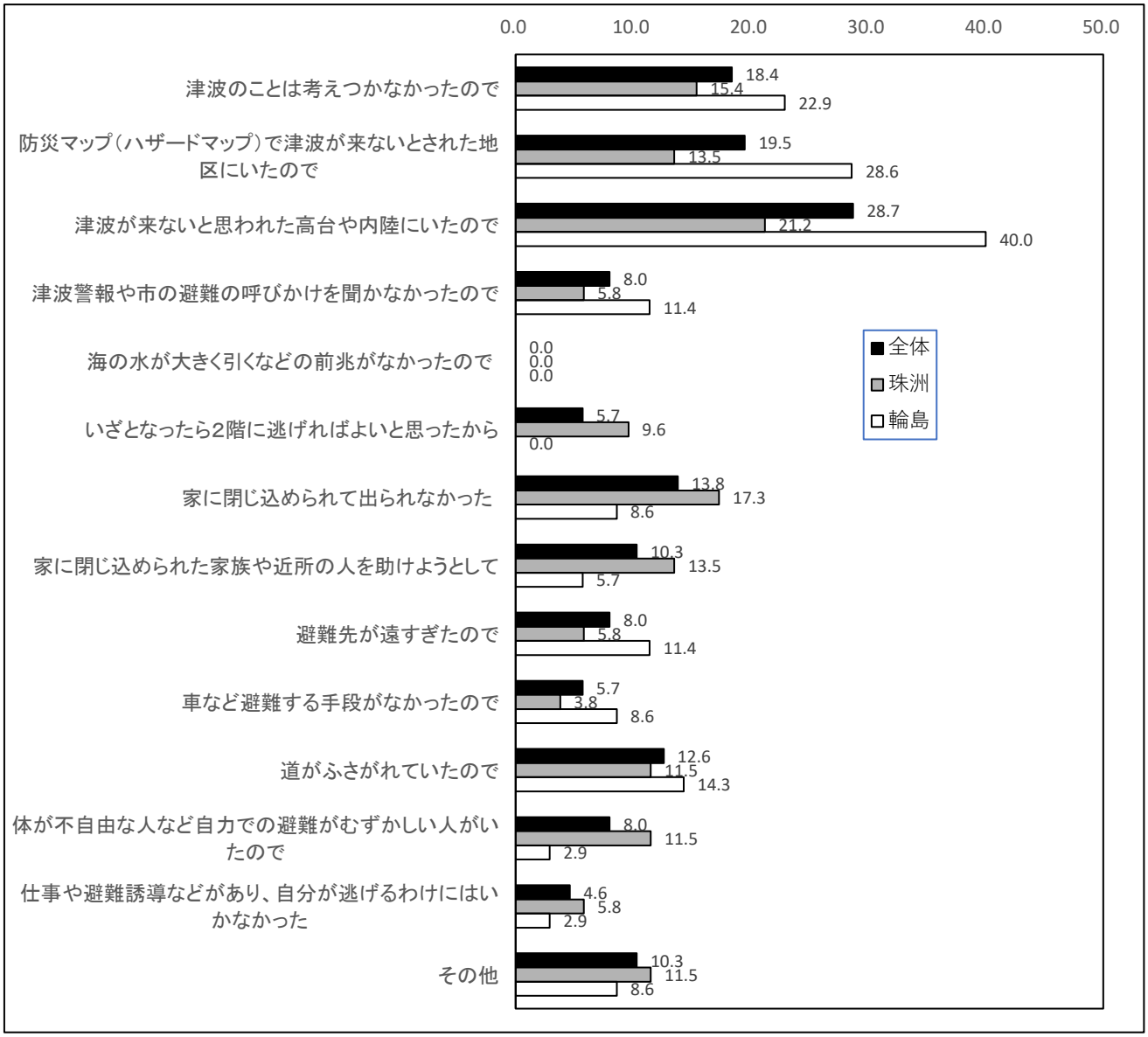

図 3.5　避難しなかった理由　複数回答（%）n=87

(図 3.5)。両者を単純に合わせると 25%となり、避難しなかった人の 1/4 程度は倒壊した家屋に閉じ込められるか、外に出て避難しようと思っても倒壊家屋で道がふさがれていて避難できなかった可能性がある。

すでにみたように今回、調査地点では全壊家屋が３割以上という甚大な家屋被害があり、これは東日本大震災ではなかったことである。一般に、甚大な津波被害が出た地震は海溝型の地震であるため、東日本大震災のように、犠牲者のほとんどは津波によるものであるといわれる。しかし今後予想される南海トラフ地震は比較的陸に近い所に震源があるため、津波危険地域で

も震度 7 が予想される地域が少なくない。たとえば内閣府の資料をもとに、推定される津波の最大浸水深が 10 メートル以上で、しかも予測される最大震度が 7 の地域をみると、静岡県・三重県・和歌山県・徳島県・高知県・宮崎県で計 43 の市町村があてはまっている(表 3.1)。

表 3.1　南海トラフ地震で津波浸水深が 10 メートル以上かつ震度 7 が予測される市町村

静岡県	浜松市・磐田市・掛川市・袋井市・御前崎市・牧之原市
三重県	尾鷲市・熊野市・大紀町・南伊勢町・紀北町・御浜町
和歌山県	御坊市・美浜町・みなべ町・白浜町・すさみ町・串本町
徳島県	美波町・海陽町
高知県	室戸市・安芸市・南国市・土佐市・須崎市・宿毛市・土佐清水市・四万十市・香南市・香美市・東洋町・奈半利町・田野町・安田町・芸西村・中土佐町・四
宮崎県	日向市・高鍋町・川南町・都農町

内閣府（2017）より　いずれも予測最大値を元に著者作成

これらの地域では、今回の能登半島地震のように家屋倒壊で津波避難が阻害される恐れがある。したがって、津波危険地域でかつ強い震度が予想される地域では、住宅の耐震対策や避難路周辺の倒壊家屋対策（空き家の撤去など）を早急に進めていく必要があるだろう。

3.4 避難訓練参加が避難を促進

避難を促進した要因として、アンケートでは避難した人にそのきっかけを聞いている。最も多く挙げられたのは「揺れの激しさ」（58.2％）で、次に多いのが「津波警報の聴取」（41.0％)、そして第 3 が「周りの人の声掛け」(34.7％）であった(図 3.6)。そのほか注目されるきっかけには「東日本大震災の記憶があったから」(26.5％)や「避難訓練でいつも避難しているから」(25.7％)などもあった。

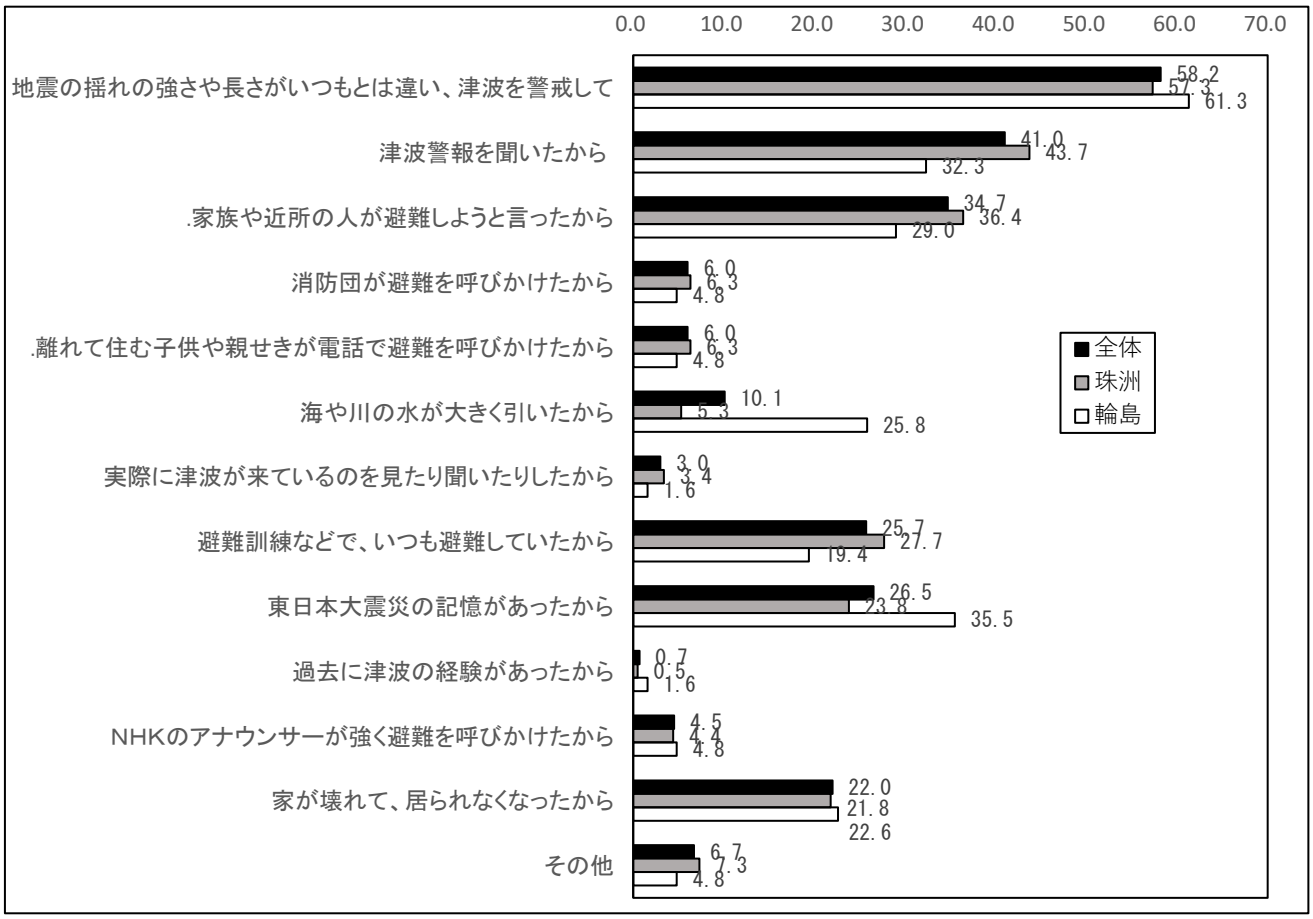

図 3.6　避難した理由（%）n=268

次に避難の有無に関係しそうな要因を探るべく、避難と関係しそうな変数と避難の有無をクロス集計した。カイ二乗検定の結果、「警報聴取あり」、「住まいが家に近い」、「珠洲市の住民」、「避難訓練によく参加していた」、「避難場所を知っている」、「津波避難地域にあると認識している」、という項目で避難率が有意に高くなっていた。たとえば全体の避難率は 73.4%だが、避難訓練によく参加している人の避難率は 91.3%、津波危険地域に住んでいることを認識している人の避難率は 92.2%であった(図 3.7)。

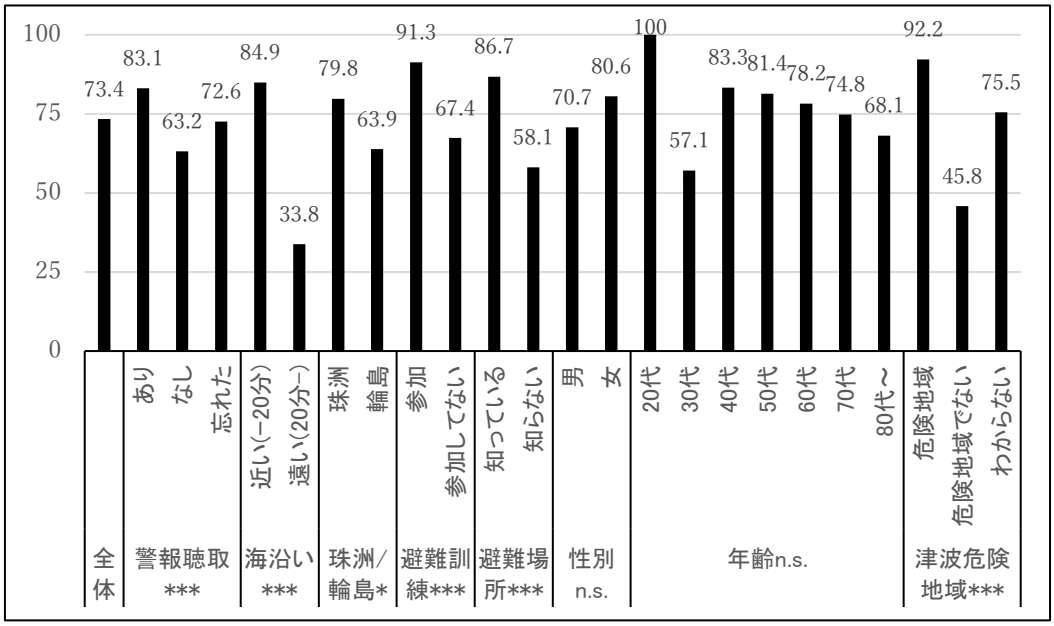

図 3.7　カテゴリー別避難率（%）χ^2；***:p<0.01，*<0.05，n.s.:有意差なし

同じことを迅速に避難した率で比較しても同様の傾向が見られた（図 3.8)。

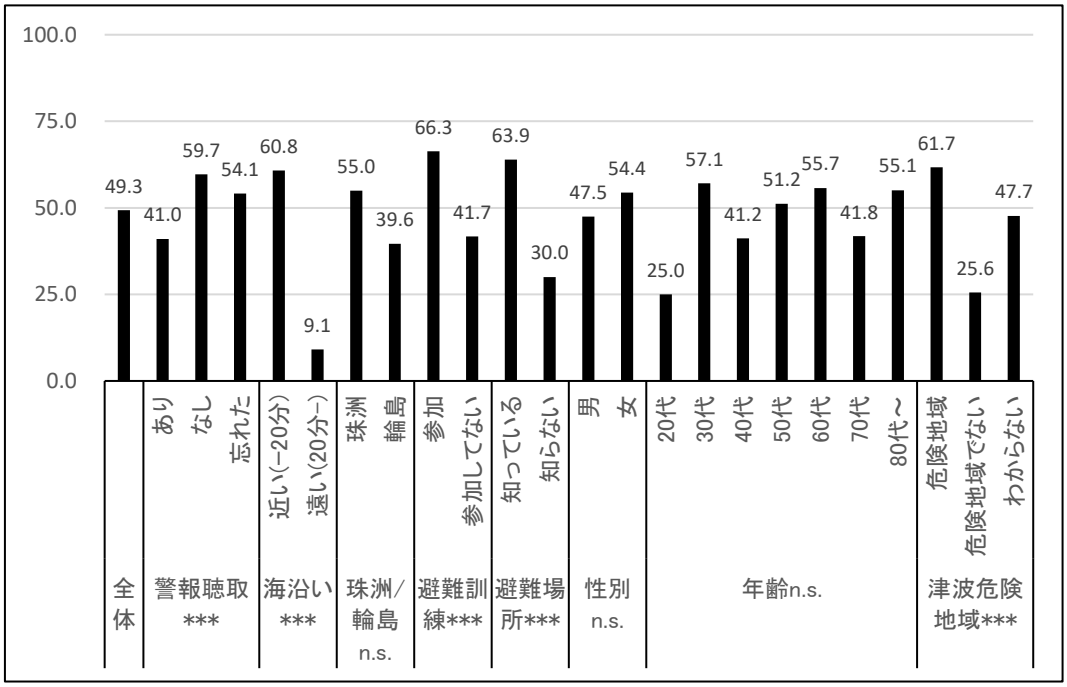

図 3.8　カテゴリー別迅速避難率　χ^2；***:p<0.01，*<0.05，n.s.:有意差なし

さらに津波前避難の有無を従属変数にしてこれらの変数を独立変数として、ロジスティック回帰分析を行った。その結果、避難訓練に参加しているという変数と、危険地域の認識の変数の２つが有意水準が５％以下で、影響力のある変数として析出された（表 3.2)。逆に津波警報の聴取の有無や避難場所を知っているという変数は有意とはならなかった。ここで注目されるのは避難訓練に参加している人は避難場所も知っており避難につながるが、避難訓練に参加

せず単に避難場所を知っているだけでは避難に結びつかないということである。また危険地域であることの認識については、危険地域ではないと知っている人がむしろ避難にプラスに働く傾向があった。これは実際の避難率と逆の傾向で奇異に感じる。津波危険地域かどうか「わからない」とする人のオッズ比が 0.49 とかなりマイナスに出ている(避難率にマイナスに寄与している)ことを考えると、防災意識が高く津波危険地域の知識がある人は、たとえ自分の家が津波危険地域ではないと知っていても避難につながりやすいということかもしれない。

表 3.2　避難のロジスティック回帰分析の結果

	B	標準誤	Wald	自由度	有意確	オッズ比
避難訓練	1.620	0.427	14.404	1	0.000	5.052
避難場所	0.375	0.353	1.129	1	0.288	1.455
性別	-	0.329	8.197	1	0.004	0.390
年齢	-	0.127	2.472	1	0.116	0.820
海沿い	1.559	0.460	11.494	1	0.001	4.753
珠洲/輪島	0.389	0.401	0.940	1	0.332	1.475
津波警報			2.863	3	0.413	
聞いた	-	1.075	0.149	1	0.699	0.660
聞かない	0.595	0.400	2.211	1	0.137	1.813
覚えていな	0.457	0.464	0.970	1	0.325	1.580
危険地域の認			12.747	3	0.005	
あると認識	0.419	1.361	0.095	1	0.758	1.521
ないと認識	0.955	0.401	5.668	1	0.017	2.598
わからない	-	0.429	2.748	1	0.097	0.491
定数	-	1.122	0.001	1	0.974	0.964

最終ステップの有意確率: <0.001(p<=0.05 で有意),
Hosmer と Lemeshow の検定: .826,　(≧0.05 でモデルの適合性良) ,モデルの的中率 ： 83.3%

こうした結果は、この地域では地域共同体の活動が活発で、それに伴って避難が促進されている様を示唆している。普段から共同体の行事として避難訓練に参加していることが、迅速な避難行動に結びついている。今回のように地域の共同体が強固で高齢者の多い所では、避難訓練によるルーティン化された避難の方が、津波警報を活かして自ら判断して避難する方策よりも有効なのかもしれない。

(中村功)

4. 避難生活

4.1 長引くライフラインの途絶と生活の困難

能登半島地震では停電や断水といったライフライン被害が長引き、避難生活に大きな困難をもたらした。経済産業省(2024)によると、石川県を中心に最大４万戸が停電し、停電戸数は、１月５日に約 28,000 戸、１月 15 日に約 5,500 戸、１月 31 日に 2,500 戸と、多くが回復するまで約１か月を要している。しかし我々の調査では事態はより深刻で、自宅周辺の停電回復が「３～４週間後」とした人まで入れても 50%に達せず「２月以降」とした人が 44.4%と最も

多くなっていた(図 4.1)。家屋の倒壊が深刻な地域では、停電の復旧に１か月以上かかっていたようである。

これをこれまでの地震と比べると、停電回復までの期間は熊本地震では約５日、東日本大震災では約８日となっている。(経済産業省, 2024) 能登半島地震での復旧までの期間を経産省資料が示す 30 日だったとしても、これまでの災害と比べて復旧までの期間が著しく長かったといえる。その原因は、土砂災害による道路の寸断や渋滞により、作業のための車が思うように活動できず、効率的に作業できなかったためである。

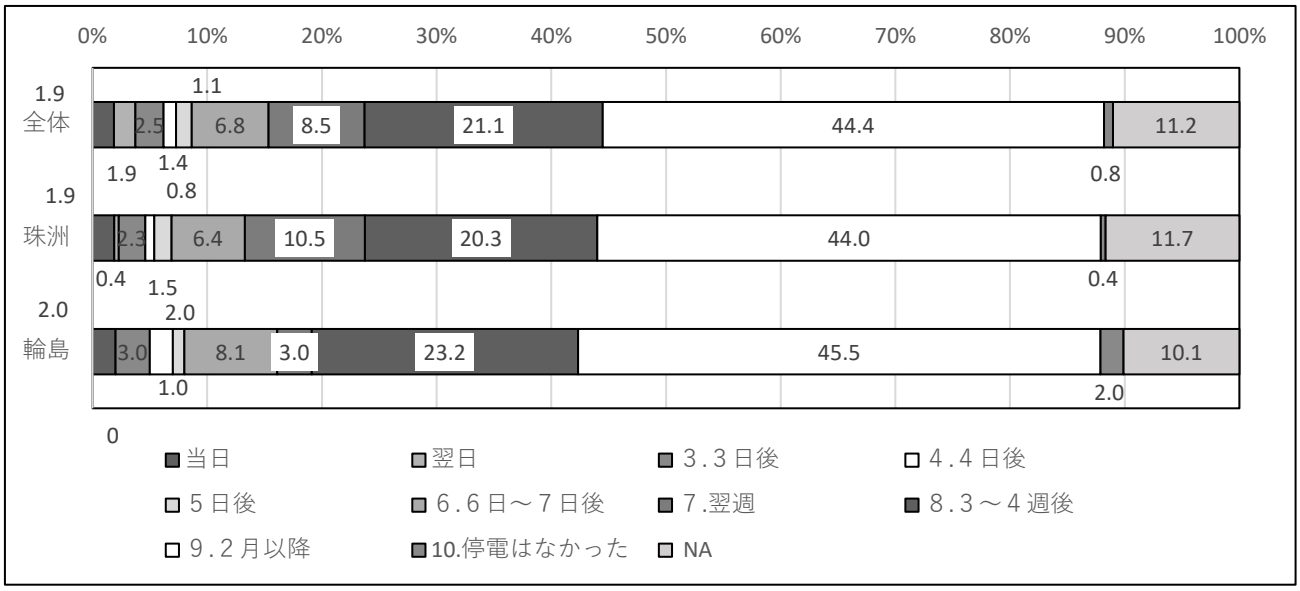

図 4.1　停電の復旧時期　(%)

ライフラインの被害でより深刻だったのは水道の断水である。内閣府の被害報告によると、石川県を中心に最大 11 万戸以上の世帯で断水が発生している。断水世帯数は１月末には約４万世帯、２月末には約２万世帯、３月末には約９千世帯、４月末には約 4,500 世帯と減少し、全世帯が復旧したのは５月末であった。被害の激しかった珠洲市では復旧はより遅く、断水世

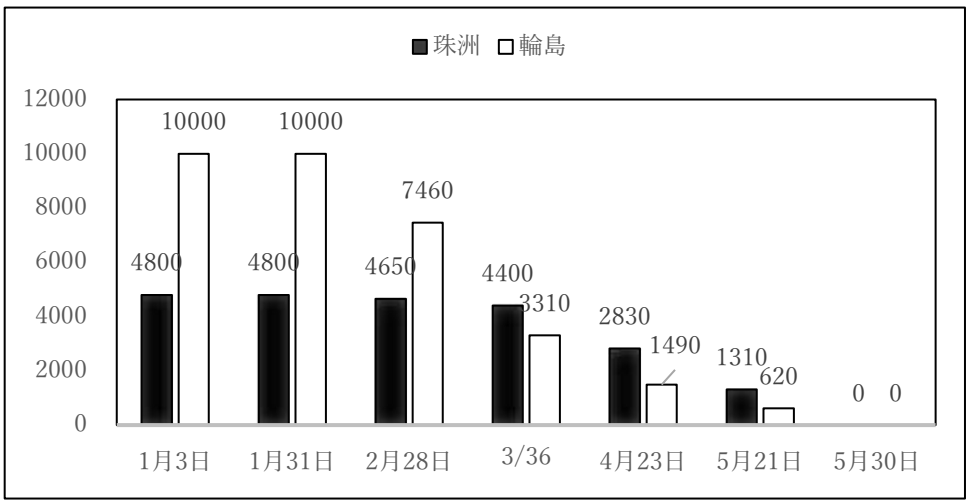

図 4.2　断水世帯数の変化　(内閣府、各日被害報告より作成)

帯数は最大値が 4,800 戸(1 月 3 日)で、以後 3 月末までほとんど減少せず、４月、５月で復旧しはじめ、ようやく５月末に断水世帯が 0 となった(図 4.2)。同様に輪島市の回復も緩慢で、断水世帯数は最大で 10,000 戸あり、２月から３月にかけて減少し、やはり５月末で完全復旧となっている。

しかし我々のアンケートによると、実際は、断水は内閣府の報告よりも、より長引いていたようである。自宅周辺での断水がいつまで続いたかをたずねたところ、５月末で回復したという人は輪島市では８割を超えたものの、珠洲市では６割にも達していなかった(図 4.3)。これはどういうことかというと、水道管は確かに自宅付近までつながったものの、自宅までの引き込み部分は各自水道業者に依頼して修復しなければならず、実際には断水が続いた世帯が多かったのだと考えられる（NHK, 2024.5.31)。

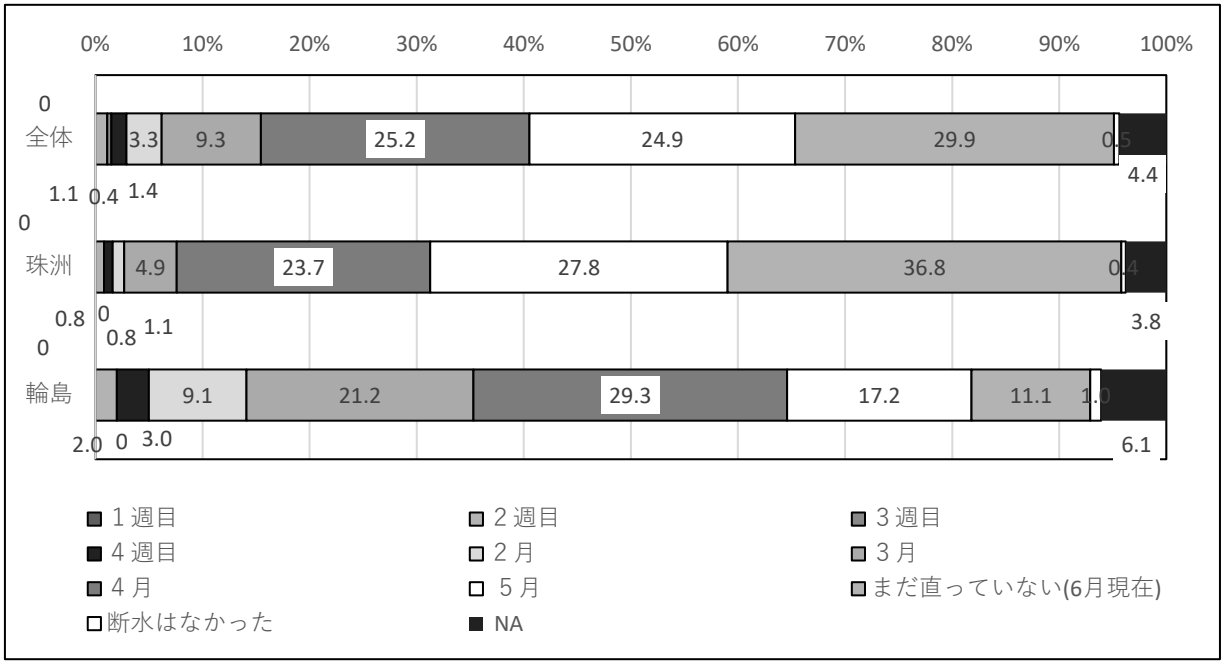

図 4.3　　自宅付近の断水の復旧時期　(%)

こうしたライフラインの停止が避難生活の困難に直結している。地震から数日間で困ったことを聞くと、「風呂に入れなかった」(75.9%)、「トイレができなかった」(60.3%)、「寒かった」(57.5%)などが半数を超えていた(図 4.4)。これらはいずれも断水や停電に起因する障害であり、これらは数日間だけでなく、ライフラインが回復するまで長く続くことになった。

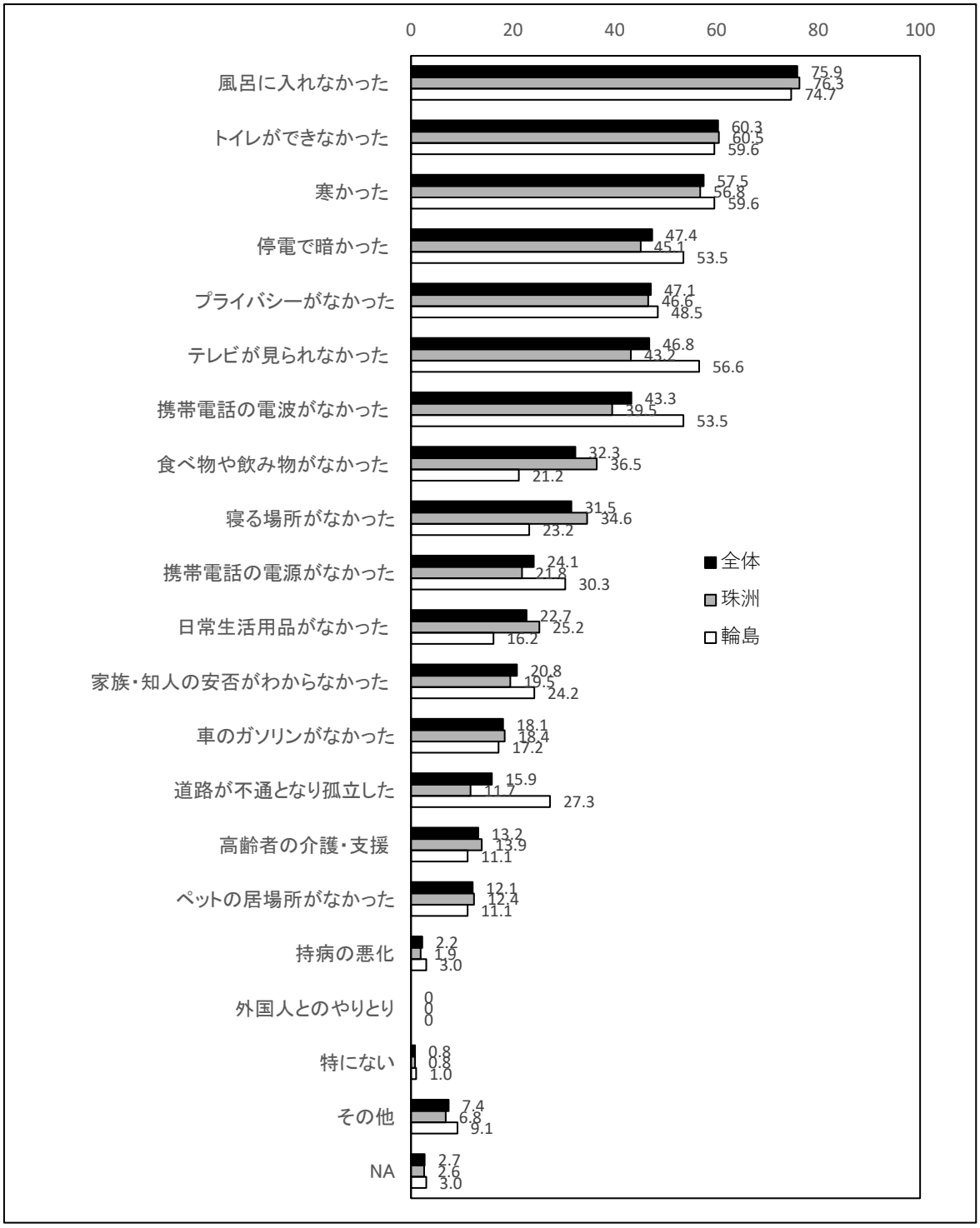

図 4.4　地震から数日間、困ったこと　M.A.　（%）

避難所に避難した住民の話によると、この中でも特に困ったのはトイレの問題であったという。避難所のトイレは汚物ですぐにいっぱいとなり、大変な状態になっていたという。しばらくして便器にゴミ袋をかぶせ、その中に吸収材として新聞紙や余っていた生理用品をちぎっていれるような方法をとるようになって、ようやく事態は改善されたという。避難訓練では避難

所に行って非常食のアルファ米を食べるようなことを繰り返していたが、そのようなことよりも非常トイレを作る訓練をしていた方が良かったのでは、とある住民は話していた。実際、我々のアンケートでも「防災訓練では、非常用のトイレの作り方をやっておいた方が良いと思った」と答えた人が 32.1%とかなり多かった。ちなみに避難所では、段ボール製の非常トイレは湿気ですぐに崩壊して使いものにならなかったとか、アルファ米は家から米を持ってきて炊いていたので不必要だった、という話も聞かれた。

4.2 2 次避難が困難な理由

地震後避難した場所はどこかをたずねたところ、学校などの公的避難所が 59.5%と最も多く、ついで車中生活が 22.7%、その他が 16.4%と多くなっていた(図 4.5)。その他とは具体的には主に近所の集会所のことで、指定避難所ではない自主的な避難所のことである。通常の災害と比べると、市内全域で自宅の被害が大きかったので、市内の家族・知人の家が少なく、公的施設や車中生活が多くなっている。

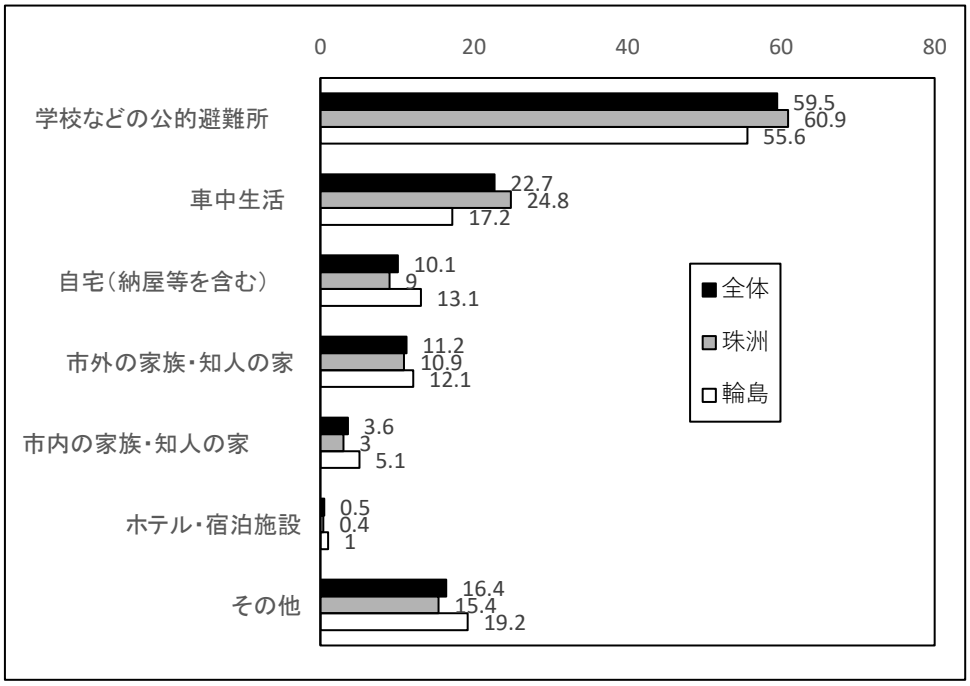

図 4.5　数日後の避難場所　（%）M.A.

ライフラインの障害から厳しい避難生活続いたが、そうであればライフラインが維持されている地域に 2 次避難をしたらよいのではないか、と考えられる。しかし実際はなかなか進まないようであった。内閣府(2024.4.15)によると、今回、最大で 40,688 人が避難者となったが、そのうちホテル・旅館等の 2 次避難所に避難した人は最大で 5,275 人（2 月 16 日）であったという。そのほか、金沢市は体育館内にテントを備えた「1.5 次避難所」(710 人収容可能)を開設した。アンケートでは初めの避難所から移動した避難先を 2 次避難ととらえ、2 次、1.5 次を区別せずたずねた。その結果、市外のホテルや民家に避難した人は回答者の 25.2%であった。

逆に 2 次避難しなかった人は 46.3%と約半数であった(図 4.6)。

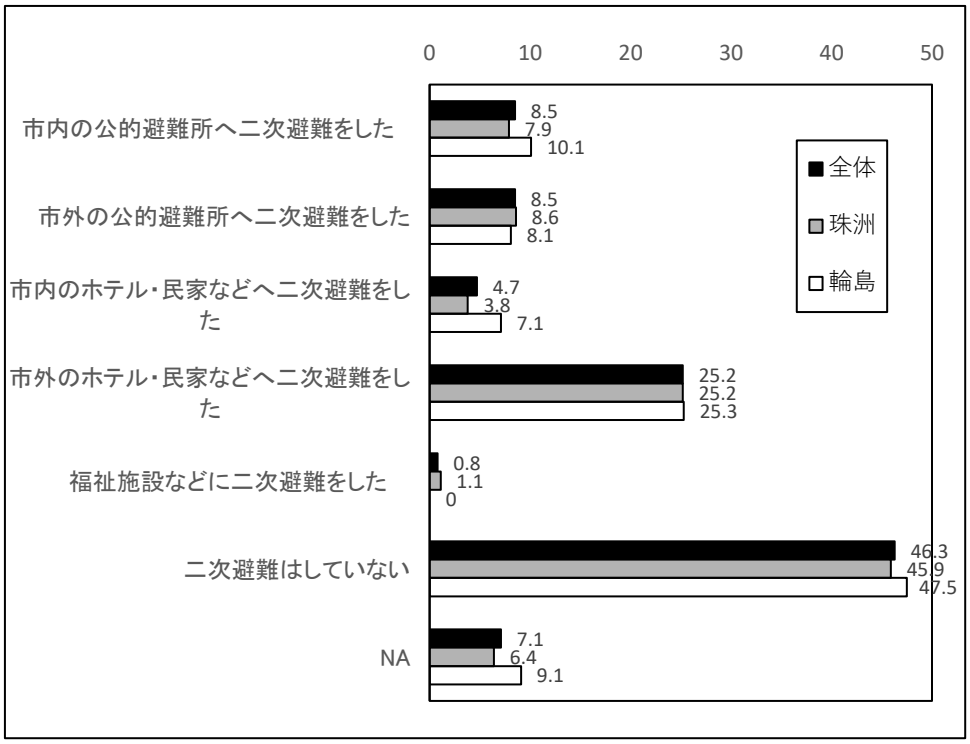

図 4.6　2 次避難の有無　（%）複数回答

2 次避難がなかなか進まない理由を探るべく、2 次避難への感想をたずねたところ、最も多かったのは「市外へ避難して、自宅を放置するわけにはいかない」というもので、回答者の 42.7%と約半数がそうした心配をしていた(図 4.7)。確かに自宅の片付けもしなければならないし、危険度判定や罹災証明などの手続きにとっても自宅付近にいた方が有利な点がある。次に多かったのは全体の 21.6%が挙げた「市外といっても金沢以遠や県外は心理的に遠すぎる」という感想である。確かに金沢は珠洲から 140km も離れており、その距離は東海道線でいえば東京から静岡県の富士までの距離に匹敵する。その他「慣れ親しんだ地域の人と離れるのは不安」(17.3%)とか「自分だけ離れるのは地域の人に悪い」(16.7%)といった地域への愛着もあるが、2 次避難を妨げるのは「家をそのままにできない」という、より現実的な問題が大きいようだ。石川県の馳知事は 2 次避難を勧める中で「仮設住宅の完成などを踏まえ、今後、元の自治体に戻ることも含めて選択肢を示したい」というようなことを話していたが、住民の不安はそのような先のことではなく、目の前の家のことや、金沢までは遠すぎるという感覚なのである。したがって仮設住宅や生業の再建により将来地元に戻れるようにする、というのではなく、いつでも気軽に帰宅できるようにシャトルバスを用意するなど、より住民の気持ちに沿った対策や説明が必要であったのかもしれない。

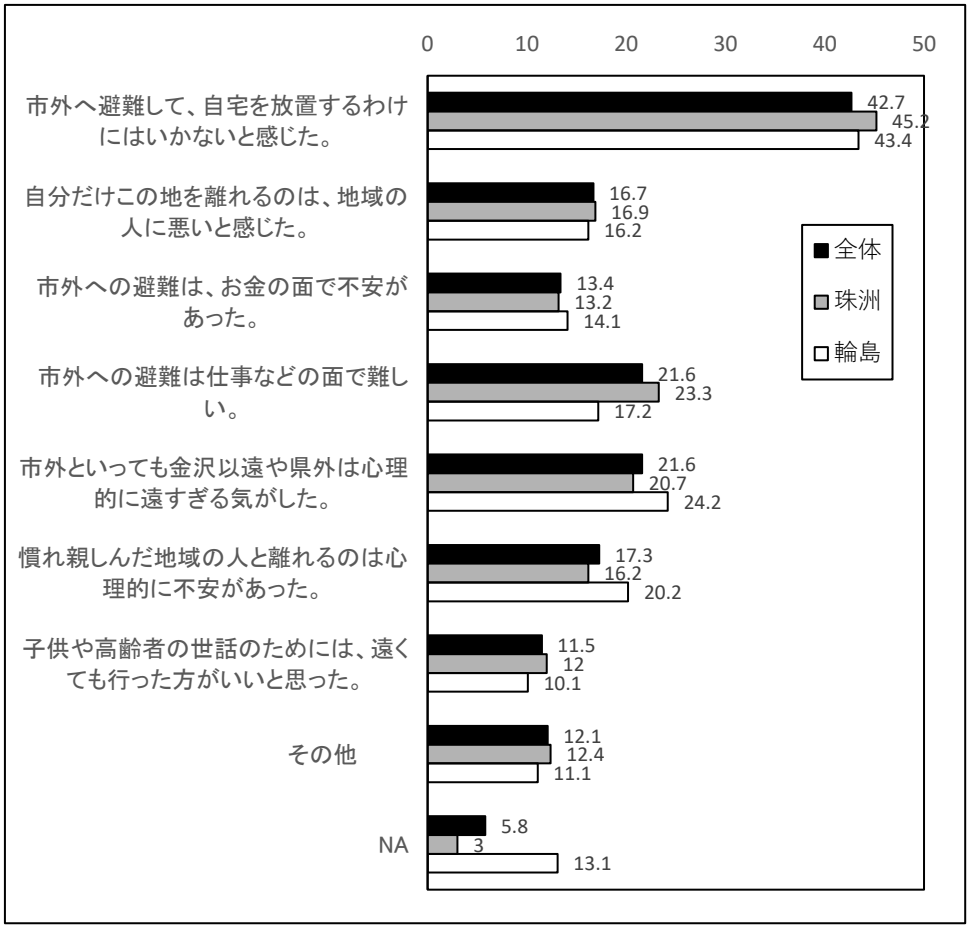

図 4.7　2 次避難についての感想　（%）複数回答

（中村功）

5. 情報ニーズと災害報道

5.1　情報ニーズと情報を得るために役に立った手段

この地震の被災地における住民の情報ニーズと情報を得るために有効だった手段についてみていこうと思う。まず、情報ニーズについてである。「地震発生から数日間、あなたはどのようなことを知りたかったですか」と尋ねたところ（複数回答）、全体の回答で最も多かったものが「水道・電気・電話･ガスの復旧の見通し」で 67.1%、次いで「交通機関・道路について」の 55.6%、以下、「トイレについて」の 54.2%、「飲み水・食料や生活物資について」の 50.7%、「家族や知人の安否」の 50.1%の順であった（表 5.1）。

表 5.1　地震から数日間と１ヶ月後の情報ニーズ（%）　M.A.

	合計	(n=365)	珠洲市	(n=266)	輪島市	(n=99)
	数日間	１ヶ月後	数日間	１ヶ月後	数日間	１ヶ月後
地震の震源地・規模	34.5	16.7	31.6	16.9	42.4	16.2
余震の可能性や規模の見通し	49.6	35.6	48.1	36.8	53.5	32.3
津波の状況や今後の津波の可能性	25.5	17.3	28.9	21.4	16.2	6.1
地震や津波の被害状況	42.2	25.8	47.0	28.9	29.3	17.2
家族や知人の安否	50.1	26.0	50.4	26.7	49.5	24.2
水道・電気・電話･ガスの復旧の見通し	67.1	66.6	62.4	63.5	79.8	74.7
交通機関・道路について	55.6	49.0	51.5	45.1	66.7	59.6
ガソリン・灯油について	33.2	18.6	32.0	17.7	36.4	21.2
飲み水・食料や生活物資について	50.7	34.2	51.5	35.3	48.5	31.3
トイレについて	54.2	34.8	54.1	33.8	54.5	37.4
暖をとる方法	16.2	6.8	17.7	6.8	12.1	7.1
給水や炊き出しの場所	15.6	17.0	16.9	18.0	12.1	14.1
風呂について	48.8	33.7	47.7	32.0	51.5	38.4
病院・医療・衛生について	29.3	27.4	27.8	25.6	33.3	32.3
原子力発電所の状況	8.5	2.7	7.1	2.6	12.1	3.0
避難生活の見通し	47.7	42.5	45.5	42.9	53.5	41.4
仮設住宅について	43.8	53.4	40.2	50.4	53.5	61.6
国や自治体の対応	30.4	35.6	28.9	34.2	34.3	39.4
仕事・学校・求人について	6.6	5.8	8.3	7.9	2.0	0.0
防犯・治安について	17.3	13.4	11.7	12.0	32.3	17.2
自宅の被害判定について	31.2	37.8	28.9	37.2	37.4	39.4
罹災証明について	27.7	34.0	25.9	33.5	32.3	35.4
その他	3.6	2.5	3.4	3.0	4.0	1.0
特にない	0.5	0.5	0.2	0.4	1.0	1.0
無回答	1.6	2.5	2.3	2.3	0.0	3.0

この質問について地域別にみると、珠洲市では、最も回答が多かったものが「水道・電気・電話･ガスの復旧の見通し」で 62.4%、次いで「トイレについて」の 54.1%、以下、「交通機関・道路について」と「飲み水・食料や生活物資について」の 51.5%、「家族や知人の安否」の 50.4%の順であった。一方、輪島市では、最も回答が多かったものが「水道・電気・電話･ガスの復旧の見通し」で 79.8%、次いで「交通機関・道路について」の 66.7%、以下、「トイレについて」の 54.5%、「避難生活の見通し」と「仮設住宅について」ならびに「余震の可能性や規模の見通し」の 53.5%、「風呂について」の 51.5%の順であった。

次に、「地震発生から１か月後、あなたはどのようなことを知りたかったですか」と尋ねたところ（複数回答）、全体の回答で最も多かったものは、地震発生から数日間と同じ「水道・電気・電話･ガスの復旧の見通し」で、ほぼ横ばいの 66.6%、次いで、「仮設住宅について」の 53.4%、以下、「交通機関・道路について」の 49.0%、「避難生活の見通し」の 42.5%、「自宅

の被害判定について」の 37.8%の順であった。
この質問について地域別にみると、珠洲市では、最も回答が多かったものが「水道・電気・電話･ガスの復旧の見通し」で 63.5%、次いで、「仮設住宅について」の 50.4%、以下、「交通機関・道路について」の 45.1%、「避難生活の見通し」の 42.9%、「自宅の被害判定について」の 37.2%の順であった。一方、輪島市では、最も回答が多かったものが「水道・電気・電話･ガスの復旧の見通し」で 74.7%、次いで、「仮設住宅について」の 61.6%、以下、「交通機関・道路について」の 59.6%、「避難生活の見通し」の 41.4%、「国や自治体の対応」と「自宅の被害判定について」の 39.4%の順であった。
次に、「地震発生から数日間、災害に関する情報を得るために役に立ったものは何ですか」と尋ねたところ（複数回答)、全体で最も多かったものは「テレビ」ならびに「ラジオ」が同率で 34.8%、次いで、「新聞」の 29.3%、以下、「避難所にある掲示やチラシ」の 23.3%、「携帯電話の通話」の 22.2%、「口コミ」の 21.9%、「携帯電話・PC の web サイト（ホームページ)」の 16.7%の順であった（表 5.2)。
　この質問について地域別にみると、珠洲市では、最も回答が多かったものが「テレビ」で 33.8%、次いで「ラジオ」の 29.3%、以下、「新聞」の 27.1%、「避難所にある掲示やチラシ」の 23.7%、「携帯電話の通話」と「口コミ」の 23.3%の順であった。一方、輪島市では、最も回答が多かったものが「ラジオ」で 49.5%、次いで「テレビ」の 37.4%、以下、「新聞」の 35.4%、「避難所にある掲示やチラシ」の 22.2%、「携帯電話の通話」の 19.2%の順であった。
そして、「地震発生から 1 か月後、災害に関する情報を得るために役に立ったものは何ですか」と尋ねたところ（複数回答)、全体で最も多かったものが「テレビ」で 68.5%、次いで、「新聞」の 56.4%、以下、「避難所にある掲示やチラシ」の 29.9%、「ラジオ」の 24.7%、「携帯電話・PC の web サイト（ホームページ)」の 23.8%、「携帯電話の通話」の 21.4%、「市・警察・消防などからの情報」の 20.0%の順であった。
この質問について地域別にみると、珠洲市では、最も回答が多かったものが「テレビ」で 33.8%、次いで「ラジオ」の 29.3%、以下、「新聞」の 27.1%、「避難所にある掲示やチラシ」の 23.7%、「携帯電話の通話」と「口コミ」の 23.3%、「携帯電話の通話」の 20.3%の順であった。一方、輪島市では、最も回答が多かったものが「テレビ」で 69.7%、次いで「新聞」の 57.6%、以下、「ラジオ」の 38.4%、「避難所にある掲示やチラシ」の 27.3%、「携帯電話・PC の Web サイト」の 25.3%、「携帯電話の通話」の 24.2%、「市・警察・消防などからの情報」の 21.2%の順であった。

表 5.2　情報を得るために役に立った手段・方法（%）　M.A.

	合計	(n=365)	珠洲市	(n=266)	輪島市	(n=99)
	数日間	1か月後	数日間	1か月後	数日間	1か月後
テレビ	34.8	68.5	33.8	68.0	37.4	69.7
ラジオ	34.8	24.7	29.3	19.5	49.5	38.4
市の防災無線	11.2	6.6	14.3	6.4	3.0	7.1
新聞	29.3	56.4	27.1	56.0	35.4	57.6
携帯電話・PCのwebサイト（ﾎｰﾑﾍﾟｰｼﾞ）	16.7	23.8	18.8	23.3	11.1	25.3
X(旧ツイッター)などのSNS	2.2	2.2	2.6	2.3	1.0	2.0
YouTube	2.5	6.3	3.0	6.4	1.0	6.1
携帯電話の通話	22.2	21.4	23.3	20.3	19.2	24.2
LINE	13.7	21.6	15.4	23.3	9.1	17.2
携帯メール	9.3	6.6	9.4	5.6	9.1	9.1
口コミ	21.9	17.5	23.3	18.0	18.2	16.2
市・警察・消防などからの情報	12.3	20.0	12.0	19.5	13.1	21.2
避難所にある掲示やチラシ	23.3	29.9	23.7	30.8	22.2	27.3
ケーブルテレビ	0.8	0.8	0.4	1.1	2.0	0.0
その他	3.0	1.4	2.6	1.1	4.0	2.0
特にない	4.9	0.5	5.3	0.4	4.0	1.0
無回答	1.9	2.2	2.3	2.3	1.0	2.0

5.2　ＮＨＫの対応

この地震は、能登地域の放送にも影響を与えた。地上波テレビ放送については、地震発生による長期間続いた停電により中継局が機能しなくなったことから NHK と石川県の民間放送４社が停波した（停波が解消したのは 2024 年１月 24 日であった）。このような状況の中、ＮＨＫは、地上波テレビ放送が映らなくなった地域のために、2023 年 11 月で放送を終了していた衛星放送（BS）の 103 チャンネルを使用して、2024 年１月９日から NHK 金沢放送局の総合テレビの番組を放送した（総務省　2024）。このような NHK の対応が役に立ったかどうかについて尋ねたところ、全体では「役に立った」と回答した人は 17.5%、「役に立たなかった」と回答した人は 18.9%で、これを地域別にみると「役に立った」と回答した人は珠洲市が 13.5%であったのに対し輪島市は 28.3%であった（表 5.3）。

表 5.3　NHK の BS での地上波放送は役に立ったか（%）

	全体	珠洲市	輪島市
	（n=365）	（n=266）	（n=99）
役に立った	17.5	13.5	28.3
役に立たなかった	18.9	20.3	15.2
問題なく地上波が受信できたので関係なかった	15.6	18.0	9.1
わからない	39.2	38.7	40.4
無回答	8.8	9.4	7.1

次に、NHK では東日本大震災における大規模な津波被害の経験から、津波警報の発表を報じる際などにおいて、担当するアナウンサーは声を張りあげて強い語調で伝えるようになった（NHK　2021）。能登半島地震においても、津波警報、さらには大津波警報が発表されたため、担当していたアナウンサーが声を張りあげて強い語調で警報の発表と避難を促す情報を伝えた。このようなアナウンサーの対応の評価について尋ねたところ、「この伝え方でよかったと思う」と回答した人が全体の 31.2%、「ある程度はよかったとは思うが、もう少し声のトーンや調子を落として伝えた方がよいと思う」と回答した人は 4.9%、「あまりよいとは思わない。普通の話し方で伝えてほしいと思う」と回答した人は 0.8%であった（表 5.4）。なお、「NHK のテレビ・ラジオの放送を見聞きしていなかったので、わからない」と回答した人は 48.5%、無回答が 6.0%で、NHK が伝えた津波警報を見聞きしていたのは、回答者の半数近くということになる。

表 5.4　ＮＨＫの津波警報の伝え方に対する評価（%）

	全体	珠洲市	輪島市
	(n=365)	(n=266)	(n=99)
この伝え方でよかったと思う	31.2	30.5	33.3
ある程度はよかったと思うが、もう少し声のトーンを落として伝えた方がよいと思う。	4.9	4.5	6.1
あまりよいとは思わない。普通の話し方で伝えてほしいと思う。	0.8	0.4	2.0
NHKのテレビ・ラジオの放送を見聞きしていなかったので、わからない。	48.5	50.8	42.4
その他	8.5	8.6	8.1
無回答	6.0	5.3	8.1

この質問について地域別にみると、珠洲市では、「この伝え方でよかったと思う」と回答した人が 30.5%、「ある程度はよかったとは思うが、もう少し声のトーンや調子を落として伝えた方がよいと思う」と回答した人は 4.5%、「あまりよいとは思わない。普通の話し方で伝えてほしいと思う」と回答した人は 0.4%、「NHK のテレビ・ラジオの放送を見聞きしていなかったので、わからない」と回答した人は 50.8%、無回答が 5.3%であった。一方、輪島市では、「この伝え方でよかったと思う」と回答した人が 33.3%、「ある程度はよかったとは思うが、もう少し声のトーンや調子を落として伝えた方がよいと思う」と回答した人は 6.1%、「あまりよいとは思わない。普通の話し方で伝えてほしいと思う」と回答した人は 2.0%、「NHK のテ

レビ・ラジオの放送を見聞きしていなかったので、わからない」と回答した人は 42.4%、無回答が 8.1%であった。

なお、筆者は、2024 年 3 月上旬に、金沢市・富山市・新潟市の住民 150 人を対象に WEB による調査を実施し、同じ質問をしている。その結果、「この伝え方でよかったと思う」と回答した人が全体の 71.3%、「ある程度はよかったとは思うが、もう少し声のトーンや調子を落として伝えた方がよいと思う」と回答した人は 16.0%、「あまりよいとは思わない。普通の話し方で伝えてほしいと思う」と回答した人は 2.0%で、「NHK のテレビ・ラジオの放送を見聞きしていなかったので、わからない」と回答した人は 10.0%、無回答が 0.7%であった。

この結果から、アナウンサーが声を張りあげて強い語調で津波警報を伝える NHK の対応を評価している人が比較的多いことがわかる。前述のように、被災地調査では、津波が来る前に避難したと回答した人に、その理由を尋ねた結果、「ＮＨＫのアナウンサーが強く避難を呼びかけたから」と回答した人が 4.5%いたことから、NHK の津波警報の伝え方は一定の役割を果たしていると評価してよいだろう。

5.3　災害報道ならびに災害情報に関する評価

この地震による災害に関する情報ならびに報道についての評価・感想についても 17 の選択肢を設けて尋ねた（複数回答、表 5.5）。全体で最も多かったものが、「自分の住んでいる地域は、発表された震度よりも実際は大きかったような気がする」の 59.5%で、次いで、「報道のおかげで、多くの人々が被災地に関心を持っていただけたのではないかと思う」の 47.1%、以下、「復興に頑張っている人の報道を見ると、自分自身も頑張ろうと思うことがある」の 38.1%、「自分の住んでいる地域の取材や報道が少なくて不公平感を覚えた」の 30.7%、「自分の住んでいる地域の取材や報道が少なかったので、支援やボランティアが来なかったり、来るのが遅れたように思える」の 27.7%、「被害についての報道だけではなく、生活に関わる報道をもっと伝えてほしかった」の 24.9%の順であった（無回答 3.3%）。

この設問でも地域による差がみられた。まず、震度情報への評価である。「自分の住んでいる地域は、発表された震度よりも実際は大きかったような気がする」と回答した人は全体では前述のように 59.5%であったが、これを地域別でみると、輪島市が 44.4%であったのに対し珠洲市が 65.0%と、輪島市よりも珠洲市の方が、発表された震度に対して疑問を持っている住民が多いことがわかる。これは、今回の地震（本震）で、輪島市にある震度観測点での最大震度が７だったのに対し、珠洲市にある震度観測点での最大震度が６強だったこと（気象庁 2024）に関連していると考えられる。住家の全壊は（2025 年２月 25 日 14 時現在）、輪島市が 2306 棟、珠洲市が 1754 棟（石川県　2025）と両市とも非常に多い。しかしながら、珠洲市では震度７が記録されていなかった。震度は被害度ではなく観測点の揺れの大きさである。また、震度は一般には市区町村単位で発表されるが、厳密に言えば、震度は限られた震度観測点の値である。つまり、市区町村といった面の情報ではなく点の情報であるため、例えば、震度６強と発表された市区町村内でも震度７に相当する揺れとなった場所がある可能性もあり、震度７と発表された市区町村内でも震度６強に相当する揺れとなった場所がある可能性もある。

このようなことが、発表された震度に対する疑問を持つ住民が多かった背景にあると考えられる。

次に、報道の不公平感である。「自分の住んでいる地域の取材や報道が少なくて不公平感を覚えた」と回答した人は、前述のように全体では 30.7%であったが、地域別にみると、珠洲市が 24.1%であったのに対し、輪島市は 48.5%であった。また、「自分の住んでいる地域の取材や報道が少なかったので、支援やボランティアが来なかったり、来るのが遅れたように思える」と回答した人は、前述のように全体では 27.7%であったが、地域別にみると、珠洲市が 21.8%であったのに対し、輪島市は 43.4%であった。つまり、珠洲市よりも輪島市の方で、報道に不公平感や不満を覚えた住民が多かったことがわかる。これは、調査対象地域が大きく影響しているように思われる。今回の調査で、輪島市の対象になった地域は輪島地区ではなく門前地区である。能登半島地震での報道を考えると、輪島市を扱う場合、大規模な火災があった輪島地区が多く取りあげられ、門前地区に関する報道は輪島地区に比べると少なかったように思われる。そのため、門前地区の住民は、自分が住んでいる地域が報道であまり扱われないために不公平感を覚え、さらには、そのような報道が支援やボランティアにも影響していると考えたのではないかと思われる。

表 5.5　災害報道ならびに災害情報等に対する評価（%）　M.A.
（全体：365　珠洲市：266　輪島：99）

	全体	珠洲市	輪島市
1.自分の住んでいる地域は、発表された震度よりも実際は大きかったような気がする。	59.5	65.0	44.4
2.自分の住んでいる地域の取材や報道が少なくて不公平感を覚えた。	30.7	24.1	48.5
3.自分の住んでいる地域の取材や報道が少なかったので、支援やボランティアが来なかったり、来るのが遅れたように思える。	27.7	21.8	43.4
4.必要以上に誇張して報道しているように感じる。	2.5	2.6	2.0
5.被害の映像が繰り返し報道され、見るのが嫌になった。	10.7	9.4	14.1
6.不十分な取材による報道が多いように感じる。	10.7	9.0	15.2
7.被災者への配慮が足りない報道が多いと思う。	9.9	9.8	10.1
8.マナーを守っていない報道関係者がいたと思う。	7.4	7.1	8.1
9.被害についての報道だけではなく、生活に関わる報道をもっと伝えてほしかった。	24.9	23.3	29.3
10.生活に関わる情報を多く報道していて、よかったと思う。	9.9	10.2	9.1
11.必要な情報をどのように得ればよいかをもっと伝えてほしかった。	17.8	16.9	20.2
12.被災者に寄り添うような報道に元気づけられた。	11.5	12.8	8.1
13.不安を払しょくするような報道をもっと伝えてほしかった。	7.1	6.0	10.1
14.被災者に同情しているような報道が鼻につくことがある。	5.5	4.9	7.1
15.報道のおかげで、多くの人々が被災地に関心を持っていただけたのではないかと思う。	47.1	48.5	43.4
16.復興に頑張っている人の報道を見ると、自分自身も頑張ろうと思うことがある。	38.1	39.5	34.3
17.復興に頑張っている人の報道を見ると、逆にあせりを感じることがある。	9.9	10.9	7.1

（中森広道）

6.　通信メディア

6.1　防災無線の有効性

情報通信のもっとも重要な役割には津波警報などの避難情報を伝達することがある。すでに述べたように、避難のきっかけとしては津波警報の聴取は２番目に多く挙げられた要因となっていた。アンケート調査によると、津波が襲う前に津波警報を聞いた人は 53.7％（珠洲 59.4％、輪島 38.4％）と約半数になっていた(図 6.1)。輪島では現実には津波が襲ったわけではないので、「おぼえていない」という人

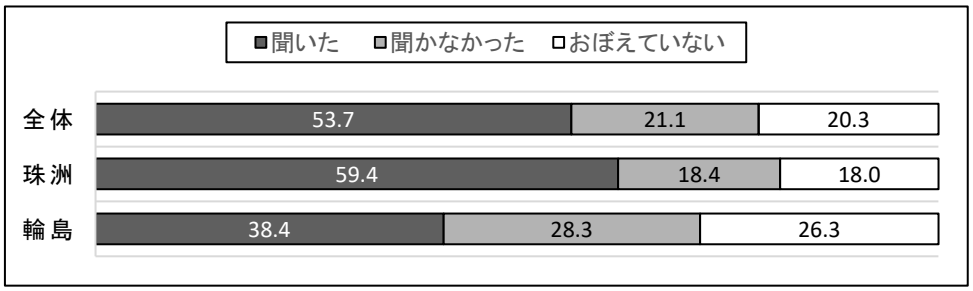

図 6.1　津波警報聴取率　（％）n=365

が多くなっているが、珠洲では約６割の人に津波警報が伝えられていた。伝達率は比較的高かったといえるだろう。

津波警報を聞いた人にどのようなメディアから聞いたかをたずねると、最も多くの人が挙げたのが防災無線の屋外拡声器（65.3％）であった(図 6.2)。ついで多かったのは緊急速報メール(30.6%)だったが、その割合は防災無線の半分以下となっている。

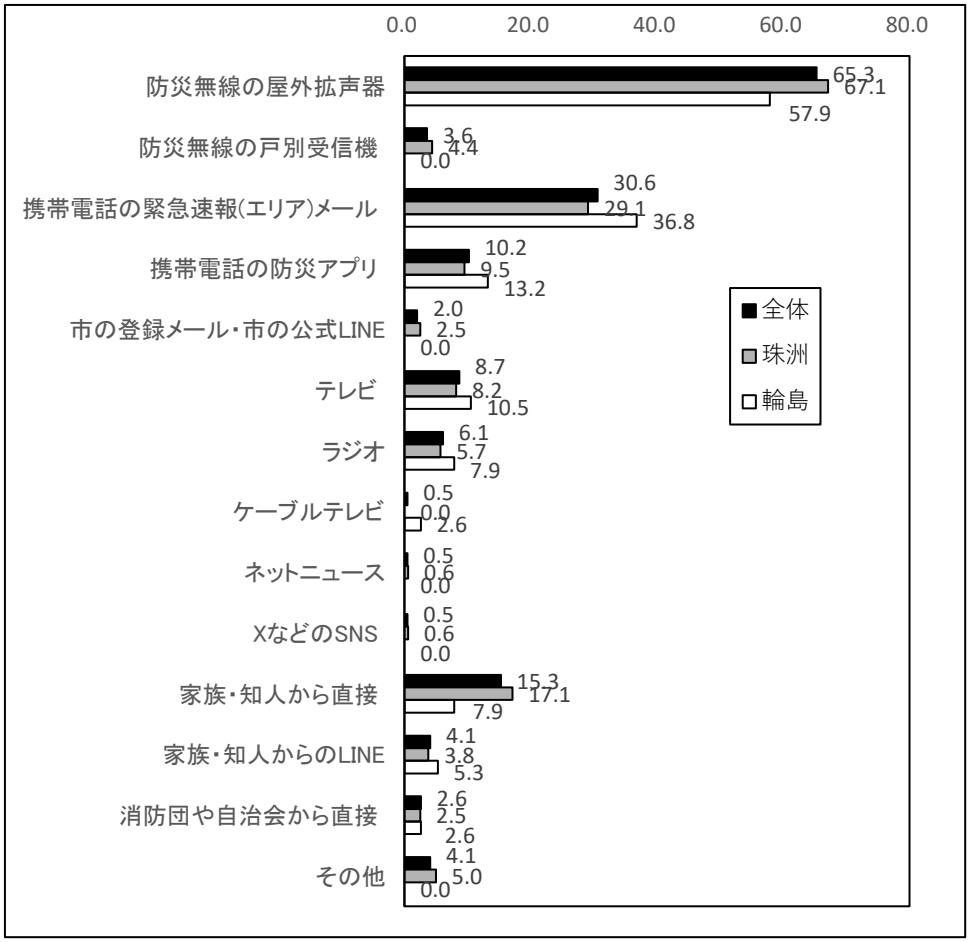

図 6.2　津波警報聴取メディア(%)複数回答　n=196

最近の住宅は気密性が高く、しかも今回の地震は冬場の寒い時期で窓を閉め切っていたため、屋外スピーカーは聞き取りにくいはずである。しかしそれにもかかわらず、防災無線の屋外スピーカーは有効性を発揮していたのである。その原因は、地震という災害の特性にある。すなわち、大地震に遭遇すると人はまず屋外に出る傾向があるからである。実際、今回の調査で地震の直後何をしたかをたずねたところ、63.9%の人が屋外に出ていた。外に出ることで屋外拡声器の音がより聞きやすくなったのである。スマホ時代なので緊急速報メール有効性もそれなりにあるものの、それだけに依存することは好ましいとは言えないだろう。

災害時に防災無線が有効であることはこれまでの事例からも明らかである。東日本大震災では防災無線の屋外スピーカーが津波警報の伝達で最も役に立っており、2019 年の台風 19 号時には本宮市では防災無線の戸別受信機が有効だった(表 6.1)。

表 6.1　避難の呼びかけを聞いたメディア　(%)複数回答

	東日本大震災			西日本豪雨			2019 年台風 19 号		2023　梅雨	能登半島地震
	岩手県	宮城県	警報	西予市	広島市	倉敷市	本宮市	長野市	秋田市	珠洲市
避難指示等の聴取率(全体)	46	44	52.3	42.9	77.7	80.8	91.7	88.2	56.3	59.4
同報無線(戸別受信機)	↓	↓	11.0	26.7	4.8		70.5	15		4.4
同報無線(屋外拡声器)	62*	34*	50.9	13.3	9	24.8**	47.4	36.2		67.1
防災ラジオ							26.9	11		
緊急速報メール				0	31.5		19.2	48	30.2	29.1
防災メール	0	0			17		11.5	16.5	6.3	2.5
市の HP					2.3					
インターネット・メール			1.5			69.9				
防災アプリ					7.1				14.3	9.5
ネットニュース									14.3	0.6
ツイッター等の SNS					0.6				3.2	0.6
テレビ	0	2	11.9	6.7	55.6	26.5***	12.8	29.1	77.8	8.2
ラジオ	13	10	24.1	0.0		↑	2.6	4.1	7.9	6.1
サイレン・半鐘					4.7		11.5	26.8		
消防・警察・自治会・役所の人	20	51	5.4	60.0		2.7	34.7	64.6	4.8	2.5
家族・親戚・近所の人から	9	14	2.7	6.7	22.3	20.2	3.8	7.9	11.1	17.1
家族・知人の電話やメール									15.9	3.8

*戸別受信機を含む； **広報車を含む； ***ラジオを含む； その他「テレビ」「ラジオ」「ツイッター等の SNS」「家族・親戚・近所の人」については類似の内容を合算した。
左から内閣府(2011)、中村他(2012)、中村他(2020a)、広島市(2018)、倉敷市(2019)、中村他(2020b)および中村の秋田調査(調査対象:秋田市広面字釣瓶町の住民 112 人、調査時期:2023 年 11 月)より作成。

同様に総務省消防庁が近年の複数の災害について行った住民調査でも防災無線の有効性が明らかになっている。それによると自治体の避難の呼びかけについて、最も多くの人が受け取ったメディアは 64.3%が挙げた防災無線の屋外スピーカーで、次いで緊急速報メール(51.3%)、防災無線の戸別受信機・防災ラジオ（51.1%)、テレビ（42.5%）となっていた(図 6.3)。

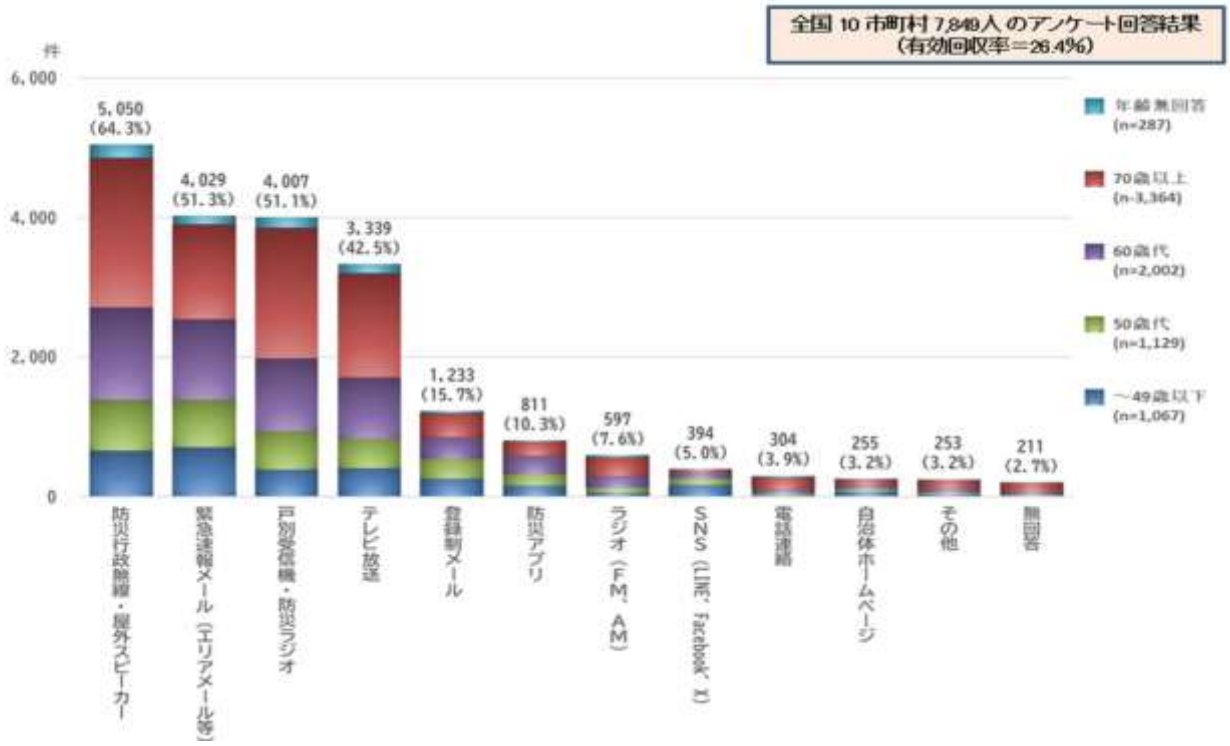

図 6.3　自治体の避難の呼びかけを入手したメディア　総務省消防庁 2024，P6

調査対象は災害があった北海道美瑛町、茨城県鉾田市、新潟県村上市、石川県珠洲市、石川県小松市、静岡県川根本町、和歌山県湯浅町、広島県三原市、愛媛県宇和島市、福岡県東峰村の住民 7849 名

近年コストの面から防災無線の屋外スピーカーを廃止する自治体が出てきているが、こうした効果をふまえると、少なくとも津波の危険性があるところでは防災無線の屋外拡声器は廃止すべきではないといえる。他方、所有者全員に送信されているはずのスマートフォンの緊急速報だが、聞いた人の割合は意外と低くなっている。緊急時には慌てているので、緊急速報メールはその通知音に気づかなかったり、通知を見逃したりして伝達できないことも少なくないようだ。スマホ時代なので緊急速報メールの有効性はもちろんあるものの、過度な依存は好ましくない。

このように津波警報伝達には役に立った防災無線だが、その後、機器的なトラブルにもみまわれている。これは生活情報の伝達にとっては問題といえる。たとえば珠洲市では市内に 76 局の屋外スピーカーがあったが、2024 年４月時点ではそのうち２局が津波で流され、２局は故障、３局は中継局のバッテリー切れで機能しなかった（内閣府，2024a）。珠洲市の防災無線を整備した事業者の話では、各スピーカーは毎時５分ずつ放送した場合、３日間はもつ非常用バッテリーが付いていたが、長引く停電により多くのスピーカーがバッテリー切れを起こし、１月６日の時点で作動が確認されたのは 10 局にすぎなかったという（静岡新聞 2024.3.8）。防災無線のバッテリーが、72 時間機能を維持するというのは、標準的な装備といえるが、長期間の停電にそなえてさらにソーラーバッテリーや燃料電池を設備するなど、何らかの対策が望まれるところである。

一方、輪島市の防災無線は通常の防災無線ではなく、携帯電話の電波を利用した「減災コミュニケーションシステム」という新たなシステムであった。筆者がこれを開発・設置した NTT データへ聞き取りに行ったところ、次のようなことが分かった。すなわち、輪島市内には 213 の屋外スピーカーがあり、各スピーカーには 72 時間のバッテリーが装備されていた。遠隔モニタリングによると、地震当日は J アラートが自動起動し、故障した 49 か所を除く 164 か所は正常に機能して、津波警報を伝えたことが確認されている。その後、停電で信号を中継する携帯電話の基地局が機能を停止し、1 月 4 日には 148 か所が機能を停止した。さらにその後、携帯電話基地局が回復して停止スピーカー数は減少するが、1 月 14 日に 151 局が停止したのをピークに第 2 の停止の波がやってきた。これはスピーカーのバッテリーが枯渇したことによるものと推定される。スピーカーのバッテリーは 72 時間しかもたないが、14 日までもっていたということは、この間ほとんど放送されなかったためと思われる。その後停電の回復でスピーカーは使えるようになったものの、4 月に入っても 52 局が使えないままになっていた(NHK,2024)。NTT データによるとこの停止の原因は不明だという。というのは輪島市からは修理の依頼が来ていないので現地調査ができないためであった。修理依頼が行われていない原因は不明だが、せっかくの装備なのだから早めに修理して活用した方がよいであろう。

このように防災無線は直後の津波警報の伝達には役に立ったが、その後トラブルにみまわれていた。長期停電に備えたり、早急な修理体制を整えたりして、被災者に情報を提供し続けられるようにしたほうがよいであろう。

6.2 生活情報を伝えた LINE

被災地の市役所ではホームページのほか、LINE など SNS による情報提供を行っている。その内容は炊き出し、入浴、ごみ出しといった生活情報のほか、罹災証明の待ち時間なども発信されていた。

珠洲市総務課への聞き取りによれば、LINE は 2024 年 1 月中旬からはじめ、その目的は市のホームページがあまり見られていないことから、ホームページの更新を知らせたいというものであった。市の公式 LINE の「友だち」の数は、地震前は 700 くらいであったが、4 月初めの段階では 9,900 程度になっており、ある程度の伝達力はあったと考えられる。市としては配信のタイミングに気をつけていて、休憩時間とか夕食時に配信するようにしていたという。市としてはホームページの更新を伝えられたのが第一の成果であったと認識していた。

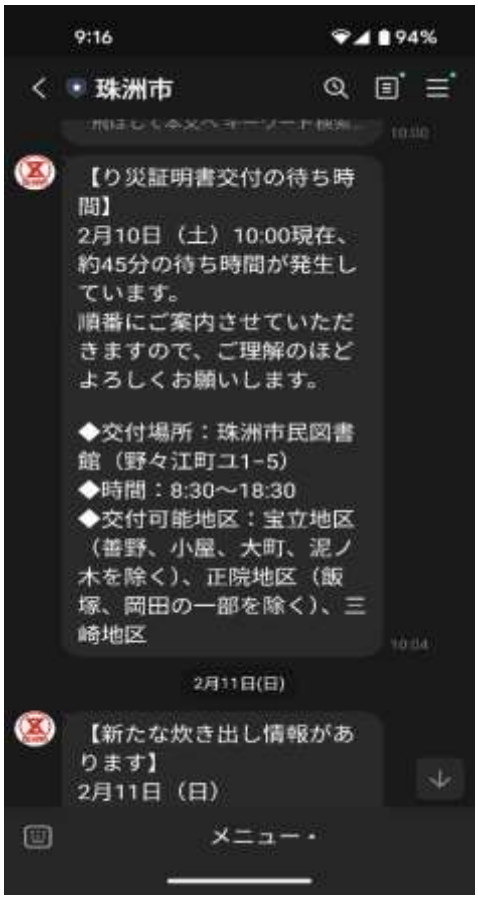

図 6.4　珠洲市の LINE の例

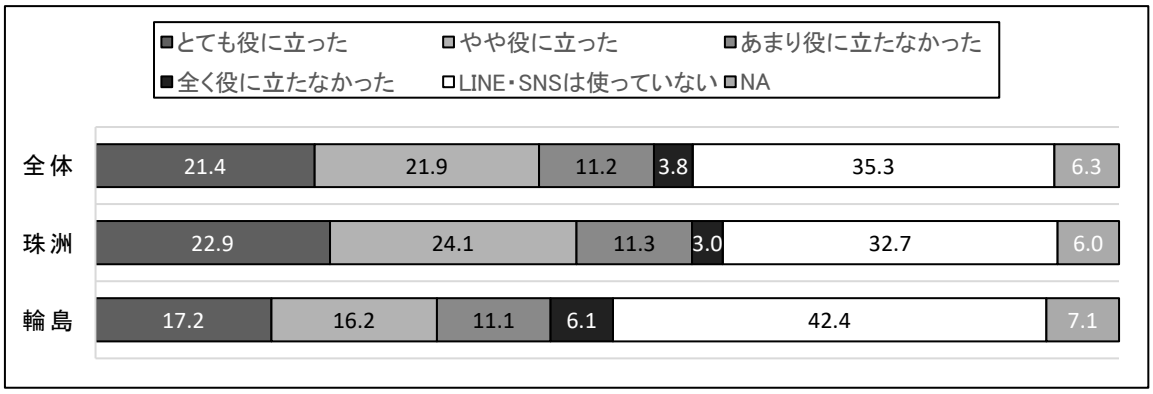

図 6.5 市による LINE・SNS による伝達の評価　（%）n=365

これについて住民に話聞くと、LINE の情報は見てはいるが内容がマンネリ化しているという声もあった。内容を見ると、たしかに同じ場所の炊き出し情報が繰り返し発信されるなど、情報の繰り返しも多いようであった。だが、今回のアンケート調査でその評価を聞いたところ、市の LINE 情報が「とても役に立った」という人が 21.4%、「やや役に立った」という人が 21.9%「あまり役に立たなかった」という人が 11.2%、「全く役に立たなかった」という人が 3.8%と、全体的には肯定的な評価をする人が多く、LINE による情報発信はある程度有効であったと評価することができよう（図 6.5）。

6.3 伝送路切断で長引いた通信障害

能登半島地震では停電にくわえ土砂災害によるケーブル切断もあり、携帯電話・固定電話・インターネットなどの通信が長時間不通になってしまった。たとえば携帯電話では最大 839 の基地局が機能を停止し、能登半島の広範な部分で携帯電話がつながらなくなった。携帯電話事業者はバッテリーの補充や衛星回線を使うなどして基地局の復旧をおこなったり、移動基地局を投入したりして通信の回復を図ったが、大方の地域で回復したのは、KDDI が 1 月 15 日、NTT ドコモが 1 月 17 日であった(各社ウェブページより)。携帯電話は復旧するまでに 2 週間以上かかったことになる。

今回のアンケート調査では、携帯電話が何日目までつながらなかったかをたずねているが、回復した人が累積で 5 割を超えたのは 7 日目で、8 割に達したのは 14 日目であった(図 6.6)。そして 9 割を超えたのは 20 日目であった。これはほぼ上述の大手 2 社の報告と符合している。しかしアンケートで全員が回復したというのは 60 日目であった。いかに携帯電話の不通が長引いていたかがわかる。

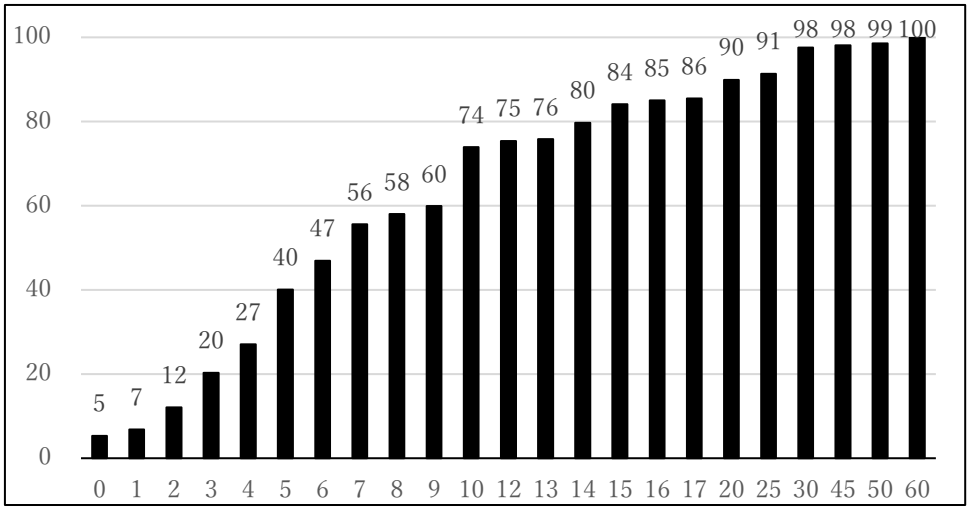

図 6.6　携帯電話回復までの日数　（累積%）n=207

これを東日本大震災時と比較すると、今回の回復速度がより遅いことがわかる。図 6.7 は東日本大震災時の基地局停波数の推移を表したものだが、たとえば NTT ドコモに注目すると、3 日後には停波数が半分以下に急激に下がっている。これは東日本大震災時には停電が停波の主な原因だったのに対して、能登半島地震では停電に加え、ケーブルが断線したことや道路の寸断で作業員が現地に到達しにくかったことが原因となっている。

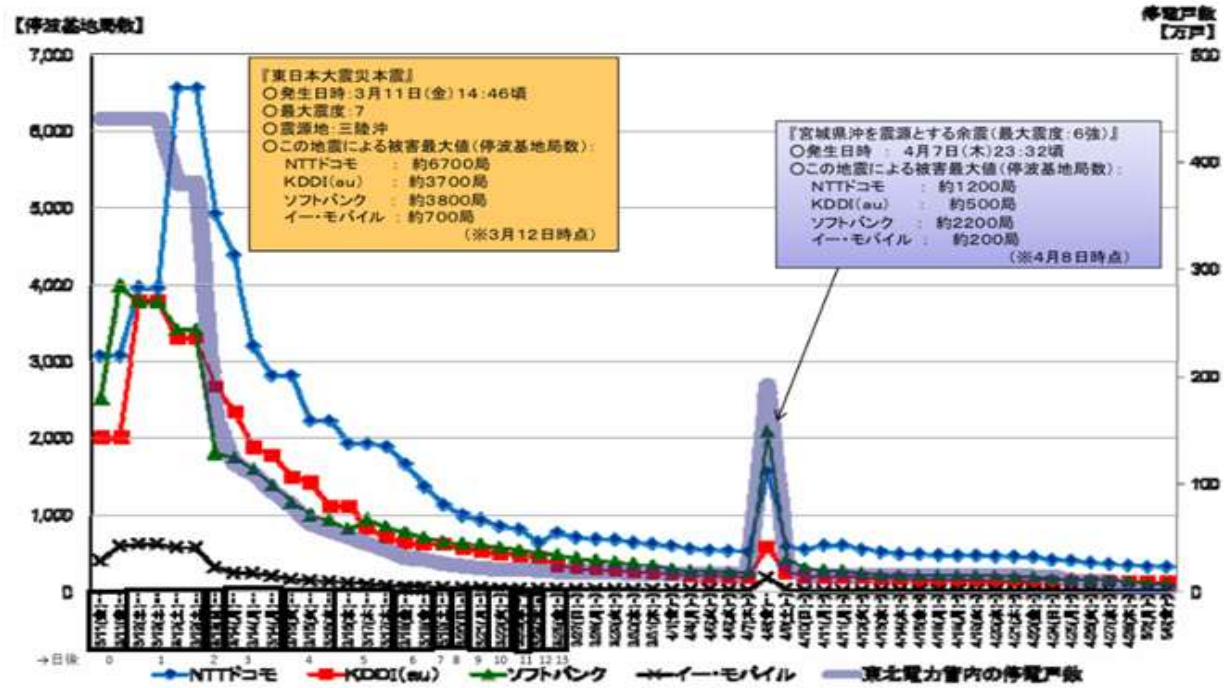

図 6.7　東日本大震災時の基地局停波数　(総務省資料,2011 に加筆)

6.4 スターリンクの活躍と課題

このように長引く通信途絶状況で、今回注目を集めたのが通信衛星を使ったスターリンク(Starlink)という新たな通信システムであった(図 6.8)。スターリンクは 6,000 基以上の低軌道周回衛星を利用した衛星通信システムで、固定回線や携帯電話回線が途絶した地域でも高速インターネットサービスを提供できる。機器としては衛星電波を受信するアンテナとそれに接続された wi-fi ルータから成っており、パスワードを入力すれば一般のスマホや PC から無線でインターネット通信ができる。欧米では 2020 年にサービスが始まり、日本では 2022 年から KDDI がサービスを提供している。

図 6.8　輪島市門前健民体育館で使われたスターリンクのアンテナ　(筆者撮影)

現地でスターリンクを使ったことのある２人に話を聞いたところ、いずれも高い評価をしていた。たとえばスターリンクを持って輪島市の応援に入ったある自治体の職員は、スターリンクをパソコンにつないで快適に使い、防災情報システムにつなぎクロノロジー機能（＝時系列機能）などを有効に使うことができたという。当時雪が降っていたがアンテナに積もることはなく、雪が激しいとき空中の障害物で通信が途切れることが時折あったが、基本的には安定的に高速インターネットができたという。あるいは避難所でスターリンクを使った人によると、ファイブゼロ(00000)の無料 wi-fi も避難所に設置されていたが、それに比べると通信が安定していて、YouTube も快適に見ることができたという。

スターリンクの運用の実態を明らかにするために KDDI 本社（衛星統括部）に聞き取りを行った。まず今回、どこでどのような規模でスターリンクが使われたかたずねたところ、第 1 に携帯電話基地局の復旧に 159 台、第 2 に避難所に配布されたのが 350 台、第 3 に各種防災機関で使われたのが 200 台（内訳は自衛隊 100 台、自治体 50 台、DMAT50 台)、合計 709 台が使われたということであった。

次に各場面での使い勝手をたずねると、第 1 の基地局の復旧においては非常に有効だったという。そもそも携帯電話の基地局は携帯電話からの電波を受けたあとは光ファイバーを通じてネットワークにつながっている。これをバックホール回線という。この回線が土砂災害で切断したり、通信局舎ビルの停電などにより機能を停止してしまった。バックホール回線の復旧は従来は静止衛星を使ったり、障害物のない区間では臨時のマイクロ回線を設置したりして対応してきた。今回 KDDI では 228 台の発電機とともに大量のスターリンクを持ち込み、この回線の復旧を図った。使ってみるとスターリンクには次のようなメリットがあったという。第 1 にアンテナが軽量であるため持ち運びがしやすく、さらに軽量のために風へ対策も簡便なものですんだ（アンテナが重いと風を受けたときの倒れる力が強いので強固な補強が必要だった)。第 2 にセットアップ時に衛星を捕捉するのが約 10 分と早いために設置が迅速にできた（従来の静止衛星の捕捉には約 1 時間かかっていた)。そして第 3 に静止衛星に比べ通信スピードが速い、ということがあった。

しかしその一方で避難所でのスターリンクの活用には様々な障害があったようである。第 1 の問題は必要な物資の用意に手間取ったことがある。KDDI では地震当日から法人対応の部局が東京の倉庫を開け、キットを取り出し、軽ワゴン車約 12 台を使って金沢の KDDI ネットワークセンターに運搬した。その後１月３日と４日に２トントラックで同様に金沢までキットを運び込んだ。こうした初動は素早かったといえる。その後１月７日にスペースＸ社と協議のうえ 350 台を避難所に運ぶことを決めたが、ここで問題が発生する。スターリンクの電源プラグは３ピンのもので（図 6.9)、そのままでは普通のコンセントにつなげなかった。そこで３ピン用の延長コードを探したが、金沢市内では数十個しか調達できず、

図 6.9　3 ピンの電源プラグ

結局これを東京で調達しなければならなかった。その間、組み立てマニュアルや連絡先などを書いた書類を用意するなどの準備をしていた。電源プラグが３ピンである問題は他の機関でもあったようで、総務省にあるスターリンク端末を防災科学研究所のスタッフが避難所に配布したが、その際にも３ピン用の電源タップがなくて設置に苦労したようだ。

第 2 の問題は、運搬の問題である。金沢までは東京や大阪の倉庫からの距離も近く、高速道路も通じていたので、比較的早く運搬することができた。しかし被災地が北海道や四国だったとすると、運び込むことか困難だったかもしれない。また金沢から先の能登半島部分では、交通渋滞がひどく、午前４時に金沢を出発して午後９時に戻ってきても１日に３～4 か所にしか設置できなかったという。ここから、スターリンクの備蓄はできるだけ分散して配置することが重要と考えられる。

第 3 の問題はセットアップする要員の不足である。1 月 10 日になって物資の用意が整い、自衛隊の手を借りてそれを石川県の備蓄倉庫に搬入し、そこから避難所への配布が始まった。自衛隊の隊員に設置方法をレクチャーして配布することになったが、それでも人手が足りなかった。そこで au ショップの社員が 3 人 1 組となり８グループを編成して配布、設置することになった。この社員はもともと避難所に wi-fi ルータや充電器を配布する役割だったが、停電が長引いていて意味がなかったためにスターリンクを配布することになった。要員不足に加え渋滞もあり配布は進まず、配布は２月中旬までかかってしまった。

第 4 に、今回はあまり問題とならなかったようだが、電源の問題がある。スターリンクも電源がなくては機能しないので、停電時は発電機やポータブル電源といった電源装置が必要である。輪島市の門前支所で聞いた話では、自衛隊がスターリンクのキットと発電機とガソリンを３点セットで持ってきたという。そうなると発電機の使い方や燃料の確保など新たな問題が生じることになる。今回は避難所への配布が１月の中旬から２月と遅れ、電源が回復してきた状況下での設置だったので、電源問題が深刻にならなかったのかもしれない。このようにスターリンク自体は優れたシステムなのだが、その実際の運用にあたっては、配布・設置の点で様々な工夫が必要であることがわかる。

では住民は実際にどの程度スターリンクを使い、どう評価していたのだろうか。今回のアンケート調査によると、住民のうちスターリンクを利用した人は 11.0%（珠洲 10.5%、輪島 12.1%）40 人であった(図 6.10)。この数字はやや少ない気がするが、もともと避難所に避難していない人が 15.6%、普段から wi-fi を利用しない人が 17.3%と合計３割以上いるので、避難所にいて wi-fi を利用している人の利用率はより高くなる。

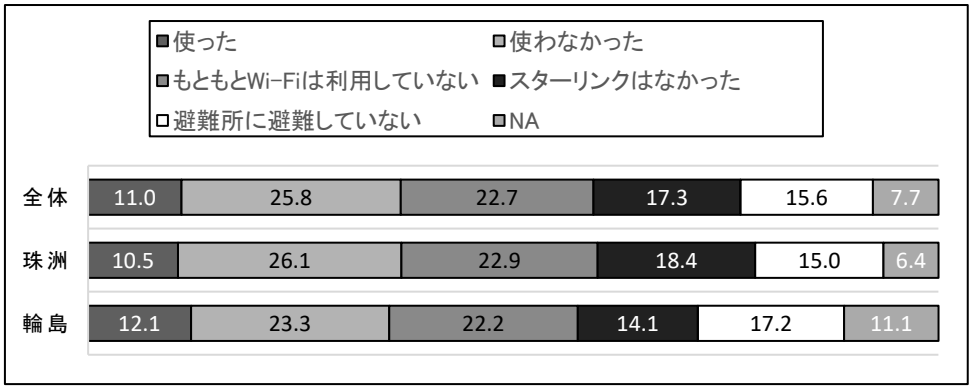

図 6.10　スターリンクの利用率　（%）n=365

そして利用者に使い勝手の評価をたずねると、「とても役に立った」という人が 62.5%、「やや役に立った」という人が 27.5%と、９割の人が役に立ったと評価していた。利用者は限られているが、使った人の評価は高かったといえる。ただ気になるのは「とても役に立った」と最も高い評価をしている人が６割と意外と少なかったことである。その理由は、先に上げた設置の遅れが原因しているのではないかと思われる。すなわち、スターリンクを配布し始めたのが１月 10 日で、２月中旬まで配布にかかったとすると、設置された頃にはすでに携帯電話基地局がかなり回復していたと考えられる。具体的にいえば我々の調査では、携帯電話は 10 日後には 74%の人が回復していると答えており、１月末には 98%の人が携帯電話は回復したとしていた(図 6.6)。逆にいえば、携帯電話が回復している状況でもスターリンクの評価は高かったわけで、そうなると今回住民にとってのスターリンクの恩恵は、通信が途絶した中で通信が可能になったというのではなくて、高速なインターネットが安定的に使えた、ということになるのかもしれない。

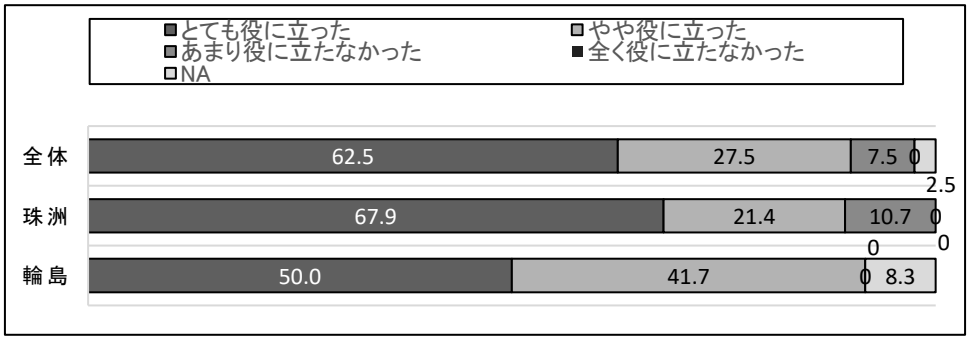

図 6.10　スターリンクの評価　（%）n=40

今回のスターリンクの活用は、災害通信における新たな可能性を示すものとして評価できる。実際各自治体は災害対策としてスターリンクを続々と導入している。たとえば東京都は 2025 年度の予算に、スターリンクを 23 区と多摩地域に 53 台、島しょ部に 18 台、都庁に 6 台のあわせて 77 台配備するとして 4 億円を計上している(MXtv.　2024)。しかし同時に配布や設置時の問題も見いだされた。今後は平常時から主要避難所にスターリンクを配備したり、避難訓練

時に設置訓練をしたりするなど、設置・活用の仕方を工夫していく必要があるだろう。
2025年にはより小型のスターリンク・ミニが登場し、機器が3万4000円、月額1500円程度で使うことができるので、電源対策をすればより容易に災害用として活用できるであろう。さらに同年には衛星アンテナを必要とせずスマートフォンから直接スターリンク衛星とやり取りできる「スターリンク・ダイレクト」というサービスが始まっている。今後こうした低軌道周回衛星による通信は災害通信に大きな役割を果たすことが期待される。

（中村功）

7. 緊急地震速報

7.1　緊急地震速報を得た手段

気象庁の発表する緊急地震速報には「予報」と「警報」がある。「予報」は「どこかで最大震度3以上が予測された場合、または長周期地震動階級1以上が予測された場合、あるいはマグニチュード 3.5 以上と予測された場合に発表するもの」である。一方、「警報」は「どこかで最大震度5弱以上または最大長周期地震動階級3以上が予測される地震について、その地震で、震度4以上の揺れが予測される地域を対象に発表されるもの」であり、一般に、テレビ・ラジオや携帯電話・スマートフォン（緊急速報メール）などから伝えられる緊急地震速報は「警報」の緊急地震速報である。
能登半島地震で気象庁は「警報」の緊急地震速報を発表した。住民は、この緊急地震速報をどのような手段で受け取ったのだろうか。また、緊急地震速報を受け取った住民は、どのような対応をしたのであろうか。

まず、緊急地震速報を受け取った手段について尋ねたところ（複数回答。表7.1)、全体で最も多かった回答が携帯電話・スマートフォンの「緊急速報（エリア）メール」の 36.2%で、次いで、「防災無線の屋外拡声器」の 33.4%、その次が「テレビ」の 23.0%であった（「この時の緊急地震速報を見聞きしていない」と回答した人が 17.8%、無回答が 4.1%であった)。ただし、本震4分前の16時6分に発生したマグニチュード5.5の地震でも「警報」の緊急地震速報が発表されていることから、これらの回答は、本震の緊急地震速報と本震4分前の緊急地震速報とを混同している可能性がある。

さて、この回答を地域別にみると、緊急地震速報を受け取った手段の順位が変わってくる。珠洲市で、緊急地震速報を受け取った手段として最も多かったものが、「防災無線の屋外拡声器」の35.7%、次いで「緊急速報（エリア）メール」の32.3%、以下、「テレビ」の21.1%、「防災アプリ」の 8.6%、「ラジオ」の 6.8%の順であった（「この時の緊急地震速報を見聞きしていない」が 20.3%、無回答が 3.8%であった)。一方、輪島市で、緊急地震速報を受け取った手段として最も多かったものが、「緊急速報（エリア）メール」の 46.5%、次いで「テレビ」の28.3%、以下、「防災無線の屋外拡声器」の27.3%、「ラジオ」の11.1%、「防災アプリ」の 7.1%の順であった（「この時の緊急地震速報を見聞きしていない」が 11.1%、無回答が5.1%であった)。珠洲市では、「緊急速報（エリア）メール」から緊急地震速報を得た人（32.3%）よりも「防災無線の屋外拡声器」から緊急地震速報を得た人（35.7%）の方が多い

という結果となった。また、輪島市でも「防災無線の屋外拡声器」で少なくない人（27.3%）が緊急地震速報を得ている。携帯電話・スマートフォンが普及した現在においても、防災無線で緊急地震速報を得る人が少なくないことから、緊急地震速報を多くの人に確実に伝えるためにも、地域における防災無線の整備を考える必要があるだろう。また、能登半島地震は、多くの人が活動している時間に発生していたにもかかわらず、「緊急地震速報を見聞きしていない」と回答した人が多くいた（全体で 17.8%、珠洲市で 20.3%、輪島市で 11.1%）。緊急地震速報が浸透している中で、この速報を受けとることができない人がいるというのも問題である。緊急地震速報を受けとることができない人を少なくすることも、地震対策の大きな課題であろう。

表 7.1　緊急地震速報を受け取った手段（%）　M.A.

	全体	珠洲市	輪島市
	(n=365)	(n=266)	(n=99)
テレビ	23.0	21.1	28.3
ラジオ	7.9	6.8	11.1
緊急速報（エリア）メール	36.2	32.3	46.5
Webサイト	0.0	0.0	0.0
XなどのSNS	0.3	0.4	0.0
防災アプリ	8.2	8.6	7.1
館内放送	2.2	2.6	1.0
防災無線の屋外拡声器	33.4	35.7	27.3
防災無線の個別受信機	2.5	3.4	0.0
専用受信機	0.8	0.0	3.0
職員・従業員などの肉声による指示	2.2	2.6	1.0
その他	3.0	4.1	0.0
この時の緊急地震速報を見聞きしていない	17.8	20.3	11.1
無回答	4.1	3.8	5.1

7.2　緊急地震速報を見聞きした際の対応

次に、「この時の緊急地震速報を見聞きしていない」と回答した人以外に、緊急地震速報を受け取った住民がとった対応について尋ねたところ（複数回答。表 7.2)、全体で最も多かった回答は、「すでに強い揺れに翻弄されていた」の 51.3%で、次いで「屋外に出た」の 42.3%、以下、「身構えた・しゃがみこんだ」の 29.0%、「何もできなかった」の 20.3%、「火の始末をした」の 16.0%、「机やベッドの下にもぐった」の 12.3%の順であった。

地域別にみると、珠洲市で最も回答が多かったものが「すでに強い揺れに翻弄されていた」の 52.4%で、次いで「屋外に出た」の 44.8%、以下、「身構えた・しゃがみこんだ」の 29.2%、「何もできなかった」の 17.5%、「火の始末をした」の 15.1%、「周りの人に注意を呼びかけた」の 11.8%の順であった。一方、輪島市で最も回答が多かったものが「すでに強い揺れに翻弄されていた」の 48.9%で、次いで「屋外に出た」の 36.4%、以下、「身構えた・しゃがみこんだ」の 28.4%、「何もできなかった」の 27.3%、「火の始末をした」の 18.2%、「机やベッドなどの下にもぐった」の 15.9%の順であった。

ちなみに、「民間放送テレビを見ていたが NHK テレビにかえた」と回答した人は、全体で3.3%、珠洲市で3.3%、輪島市で3.4%であった。「地震が起きた際は（災害に関する情報が出された際は）民間放送より NHK を見る」という人が一定程度いることがわかる。
なお、この設問に関しても、本震 4 分前の地震で発表された緊急地震速報の際の対応について回答した可能性もある。また、震源に近い地域の住民を対象にしているため、緊急地震速報を受け取る前に強い揺れを感じている人も少なくないため、緊急地震速報を受け取ったことによる対応についての回答なのか、それとも強い揺れを感じたことによる対応についての回答なのか、はっきりとは区別できない。

表 7.2　緊急地震速報を見聞きした際の対応（%）　M.A.

	全体	珠洲市	輪島市
	(n=300)	(n=212)	(n=88)
すでに強い揺れに翻弄されていた	51.3	52.4	48.9
様子を見た	9.0	9.0	9.1
身構えた・しゃがみこんだ	29.0	29.2	28.4
机やベッドなどの下にもぐった	12.3	10.8	15.9
倒れてくる・落ちてくる・崩れてくると思われるものから離れた	10.0	10.4	9.1
ヘルメット・座布団・そのほか何かで頭を守った	3.3	2.8	4.5
倒れそうなものなどを、倒れないようにおさえた・おさえようとした。	7.0	8.0	4.5
火の始末をした	16.0	15.1	18.2
ガスの元栓を閉めた	10.3	9.4	12.5
戸や窓を開けた	1.3	1.9	0.0
屋内の安全と思われる場所に移った	6.0	6.1	5.7
屋外に出た	42.3	44.8	36.4
テレビ・ラジオの情報に注意した	11.0	10.4	12.5
民間放送のテレビを見ていたがNHKテレビにかえた	3.3	3.3	3.4
テレビ・ラジオ以外の方法で情報を得ようとした	4.3	4.2	4.5
まわりの人に注意を呼びかけた	11.3	11.8	10.2
近くにいる人を守った・守ろうとした	10.0	10.4	9.1
館内放送や人の指示に従った	2.0	2.4	1.1
運転していた車を止めた	4.3	4.2	4.5
地震の様子を撮影した・撮影しようとした	1.0	0.9	1.1
その他	5.3	4.7	6.8
何もできなかった	20.3	17.5	27.3
無回答	2.7	2.8	2.3

7.3　緊急地震速報への評価

さて、2024 年 1 月 1 日 16 時 10 分に発生した本震以降、地震活動はさらに活発となり、被災地域を対象とした緊急地震速報が多く発表されるようになった。多く発表された緊急地震速報について、住民はどのように対応したり考えたりしたのであろうか。

「このたびの一連の地震で、緊急地震速報はあなたにとって役に立ちましたか」という質問をしたところ（複数回答。表7.3)、全体では「自分自身や家族の身の安全を守ることができた」が最も多く、24.1%であった。次いで「緊急地震速報が続いて発表されるので、警戒を怠らなかった」の 21.1%、以下、「緊急地震速報の有無で揺れの強さを判断した」の 17.5%、「揺れる前の段階で、これから揺れが来ることがわかった」の 15.3%、「心構えができた」の 11.2%の順であった（「特に役には立たなかった」は 20.8%、「わからない」は 14.0%、「無回答」は 4.1%である)。これらの結果は地域別にみると、珠洲市で最も多い回答は「自分自身や家族の身の安全を守ることができた」の 23.3%で、次いで「緊急地震速報の有無で揺れの強さを判断した」の 17.7%、その次が「緊急地震速報が続いて発表されるので、警戒を怠らなかった」の 17.3%であった（「特に役には立たなかった」は 22.2%、「わからない」は 15.8%、無回答は2.6%である)。一方、輪島市で最も多い回答は「揺れる前の段階で、これから揺れが来ることがわかった」の 32.3%で、珠洲市でこの回答を選択した人は 9.0%であり、地域による大きな差が見られた。次いで、「緊急地震速報が続いて発表されるので、警戒を怠らなかった」の 31.3%、その次が「心構えができた」の 19.2%（珠洲市は 8.3%）で、これらも珠洲市との回答に大きな差が見られた（「特に役には立たなかった」は 17.2%、「わからない」は 9.1%、無回答は 8.1%である)。

表 7.3.　緊急地震速報に対する評価（%）　M.A.

	全体	珠洲市	輪島市
	(n=365)	(n=266)	(n=99)
自分自身や家族の身の安全を守ることができた	24.1	23.3	26.3
揺れる前の段階で、これから揺れが来ることがわかった。	15.3	9.0	32.3
緊急地震速報の有無で揺れの強さを判断した	17.5	17.7	17.2
心構えができた	11.2	8.3	19.2
車を安全に運転することができた	2.5	2.6	2.0
慌てることが少なくなった	2.5	1.9	4.0
緊急地震速報が続いて発表されるので、警戒を怠らなかった。	21.1	17.3	31.3
揺れている状況などを映像に記録することができた	0.3	0.4	0.0
その他	9.3	9.4	9.1
わからない	14.0	15.8	9.1
特に役には立たなかった	20.8	22.2	17.2
無回答	4.1	2.6	8.1

（中森広道）

8.　教訓・困ったこと

8.1　損壊家屋の原因と避難路の確保

今回の地震では家屋の倒壊による被害が大きかったが、その一因として過去の地震による家屋の損傷があった。「自宅では、過去の地震の被害を、完全には修復できていなかった。」とした人は全体で 38.9%、珠洲市では 42.1%おり、多くの世帯では家屋が脆弱化したまま今回の

地震を迎えたことがわかる(表 8.1)。修復ができなかった要因には家が大きくて修復費用がかさむことがあった。実際アンケートでも「自宅の耐震補強をしたかったが、家が大きくて費用的に難しかった。」とした人が全体の 24.9%に達していた。一般に地方では大きな家が多いが、この地方では祭りのときに人々が各家に集まり飲食するヨバレという風習があり、大広間が必要とされていたという事情もある。もっとも地震で大きな家の損傷に苦労した後では「祭り（ヨバレ）もあるので、家には大広間があったほうがいいと思う。」とした人は 3.6%と少数であった。

また倒壊した家屋の影響で避難がうまくできなかった人が多かったようで、「津波の避難路が通れなくなった時の対策も必要だと思う」という人が全体の 47.7%と約半数に達していた。

8.2 避難訓練とトイレ問題

すでにふれたが能登地方では地域のつながりが強く、避難訓練も盛んに行われていた。そのため「地域の避難訓練にはよく参加していた」という人が全体の 35.6%おり、「自分の津波の避難場所がどこであるかは、以前から知っていた。」という人も全体の 61.6%に達していた。ただその訓練は避難所に集まってアルファ米を食べて終わりというもので、今回困ったトイレについての訓練はなかったという。そのため「防災訓練では、非常用トイレの作り方をやっておいた方がよかったと思う。」という人も全体の 32.1%いた。

表 8.1　教訓・困ったこと

	全体	珠洲	輪島
能登では毎年のように地震があったが、ここまで大きな地震が来るとは思わなかった。	83.0	81.6	86.9
自宅では、過去の地震の被害を、完全には修復できていなかった。	38.9	42.1	30.3
自宅の耐震補強をしたかったが、家が大きくて費用的に難しかった。	24.9	24.8	25.3
地域の避難訓練にはよく参加していた	35.1	38.3	26.3
自分の津波の避難場所がどこであるかは、以前から知っていた。	61.6	68.4	43.4
ボランティアの人は良くやってくれたと感謝している	59.7	59.8	59.6
ボランティアの人がもっと早く来てくれたらよかったと思う	9.3	9.4	9.1
私は日ごろから地域の付き合いを大事にしており、災害時もそれが役に立ったと思う。	27.9	27.4	29.3
祭り（ヨバレ）もあるので、家には大広間があったほうがいいと思う。	3.6	3.8	3.0
防災訓練では、非常用トイレの作り方をやっておいた方がよかったと思う。	32.1	33.5	28.3
今回の地震で、大きな地震が起きたら、とにかく屋外に逃げたほうがよいと思った。	57.5	57.5	57.6
津波の避難路が通れなくなった時の対策も必要だと思う	47.7	51.5	37.4
水道復旧にここまで長い期間がかかるとは、思わなかった。	80.3	79.3	82.8
高齢者の介護や支援にとても困った。	16.7	16.9	16.2

8.3 長期化した水道復旧

今回、多くの住民にとって意外なこととして挙げられたのは、地震の大きさと水道復旧の遅れである。「能登では毎年のように地震があったが、ここまで大きな地震が来るとは思わなかった。」とした人は全体の 83.0%、「水道復旧にここまで長い期間がかかるとは、思わなかった。」とした人が 80.3%と、ほとんどの人が感じていた。特に長引く断水には困ったようである。

（中村功）

9. 流言

9.1 外国人窃盗団

ここでは、被災地における流言についてみていきたいと思う。まず、「外国人窃盗団」に関する流言である。以前から、災害時において「犯罪」「窃盗」に関する流言が広まることが少なくなかったが、2011 年の東日本大震災や 2016 年の熊本地震など、近年の災害においては、「外国人による犯罪・窃盗」についての流言が多く報告されるようになっている。このたびの能登半島地震でも、「外国人の窃盗団がやってくる」という流言が広まった。被災地で地震直後に「外国人がマイクロバスで来て、窃盗をしている」という流言が広がり、ある集落では消防団員が、この流言を LINE グループに送信したようである（2024 年 2 月 23 日　朝日新聞）。

それでは、このような外国人の窃盗に関する流言は、被災地の人々にどの程度広まり、また、このような流言を見聞きした人はどのような対応をしたのであろうか。

表 9.1　「外国人の窃盗団がやってくる」という話を見聞きしたか（%）

	全体	珠洲市	輪島市
	(n=365)	(n=266)	(n=99)
見聞きした	45.2	47.4	39.4
見聞きしなかった	40.8	38.7	46.5
おぼえていない	6.8	6.8	7.1
無回答	7.1	7.1	7.1

「あなたは『外国人の窃盗団がやってくる』という話を見聞きしましたか」という質問をしたところ、「見聞きした」と回答した人が、全体で 45.2%、珠洲市で 47.4%、輪島市で 39.4%を占めた（表9.1)。この「見聞きした」と回答した人に、その話の情報源を尋ねたところ（複数回答)、全体で最も回答が多かったものが「口づて」の 65.5%、次いで「市・町内会・消防・警察などからの情報」の 39.4%、以下、「新聞・テレビ・ラジオ」の 23.0%、「LINE」の 11.5%、「X（旧・ツイッター)」の 4.2%の順であった（表 9.2)。地域別にみると、珠洲市で最も回答が多かったものが「口づて」の 62.7%、次いで「市・町内会・消防・警察などからの情報」の 42.1%、以下、「新聞・テレビ・ラジオ」の 21.4%、「LINE」の 9.5%、「X（旧・ツイッター)」の 4.8%の順で、一方、輪島市で最も回答が多かったものが「口づて」の

74.4%、次いで「市・町内会・消防・警察などからの情報」の 30.8%、以下、「新聞・テレビ・ラジオ」の 28.2%、「LINE」の 17.9%、「メール」「X（旧・ツイッター)」「ネットニュース」が同率の 2.6%の順であった。個人間で容易に使用できる通信のメディアが普及・浸透している現在においても、原初的な「口づて」で多くの人に流言が伝播されている状況がわかる。

本来、流言を打ち消す役割が求められる「市・町内会・消防・警察などからの情報」や「新聞・テレビ・ラジオ」を流言の情報源として回答する人が少なくなかった。これは、前述したような、消防団員が流言を LINE で伝えたような例もあるが、この調査では「話を見聞きしましたか」という尋ね方をしており、「流言自体を見聞きした」のではなく、「流言が広まっているという告知や報道を見聞きした」という意味で回答者が受けとった可能性もある。また、実際に、複数の外国人が被災地で窃盗をして逮捕されているという事例もあり（2024 年 3 月 6 日　朝日新聞ほか)、この調査の結果から、「流言」としての「外国人窃盗団の話」が、実際にどの程度見聞きされ、広まったかということを確実に見定めることが難しい点もある。

表 9.2　「外国人の窃盗団がやってくる」という話の情報源（%）　M.A.

	全体	珠洲市	輪島市
	(n=165)	(n=126)	(n=39)
口づて	65.5	62.7	74.4
メール	3.0	3.2	2.6
LINE	11.5	9.5	17.9
X（旧・ツイッター）	4.2	4.8	2.6
ネットニュース	3.6	4.0	2.6
新聞・テレビ・ラジオ	23.0	21.4	28.2
電話（通話）	0.6	0.8	0.0
市・町内会・消防・警察などからの情報	39.4	42.1	30.8
その他	4.2	5.6	0.0
無回答	1.2	0.8	2.6

この「外国人の窃盗団がやってくる」という話を見聞きして、人々はどの程度、この話を信じていたのであろうか。この点について質問したところ、「本当だと思った」と回答した人が全体で 61.8%（珠洲市で 61.9%、輪島市で 61.5%)、「半信半疑だった」と回答した人が全体で「半信半疑だった」と回答した人が全体で 33.3%（珠洲市で 31.7%、輪島市で 38.5%)、「本当ではないと思った」と回答した人はいなかった（表 9.3)。「外国人の窃盗団がやってくる」という流言は、被災地で多くの人が信じていたということがわかる。

表 9.3　「外国人の窃盗団がやってくる」という話を信じたか　（%）

	全体	珠洲市	輪島市
	(n=165)	(n=126)	(n=39)
本当だと思った	61.8	61.9	61.5
半信半疑だった	33.3	31.7	38.5
本当ではないと思った	0.0	0.0	0.0
無回答	4.8	6.3	0.0

さて、「外国人の窃盗団がやってくる」という話を見聞きしたと回答した人に、この話を見聞きしてどうしたかということについて尋ねたところ（複数回答）、全体で最も多かった回答が「防犯に注意した」の 53.9%（珠洲市は 54.0%、輪島市は 53.8%）で、次いで「家族や知人などに話をした」の 40.0%（珠洲市は 41.3%、輪島市は 35.9%）、以下、「何もしなかった」の 23.0%（珠洲市は 22.2%、輪島市は 25.6%）、「家族や知人などにメールや LINE などで伝えた」の 7.3%（珠洲市は 8.7%、輪島市は 2.6%。なお、輪島市は「X（旧・ツイッター）などの SNS に投稿した」と回答した人も 2.6%）の順であった（表 9.4）。この話によって半数以上の人が防犯に注意をして、4 割近い人がこの話を口伝えによって広めていたことがわかる。

表 9.4　「外国人の窃盗団がやってくる」という話を見聞きしてどんな対応をしたか（%）
M.A.

	全体	珠洲市	輪島市
	(n=165)	(n=126)	(n=39)
家族や知人などに話をした	40.0	41.3	35.9
家族や知人などにメールやLINEなどで伝えた	7.3	8.7	2.6
X（旧・ツイッター）などのSNSに投稿した	0.6	0.0	2.6
防犯に注意した	53.9	54.0	53.8
何もしなかった	23.0	22.2	25.6
その他	6.7	7.1	5.1
無回答	3.0	3.2	2.6

9.2　救出・救援を求める偽の情報

次に、今回の能登半島地震では、主として X（旧・ツイッター）によって、住所を明示し、救出や救援を求める偽の情報（例えば、「閉じ込められました、助けてください。〇〇市〇〇町〇〇番地」など）が伝わった。これは、意図的に流した誤情報であることから、流言というよりはデマと言うべきものであるが、このような偽の情報を、被災地では、どの程度の人が接触し、また、この情報に触れた人たちは、どのような対応をとったのであろうか。

表 9.5　「救出・救援要請のニセ情報」を見聞きしたか（%）

	全体	珠洲市	輪島市
	(n=365)	(n=266)	(n=99)
見聞きした	10.7	12.4	6.1
見聞きしなかった	72.9	68.8	83.8
おぼえていない	5.8	6.8	3.0
無回答	10.7	12.0	7.1

「あなたは『救出・救援要請のニセ情報』を見聞きしましたか」という質問をしたところ、全体では、「見聞きした」と回答した人が 10.7%、「見聞きしなかった」と回答した人が 72.9%、「おぼえていない」と回答した人が 5.8%であった（表 9.5)。地域別にみると、珠洲市では「見聞きした」と回答した人が 12.4%、「見聞きしなかった」と回答した人が 68.8%、「おぼえていない」と回答した人が 6.8%、輪島市では「見聞きした」と回答した人が 6.1%、「見聞きしなかった」と回答した人が 83.8%、「おぼえていない」と回答した人が 3.0%であった。この「救出・救援要請のニセ情報」に接した人は、被災地では比較的少なかったようである。

表 9.6　「救出・救援要請のニセ情報」の情報源（%）　M.A.

	全体	珠洲市	輪島市
	(n=39)	(n=33)	(n=6)
口づて	25.6	24.2	33.3
メール	5.1	6.1	0.0
LINE	7.7	6.1	16.7
X（旧・ツイッター）	23.1	24.2	16.7
ネットニュース	7.7	9.1	0.0
新聞・テレビ・ラジオ	38.5	39.4	33.3
電話（通話）	2.6	3.0	0.0
市・町内会・消防・警察などからの情報	7.7	9.1	0.0
その他	2.6	3.0	0.0
無回答	2.6	0.0	16.7

「『救出・救援要請のニセ情報』を見聞きした」と回答した人に、この情報を何から得たかについて尋ねたところ（複数回答)、最も多かった回答が「新聞・テレビ・ラジオ」の 38.5%で、次いで「口づて」の 25.6%で、以下、「X（旧・ツイッター)」の 23.1%、「LINE」「ネットニュース」「市・町内会・消防・警察などからの情報」が同率の 7.7%であった（表 9.6)。この結果を地域別にみると、珠洲市で最も多かった回答が「新聞・テレビ・ラジオ」の 39.4%で、次いで「口づて」と「X（旧・ツイッター)」が同率で 24.2%、以下、「ネットニュ

ース」と「市・町内会・消防・警察などからの情報」が同率の 9.1%、「メール」と「LINE」が同率の 6.1%であった。一方、輪島市では、最も多かった回答が「口づて」と「新聞・テレビ・ラジオ」が同率の 33.3%で、次いで「LINE」と「X（旧・ツイッター）」が同率の 16.7%であった。「救出・救援要請のニセ情報」で主に発せられた「X（旧・ツイッター）」を情報源に挙げている人は少なくないが、「救出・救援要請のニセ情報」が X などで伝えられていることを報道した「新聞・テレビ・ラジオ」から、この情報を得たという人が多かったことがわかる。

表 9.7　「救出・救援要請のニセ情報」を信じたか　（%）

	全体	珠洲市	輪島市
	(n=39)	(n=33)	(n=6)
本当だと思った	48.7	51.5	33.3
半信半疑だった	25.6	18.2	66.7
本当ではないと思った	10.3	12.1	0.0
無回答	15.4	18.2	0.0

この「救出・救援要請のニセ情報」を見聞きした人は、この情報を信じたのであろうか。この点について尋ねたところ、「本当だと思った」と回答した人が全体では 48.7%（珠洲市は 51.5%、輪島市は 33.3%）、「半信半疑だった」と回答した人が全体では 25.6%（珠洲市は 18.2%、輪島市は 66.7%）、「本当ではないと思った」と回答した人が全体では 10.3%（珠洲市では 12.1%、輪島市は 0）であった（表 9.7）。「救出・救援要請のニセ情報」を見聞きした人は相対的に少なかったものの、この偽の情報に接した人は、この情報を信じたり半信半疑になったりしたことが多かったことがわかる。

では、この「救出・救援要請のニセ情報」を見聞きした人は、どのような対応をしたのであろうか。この点について質問したところ、「家族や知人などに話をした」と回答した人が全体で 43.6%（珠洲市は 42.4%、輪島市は 50.0%）、「何もしなかった」と回答した人が全体で 41.0%（珠洲市は 39.4%、輪島市は 50.0%）、「家族や知人などにメールや LINE などで伝えた」と回答した人が全体で 7.7%（珠洲市は 9.1%、輪島市は 0）であった（表 9.8）。

表 9.8　「救出・救援要請のニセ情報」を見聞きしてどんな対応をしたか（%）　M.A.

	全体	珠洲市	輪島市
	(n=39)	(n=33)	(n=6)
家族や知人などに話をした	43.6	42.4	50.0
家族や知人などにメールやLINEなどで伝えた	7.7	9.1	0.0
X（旧・ツイッター）などのSNSに投稿した	0.0	0.0	0.0
消防・警察に通報した	0.0	0.0	0.0
何もしなかった	41.0	39.4	50.0
その他	5.1	6.1	0.0
無回答	7.7	9.1	0.0

9.3　そのほかの流言

被災地で広まったと思われる、そのほかの流言についても質問した（表 9.9）。

表 9.9　そのほかの流言を見聞きしたか（%）

	全体	珠洲市	輪島市
	(n=365)	(n=266)	(n=99)
二次避難をすると、仮設住宅の抽選に当たりにくくなる。	24.7	23.7	27.3
○月○日にまた大きな地震がくる	26.6	30.1	17.2
今回の地震は「人工地震」だった	4.9	4.1	7.1
その他	6.8	6.8	7.1
無回答	2.5	2.6	2.0

まず、「二次避難と仮設住宅」に関する流言である。今回の能登半島地震では、二次避難についても大きく注目された。災害発生によって、住居近くの（被災地内の）避難所などに身を寄せて避難することを「一次避難」と呼ぶのに対して、居住している地域を離れて、生活する環境が整っている場所（ホテルや旅館などの宿泊施設など）に移って避難することを「二次避難」と呼んでおり、今回の能登半島地震では、二次避難をする住民も少なくなかった。そんな中、二次避難をした人は仮設住宅の抽選が当たりにくくなるという流言が被災地で広まったようである。

「『二次避難をすると、仮設住宅の抽選に当たりにくくなる』という話を見聞きしたことがありますか」という質問をしたところ、全体では 24.7%、珠洲市では 23.7%、輪島市では 27.3%の人が見聞きしたことがあると回答している。

次に、かなり昔から、地震災害の際には必ずと言ってもよいくらい広まる、「○月○日にまた大きな地震がくる」という流言である。この流言について質問をしたところ、全体では 26.6%、珠洲市では 30.1%、輪島市では 17.2%の人が見聞きしたと回答している。

そして、これも 2011 年の「東日本大震災」あたりから地震災害時に、よく広まると言われている「今回の地震は『人工地震』だった」という流言である。この流言について質問したと

ころ、全体では 4.9%、珠洲市では 4.1%、輪島市では 7.1%の人が見聞きしたと回答している。

また、「そのほかの流言を見聞きした」と回答した人が、全体では 6.8%、珠洲市では 6.8%、輪島市では7.1%を占めていた。その具体的な内容をいくつか挙げると、「ペットを連れていると、避難所を追い出された人がいる」(珠洲市)、「県外から『アタリヤ』が多数入り込んでいる」(珠洲市)、「千年に一度の災害震であると聞いた」(珠洲市)、「〇〇の店が閉店撤退する」(珠洲市)、「〇〇地区の避難所で子供が餓死した」(珠洲市)、「当たり屋の車両ナンバー」(珠洲市)、「被害判定を何度も再申請すると、4 度目に判定が下がる」(珠洲市)、「同じ避難所にいた人が今から大きな地震が来るから外に出てと言ったために寒い中外に出た方がたくさんいた」(輪島市)、「体調が悪くなったお年寄りもいた」(輪島市)、「日本人の県外車、ハイエースなどに注意(窃盗団)」(輪島市)、「もう一度地震が来る」(輪島市)、「近いうちにまた地震が来るかもとテレビで聞いた」(輪島市) などがあった。

(中森広道)

参考文献

朝日新聞デジタル,2024, 能登半島地震の死者、4 割が圧死　窒息・呼吸不全 2 割強　警察まとめ

石川県, 2025,「令和６年能登半島地震による人的・建物被害の状況について」191 報

広島市,2018, 平成 30 年 7 月豪雨災害における避難対策等検証会議最終報告,
http://www.bousai.go.jp/fusuigai/suigai_dosyaworking/pdf/hiroshimasaisyu.pdf

倉敷市,2019, 平成３０年７月豪雨災害 対応検証報告書,
https://www.bousai.go.jp/fusuigai/suigai_dosyaworking/pdf/kurashikikensyou.pdf

中村功, 中森広道, 保科俊, 2020b, 2019 年 10 月台風 19 号豪雨災害における災害情報の伝達と住民の対応,災害情報調査研究レポート, No.17, 255-352,
http://nakamuraisao.a.la9.jp/report17.pdf

内閣府, 2024, 令和６年能登半島地震に係る被害状況等について　令和 6 年 4 月 23 日

内閣府, 2025, 令和６年能登半島地震に係る被害状況等について　令和 7 年 5 月 13 日
https://www.bousai.go.jp/updates/r60101notojishin/r60101notojishin/pdf/r60101notojishin_57.pdf

気象庁, 2024,『災害時地震・津波報告　令和６年能登半島地震』

気象庁, 2024a, 「令和６年能登半島地震」における気象庁機動調査班（JMA-MOT）による 津波に関する現地調査の結果について,
https://www.jma.go.jp/jma/press/2401/26a/20240126_tsunamichousakekka.pdf

気象庁,2024b, 令和６年１月　地震・火山月報（防災編）,
https://www.data.jma.go.jp/svd/eqev/data/gaikyo/monthly/202401/202401tokushuu_1_1.pdf

気象庁 WEB ページ, 緊急地震速報（予報）の内容,
https://www.data.jma.go.jp/eew/data/nc/fc_hist/2024/01/20240101161010/index.html

共同通信,2024.2.5, 輪島・珠洲、3割以上が全壊　無被害わずか、市建物調査,
https://nordot.app/1127182810327843182
経済産業省資料,2024, 令和６年能登半島地震の対応について,
https://www.meti.go.jp/shingikai/sankoshin/hoan_shohi/denryoku_anzen/denki_setsubi/pdf/020_01_01.pdf
総務省消防庁,2024, 災害情報伝達手段の整備等に関する手引き,
https://www.fdma.go.jp/mission/prepare/transmission/items/0603_tebiki.pdf
総務省消防庁,2024b, 能登半島地震に伴う火災状況,
https://www.fdma.go.jp/singi_kento/kento/items/post-148/01/sankou1.pdf
静岡新聞 2024.3.8, 能登地震被災５市町　防災無線　一時停止相次ぐ　停電長期化で蓄電池切れ　行政避難情報発信に課題, https://www.at-s.com/sp/news/article/national/1427247.html?lbl=552
総務省, 2004,『令和６年版　情報通信白書』
総務省資料, 2011, 東日本大震災における通信の被災状況、復旧等に関する取組状況
https://www.bousai.go.jp/kaigirep/kentokai/kinoukakuho/2/pdf/1.pdf
総務省, 2024a「令和６年能登半島地震に関するインターネット上の偽・誤情報にご注意ください」https://www.soumu.go.jp/use_the_internet_wisely/special/fakenews/
内閣府, 2011, 「津波避難等に関する調査結果(速報)」中央防災会議東北地方太平洋沖地震を教訓とした地震・津波対策に関する専門調査会第６回会合資料 5,
http://www.bousai.go.jp/kaigirep/chousakai/tohokukyokun/6/pdf/5.pdf
内閣府, 2024.4.15, 令和６年能登半島地震における避難所運営の状況,
https://www.bousai.go.jp/updates/r60101notojishin/pdf/kensho_team3_shiryo02.pdf
中村功, 中森広道, 福田充, 2012, 東日本大震災時の災害情報の伝達と住民の行動－陸前高田市・南三陸町・仙台市・名取市・山元町住民調査をもとにして－, 災害情報調査研究レポート, Vol.16, 1-126.
中村功, 森岡千穂, 2020a, 2018年西日本豪雨災害時におけるダム情報の伝達と住民の行動-愛媛県肱川流域のダム情報と避難-,災害情報調査研究レポート, No.17,145-216,
http://nakamuraisao.a.la9.jp/report17.pdf
ロイター, 2024.4.19, 能登半島地震の現場でスターリンク活用、効果検証する＝官房長官,
https://jp.reuters.com/markets/japan/funds/UAD4JHJM3NNIPEBX3XKXLY4UHA-2024-01-19/
吉井博明,中村功,中森広道,関谷直也,森岡千穂, 2008, 能登半島地震における住民の対応と災害情報の伝達, 災害情報調査研究レポート,Vol.14., 58-123.,
http://nakamuraisao.a.la9.jp/report14.pdf

KDDI,20246.21,「能登半島地震における Starlink（次世代衛星通信サービス）活用事例」
https://www.bosaitech-pf.go.jp/doc/20240621_4.pdf
MX tv, 2024.1.19, 都の新年度予算案　知事の狙いは？

https://s.mxtv.jp/tokyomxplus/mx/article/202401191110/detail/
NIKKEI Film, 2024. 3.9., 能登の津波、人々はどう逃げたか　位置情報と証言で迫る, https://www.nikkei.com/article/DGXZQOCA072CL0X00C24A3000000/
NHK news web , 2024.5.31, 石川県 断水について発表 “早期復旧が難しい地域を除き解消”, https://www3.nhk.or.jp/news/html/20240531/k10014467531000.html
NHK, 2024.4.2, 輪島市が地震のあと使えなくなっている防災行政無線を公表へ, https://www3.nhk.or.jp/lnews/kanazawa/20240402/3020019780.html
Space.com,2024, Starlink satellites: Facts, tracking and impact on astronomy, https://www.space.com/spacex-starlink-satellites.html

※本論１章、２章、３章、４章、６章は中村功「2024 年能登半島地震における津波避難・情報通信・流言の特徴－住民アンケート調査および関係者への聞き取り調査をもとに－」『松山大学論集』「人文学部開設 50 周年記念特別号」2025 年 3 月 379-408.に加筆修正したものである。

資料　調査票　単純集計(合計、珠洲、輪島)

2024年1月1日能登半島地震におけるアンケート調査

（珠洲市・輪島市）

合計 N=365（/617）　珠洲 N=266（/428）　輪島 N=99（/189）

東洋大学社会学部　中村研究室；　日本大学文理学部　中森研究室

【ご回答に際して】
１.**1月1日の本震時に自宅またはその周辺地区にいた方がお答えください。**
２.調査は、20歳以上の方１人がお答えください。
(お宅に複数の方がいる場合、できれば、誕生日が１月１日から数えて早いほうの方がお答えください。これは年が若い方という意味ではありません)
３.答え方は、あてはまる項目を選び、その番号を〇で囲んでください。
４.質問には、〇を「1つだけ」つけるものと、「いくつでも」つけるものがあり、質問ごとに明記されています。
５.集計はすべて統計的に処理されますので、回答者の個人情報が使われることはありません。
６.調査票が重複して届いた場合は、１通だけお答えください。

問１　今回の災害で、お宅の被害はどの程度でしたか。（〇は１つだけ）(合計　珠洲　輪島)

１.全壊 64.1　71.8　43.4　２.半壊（大規模・中規模）25.5　21.1　37.4
３.準半壊・一部損壊 9.3　6.0　17.2　４.家に被害はなかった 0.3　0.4　0　NA=0.8　0.8　1.0

問２　お宅の地域では停電はどのくらいで直りましたか。（〇は１つだけ）

１.当日 1.9　1.9　2.0　２.翌日 0.3　0.4　0　３.３日後 2.5　2.3　3.0　４.４日後 1.1　0.8　2.0
５.５日後 1.4　1.5　1.0　６.６日～７日後 6.8　6.4　8.1　７.翌週 8.5　10.5　3.0
８.３～４週後 21.1　20.3　23.2　９.２月以降 44.4　44.0　45.5　10.停電はなかった 0.8　0.4　2.0
NA=11.2　11.7　10.1

問３　お宅の地域では断水はどのくらいで直りましたか。（〇は１つだけ）

１.１週目 0　0　0　２.２週目 1.1　0.8　2.0　３.３週目 0　0　0　４.４週目 1.4　0.8　3.0
５.２月 3.3　1.1　9.1　６.３月 9.3　4.9　21.2　７.４月 25.2　23.7　29.7　８.５月 24.9　27.8　17.2
９.まだ直っていない 29.9　36.8　11.1　10.断水はなかった 0.5　0.4　1.0　NA=4.4　3.8　6.1

問４　お宅の地域では携帯電話はおおよそいつからいつまでつながりませんでしたか。
（数字を書き入れてください。わからない人は「２」に〇）

本震後、だいたい（　　）日目から（　　）日目までつながらなかった。
中央 1　1　1　平均 1.3　1.3　1.3 (NA=38.1　40.2　32.3)　中央 7　6　8　平均 10.2　9.6　11.7
最大 60　60　60 (NA=43.3　44.7　39.4)　２.携帯電話は持っていない・わからない 28.5　28.6　28.5

1月1日午後4時10分の本震についてお聞きします

問５　本震が起きたとき、あなたはどう感じましたか。（〇はいくつでも）

１.これまでにない激しい揺れだった 91.0　90.2　92.9
２.これまでにない長い揺れだった 72.6　74.8　66.7
３.とっさに津波が来るかもしれないと思った 40.0　43.2　31.3
４.家がつぶれるかもしれないと思った 69.6　71.4　64.6　NA=0.5　0.8　0

問６　揺れがおさまってから、あなたはどうしましたか。（○はいくつでも）（合計　珠洲　輪島）

１.屋外に出た（揺れている最中に屋外に出た、を含む）63.0　63.9　60.6
２.自宅の中や外のかたづけを始めた 2.2　1.9　3.0
３.地震に関する情報を得ようとした 25.5　25.9　24.2
４.近くに住む親戚・知人などの様子を見に行った 12.6　12.0　14.1
５.家族などの安否を確かめるために電話やLINEをした 15.9　17.7　11.1
６.出先から自宅に向かった 6.8　7.1　6.1
７.海や川の様子を見に行った　2.2　2.3　2.0
８.津波が来るかもしれないと思いすぐに避難した 49.3　53.4　38.4
９.津波から避難する準備をした 9.9　9.8　10.1
10.何もすることができなかった 17.8　16.5　21.2
11.閉じ込められた 7.1　6.4　9.1
12.その他（具体的に：　　）　14.2　13.9　15.2　　NA=3.0　3.0　3.0

問７　本震時、各地で火災が発生しましたが、それについてあなたにあてはまることはありますか。（○はいくつでも）

１.地震の後、火の元を確かめた 34.8　32.3　50.5
２.日ごろから火事に備えて消火器などを用意していた 13.4　11.3　19.2
３.今回、地震で火災になるとは思いもつかなかった。 15.9　18.4　9.1
４.避難するとき、火災防止のためにブレーカーを切ることは、考えもつかなかった。 24.1　24.4 23.2
５.津波警報が出ていたので、避難が優先で、火災防止や消火どころではなかった。 35.6　41.4　20.2
６.その他(具体的に:　　）14.5 14.3　15.2　　NA=4.4　3.0　8.1

問８　あなたは、本震の揺れを感じた段階で、お住まいの地域に津波が来ると思いましたか。（○は１つだけ）

１.津波が必ず来ると思った 18.4　15.8　25.3
２.もしかしたら津波が来るかもしれないと思った 45.5　50.8　31.3
３.津波は来ないだろうと思った 10.1　9.8　11.1
４.津波のことはほとんど考えなかった 21.1　18.4　28.3　　NA=4.9　5.3　4.0

問９　あなたは大津波が襲う前に、津波警報を聞きましたか。（○は１つだけ）

１.聞いた 53.7　59.4　38.4　２.聞かなかった 21.1　18.4　28.3⇒問10へ
３.おぼえていない 20.3　18.0　26.3⇒問10へ　　NA=4.9　4.1　7.1

問９で津波警報を「聞いた」と答えた方にお聞きします n=196　158　38

問９付問１あなたは、津波警報をどのようにして知りましたか。（○はいくつでも）

１.防災無線の屋外拡声器 65.3　67.1　57.9
２.防災無線の戸別受信機 3.6　4.4　0
３.携帯電話の緊急速報(エリア)メール 30.6　29.1　36.8
４.携帯電話の防災アプリ 10.2　9.5　13.2
５.市の登録メール・市の公式LINE　2.0　2.5　0
６.テレビ 8.7　8.2　10.5
７.ラジオ 6.1　5.7　7.9
８.ケーブルテレビ 0.5　0　2.6
９.ネットニュース 0.5　0.6　0
10.X（旧ツイッター）などのSNS 0.5　0.6　0
11.家族・知人から直接 15.3　17.1　7.9
12.家族・知人からのLINE 4.1　3.8　5.3
13.消防団や自治会から直接 2.6　2.5　2.6
14.その他（具体的に：　）4.1　5.0　0
NA=0　0　0

再び全ての方にお聞きします　　（合計　珠洲　輪島）

問 10　地震時あなたがいた場所には、結果的に、津波は来ましたか。（○は１つだけ）

１.津波が来た 33.4　44.4　4.0　２.津波は来なかった 58.6　49.6　82.8
３.わからない 4.1　1.5　11.1　NA=3.8　4.5　2.0

問 11　あなたは、津波が来る前に、避難しましたか。（○は１つだけ）

１.避難した 73.4　77.4　62.6　２.避難しなかった 23.8　19.5　35.4　NA=2.7　3.0　2.0

問 11 で「２.避難しなかった」と回答した人だけお答えください n=87　52　35

付問 11-１　あなたはなぜ避難しなかったのですか。（○はいくつでも）

１.津波のことは考えつかなかったので 18.4　15.4　22.9
２.防災マップ（ハザードマップ）で津波が来ないとされた地区にいたので 19.5　13.5　28.6
３.津波が来ないと思われた高台や内陸にいたので 28.7　21.2　40.0
４.津波警報や市の避難の呼びかけを聞かなかったので 8.0　5.8　11.4
５.海の水が大きく引くなどの前兆がなかったので　0　0　0
６.いざとなったら２階に逃げればよいと思ったから 5.7　9.6　0
７.家に閉じ込められて出られなかった 13.8　17.3　8.6
８.家に閉じ込められた家族や近所の人を助けようとして 10.3　13.5 5.7
９.避難先が遠すぎたので 8.0　5.8　11.4
10.車など避難する手段がなかったので 5.7　3.8　8.6
11.道がふさがれていたので 12.6　11.5　14.3
12.体が不自由な人など自力での避難がむずかしい人がいたので 8.0　11.5　2.9
13.仕事や避難誘導などがあり、自分が逃げるわけにはいかなかった　4.6　5.8　2.9
14.その他(具体的に：) 10.3　1.5　8.6　NA=1.1　0　2.9

付問 11-２から 11-５は　問 11 で「１.避難した」と回答した人だけお答えください

付問 11-２　あなたが避難した理由は何ですか。（○はいくつでも）n=268　206　62

１.地震の揺れの強さや長さがいつもとは違い、津波を警戒して。 58.2　57.3　61.3
２.津波警報を聞いたから　41.0　43.7　32.3
３.家族や近所の人が避難しようと言ったから 34.7　36.4 29.0
４.消防団が避難を呼びかけたから　6.0　6.3　4.8
５.離れて住む子供や親せきが電話で避難を呼びかけたから 6.0　6.3　4.8
６.海や川の水が大きく引いたから　10.1　5.3　25.8
７.実際に津波が来ているのを見たり聞いたりしたから 3.0　3.4　1.6
８.避難訓練などで、いつも避難していたから。 25.7　27.7　19.4
９.東日本大震災の記憶があったから 26.5　23.8　35.5
10.過去に津波の経験があったから 0.7　0.5　1.6
11.ＮＨＫのアナウンサーが強く避難を呼びかけたから 4.5　4.4　4.8
12.家が壊れて、居られなくなったから。 22.0　21.8　22.6
13 その他（具体的に：　　）6.7　7.3　4.8　NA=1.5　0.5　4.8

（合計　珠洲　輪島）

付問 11-３　あなたが避難をはじめたのは、本震の発生からどのくらい経ってからですか。（○は１つだけ）

１. 揺れている間 6.7　6.3　8.1	５. 揺れが収まってから30分くらいまで 1.5　1.5　1.6
２. 揺れが収まった直後 52.6　5.29　51.6	６. 揺れが収まってから30分以上後 3.0　2.9　3.2
３. 揺れが収まってから10分くらいまで 24.3　24.3　24.2	７. よく覚えていない 5.2　5.3　4.8
４. 揺れが収まってから20分くらいまで 5.2　5.3　4.8	NA=1.5　1.5　1.6

付問 11-４　あなたはどのような手段で避難をしましたか。（○はいくつでも）

１. 歩いて避難した 54.1　51.0　64.5	２. 走って避難した 11.9　13.6　6.5
３. 車で避難した 31.7　33.5　25.8	４. その他（具体的 ）1.9　1.　1.6
	NA=2.6　1.9　4.8

付問 11-５　あなたが、はじめに避難した場所はどこですか。（○は１つだけ）

１. 市が指定した津波の避難場所 65.7　71.8　45.2	
２. 津波に安全かはわからない近くの公共施設 7.8　5.8　14.5	
３. 津波から安全そうな場所にある知人・親戚などの家 3.0　2.9　3.2	
４. 津波に安全かはわからない知人・親戚などの家 0.4　0.5　0	
５. その他（具体的に：　　）21.6　17.5　35.5	NA=1.5　1.5　1.6

再び全ての方にお聞きします

問 12　地震から数日間あなたはどこに避難していましたか（○はいくつでも）

１. 学校などの公的避難所 59.5　60.9　55.6	５. 市外の家族・知人の家 11.2　10.9　12.1
２. 車中生活 22.7　24.8　17.2	６. ホテル・宿泊施設 0.5　0.4　1.0
３. 自宅（納屋等を含む） 10.1　9.0　13.1	７. その他（具体的に：　）16.4　15.4　19.2
４. 市内の家族・知人の家 3.6　3.0　5.1	NA=2.2　2.3　2.0

問 13　地震から数日間、あなたは避難生活でどんなことに困りましたか（○はいくつでも）

１. 寒かった 57.5　56.8　59.6	10. 高齢者の介護・支援 13.2　13.9　11.1
２. 食べ物や飲み物がなかった 32.3　36.5　21.2	11. 家族・知人の安否がわからなかった 20.8　19.5　24.2
３. トイレができなかった 60.3　60.5 59.6	12. 携帯電話の電源がなかった 24.1　21.8　30.3
４. 寝る場所がなかった 31.5　34.6　23.2	13. 携帯電話の電波がなかった 43.3　39.5　53.5
５. プライバシーがなかった 47.1　46.6 48.5	14. 道路が不通となり孤立した 15.9　11.7　27.3
５. 日常生活用品がなかった 22.7　25.2　16.2	15. 停電で暗かった 47.4　45.1　53.5
６. 風呂に入れなかった 75.9　76.3　74.7	16. 外国人とのやりとり 0　0　0
７. 車のガソリンがなかった 18.1　18.4　17.2	17. テレビが見られなかった 46.8　43.2　56.6
８. ペットの居場所がなかった 12.1　12.4　11.1	18. その他（具体的に：　）7.4　6.8　9.1
９. 持病の悪化 2.2　1.9　3.0	19. 特にない 0.8　2.6　1.0
	NA=2.7　2.6　3.0

（合計　珠洲　輪島）

問 14　あなたはどのくらいの期間、避難所で生活をしていましたか。（○は１つだけ）

１．１週間以内	17.0	18.4	13.1	２．２週間以内	9.3	9.4	9.1	３．１か月以内	11.5	10.9	13.1
４．３か月以内	11.8	13.5	7.1	５．３か月以上	32.1	29.7	38.4				
６．避難所生活はしていない	14.2	14.3	14.1						NA=4.1	3.8	5.1

問 15　あなたは二次避難（初めの避難所からの移動）をしましたか。（○はいくつでも）

１．市内の公的避難所へ二次避難をした	8.5	7.9	10.1		
２．市外の公的避難所へ二次避難をした	8.5	8.6	8.1		
３．市内のホテル・民家などへ二次避難をした	4.7	3.8	7.1		
４．市外のホテル・民家などへ二次避難をした	25.2	25.2	25.3		
５．福祉施設などに二次避難をした	0.8	1.1	0		
６．二次避難はしていない	46.3	45.9	47.5	NA=7.1	6.4	9.1

問 16　市外への二次避難についてあなたはどう思いますか。あてはまるものをいくつでも選んでください。（○はいくつでも）

１．市外へ避難して、自宅を放置するわけにはいかないと感じた。	42.7	42.5	43.4			
２．自分だけこの地を離れるのは、地域の人に悪いと感じた。	16.7	16.9	16.2			
３．市外への避難は、お金の面で不安があった。	13.4	13.2	14.1			
４．市外への避難は仕事などの面で難しい。	21.6	23.3	17.2			
５．市外といっても金沢以遠や県外は心理的に遠すぎる気がした。	21.6	20.7	24.2			
６．慣れ親しんだ地域の人と離れるのは心理的に不安があった。	17.3	16.2	20.2			
７．子供や高齢者の世話のためには、遠くても行った方がいいと思った。	11.5	12.0	10.1			
８．その他（具体的に：　　）	12.1	12.4	11.1	NA=5.8	3.0	13.1

問 17　地震発生から数日間、あなたはどのようなことを知りたかったですか。（○はいくつでも）

１．地震の震源地・規模	34.5	31.6	42.4	12. 給水や炊き出しの場所	15.6	16.9	12.1
２．余震の可能性や規模の見通し	49.6	48.1	53.5	13. 風呂について	48.8	47.7	51.5
３．津波の状況や今後の津波の可能性	25.5	28.9	16.2	14. 病院・医療・衛生について	29.3	27.8	33.3
４．地震や津波の被害状況	42.2	47.0	29.3	15. 原子力発電所の状況	8.5	7.1	12.1
５．家族や知人の安否	50.1	50.4	49.5	16. 避難生活の見通し	47.7	45.5	53.5
６．水道・電気・電話･ガスの復旧の見通し	67.1	62.4	79.8	17. 仮設住宅について	43.8	40.2	53.5
７．交通機関・道路について	55.6	51.5	66.7	18. 国や自治体の対応	30.4	28.9	34.3
８．ガソリン・灯油について	33.2	32.0	36.4	19. 仕事・学校・求人について	6.6	8.3	2.0
９．飲み水・食料や生活物資について	50.7	51.5	48.5	20. 防犯・治安について	17.3	11.7	32.3
10. トイレについて	54.2	54.1	54.5	21. 自宅の被害判定について	31.2	28.9	37.4
11. 暖をとる方法	16.2	17.7	12.1	22. り災証明について	27.7	25.9	32.3
				23. その他（具体的に：）	3.6	3.4	4.0
				24. 特にない	0.5	0.4	1.0	NA=1.6	2.3	0

（合計　珠洲　輪島）

問 18　地震発生から数日間、災害に関する情報を得るために役に立ったものは何ですか。（○はいくつでも）

１.テレビ　34.8　33.8　37.4	９.LINE 13.7　15.4　9.1
２.ラジオ 34.8　29.3　49.5	10.携帯メール　9.3　9.4　9.1
３.市の防災無線 11.2　14.3　3.0	11.口コミ　21.9　23.3　18.2
４.新聞 29.3　27.1　35.4	12.市・警察・消防などからの情報 12.3　12.0　13.1
５.携帯電話・PC の web サイト（ﾎｰﾑﾍﾟｰｼﾞ） 16.7　18.8　11.1	13.避難所にある掲示やチラシ 23.3　23.7　22.2
６.X(旧ツイッター)などの SNS 2.2　2.6　1.0	14.ケーブルテレビ　0.8　0.4　2.0
７.YouTube　2.5　3.0　1.0	15.その他（具体的に：　　）　3.0　2.6　4.0
８.携帯電話の通話 22.2　23.3　19.2	16.特にない 4.9　5.3　4.0　NA=1.9　2.3　1.0

問 19　地震発生から１か月後、あなたはどのようなことを知りたかったですか。（○はいくつでも）

１.地震の震源地・規模 16.7　16.9　16.2	12.給水や炊き出しの場所 17.0　18.0　14.1
２.余震の可能性や規模の見通し 35.6　36.8　32.3	13.風呂について 33.7　21.0　38.4
３.津波の状況や今後の津波の可能性 17.3　21.4　6.1	14.病院・医療・衛生について 27.4　25.6　32.3
４.地震や津波の被害状況 25.8　28.9　17.2	15.原子力発電所の状況 2.7　2.6　3.0
５.家族や知人の安否 26.0　36.7　24.2	16.避難生活の見通し 42.5　42.9　41.4
６.水道・電気・電話･ガスの復旧の見通し 66.6　63.5　74.7	17.仮設住宅について 53.4　50.4　61.6
７.交通機関・道路について 49.0　45.1　59.6	18.国や自治体の対応 35.6　34.2　39.4
８.ガソリン・灯油について 18.6　17.7　21.2	19.仕事・学校・求人について 5.8　7.9　0
９.飲み水・食料や生活物資について 34.2　35.3　31.3	20.防犯・治安について 13.4　12.0　17.2
10.トイレについて 34.8　33.8　37.4	21.自宅の被害判定について 37.8　37.2　39.4
11.暖をとる方法 6.8　6.8　7.1	22.り災証明について 34.0　33.5　35.4
	23.その他（具体的に：　）　2.5　3.0　1.0
	24.特にない 0.5　0.4　1.0
	NA=2.5　2.3　3.0

問 20　地震発生から 1 か月後、災害に関する情報を得るために役に立ったものは何ですか。（○はいくつでも）

１.テレビ 68.5　68.0　69.7	９.LINE 21.6　23.3　17.2
２.ラジオ　24.7　19.5　38.4	10.携帯メール 6.6　5.6　9.1
３.市の防災無線 6.6　6.4　7.1	11.口コミ 17.5　18.0　16.2
４.新聞 56.4　56.0　57.6	12.市・警察・消防などからの情報 20.0　19.5　21.2
５.携帯電話・PC の web サイト（ﾎｰﾑﾍﾟｰｼﾞ） 23.8　23.3　25.3	13.避難所にある掲示やチラシ 29.9　30.8　27.3
６.X(旧ツイッター)などの SNS 2.2　2.3　2.0	14.ケーブルテレビ 0.8　1.1　0
７.YouTube 6.3　6.4　6.1	15.その他（具体的に：　）1.4　1.1　2.0
８.携帯電話の通話 21.4　20.3　24.2	16.特にない 0.5　0.4　1.0　NA=2.2　2.3　2.0

（合計　珠洲　輪島）

問 21　市では地震後 LINE や SNS を使った情報発信をしていましたが、それはあなたにとって役に立ちましたか。（○は１つだけ）

１.とても役に立った	21.4	22.9	17.2	２.やや役に立った	21.9	24.1	16.2
３.あまり役に立たなかった	11.2	11.3	11.1	４.全く役に立たなかった	3.8	3.0	6.1
５.もともと LINE や SNS は使っていない	35.3	32.7	42.4	NA=6.3	6.0	7.1	

問 22　今回、避難所では人工衛星（スターリンク）を使った Wi-Fi 通信が利用されましたが、あなたはそれを使いましたか。（○は１つだけ）

１.使った	11.0	10.5	12.1	２.使わなかった	25.8	36.7	23.2
３.もともと Wi-Fi は利用していない	22.7	22.9	22.2				
４.自分の避難所にはスターリンクはなかった	17.3	18.4	14.1				
５.避難所には避難していない	15.6	15.0	17.2	NA=7.7	6.4	11.1	

問 22　で「使った」と答えた方にお聞きします n=40　28　12

問 22　付問１　スターリンクはあなたにとって役に立ちましたか。（○は１つだけ）

１.とても役に立った	62.5	67.9	50.0	２. やや役に立った	27.5	21.4	41.7
３.あまり役に立たなかった	7.5	10.7	0	４.全く役に立たなかった	0	0	0
NA=2.5	0	8.3					

再び全ての方にお聞きします

問 23　ＮＨＫは、地上波が映らなくなった地域のために、ＢＳ（１０３チャンネル）で地上波の放送を行いましたが、あなたにとってこの対応は役に立ちましたか。（○は１つだけ）

１.役に立った	17.5	13.5	28.3	２.役に立たなかった	18.9	20.3	15.2
３.問題なく地上波が受信できたので関係なかった。	15.6	18.0	9.1				
４.わからない	39.2	38.7	40.4	NA=8.8	9.4	7.1	

問 24　津波警報が発表された際、ＮＨＫのアナウンサーは、声を張りあげて津波警報を伝えました。あなたは、この伝え方をどのように思いましたか。（○は１つだけ）

１.この伝え方でよかったと思う	31.2	30.5	33.3
２.ある程度はよかったとは思うが、もう少し声のトーンや調子を落として伝えた方がよいと思う。	4.9	4.5	6.1
３.あまりよいとは思わない。普通の話し方で伝えてほしいと思う。	0.8	0.4	2.0
４.ＮＨＫのテレビ・ラジオの放送を見聞きしていなかったので、わからない。	48.5	50.8	42.4
５.その他（具体的に：　　）	8.5	8.6	8.1
NA=6.0	5.3	8.1	

（合計　珠洲　輪島）

問 25　このたびの能登半島地震に関する情報・報道について、あなたが思うこと・感じることは何ですか。次の中から、あてはまるものをすべて選んでください。

１.自分の住んでいる地域は、発表された震度よりも実際は大きかったような気がする。 59.5　65.0　44.4
２.自分の住んでいる地域の取材や報道が少なくて不公平感を覚えた。 30.7　24.1　48.5
３.自分の住んでいる地域の取材や報道が少なかったので、支援やボランティアが来なかったり、来るのが遅れたように思える。 27.7　21.8　43.4
４.必要以上に誇張して報道しているように感じる。 2.5　2.6　2.0
５.被害の映像が繰り返し報道され、見るのが嫌になった。 10.7　9.4　14.1
６.不十分な取材による報道が多いように感じる 10.7　9.0　15.2
７.被災者への配慮が足りない報道が多いと思う。 9.9　9.8　10.1
８.マナーを守っていない報道関係者がいたと思う。 7.4　7.1　8.1
９.被害についての報道だけではなく、生活に関わる報道をもっと伝えてほしかった。 24.9　23.3　29.3
10.生活に関わる情報を多く報道していて、よかったと思う。 9.9　10.2　9.1
11.必要な情報をどのように得ればよいかをもっと伝えてほしかった。 17.8　16.9　20.2
12.被災者に寄り添うような報道に元気づけられた　11.5　12.8　8.1
13.不安を払しょくするような報道をもっと伝えてほしかった。 7.1　6.0　10.1
14.被災者に同情しているような報道が鼻につくことがある 5.5　4.9　7.1
15.報道のおかげで、多くの人々が被災地に関心を持っていただけたのではないかと思う。47.1　48.5　43.4
16.復興に頑張っている人の報道を見ると、自分自身も頑張ろうと思うことがある。 38.1　39.5　34.3
17.復興に頑張っている人の報道を見ると、逆にあせりを感じることがある。 9.9　10.9　7.1
NA=3.3　1.9　7.1

緊急地震速報についてお聞きします

問 26　あなたは、本震の緊急地震速報を何から得ましたか。（○はいくつでも）

１.テレビ 23.0　21.1　28.3
２.ラジオ 7.9　6.8　11.1
３.緊急速報（エリア）メール 36.2　32.3　46.5
４.Web サイト（ホームページ） 0　0　0
５.X（旧ツイッター）などの SNS 0.3　0.4　0
６.防災アプリ 8.2　8.6　7.1
７.館内放送 2.2　2.6　1.0
８.防災無線の屋外拡声器 33.4　35.7　27.3
９.防災無線の戸別受信機 2.5　3.4　0
10.専用受信機 0.8　0　3.0
11.職員・従業員などの肉声による指示　2.2　2.6　1.0
12.その他（具体的に：　）3.0　4.1　0
13.この時の緊急地震速報を見聞きしていない。 17.8　20.3　11.1
NA=4.1　3.8　5.1

（合計　珠洲　輪島）

問 27　あなたは、本震時の緊急地震速報を見聞きした際、どのようなことをしましたか。（○はいくつでも）　〈問 26 選択肢 13 以外の人〉 n=300 212　88

１.すでに強い揺れに翻弄されていた 51.3　52.4　48.9	12.屋外に出た 42.3　44.8　36.4
２.様子を見た 9.0　9.0　9.1	13.テレビ・ラジオの情報に注意した 11.0　10.4　12.5
３.身構えた・しゃがみこんだ 29.0 29.2　28.4	14.民間放送テレビを見ていたがＮＨＫテレビにかえた 3.3　3.3　3.4
４.机やベッドなどの下にもぐった 12.3　10.8　15.9	15.テレビ・ラジオ以外の方法で情報を得ようとした 4.3　4.2　4.5
５.倒れてくる・落ちてくる・崩れてくると思われるものから離れた 10.0　10.4 9.1	16.周りの人に注意を呼びかけた 11.3　11.8　10.2
６.ヘルメット・座布団・そのほか何かで頭を守った 3.3　2.8　4.5	17.近くにいる人を守った・守ろうとした 10.0　10.4　9.1
７.倒れそうなものなどを、倒れないようにおさえた・おさえようとした。 7.0　8.0　4.5	18.館内放送や人の指示に従った 2.0　2.4　1.1
８.火の始末をした 16.0　15.1　18.2	19.運転していた車を止めた 4.3　4.2　4.5
９.ガスの元栓を閉めた 10.3　9.4　12.5	20.地震の様子を撮影した・撮影しようとした 1.0　0.9　1.1
10.戸や窓を開けた 1.3　1.9　0	21.その他（具体的に：　　）5.3　4.7　6.8
11.屋内の安全と思われる場所に移った 6.0　6.1　5.7	22.何もできなかった。20.3　17.5　27.3 NA=2.7　2.8　2.3

問 28　このたびの一連の地震で、緊急地震速報はあなたにとって役に立ちましたか。（○はいくつでも）

１.自分自身や家族の身の安全を守ることができた 24.1　23.3　26.3	７.緊急地震速報が続いて発表されるので、警戒を怠らなかった。 21.1　17.3　31.3
２.揺れる前の段階で、これから揺れが来ることがわかった。 15.3　9.0　32.3	８.揺れている状況などを映像に記録することができた 0.3　0.4　0
３.緊急地震速報の有無で揺れの強さを判断した 17.5　17.7　17.2	９.その他（具体的に：　） 9.3　9.4　9.1
４.心構えができた 11.2　8.3　19.2	10.わからない 14.0　15.8　9.1
５.車を安全に運転することができた 2.5　2.6　2.0	11.特に役には立たなかった 20.8　22.2　17.2
６.あわてることが少なくなった。 2.5　1.9　4.0	NA=4.1　2.6　8.1

流言・うわさ・デマについてお聞きします

問 29　あなたは「外国人の窃盗団がやってくる」という話を見聞きしましたか。（○は１つだけ）

１.見聞きした 45.2　47.4　39.4	２.見聞きしなかった 40.8　38.7　46.5⇒問 30 へ
３.おぼえていない 6.8　6.8　7.1　⇒問 30 へ	NA=7.1　7.1　7.1

問29　で「聞いた」と答えた方にお聞きします n=165　126　39　　（合計　珠洲　輪島）

問29付問1　その話の情報源は何ですか。（○はいくつでも）

１.口づて	65.5	62.7	74.4	２.メール	3.0	3.2	2.6	３.LINE	11.5	9.5	17.9
４.X（旧・ﾂｲｯﾀｰ）	4.2	4.8	2.6	５.ネットニュース	3.6	4.0	2.6				
６.新聞・テレビ・ラジオ	23.0	21.4	28.2	７.電話（通話）	0.6	0.8	0				
８.市・町内会・消防・警察などからの情報	39.4	42.1	30.8								
９.その他（具体的に：　　）	4.2	5.6	0					NA=1.2	0.8	2.6	

問29付問2　その話を見聞きして、あなたは本当だと思いましたか。（○は１つだけ）

１.本当だと思った	61.8	61.9	61.5	２.半信半疑だった	33.3	31.7	38.5
３.本当ではないと思った	0	0	0		NA=4.8	6.3	0

問29付問3　その話を見聞きして、あなたはどうしましたか。（○はいくつでも）

１.家族や知人などに話をした	40.0	41.3	35.9			
２.家族や知人などにメールやLINEなどで伝えた	7.3	8.7	2.6			
３.X（旧・ツイッター）などのSNSに投稿した	0.6	0	2.6			
４.防犯に注意した	53.9	54.0	53.8			
５.何もしなかった	23.0	22.2	25.6			
６.その他（具体的に：　　）	6.7	7.1	5.1	NA=3.0	3.2	2.6

再び全ての方にお聞きします

問30　あなたは「救出・救援要請のニセ情報」（例：「閉じ込められました、助けてください。○○市○○町○番地」）という話を見聞きしましたか。（○は１つだけ）

１.見聞きした	10.7	12.4	6.1	２.見聞きしなかった	72.9	68.8	83.8⇒問31へ
３.おぼえていない	5.8	6.8	3.0	⇒問31へ			

NA=10.7　12.0　7.1

問30　で「聞いた」と答えた方にお聞きします n=39　33　6

問30付問1　その話の情報源は何ですか。（○はいくつでも）

１.口づて	25.6	24.2	33.3	２.メール	5.1	6.1	0	３.LINE	7.7	6.1	16.7
４.X（旧・ﾂｲｯﾀｰ）	23.1	24.2	16.7	５.ネットニュース	7.7	9.1	0				
６.新聞・テレビ・ラジオ	38.5	39.4	33.3	７.電話（通話）	2.6	3.0	0				
８.市・町内会・消防・警察などからの情報	7.7	9.1	0								
９.その他（具体的に：　　）	2.6	3.0	0					NA=2.6	0	16.7	

問30付問2　その話を見聞きして、あなたは本当だと思いましたか。（○は１つだけ）

１.本当だと思った	48.7	51.5	33.3	２.半信半疑だった	25.6	18.2	66.7
３.本当ではないと思った	10.3	12.1	0		NA=15.4	18.2	0

問30付問3　その話を見聞きして、あなたはどうしましたか。（○はいくつでも）

１.家族や知人などに話をした	43.6	42.4	50.0			
２.家族や知人などにメールやLINEなどで伝えた	7.7	9.1	0			
３.X（旧・ツイッター）などのSNSに投稿した	0	0	0			
４.消防・警察に通報した	0	0	0			
５.何もしなかった	41.0	39.4	50.0			
６.その他（具体的に：　　）	5.1	6.1	0	NA=7.7	9.1	0

（合計　珠洲　輪島）

再び全ての方にお聞きします

問 31　その他にあなたが見聞きした流言・うわさ・デマはありましたか。（○はいくつでも）

１.二次避難をすると、仮設住宅の抽選に当たりにくくなる。 24.7　23.7　27.3
２.○月○日にまた大きな地震がくる 26.6　30.1　17.2
３.今回の地震は「人工地震」だった 4.9　4.1　7.1
４.その他（具体的に：　　） 6.8　6.8　7.1　　NA=2.5　2.6　2.0

問 32　今回の災害で、あなたにあてはまることがあれば、いくつでも○をつけてください。

１.能登では毎年のように地震があったが、ここまで大きな地震が来るとは思わなかった。 83.0　81.6　86.9
２.自宅では、過去の地震の被害を、完全には修復できていなかった。 38.9　42.1　30.3
３.自宅の耐震補強をしたかったが、家が大きくて費用的に難しかった。24.9　24.8　25.3
４.地域の避難訓練にはよく参加していた 35.1　38.3　26.3
５.自分の津波の避難場所がどこであるかは、以前から知っていた。61.6　68.4　43.4
６.ボランティアの人は良くやってくれたと感謝している 59.7　59.8　59.6
７.ボランティアの人がもっと早く来てくれたらよかったと思う 9.3　9.4　9.1
８.私は日ごろから地域の付き合いを大事にしており、災害時もそれが役に立ったと思う。 27.9　27.4　29.3
９.祭り（ヨバレ）もあるので、家には大広間があったほうがいいと思う。 3.6　3.8　3.0
10.防災訓練では、非常用トイレの作り方をやっておいた方がよかったと思う。 32.1　33.5　28.3
11.今回の地震で、大きな地震が起きたら、とにかく屋外に逃げたほうがよいと思った。 57.5　57.5　57.6
12.津波の避難路が通れなくなった時の対策も必要だと思う 47.7　51.5　37.4
13.水道復旧にここまで長い期間がかかるとは、思わなかった。 80.3　79.3　82.8
14.高齢者の介護や支援にとても困った。16.7　16.9　16.2
15.その他(具体的に:　　) 4.1　5.6　0　　NA=2.2　1.9　3.0

問 33　今回の災害についての教訓や、国・県・市など行政に対するご意見がありましたら、どんなことでもけっこうですからお書きください。

最後にあなたご自身のことについてお聞きします

Ｆ１　性別

１.男	50.7	50.0	52.5	２.女	47.9	48.9	45.5

NA=1.4　1.1　2.0

Ｆ２　年齢　（○は１つだけ）

１.20 歳代	２.30 歳代	３.40 歳代	４.50 歳代
1.1　0.8　2.0	1.9　1.9　2.0	4.9　6.0　2.0	12.3　15.0　5.1
５.60 歳代	６.70 歳代	７.80 歳以上	
24.4　25.9　20.2	34.2　32.0　40.4	20.0　17.7　26.3	NA=1.1　0.8　2.0

Ｆ３　現在のお住まいの形態はどれですか。（○は１つだけ）

１.仮設住宅	81.6	79.7	86.9	２.みなし仮設住宅	0.3	0.4	0
３.私費の借家・集合住宅	0.5	0.8	0	４.親族宅	0.3	0.4	0
５.元の自宅（納屋等を含む）	11.2	11.7	10.1	６.避難所	3.8	5.3	0
７.その他（　）	1.1	1.1	1.0				

NA=1.1　0.8　2.0

Ｆ４.本震時にお住まいの地区はどこですか。（○は１つだけ）

珠洲

１.宝立	41.4	２.上戸	7.9	３.飯田	0.8	４.若山	0.4	５.直	1.9	６.正院	12.4
７.蛸島	0	８.三崎	34.6	９.日置	0	10.大谷	0				

NA=0.8

輪島

１.諸岡	45.5	２.黒島	6.1	３. 門前	21.2	４. 仁岸	3.0	５.阿岸	3.0		
６.本郷	6.1	７.浦上	13.1	８.七浦	0	９.その他の輪島市内	0	NA=2.0			

Ｆ５　本震時のお住まいから海までは、歩いてとのくらいの距離でしたか。（○は１つだけ）

1.10 分以内	68.2	78.6	40.4	2.20 分以内	12.1	10.5	16.2	3.30 分以内	3.8	4.5	2.0
4.30 分以上	14.5	5.3	39.4								

NA=1.4　1.1　2.0

Ｆ６　本震時のお住まいの地区は、市で津波の危険地域とされていましたか。

１.津波の危険地域だった	43.0	46.6	33.3	
２.津波の危険地域ではなかった	23.3	18.8	35.4	
３.わからない	31.2	32.3	28.3	NA=2.5　2.3　3.0

ご協力たいへんありがとうございました。
ご回答は今後の防災に生かしてまいりたいと思います。

自由回答

(問 4)　携帯電話不通期間(その他)

避難所(宝立小中)の 4 階外の非常階段付近で当日でも通話できた。/　1 月 12 日でもドコモはネットも通話もできなかった！/ずーっとつながりにくかった。/　津波でなくした手ぶらで逃げた。/場所によってはつながった。ただし、au。/Au はつながっていた。/直後は通話できたが、夜からは×。/　持っていたけれど、電話する気がなかった。/　ながされてしまっていた。/　Au は一日からつながった。/　避難所で発動機。/　つながらないことがたびたびあった。/　ほとんどつながっていた。/　ただ、電波が悪くすぐ切れる状態。/　避難所にドコモの WiFi がついて通じました。/　電波の状況が悪かったが、切れながらなんとか通話できた。/　その後も電波不安定。/　ほぼずっと通じていた au。つながりにくいときはあったが、通じなかったことはない。/携帯電話はすぐつながった。/　当日からだいたい通話できた。/　電波が弱かった。00000Japan(ソフトバンク)がとても役に立った。/

問 6　揺れが収まってからの行動(その他)

トイレに行って 30 秒後、ガラス戸が五六枚。倒れてきた。/　1 分前の余震の後、すぐ外に出た。同時に本震あり。/　近所の人に助けてもらって避難した。/　その場ですぐ二階いが落ち、全壊した。揺れが長く続き出れなく、終わってすぐ出た。/　助けての声を聞いてチェーンソーを持ち、近所の救助に行き、トータル 8 人は瓦礫から出した。/　仕事場に行った。/　外にいたので避難所へ行った。/　一人は家の下敷きになった消防の方に助けて頂いた。窓から飛び降りた。/　津波と近くで火事があったので避難した。/　母の安全を確認、屋上へ避難した。/　揺れがおさまったので、外でほっとしていた。/　家の下敷きになっていた。/男女に行く準備をした。自分とペットの食糧の確保。/　最初の地震の時、外にいた時 4 分後に地震が来た。/　祖母の部屋へ行き、外へ連れ出した。/　地面に座っていた。/　倒壊した建物の下敷きになっていた。/　閉じ込められた家族を救出した。/　オール電化で停電となり、気にもしなかった。/　　家が倒壊し 20 分後、どうにか瓦礫から自力で脱出できた。/　仕事中だったので、仕事が終わるまで何もできなかった。/　防災無線で津波警報が入った。/　近所の様子を見て回った。/　途中で帰れなかった。/屋外にいた。/　本震後に家の状態を確認中 2 から 3 分後、本震以上の余震があり避難した。/　放送があったから一生懸命走りました。/　高台に避難。/　家の下敷きになった夫の名前を呼び続けた。/　出先から自宅に向かったが、一日帰れなかった。/　家族に無事を知らせるためにラインをした。近所で閉じ込められた人の救助に行った。/　すぐ避難所に行った。/　まずは避難するので、人のいるところへ。揺れる中。/　スリッパだったので、とりあえず靴を履いて避難した。/　出先から自宅への道はデコボコになっており、自宅前の道路は電柱や街灯が倒れ、電線等が垂れ下がり地面についていたため自宅へ入れず、市役所が安全だったので、市役所の駐車場で車中泊をした。/　車で出かけていた。/　屋外に出た後、すぐに飯田高校に避難した。/

問 7 防火行動(その他)

　ブレーカーとガスを止めた。/　家の横の電柱が倒れ、即停電した。/　ブレーカーは切って避難した。/　全然考える余裕はありません。/　助けてもらった人に。津波くるから高台にと言われました。/　家の下敷き、閉じ込められた。/　ブレーカーを切る水道の栓を止める。/　仕事中で火のことまで考えなかった。/　輸出していたので家になかった。/　ブレーカーを切った。/自宅が目の前で倒れた。/　まず、ガスブレーカー水道の栓を止める。/　家族がブレーカーを切っていた。/　ブレーカーを切って避難した。/　ブレーカーを落とし火の元の確認水道の元栓を閉めた。/　家の下敷きでした。/　停電になったのでブレーカーを切らなくてもいいと思った。ブレーカーまで行けなかった。/　ガスのため安定装置が働いた。/　停電していた。/　ブレーカーを切り、水の元栓を締めて避難した。/　すぐそばに立っていたので、ガスの元栓を閉めた。/　一旦高台へ避難し、津波がおさまった後、自宅へ戻りブレーカーを切った。/　一軒家で家が全壊したので、火災についてはあまり気にかけなかった。/　何もできなかった。/　時間なんてない。/　ブレーカーを切った。/ ブレーカーを切って家を出ました。/　一回目でストーブを消したが、すぐに 2 回目外に出るのはやっと。/　自宅にいなかった/　家が潰れたので電線が切れていないかだけ目視確認した。/　何もできない。/　閉じ込められて救命に必死だった。/　すぐブレーカーを切った。/　ブレーカーの所までたどり着けなかった。/そのときどこへ行っても危ないと思い、その場でじっとしている方が安全だと思った。/　　2 日後に避難所 (直小学校)より家に帰り家のブレーカーを切った。/

問 9 付問 1 津波警報聴取手段(その他)

　車のテレビ。/　走って逃げる後ろから津波！津波！と聞いた。/　パトロールしていた警察の方。/　高台避難後に速報を聴く。/　津波がくると思い外に出たら防災無線が聞こえた。/　警察の方がおーきな声で言っていたので。/　家の前が海で潮の引き方が異常だった。/　避難準備中に津波が来た。/

問 11 付問 1 避難しなかった理由(その他)

　　倒壊した建物の下敷きになっていた。動くことができなかった。/　津波が来ないと思っていたから。/　納屋に入っていた車がつぶれた/　まさか津波が来るとは思いもしなかった。/

問 11 付問 2　避難した理由(その他)

　昭和 36 年、チリ沖厚岸で町全体水没。/　そのまま仕事場に行ったから。/　外へ出たらお向かいさんや隣家が潰れていた。/病気の夫がいたので、歩けない。後から津波が追いかけてきた。/　近所の人の叫び声で。/　避難、後日家の壊れを知った。/お正月で長男長女孫たちが来ていたので、一緒に車にのって山へ避難した。/　出先で車にいた為、歩いて避難をするしかできなかった。/　現居場所が海に近かったから。/　家が壊れてきて揺れていて、どうかして人のいるところへと。/　高架道路の建設の時に遺跡が出てきた。多分津波が来ていたと思った。/

問 11 付問 4　避難手段(その他)

　　知らない方に誘導された。/　親を背負い。/　おんぶされて。/　ペット犬を連れて妻と速足で。/　親戚の人の車に一夜いました。/

問 11 付問 5　避難場所(その他)

高い場所にある空き地。/　自宅を出て津波に遭った。車も流され。動かなかった。/　市外の避難所。/　仕事場。/　指定避難場所へ向かう途中の高い建物→指定の避難所。/　近くの高台の国道。/　屋外で一晩過ごした体育館の天井が崩れて入れなかった。/天井落下で外で過ごした。/　高台に老人ホームがありましたので、一晩。/　引砂の松森神社。/　近くに山や畑があるので、子供達と一緒に車に乗って避難した。/　自宅から離れた小高いところ。/　津波から安全な高い場所。/　集落の避難所が高台にある神社前と訓練の時から決められていたので、そちらへ行った。/　車が停められる近くの廃工場。/　集会所。/　集落の集会所。/ 町内の指定場所。/　集会所。/　裏山の畑、集会所。/　近くの高台。/　海から距離がある山側の隣地区で車中にいた/　車の中。/自分の家より高い場所だったから。/　近所高台のデイサービスセンター。/　津波が来ると聞き、知人の広場に他の人たちと車中泊をする。/　集会所。/　高い場所にある集会所 (自主避難所)。/　近くの山道。/　高台。/　親戚の人の避難所に。/　海から遠い場所へ。/　学校。/　なるべく内陸に向かって歩いた。/　少しでも高い所、海岸から遠い。/　消防署。/　珠洲市消防署。/　高い場所。/

問 12　数日後の避難所(その他)

部落の集会所。/　車中泊二泊から違う小中学へ移動した。一日目、旧小中学校へ。体育館の天井落ちて中へ入れなかったため、

外に火を焚いていた。途中車に乗せてもらって夜を明かした。/　特別養護老人ホーム。/　第三長寿園老人ホーム。/　老人ホーム。/　特別養護老人ホーム第三長寿園。/　老人ホーム。/　畑にある肥料小屋。/　病院。/　地域にある集会所に避難した。/町内、ビニールハウス。/　地域の集会施設。/　集会所。/　部落の集会所。/　病院に入院していた。/　ハウス。集会所。/　地区の集会所。/　地区の集会所。/　職場（病院）。/　職場。/ 仕事から帰られなかった。/集会所。/　集会所。/　臨時避難所。/集会所。/　部落の避難場所、高台。/　集会場。/　高台のビニールハウス。/　集会所。/　自主避難所（集会所）。/　地区集会場。/　集会場。/　地区の集会所。/　地区の集会所。/　自宅向かいの車庫。/　市外のアパート。/　珠洲市役所。/　ペットがいるから家に。店はダメになり、部屋の一部にいた。/

問 13　避難生活で困ったこと（その他）

携帯電話持たずに逃げる。/　ペットが行方不明になった。/　息子から電話で津波が来るから逃げろと！！/　情報がない。/　水が出ない。/　トイレ怖い。狭く寝返りできなかった。手を洗えなかった。/　衣類寝具がなかった。/　家にいたので私をおんぶして小中学校まで 100m か 200m ぐらい来た。/　情報がなかった。/　圧迫骨折で伏せっていた。/　人数的に避難所が狭く、コロナインフルが流行した。/　断水で衛生管理に困った。/　入院していたので特に無い。/　車で通行可能な道がわからなかった。/　車がない。移動できない。/　寒いし、余震が来るたび怖かった。3 日間だけだけど。/　車が壊れて動けなかった。/　水に困った。/3 日間車中。/　情報が入らなかった。スマホがほとんどつながらず、3 日に新聞が届いて初めて他地区の被害を知った。6 日、ソフトバンク支援、充電器・ワイファイが来た。/　一時、避難所では新聞やテレビがなかった。/

問 16　二次避難について（その他）

群馬県へ避難し、当初不安だったが、次第に慣れてきて三食の食事もすごく美味しいと思えはい。良かったと思う。/　県外、ペットで県営住宅を断られ、やむなく親戚に世話に。/　娘夫婦が迎えに来てくれた県内へ。/　県外に行く場所があった！/　もう一軒の家が建っていたのと外猫を飼っていたのと、親が別の避難所にいたので。/　子供が迎えに来たので離れた。/　定年後の生活をここと決めてたので、現実を見ることにした。/　高齢者がいて避難できなかった。/　点滴をしなければならないので、水が出ない県中病院へ行かれなくなった。疎開→病院。金沢でアパート。/　高齢者は国が強制的にも復興のためにも二次避難させるべき。/　風呂屋洗濯買い物のため 2 時避難。/　体調を悪くしたので仕方ないと思った。／　避難してる人があまりにも多いので、自ら避難した。/　子供が学校を変わりたくないと言ったので。/　体調悪く、とにかく水が出て食事が出る所へ行きたかった。/市外へ行くことを考えなかった。/　貴重品が盗まれたら県や国が責任取れるのか？/　夫が地元を離れるのを嫌がったから。/ペット。猫が家に居る。/　移動が難しい高齢者もいること。/　一時避難所が少しでも人数減になると思い、二次避難した。/ 仕事があった。行こうにも道も悪かった。/　仕事があった為、避難しなかった。/　ペットがいたため。/　車中泊が出来るので考えなかった。/　家族が怪我をし、通院が必要となり。仕方なかった。/　家族が仕事をしていたので、残して離れられないと思った。/　避難所にあわなかった。/　都市機能を失った場所に私益で居続け、現場にも自分にも負荷をかけるより公衆衛生の整った場所でインフラ復旧を待つ方が精神的に安定する。/　いろいろと見届けないといけないので。/　仕事があるので残った。/

問 17　地震後数日知りたかった情報（その他）

建て直す方法、工事関係者の確保。前が見えない。/　病院へ行けない。一ヶ月も風呂に入らず、川の水で生活していた。/　国、県市の判断。実行。スピードが知りたかった。/　隣の家との傾きの許しがまだ確認ができない。/　市の対応早急に対応が遅い。/　全部。/　子供の避難先。/

問 18　地震後数日役立った情報源（その他）

テレビは電気がないので何もない。防災無線は声が二重三重になって聞こえない。/　五ヶ月経ったけれどテレビない。/　停電スマホが使えなかった/　集落の区長さんの人たちの采配や、近所の人の携帯の情報。/　カーナビのテレビ。/　市の防災無線全く聞こえない何を言っているのかわからない。/　1.5 次避難所に移り、ようやくテレビと新聞にありつけた。/

問 19　地震後 1 か月知りたかった情報（その他）

給水や炊き出しの場所は遠くて行けない風呂はない。防犯治安はどうでもいい。/避難所は直腸なのでトイレの回数が多いので追い出された。/　変わらない状況への改善、いつ変わるかを知りたかった。/　市の対応が遅い不安であった。/　通行可能な道路状況。仮設トイレの設置場所。/　国・県・市が行う補助金や免税といった制度の展開、展望。/　全部。/

問 20　地震後 1 か月役に立った上情報源（その他）

車のテレビ。/　県と市のライン。県の被災者情報登録フォーム。/　あまりなかった。/

問 24　NHK アナウンサーへの評価（その他）

即避難したし、テレビも電気がすぐ停電したので放送は知らない。/　字幕を見て外へ出た津波がきます。/　テレビラジオの電波が入らない。電気こない山の中。/　停電していた。/　同じことの繰り返しばかりで中身がない、もう少し明確に伝えてほしい、くどい。/　　電気がストップしてダメ。/　停電がすぐ発生。被災者には届かなかった。/　すぐに着かなくなった。テレビ聞いていない。/　おぼえていない。/　テレビがつぶされた。/　避難所ではテレビの普及遅かったです。/　パニックコントロールもテレビ局は勉強してきているとは思う。落ち着いて行動してくださいという文言もあったし、今までのアナウンスより工夫はされているのではないかと思った。/　意味がない。逃げなきゃいけないので、テレビなんて見てない。津波だけでなく、地震も！！/避難中のためわからない。/　テレビをつけて見る余裕がなかったです。/　テレビ等は停電で役に立たない。/　テレビ動向でわなかった！/　すぐに停電したので、テレビは見れていない。/　停電になっているのに不安な気持ちでいた。/　すぐに停電になって見ていない。そんなひまもなく避難した。/　倒壊したため、テレビは見れなかった。/　家にいなかった/　すぐに停電になったので、テレビは見れなかった。/　すぐ停電でテレビ放送は観ていないが、後から見て思ったことはアナウンサーのあの伝え方があってすぐに逃げた人も多いと思います。逃げないと、と思った人がたくさんをいでると思います。津波警報が直に伝わりました。テレビを見ている時間がなかなか取れなかった、ほとんど見ていない。/　テレビ等は見れていない。/　すぐ停電になった。/

問 26　緊急地震速報の入手手段（その他）

あまりにひどい揺れで、そんな暇はないです。/　孤立し数日後新聞で。/　何も放送知らずに。/　人伝え、田舎だから。/　停電全壊のため逃げるのでいっぱい。手に携帯がなかった。/　速報の前に揺れている。/　近所の人の呼びかけ。/　人の声逃げるのに精一杯。/　避難に。何も聞けない。/

問 27　緊急地震速報後の行動（その他）

動かれなかった/　発生後に聞いた。/　一回目の揺れで火の始末をしてすぐ外に出たら、2 回目の大きな揺れが来た。その場で座っていたら、孫や子に支えてもらい、すぐ山へ逃げた。/　1 月一日の本心が来たときは、ガラスや壁が割れて身動きが取れない時に通知が来たので、可能ならもう少し早く通知が来てほしい。/　地震の揺れが終わった後、速報があった。/　津波がくると思い、とにかく遠くへと歩いた。海が近いから。/　道路に這いつくばって揺れに耐えていた。/　外に出ていた時に地震が起きた。/

問 28　緊急地震速報の役立ち具合（その他）

地震前に通知してほしかった。揺れている時は妻と 2 人で柱にしがみついていた。緊急地震速報は遅い。/　潰れた家の隙間から

やっと逃げた。/　必要な物を準備して逃げる用意ができた。/　緊急速報なしのうちに地震があった。/　避難するため、そんなこと聞いている余裕はない。/　地震の方が早かった。/　すでに強い揺れだった。/　窓を閉めて行ったので何か分からなかった。/　テレビ見るどころではない。/　スマホの電池が切れそうになったので電源を切った。/　地震後の速報が多かった。/　震源から 10 キロ以内のため速報前に揺れ、本震と余震があった。/　何回も地震後に速報があった。遅い。/　速報より揺れが始 0 のが早かった。/　細い既に地震は起こっていた。/　揺れがひどくて、何もできずにそのまま靴だけをはき歩いた。/　家が潰れ逃げるのに精一杯。/　一回目の速報で屋外に出たので、2 回目の本震による家屋倒壊に巻き込まれずにすんだ。/　見てない、聞いていない。/　その時外出していたので何も聞いていなかった。/

問 29 付問 1　うわさの情報源(その他)

近所の掲示物。/　自宅の地震の後地を見に行ったとき、言葉の違う人がやってきて話しかけられました。怖かったです。/　全壊だからつぶすまで手間がはぶけ、全部持って行けと思った。/　実際に盗まれた。/　声をかけたらダッシュで逃げた。/ 実際にありました。/　市外に居る子供より連絡。/

問 29 付問 3　外国人流言聴取後の行動(その他)

避難所に来た警察官には、自宅付近のパトカーでの巡回を依頼した。防犯のために。/　倒壊した自宅から貴重品を持ち出した。/　1 月 2 日に大阪の男だったが、盗まれたもの数点！/　お互いに。情報交換し備えた。/　全壊で何もできなかった。/　警察にも報告相談した。/　防犯カメラをつけた！/　家が心配だった。/　貴重品は自分の側に置くようにした。/

問 30 付問 3　救助要請流言聴取後の行動(その他)

助かった命が救えないと感じたし、怒りを感じた。/

問 31　聞いた流言(その他)

ペットを連れていると、避難所を追い出された人がいる。(本当の話かどうかわかりませんが)
。/　県外から「アタリヤ」が多数入り込んでいる。/　千年に一度の災害震であると聞いた。/　○○の店が閉店撤退する。○○地区の避難所で子供が餓死した。/　当たり屋の車両ナンバー。/　被害判定を何度も再申請すると、4 度目に判定が下がる。/

問 32　教訓・感想(その他)

水道復旧もあるが、下水道の復旧がまま。ままならないときは、個人宅に合併処理の浄化槽の設置をしてくれた方が良いのでは？/　道路がまったく進まない。/　家を直して 400 万かかった。夫が大腸癌。仮設入っても人間関係がいろいろ困った。仕切り屋がいる。/　集落の避難は山で建物もないところなので、私たちは車で山へ逃げたので良かったと思う。夜中まで車に乗っていた。/　災害用のリュックも玄関横に準備してあったが今回は持って出られなかった。これからを思うと神社の高台に集会所を建てたたほうが良いのではと思った。/　災害時においても、高齢者のわがままに困った。/　過去の地震の修復はしたが、耐震補強までは考えなかった。/　今回の地震は大きすぎて身動きができなかった。/　一月一日、冬の中ハウスで暖を取るのに大変だった。/　仮設トイレがもう少し広いと助かると思った。/　非常時でも家事にあたる業務を手伝わない男性がほとんどで、避難所の公衆衛生維持に全く役に立たず、いるだけ邪魔だった。/　避難所での感染症、衛生管理対策の大切さを痛感している。/

問 33　行政への要望

1 月 1 日の大地震までは、毎日のように地震があった。昨年度で数百回とか新聞で読みましたが、やはり前兆だったんだなと思っています。もっと事態を真剣に捉えていれば、家の全損も防げたかもしれないと思う。しかし、年金生活の一人暮らしでは思っていても。やりたく思っていても、生活するだけで精一杯です。令和五年 5 月 5 日の地震以降、行政もまた必ず来るだろうと大々的に語ってくれたなら少し違ったかもしれない。/　とにかく国の対応がお粗末な感じがします！全部の面で！特に避難所が最悪です。本当に先進国なのか？日本国なのかと！個人のプライベート空間もお粗末でした。/　他県からの応援本当にありがとうございました。手を合わせます。道が悪い中朝早くから感謝感謝です。歯医者、美容院。(42 日以上入院.六ヶ月のび困った)がなく困った。/　早く水道を通してほしい。/　電気-自宅付近の電柱の倒れにより停電となり、電力にもなかなか電柱を立ててくれなかった。3 月初旬に通電。水道-現在 5 月末。通水しているかどうか知らない。下水-先にも記したが、今後住民が少なくなるのに下水道の修復するより、個人宅への合併浄化槽の設置が安価ではないか？(下水道に連結している住居に)水道が通っても。使用できない。住居-現況の住居を点検してほしい修理が最適か解体して新築が良いのかの判断のため。知り合いの設計士もなかなか来れない。見積もりをするなら 3 カ月先になると言っていた。/　・携帯の電波が入らなくなるとわ思わなかった。車のテレビやラジオで情報を得られたからなんとかなったけど...・義援金の配布。6 市町市民全員に 5 万円の一律給付は？もうちょっと配る対象を選定したら良かったのでは？6 市町で被害がない人に配られる一方、6 市町以外で被災した人に当たらないのはどうかと。早く被災者の手元に行くようにと 6 市町全員に配布するという趣旨だったのだと思うが。6 月になってもまだ振り込まれない人もいる。・県がボランティアは来るのを控えるように言ったことで、被災者もボランティアを頼みづらい状況があると思う。・地理的な要因で復旧が遅れていると報道等で聞くので、地理的要因を含め、防災対策を進めて欲しい。・ペットの避難所を決めておいてほしい。/　・未確定あるいは不正確な情報があるため。大切な情報と信じられずに迷ってしまうことが多かった。・首相がテレビで言った件で、行政に問い合わせても「分かりません」と言う返事しかなく、不信感に繋がった。・6 月に入ったが、まだ自宅は水が来ていません。清掃さえできないので給水をやめてしまうのではなく。要望を聞いて水が来ていない地域での給水活動があればありがたい。通水地域が増えたので、給水は行われなくなってきています。/　津波にあった集落だが新たに家を建てたいので方向性を示してほしい！/　日頃からの避難訓練で(年一回)地区の人たちが助かったです。地区の消防団、地区行政の人たちにお世話になりました。家の前が海ですので、津波は考えていませんでした。地区の人に助けてもらってありがたいです。少し遅れていたら不明になっていました。近所地区の人にお礼を申し上げます。/　国全体でボランティアや。支援を本当に良くしていただいて感謝しております。/復興を早くしてください。/　道路の復旧が今は最優先です。交通インフラが少しでも早く復旧して欲しいです。20 年前に地震があった時から耐震補強などいろいろ対策が必要だった。/　常備薬はカバンの中に入れておくようになった。地元に市議はいるが全く活動しなかったので。正院地区の市議がいろいろな情報（行政)を流してくれたので。避難所のみんなと共用できたのは本当に助かった。地震の時は市議は何もしなくてもよいのか疑問です。取材はいくつも答えたが新聞を持ってくる記者はいなかった。テレビがないので情報が欲しいと思った。/　地震報道はよくあったのに、自分の地域は危険を感じていなくて、今回のようなことはないと過信していたのが悔やまれる。反省が多い。日頃からの防災意識の不足を改めて感じている。/　水が来ないのでは？すずには住めません。もう一度地震が来た時は諦めて珠洲市を離れます。何週間も水も電気もない生活をして疲れてしまいました。仮設にあたりホッとしていますが。まだ当たらない人のことを考えたら喜ばれません。あまりにも時間がかかりすぎです。/　ライフラインの復旧が遅い。電気は 4 月に復旧。水道はまだきていない。修理補助が少ない。隣の家が傾いているのになかなか解体しない。/　過疎地で後回しにされている何もかも遅い。未だ水排水ができてない。/　いろいろありがとうございました。/　支援金を。早く振り込んで欲しい。/　市の対応が遅すぎる。しっかり情報を出してほしい。国はお金をもっと

出してほしい市民の声をしっかり県・国に届けてほしい。/　1月1日の地震により日常がなくなってしまった。歩いて5分の宝立小学校に避難し、100 日。地区長である主人とほぼ近くの仮設に入る人たちを見届け、自宅に戻った。1 月 1 日より 5 ヶ月になるけど。壊れた家などが邪魔するのか、水が出ない。家があるからいいじゃないかという人もいるけれど。残った家で人もいなくなり、道路から少し入っただけで見捨てられた生活に。疲れがたまり、ふっと泣きたくなる。泣いても水出ない。何が欲しいわけではない。今まで送ってきた生活に戻りたい。工事の人たちも来ない。お願いします。見捨てないでください。せっかく横須賀から戻り、第 2 の生活を過ごしてきたのに、私だけではない。みんなを助けて欲しい。いつもに戻りたい。/　普段から市の防災無線は聞きづらい。まさかこんな強い地震に襲われるとわ思わなかった。町内(30 個弱)で七名の方が亡くなった。本当に残念です。家の中は津波の爪痕で。畳までひっくり返し。漁具もいっぱい。井戸の水はなく。地面と同じ高さです。町の寺や宮・墓も崩壊。これから何年かかるのか。余命いくばくもない老人が多いのに途方にくれています。でもらった命を大切に珠洲で頑張ります。/仮設住宅の期限が切れた後、住む所が確保できるか不安。家は全壊で新しく建てる余裕がない。登記に関係なく居住している人優先で公費解体ができるといい。1 人と 2 人以上の人数で義援金の差があったり、家の程度で差があるのがおかしい。一から二ヶ月はみんなが家に住むことができなかったり、一部の部屋にしか住めない。最初は平等でも誰も不足を言わないと思うけど?/　家が全壊なので津波もい死んでもいいと思った。病気を持ってる人は大変。わりとしらんぷりして。仮設トイレ 100m 程歩いて。1 月中は雪雨が降っているので。傘杖を持って歩いて行く人に迷惑がかかっているので、その場で強い口調で。小中学校の避難所から。追い出され、誰も止める人がいなかった。食べ物なし→店は遠い。水なし。下はコンクリート。電気なし。珠洲市。あとは山小屋。寒いし水はなく、大変な思いをした。こんなときはみんな冷たい視線で黙って見ていた。今でも死を選びたくなることがしばしばある。生きていても仕方がない。寂しいことが多々ある。家は全壊。寂しい。80 才になってからこんなことに?離れているとどんな話があっても耳には入ってこなくて。大変な目にあった。大腸がんなのに皆知らんふりしている。冷たい。トイレが近いので、2 人で死のうかと思ったことが何回かあった。/　復興はいつになるのか？/　公費解体を迅速にやってほしい。今後の都市計画(道路の拡張等)。/　日本全国の過去に発生した地震の要因すべてが重なった能登地震だとある大学の教授が発表しており、半島であり、道路崩壊などさまざまな理由による判断というのも理解しようと耐えてきたが、とにかく行政の方でもボランティアでも構わないので、自治体運営、避難所、復旧などすべてのことを被災者がしなくても良いシステムの構築。人を統率する人の育成。/　まちづくりのプランを出してほしい。/　支援金義援金はじめすべての。助成金の配布が遅すぎる。少しずつでも良いから早く出してほしい。例えば、車が潰れたのに足がなくて、どこにも行けない。早急にクルマを買う金も急を要する。/　①仮設住宅の公平性　全て同じ仕様の仮設住宅にすべき。見付宝立小中学校と 2 通りある。②半壊以上の人全て仮設住宅に入居するべき。入居できない人もいる。特に高齢者が困っている。/　市の対応の遅さに立腹した。誰のための被災地の視察なのか、考えが不明である。視察を大いに生かすべきである。いずれにも市民に不安を与えているので、一日も早く解散してほしい。/　　半島先っちょなので国はほったらかしに見える。五ヶ月経ったけど、景色はほとんど変わっていない。せめて道路でもと思うけど、橋もいつまで経っても取れない。だんだん狭くなるのが目に見える。場所によっては繋がらなかった。ただし、au。/　いろいろな手続きが大変だった戸籍謄本もっと簡単にして欲しい。生まれてから死ぬまでの何枚もは多い。/　体調悪くなって二次避難で。県外をしたが、三食水ありのゆっくりした環境にほっとしました。本当に無料で泊まれてありがたかったです。このような手続きを支えてくださった方に感謝です。耐震の重要性を感じました。築 50 年近いですが、何もかも壊れてしまった。もっと切実に感じなければならなかった。悔しいです。その一言です。行政はもっと強く言って欲しかった。結果論ですが。/　　公費解体の相続人等の承諾印の省略や簡素化を！！/　教訓-靴、ホイッスル、スマホ大事。瓦の上をまっすぐ歩く練習。田んぼの中しか通れなかった。そこで足を取られ、腰まで浸かり。動けなくなった。靴もなくした。津波が来たら死ぬと思った。日頃から危険を想定しておく。そのときどこにいたか助かったのは運しかなかった。余震が来ても大勢の人がいたので安心だった。避難所の職員さんは 3 日目に初めて外の様子を見に出たとおいでた。自身も被災しているのに申し訳ない。被害が多すぎて頑張れない人の方が圧倒的に多いのでは？SNS など使いこなせない。発信もできない。店舗は全壊。/　自衛隊の入浴支援にすごくありがたいです。パトカーの警備、炊き出し、仮設住宅の充実、道路の整備、本当にありがとうございました。/水道復旧が遅く、その後水道復旧にしても浄化槽や下水道工事をしてくれる業者が少なく、いつ自宅に水が使えるのかわからない。/　自然災害というものは、どうしても自分にはあまり関係がない...と思いがちです。なかなか当事者の気持ちには前もってはなれません。しかし、できることがあり、それを実行している方も少数ですがおられます。耐震補強工事など行政が。普段から推進して行くことが大事なのではないかと考えます。水や食料の備蓄など、息の長い続けられる日常の用意の推進も併せてしていけばよいのではないかと考えます。/　倒壊家屋からの必要品の持ち出しをもっとしてほしい。/国、県、市もすべてに対応が遅い。何もかも不安だらけです。避難所生活しないと助けてもらえない。全壊した家屋が隣接の敷地の建物に接近していて、非常に危険な状態なのに、公費解体撤去がスムーズに行かない。/　避難所に珠洲市もしくわ石川県の職員を派遣し、行政からの情報を伝えて欲しい。自主防災組織に頼りすぎたため、各地区によって対応にばらつきが生じ、その後の統制も難しくなっているように感じた。住民からの行政府神話復興の妨げになると思う。/　仮設住宅が五か月たっても入居できない。/　とにかく 50 年経った水道管がわかりませんが、先進国、日本なのに？まだ水道でません。家がひどいけれど残っているので仮説も当たりません。夫は急にボケてきたし、どうしたら？一日も早く仮設に入りたい！そして家のことをお金のことを考えたい。/　とにかく行政のアナウンスが無い。今もない。良きも悪しきもアナウンスが欲しい。聞きたいことは役所へ来い、ではいけないと思う。書きたいことはまだまだありますが他の人が回答していると思います。それがすべてです。/　家の前の道路に亀裂や段差で車が通行できず、U ターンして通行できる道路を探し回っているのを見た。ロープで危険ですと知らせることしかできなかった。近所の建設会社の人に重機で復旧したら車も通行できるのにと思ったが、市役所の方から「触らないように」と言われた。ああとでお金の問題かと思った。/　震度 5 の地震は今までに何度か起きたが、揺れがおさまったことを何とか経験したので、今度もそうなのかと考え、逃げることに意識が回らなかった。こんなにすごい地震は初めてだったので恐怖だった。揺れが収まったときに、ただ呆然と壊れた家屋を眺めていたが、「ゴー」という音に津波だと直感し逃げようとしたが、大道りへの道はふさがっていて逃げ道がなかった。冷たい水に浸かりながら。真剣にこのような状態を考えたことがなかった。仮設住宅に住みながら今後のことを考えなければならないが、市のビジョンがはっきりしないので、考えがまとまらない。テレビだけの情報ではなく、現在の市の行政の情報を正直に出してほしい。/　仮設を早く作ってください。お疲れ様。この先、安心して住める場所が欲しいです。/　家屋は全壊で、今は仮設住宅にいますが、住めるのは二年です。85 歳になっている私たちは年金生活でこの先、お金もなく、どこへ行けばいいのか心配です。この先、安心して住める場所が欲しいです。/　自宅が被災していても、自宅で生活している人がたくさんいます。その人たちの支援が足りないと思った避難場所が遠かったり、通行止めになったりしていけなかった。二次避難場所も格差がありすぎた(例 食事付と自炊ホテルで一人集団)。屋外の防災無線は普段から聞こえづらい。/とにかく逃げる。/　意見はきりがない。/　人生の全てが変わってしまった支援はすごくありがたく嬉しかった。ありがとうございます。でも、もう珠洲には住めない。/ 本震後外に出ると、倒壊した家があまりにも多いことにびっくりしました。車は車は無事だったのですが、倒壊した家屋で道が塞がれて車が避難することができませんでした。徒歩で避難所へペットと一緒に避難しました。しばらくはペットと一緒にいましたが、人間が優先と言われ、獣医師会の預かりボランティアに預かってもらいました(最長で二か月)。しばらく後でペットと一緒に過ごせる避難所もできましたが、もっと早く開設して欲しかったです。以前からペットと一緒に避難が推奨されてはいましたが、そんなことはなく、車や壊れた自宅でペットと過ごす

人が多くいました。各避難所にペットと一緒に避難できる所を用意して欲しかったです。2024 年能登半島地震は東北大震災に比べれば地震の規模は小さいかもしれません。しかし、被災したのは同じです。アンケートに回答している現在も水が来ていません。何とか何とか早く水道を通して欲しいです。2020 年 6 月 23 日。/　一回目は一年前、5 月の地震よりは小さかった 2 回目は確実く大きい揺れ。一回目とは比べものにならない。避難できない。耐震が必要と思う。/　県には前回の地震に。対するに対するに対する本を作っていれば早く。物資などが来たと思う。能登半島に来て自分の見て早く対応してほしかったし、国会。ではほかの話しかしたのでバカな人達だなって思った。/　水の大切さが分かった。水道のシステムがないと生活に支障があることがよくわかった。何もかも感謝の心に気づいた。地域の人たちとの共同生活をするようになり。私は体育館で寝泊まりをした二ヶ月間、楽しいと思うことが多くあった。他人の日常がじっくり見えるので性格がわかる。日頃の行いが災害時、非常に現れて嫌な悪いところはあきれてうんざりした。自分は気をつけようと思った。何事にも「これでよかった」と納得し、思い込むことが必要と思った。人それぞれ正解はないのでは？/　地方自治の自主性を求めているのか、押し付けているのか知らないが、大災害の経験は国が蓄積されるので思われるので、国が全面的に復興に取り組んでいただきたい。/　住宅被害の判定に納得いかない、地域によって差があったと思う。/　意見はたくさんありますが、自然災害を恨みます。何をするにもお金がかかるので、高齢の私たちは何もできません。娘夫婦は近くのアパートに住んでいるので任せてあります。/　指定避難所の把握と、その場所すぐトイレ等の衛生管理ができること。最低限の水分と食料備蓄が必要だと思った。/　地震の想定が甘い。地震を繰り返していたのに事前対策が行政としてできていなかった。特に市は輪島市と比べて職員が少ないのではないか？全てが後手後手になっていないか？ラインなどは高齢者には困難な人が多く、災害だよりなどの情報が充分に共有されていない。公費解体や罹災証明などの周知に時間を要した。/　私は自主避難所にいました。　支援物資は 1 月 6 日から 7 日頃に初めて届いたように記憶しています。その間、持ち寄った食材で炊き出ししていました。支援物資が届いてほっとしたので、本当に助かりました。/　老老介護の 2 人暮らしでどもすることもできない。家族一家が来て来て避難することができた。子どものおかげは金沢に避難しているが、何かの手続きも珠洲までなかなか帰ることができない。珠洲市の社協でも金沢の介護支援事業所がわかればよかった。/　市へ-罹災証明で、住めないのに半壊で、住めるのに全壊とは不公平だと思いました。だいぶ信用ないです。過疎化が進んでいる時にますます進んでしまってます。/在宅避難者の一人として井戸水を使用できたこと、作業場が無事で寝泊りできたことが幸いした。在宅避難者には炊き出しの情報物資の配布市のチラシによる情報が。得られなかった。/　今まで福島熊本市の地震があって、ペット、避難生活医療などこんな事までしてもらえるなんてと、本当にありがたかったです。感謝でいっぱいです。在宅介護で高齢者を 2 人抱えていたので、2005 月 5 月 5 日のときには訪問看護の方には「津波来たら海のすぐそばなので避難は無理で自宅に残ります」と覚悟を伝えていました。その年の暮れにひとりを看取り、ひとりひとりだけ介護する生活したが、今回台車に台車に乗せて高台まで避難しました。お国が介護でも低くても施設入所を許してくださり、今、色々な手続きや家の片付けなど動きがとれています。私にとってはこの差配はありがたかったです。コロナにもなり喘息。悪化して免疫も落ちてヘルペスになり、歯科病変も悪化し、化膿して、まざまな支援がなかったら私は生きてなかったです。ありがとうございました。皆様には心からお礼申し上げます。自分ができることを少しずつ。動けています。これからの日本や世界からは再災害はもっと大きく発生するだろうと思っています。/　1 月の能登半島地震のにあとに台湾で地震が起きた。報道で知る限りでは台湾の地震での対応と比べて、今回の震災で日本の避難所がいかにお粗末であるということがわかった。私は現在、三崎小学校グラウンドの仮設住宅に入居している。3 月 2 日からの入居で珠洲市においては早い入居であった。夫婦 2 人で 1K、約五畳の部屋で二年間住むには狭いと思っていたが、皆さんがそうなので仕方がないと思っていた。しかし、それ以降に入居が始まった三崎中学校グランドや蛸島町の仮設住宅に入居した人たちは夫婦 2 人で 2K の部屋に入居しているということである。2K は 1K に比べて単に一部屋が多いだけではない。K の部分が 2K では 1K の 3 倍から 4 倍の広さであり実質は 2DK である。1K では五畳の部屋に食事の際にテーブルを出し、テーブルを片付けて布団を敷かねばならない。2K なら K の部分にテーブルを出しっぱなしにしも 2 部屋のどちらかに布団を引けばいいわけである。1K では珠洲市を離れている子供が様子を見に帰ってきたいといっても、寝るスペースがないからと断らざるを得ない。奥能登で珠洲市の人口流失の割合が最も高いというが、こういうことをしていれば当然のことであると思う。親の様子を見に来て一泊もできないようであれば、子供もだんだんと珠洲から足が遠のくのではないだろうか。災害救助法の五つの原則では救助を求めているものを平等に扱うとあるが、入った地区によって当たり外れがあるというのでは平等に扱われているとは言えないと思う。だが、必要即応の原則で必ずしも救助をすべての被災者に画一的機械的に行わねばならないわけではないとあるから、部屋の広さに差別があってもいいのかもしれないが、その場合は違うことに対して合理的な説明が必要である。仮設住宅もプレハブのものがあったり、木造のものがあったりとなぜ同一市内で同じものにできないのか不思議なところである。/

　過去にとらわれず、充実した支援をお願いしたい。エックスのデマ情報規制。インプレゾンビ排除を国から強く要求してほしい。死人が出てからでは遅い。家の新築、地震保険加入等で対策しましたが、家が全壊となり、お金はいくらあっても足りません。明日は我が身と被災地を見下すことや、自業自得と責めるのはやめていただきたい。/　　仮設住宅が二年で撤去するのは撤去にもお金がかかる。二年で高齢者に住む所を作れるか？最初から高齢者がなくなるまで進める市営住宅を時間がかかっても作ったほうが良いのではと思う。作る場所も学校でなく、空地なら長く使える。/　避難支援について-　半島先端部における災害は避難するにも救援するにも道路の寸断がおーきな障害となった。全国的に道路と並行した緊急避難緊急援護ができる手段の構築を求める。仮設住宅について-　大規模広範囲な被害の場合、仮設住宅は長期にわたり居住が可能なものが望ましい。特に高齢者には住宅再建は非常に重い懸案である。地震は起きるものと思うが、津波は防御できる。仮設住宅の建設は急ぐ作業ではあるが、津波を防御できる場所を造成し、恒久的に住むことができる住宅を建設してほしい。/　自分的には今までのようなおーきな 2 階家はいらない。平屋で耐震補強が大事と強く思った。行政については、ほとんどの職員が初めての体験であり、大変だったと思う。自分的には一般職よくやってもらっていると思うが、トップの人には特に行動言動等に配慮してもらいたいと思う。/　外観検査で大規模半壊だったのが納得いかなくて、再度検査して中規模に下がったのが納得いかない。地震で柱、家が傾き、津波が入り、床上浸水しているのに、国の基準だとか言われてとても住める状態ではない。みんな泣き寝入り。国の基準がなんだっておかしいよ！！再建できるお金もないし仮設は二年後出なくてはいけないし、先が見えない。仮設の建っているところでも津波が入っている。安心して生活していられない。毎日のように余震が続くし、夜も安心して寝ていられない。毎日ビクビクしてる。/

本震は津波の心配のない場所でしたが、自宅が全壊して、今住んでいる仮設住宅は、海が目の前でこれからの生活に津波が影響することがないのか、とても不安です。/　仮設住宅が狭すぎて布団を入れる場所がないので、ゆっくり足を伸ばせず、夫婦喧嘩も多くなりました。2 部屋もらっている人もいるみたいですが、なぜでしょうか？/　一部損壊で補助が無い。義援金に差をつけすぎだ。/　県知事すぐやめてくれ。/　市・県が災害等の申請に関して職員の判断で是非を言っている。組織の上からの指示を守っていない。例えば、家の修繕をする時、補助金は役所は出すが、業者は自分で探せ。誰も身勝手！/　ボランティアの方に感謝しかありません。よくしてくださいました。/　能登は地震が少ないところと思っていた。大きな地震はないと思っていた。後になって youtube などを見ると。近年、地震が起きる可能性があると言っている学者さんがいる。その話も少し報道してほしかった。/

珠洲市水道復旧が遅すぎる。あまり遅くなると戻ってこようとする意欲も無くしてしまう。震災の際の水、風呂、トイレが特に重要であることが身にしみた。/　公費解体(り災証明)を今より早くできるように！！時間がかかるだけ！！役人の人数が全然足らない！！/

年も若くないし、寝泊りできるところを再建したいと思っている。早く解体してほしい。/ 対応が遅いと感じた。ペットがいるとどこにも避難できない厳しさを感じた。都会で同規模の地震が起こったら、もっと殺伐とするだろうと思った。/　義援金がまだ入ってこない。今一番欲しいのに対応が遅い。生活が苦しい。仕事がない。仮設住宅でも差がありすぎ。不公平ではないか？トレイラーハウス、長屋建てなど。ちなみに私はプレハブ仮設住宅ですけど、狭いし、もう無理です。正直能登半島は見放された気がします。/　義援金の配布等遅かったと感じる。/　津波が来る前に。高所にある集会所に逃げる時、橋が渡れなかった。裏道からなんとか逃げられたが、もう少しで津波に呑まれるところだった。もう思い出したくない。本当に腹が立ってきた！！/　家の中の物を入れておく建物が欲しいです片付けができません。/　公費解体後の再建ができない。公費解体も進んでいない。全壊家屋の復興支援が少なすぎる。能登の市町から若い人を中心に人がいなくなり、自治体が消滅する可能性が極めて高い。復興住宅支援金不足等を早急に対応すべきだ。国・県・市町の対応が遅すぎる。/　情報が少ない。対応が遅い/　高齢者の多い地域で、年金生活で細々と暮らしている方々には、今後家を再建する経済力も時間もありません。そういう方々が生活できる公営住宅や施設の早急な準備、対策を工講じ、援助していただきたいと思います。/ 支援やボランティア、後にたくさんいただきましたが、3 日目にパン一個おむすび一つでした。/　1から3月まで市職員の声顔ほとんど見てない。自分たちで道路の瓦礫を片付けをし道を通れるようにした。現状はどうなのか、今後の事、水道、電気等大変困ったが県外の市支援の人たちばかりで、報告しておきます、ばかり。何の相談にもならなかった。市中心から遠く離れた避難所の区長だったのでもっと情報が欲しかった。/　家の前で車中泊している時に何も食べるものがなかったが。道が寸断されて物資が届かなかったので、その時はこう思いました。陸がダメなら空があるじゃないかと。/　集落の避難は高台だけで建物がなく辛かった！/　仕事で弁当がなくよその避難所で物資をいただくことができなかった。/　国が支援金やいろいろな政策を言っても市レベルになかなか降りてこないのか全然私たちのところには反映されない。耐震工事してある家なので、津波が家の中 1.8m 入っても「柱はしっかり立っているので」と言われて中規模半壊にしかならなかった。柱はしっかりしていても、天井壁、床すべて張り替え無いと住めないのに。2 回目、3 回目の調査は「津波被害は見ません」と言われた。津波で一階は戸もすべてなくなり、家の中はめちゃくちゃ。住めるわけがない。津波被害の家の調査で津波被害を見ないなんてありえないと思う。/　珠洲市の上下水道施設の貧弱性にがっかりした。/　仮設住宅から二年で出られるか不安である。家を修理もできない。行く所がない。津波が来たところには住みたいと思わないが仕方がない。若い人たちは残ってくれるか心配だけど、仕事もないところには気の毒である。/　国はやはりあまり自身のことを言わない！やっぱりテレビを見ていても裏金のことばかり。自分たちがなってみて思うのは、政府は人ごとにしか思っていない！人の足をとることばかりだ。どの政党も自分たちのことばかり。今こうだからみんなで考えようと思う人がいないことがよくわかった。/　仮説に入れるなら入れるで、その時期を逸ヶ月ほど前に伝えて欲しかった。後戻りできなくなってから「仮設が当たりました」と言われても困ります。(私費の借家住まい)/　日本各地から支援していただき、感謝しております。炊き出しもいただき、避難民には大変助かりました。現在仮設住宅におりますが、孤立化してて心配です。仮設施設内に集まれる集会所等があればと願っております。/　県外の県営住宅に避難したが、自治体ごとに。災害時の対応が違うので、災害の起こった県や市と同じ対応が受けられれば良いと思った。具体的には、要介護等の支援に手間取ったので大変だった。自宅で介護していたため、個人で移動するしかなかった。避難するときは公的避難先に行かないとすべてが遅れて伝わるため、自分で判断したことが良かったのか悪かったのか後で後悔することもあると思った。認知症専門の PMAT チームも駆けつけて欲しかった。/　ライフラインの復旧が遅いのでもう少しスピードは速ければと思います。防災計画は役に立ったのか、はっきりどこがダメだったのか、市民に説明して欲しいです。/　地域の皆さんが協力助け合いで今日まで来れたと思うが、この大地震に対し。珠洲市町の考え方対応があまりにもひどすぎる情けない。避難所に一度も来てくれず、住民の意見も何一つ聞いてくれないので、市→県・国へと伝わっていないことに腹が立ちます。報道陣の方々もあきれていました。一人でも病気の死亡者が出ないよう防災お願いします。/　自衛隊による給水車が来た時はホッとした災害備蓄を見直すべきだと思う。/

　行政がよくまめにしてくださり、感謝しています。/　珠洲は高齢者が多いので。こう地震が何度もあると家を新築することは考えられない。今後、仮設住宅から退出したら、市営の平屋住宅などで入居できたら良いと思います。/　自分の家が潰れるとは思ってもみなかったので、揺れがひどい。と思ったらまず屋外へ逃げた方が良いと思った。少しの大丈夫だろうというまよいが下敷きになる原因と思った。車の鍵等はスペアをいくつも分散して保管した方が良いと思った。家の中だけでなく、車の中に避難グッズを載せてあることも必要。/　仮設住宅の後、年金で暮らしていけるような公共な住宅を地域で作って欲しい。/　とにかく道路の復旧が遅かった。/　全国的な行政支援のおかげで、避難所生活や二次避難など生活を支えてもらえ、大変ありがたかった。外野では行政の動きが遅いだなんだ言われていたが、そうは感じなかった。行政施策に乗らず、自己都合的な自主避難を続ける人間が多い中、1 週間で電気の復旧仮設トイレの設置、自衛隊による給水活動が開始と、救出、救助活動が並行して行えており、元々大量に人員を収容できる能力のない珠洲市において最大限の初動をとっていただきいただいたと思う。珠洲市職員がどのような動きをとっていたのかだけがまったくわからず、避難所の連絡役がいなかったのは混乱を招いたと思う。小さい自治体なので絶対数は少ないけれど、ここまで姿を見せないものかと疑問を持った。/　避難所での対応について冬場の避難ということもあって、寒さ対策が大変でした。指定避難所にはある程度の備蓄があるはず、あるべきだと思います。仕切りもなくパイプ椅子に座ったまま何日間か夜過ごしました。高齢者には大変つらいことだったのではないでしょうか。あとトイレの問題もあります。/　残念ながら防災無線は聞こえなかったという人が多かった。また、津波からの避難時に避難場所も避難経路も土砂崩れや家屋倒壊により通行不能な場所が多く正院町沿岸部の人たちは大変苦労しました。日本海沿岸部では津波の到達時間が早いと聞きます。今後もリスクがあるのなら早期に避難場所と経路の整備に努めていただきたい。/　ボランティアの方にありがとうございます。/　しかもわかりませんが、落ち着いて行動をすること。今後できれば同じ集落の方たちと住みたい。/　物資の配分を考えた方がいいかなと思った。全く届かない人がいれば、全く被災していなくても、このときばかりと毎日溜め込んで通って、家は物資でいっぱいにしている人もいる。/　市・県からの義援金が早くもらえる人とまだもらえない人がいる。今日で6月に入ったが、4月に入金された人と 6 月中頃でないと入金されないとはちょっと不公平だと思う。特に私は家は全壊なのになぜ？と思う。手続きは早くしました。/　公費解体や修繕に対する制限が厳しい。もっと緩やかに。復旧できるよう。補助等をするべきです。/　全壊で何もできない状況で行政が聞いてくれますか？行政の人は話すこともできない。話してもらえない。何もできない我々の話を聞いてもらえないです。寂しいですね！/　小学校に避難できてよかったと思ってます。水にはすごく不便なこともありましたが、暖房も入ったりして、寒さにはあんまり困りませんでした。が、テレビもなかったし(学校にはありました)ラジオも持ってなかったので、今どうなっているのか全くわからない日が続いていたので、早くニュースとか見ることができたらと個人的に思いました。/ 国と県と市がよく支援してくれたと思う。/ 県・自衛隊が遅いとの批判が多くあり、道路情報等があまりない中、活動をしてくださったことに感謝します。支援物資等を届けてくださった方々にも深く御礼を伝えたい。ボランティアは待って、との県知事の発言は適切

で批判されるものではない。/　家は公費解体してもらえるが、家を建てるにはお金が足りない。/　仮設住宅の入居について選考が不透明で法制に欠けている。高齢者要介護者障害者を優先と言っていたが、自分の地区では免許のない 80 台と障害のある家族が離れた地区の仮設をあてがわれた。孤立化しないような配慮が全くされていない(輪島のニュースを見たのでより心配だ)。役所にコネのある人が全壊より先に入居している。高齢者世帯に支援金上乗せと話が出ているが、600 万円で家は建たない。その分を公営住宅の建設に回して欲しい。最初の 3 日間を自助・共助で頑張れば、4 日目からは支援が来てくれると実感した。/　私は息子(足が不自由)のおかげで 1.5 時避難所へ行くことになり、ボランティアさんの x 作業が避難者にとって至れり尽くせりで本当に幸せでした。1 月 16 日から 5 月 27 日、仮設住宅に入るまでお世話になりました。その間、お医者さん(内科、歯科リハビリ等)達が何度も見舞いに来られました。ナースさん、ボランティアさん達もこられて私たちの話を聞いてくださいました。ここは本当に天国かと思うほどでした。それに比べて 2 次避難所へ行かれた方の中で、寝ることはできても、食事等は自分たちで都合しなければならず、本当に気の毒だと思いました。なぜこんな差別のようなことがあったのか、事前の調査がうまくいってなかったのかなと思いました。今までこんな災害は滅多になかったので、みんなどのようにすればよいのか分からないことが多かったのかなと思いました。/　仮設住宅に入れたが、元の家のところでなく遠い。不公平があると思ったが、入れただけでも良かったと思うしかない。まだ入れない方もおいでになるようです。だが胸のもやもやは収まらない。/　地震が起きて五ヶ月以上経過しても市道は依然として中々修復が進まず、下水管うもうき出たままで、いつになったら復旧工事が終わるのかと不安で、つぶれた家もそのままの状態。また、6 月 3 日に地震が起き、不安が募るばかりです。/　長い避難中に市からの、これからのいろいろの話など、先行きの話等分からず、みな不安を持って毎日過ごしていた。こんな時に地区からの議員さんより足を運んでくださって、みんなに話をして欲しかった(ほとんど姿見せず)。国・県・全国の応援本当にありがたく感謝致します。/　現金支給が遅すぎる。3 月 8 日に 5 万円の手続きしたが、まだ振り込みがない(6 月一日現在)。/

6 月 2 日現在でも上下水道が復旧していません。早期復旧困難地区（建物倒壊道路通行不能)を除き 5 月 3 日に断水が解消されました、と報道されましたが(県)、腹が立ちました。知事の 3 月末までに復旧を目指すとの言葉に合わせた報道と思います。2 割も水着ていないのに解消したというポンコツ。今後の見通し、復旧スピードの加速を同時に示して当然かと。国土交通省に陳情に行けや、予算取ってこい、と言いたいです。復旧が異常に遅いです。国がもっと介入してほしい。

参考資料

災害時の情報との向き合い方　-被災地流言とネット流言-

『看護』2024 年 11 月臨時増刊号 pp118-123.　　中村　功

鈍感と過敏

災害時の情報に我々はどう向き合ったらよいでしょうか。「災害時こそ冷静に」あるいは「適度・適切に恐れることが大事」など言われますが、実際にはうまくできないことが少なくありません。それへの対応には、まず人間の心理を理解し、陥りがちな罠にはまらないようにすることが重要です。

一般に、災害時の情報に対する人々の反応は、災害が発生する前は比較的鈍感で、逆に災害の後には過敏になる傾向があります。たとえば災害の前には警報や避難指示などの情報が出ますが、まだ平常時に出されるそれらの情報に対しては「まさかそんなことにはなるまい」などと思い、避難行動につながらないことがあります。これは「正常化の偏見」の心理などと呼ばれ、危険な対応です。しかしいったん災害が発生すると状況は一変します。不安心理を背景に、さらに不安をあおる情報が広まったり、焦燥感を伴った避難騒ぎが起きることもあります。鈍感、過敏いずれも困った現象なのですが、本論では後者の例として、災害時に発生する流言について、2024 年１月に発生した令和 6 年能登半島地震をふまえて、その種類、メカニズム、対策などを考えます。

様々な災害流言

流言とは、人から人に伝わる根拠が不確かな情報のことで、災害時には必ずといってよいほど発生します。2024 年の能登半島地震の時にも数々の流言が発生しました。たとえば、「中国人がマイクロバスで来て、窃盗をしている」、「住所入りの救助要請」、「地震は人工地震だった」、「〇月〇日にまた大地震が来る」、「二次避難をすると仮設住宅に当たりにくくなる」などといった流言がありました。その他にＸ（旧ツイッター）では、他の災害時の画像を張り付けた被害状況の投稿、避難所の物資ひっぱくを訴える虚偽の投稿、寄付を募る偽りの投稿などもありました[1)]。

そのうち、中国人窃盗団の流言は、避難所でうわさを耳にした消防団長がそれを仲間の LINE で流したことがきっかけで発生し、それがＸを通じて急速に広まったものであることがわかっています[2)]。あるいは図１のような住所入りの救助要請もＸで多数拡散されました。このような投稿をもとに石川県警機動隊が輪島市の現地に向かったものの、倒壊家屋は見当たらなかったということです。出動のきっかけとなった投稿をしたのは埼玉県に住む 25 歳の会社員で、のちに偽計業務妨害罪の疑いで逮捕されています。当人は「大勢からの反応が欲しくて投稿した」などとその動機を語っています[3)]。

つ　き　の　@_Otsuki3　・　1　月　1　日

〒928-0001
石川県輪島市河井町 6-35-78

旦那が足を挟まれて出られません。119 繋がりません。充電もあと 6%しかあ
りません。旦那の呼吸ありません。私自身も右足の感覚が無くなってきてい
るきがしています。寒いです。どなたかいらっしゃいましたらご協力お願
#石川県 #地震 #救助要請 #輪島市 #SOS

図 1　能登半島地震時にXで広まった偽りの救助要請の例

同様にこれまでの災害でもさまざまな流言が流れています（表 1)。2011 年の東日本大震災では千葉県の製油所で火災がありましたが、その際「有毒な雨が降ってくる」という流言がありました。あるいは 2016 年の熊本地震では「動物園からライオンが放たれた」という流言がツイッターで流れ、発信者が逮捕されています。さらに 2018 年の北海道胆振東部地震では「48 時間以内に本震が来る可能性が高い」という流言が LINE で広まり、苫小牧市ではそれを信じた多くの住民が高台に避難するという騒ぎまで起きています。

表 1　典型的な流言の例

東日本大震災	熊本地震	北海道胆振東部地震	能登半島地震
「製油所の火災により有害物質が飛散し雨と一緒に降って来る」 「会社のサーバーラックにつぶされている」 「ナイフを持った外国人グループが横行」	「動物園からライオンが放たれた」 「イオンモールが燃えた」	「携帯電話があと 4 時間で使えなくなる」 「48 時間以内に本震が来る可能性が高い」	「外国人の窃盗団が来る」 「夫が家の下敷きになっているという救助要請」 「二次避難をすると仮設住宅にあたりにくい」 「地震は人工地震だった」 「〇月〇日にまた大地震が来る」

橋元[4)]によれば、災害流言の内容には 5 つの種類があるといいます。すなわち、①「災害の前兆・予言に関するもの」、②「災害・被害の原因に関するもの」、③「災害直後の混乱に関するもの」、④「被災地周辺で広まる被災状況に関するもの」、そして⑤「災害再発予測に関するもの」の 5 つです。能登半島地震で流れた「地震は人工地震だった」という流言は②の「災害の原因」に関するもので、「〇月〇日にまた大地震が来る」は⑤の「災害再発予測に関する流言」に相当します。橋元はこの中でも⑤の災害再発予測流言が圧倒的に多く発生してきたと指摘します。

一方、様々な災害流言には危険性に差があるという指摘もあります。廣井によれば、道端ですれ違った人同士などふだんの人間関係を越えて猛烈な勢いで広まる流言を「噴出流言」といい、ふだんの人間関係を伝ってじわじわと広がる流言を「浸透流言」といいます。関東大震災時の「朝鮮人が暴行や放火をして襲ってくる」という流言や、大正桜島噴火時の「毒ガスが発

生した」などという流言が「噴出流言」にあたります。災害流言において大規模な社会的混乱を引き起こすのはこのうち「噴出流言」の方なのですが、廣井は災害時でも、噴出流言が発生するのは稀なことであると言います[5)]。

災害流言のこうしたタイプ分けに加えて、筆者は被災地から発生してきた「被災地流言」とネットが発信元の「ネット流言」という区別もあるのではないかと思います。能登半島地震でみられた「〇月〇日にまた大地震が来る」や「中国人窃盗団」の流言は被災地から発してきた「被災地流言」であり、熊本地震時の「動物園からライオンが放たれた」とか、能登半島地震時の「住所入りの救助要請」はネット流言です。被災地で発生した流言が LINE やＸなどのネットに流出することもあるのですが、この２つは発生や流通の仕方が異なるため、対策を考えるにも区別することが有用だと考えられます。

筆者らは能登半島地震時の流言に関して、珠洲市と輪島市の仮設住宅およびその周辺の住民 365 人に対してアンケート調査を行いました（2024 年 6 月実施、回収率 59.6%）。それによると最も多くの人が聴取していたのは「外国人の窃盗団がやってくる」という流言で 45.2%の住民が聞いていました。ついで「〇月〇日にまた大地震が来る」は 26.6%、「二次避難をすると仮設住宅に当たりにくい」は 24.7%の人が聞いていました。他方、住所入りの「救援要請の偽情報」は 10.7%、「この地震は人工地震だった」は 4.9%の聴取率と低めでした（図 2）。被災地では被災地で作られる「被災地流言」の流通が著しく、「ネット流言」の広がりは低い傾向があるようです。

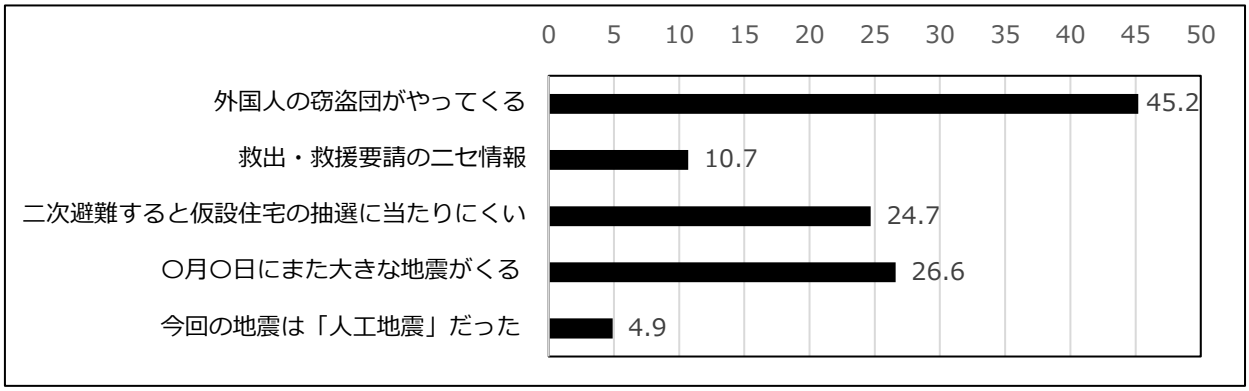

図 2　能登半島地震における流言の聴取率（%）（珠洲市・輪島市）N=365

流言のメカニズム

ネット流言と被災地流言ではそのメカニズムが異なっています。ネット流言は能登半島地震の「住所入りの救援要請」や熊本地震の「ライオンが放たれた」流言にみられるように、ある主体が虚偽の情報とわかっていて意図的に誤情報を発信し始めたものです。社会心理学では虚偽の情報とわかっていて意図的に流すものを「デマ」とよび、一般的な流言と区別しています（ただしマスコミなど一般では流言とデマは区別していません）。

こうしたネット流言が発生する要因には少なくとも 3 つが考えられます。第 1 は多くの人が関心を持つ大災害に乗じて、センセーショナルな情報を発信することで注目を集め、承認欲求

を満たす動機があります。実際、能登半島地震で逮捕された容疑者は「大勢からの反応が欲しかった」と述べていました。

第 2 はインプレッション稼ぎといった経済的要因です。Ｘでは 2023 年から「広告収益分配プログラム」を実施しており、フォロアー数が 500 人以上で、インプレッション(投稿がユーザーに表示された回数)が３か月間で 500 万回以上だと表示数に応じて広告の分配金を得ることができるようになりました。得られる収入はそれほど多くないようですが、偽情報であれ表示回数が増えれば経済的利益となります。能登半島地震のＸの投稿を分析した澁谷ら[6)]によると、「#SOS」や「#助けて」を含む投稿では日本語使用者以外の投稿が 70.0%を占め、複製投稿（コピペ投稿）にいたっては、日本語使用者以外のユーザーによる投稿が 91.9%を占めたといいます。外国人がインプレッション稼ぎのために多くの投稿をしていたことがわかります。そして第 3 に能登半島地震時の「人工地震」流言にみられるようなイデオロギー的要因があります。この流言は陰謀論的な考えとつながっており、その背景には「私はマスコミが報じない本当のことを知っている」という優越感があると考えられます。

ただし、ネット流言はネットから直接伝わるだけではそれほど信じられません。それは、ネットの情報はそもそも信頼性が低いからです。ネット流言が信じられるのは、ネットから人々に伝わり、身近な人から伝えられたときです。実際筆者らの調査では、能登半島地震のネット流言(「住所入りの救援要請」)を本当のことだと思った人は、「口づて」で知った人は８割だったのに対し、Ｘで知った人は 3 割にとどまっています（図 3)。流言の影響低減には、「口づて」をどう遮断するかがカギとなるでしょう。

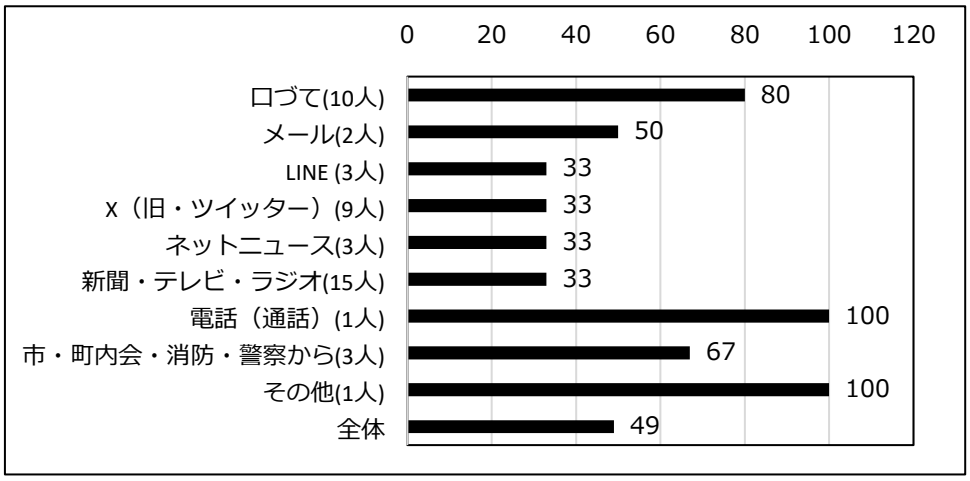

図 3　伝達メディア別「救助要請流言」を信じた人の割合（%）（カッコ内は聞いた人数:珠洲市・輪島市）

他方、被災地から発生する「被災地流言」は自然発生的なものであり、ネット流言とはメカニズム的に異なります。そのメカニズムには心理学的なものと社会学的なものがあります。心理学的要因としては、第 1 に災害発生に伴う恐怖や不安感情が流言の源となります。地震時は大きな揺れや建物の被害が人々に恐怖感情をもたらします。当座の危機を脱しても人々の不安

は収まりません。そんな時、また恐ろしい事が起こるのではないか、と不安の種を見つけようとする心理があります。これは心理学の「認知的不協和理論」で説明できます。認知的不協和理論とは、人は自らの認知の間で相違があると不快になりそれを解消しようとするというものです[7]。

例えば喫煙者が喫煙の危険を知らされたとき、自ら喫煙しているという認識と、それが危険であるという認識の間に矛盾（不協和）を感じます。そこで喫煙をやめるか、あるいは「喫煙は必ずしも体に悪いわけではない」と思い込むことでその矛盾を解消しようとするのです。被災後の場合、実際は危機を脱して安全なはずなのに、気持ちは不安のままであるという矛盾した状態に人々は置かれます。その矛盾を解消しようとして「きっとまた何か恐ろしい事かあるはずだ」という、不安の原因を探そうとするのです。「また大地震が来る」とか「窃盗団が来る」という流言はそうした心配事探しの結果現れるものと考えられます。

第2に流言の形成には偏見や思い込みが含まれることが多いです。Allportらはこれを「同化」のメカニズムと言っています[8]。たとえば外国人の窃盗団流言の背景には外国人に対する偏見があるでしょうし、窃盗流言には、「災害時には火事場泥棒に気をつけろ」という、よくある思い込みが反映しています。しかし現実には、例えば阪神淡路大震災時の警察資料[9]によると、災害時に空き巣犯罪が激増するということは少ないようです。

そして第 3 に、被災地流言を他人に伝える人は、ネット流言とは異なり悪意に基づいて広めているわけではありません。それどころか「念のために教えてあげよう」という「善意」に基づいて伝達するのです。あるいは不安な話について「～という話をききましたか?」と単に確認しようとしたり、さらには不安な話について他の人と話すことで「安心する」という心理もあります。実際、筆者らが北海道胆振東部地震時の流言についてアンケート調査をしたところ、流言を聞いた人のうち、「念のために他の人にも教えてあげた」という人が 20%、「不安でそうした話の真偽を他の人に聞いて確かめようとした」人が 33%、「そうした不安を他の人と共有出来て、少し安心した」という人が 20%いました[10]。

一方、社会学的理論には、流言は単に一人の人が作りだすのではなく、情報ニーズにも関わらずそれに対する確かな情報がないために、人々の間で集合的に作られるニュースである、という考えがあります。Shibutani[11]はこれを「即興的なニュース」(improvised news)と名付けました。すなわち流言には、あるストーリーを選び支持する「主役」、単なる「伝達者」、意味を解釈する「解釈者」、それを疑う「懐疑者」、受け身の「聞き役」など様々な役割を果たす人々がいて、もっともらしい話が作り上げられていく側面があるのです。

対策

このように、ネット流言と被災地流言は異なるメカニズムをもつので、対策も異なってきます。ネット流言の弊害を防ぐには、第 1 にネット上の偽情報の発信を抑制する必要があります。偽情報がインプレ稼ぎによるものだった場合は、その仕組みを廃止するか、少なくとも災害発生時にはそれに関する投稿はインプレにカウントしないという操作みが必要でしょう。

第 2 は偽情報を見抜くようにすることです。それには、①日本ファクトチェックセンター

(JFC)などの機関がファクトチェックを行い偽情報について周知すること、②プラットフォーム事業者(Ｘ社や Meta 社)が通報に基づいて偽情報を削除・警告すること、そして③ユーザーのリテラシーを高め偽情報を自ら見抜くようにすること、などが考えられます。総務省では能登半島地震の直後から偽情報の例を挙げ、以下の４つの方法で偽情報を見抜くように広報しています。すなわち、①「他の情報と比べてみる」(ネット検索し、複数の情報を読み比べる)、②「情報の発信元を確かめる」(発信元が信頼できる人・サイトなのかを確認する)、③「その情報はいつ頃書かれたものか確かめる」(元の情報が古い場合状況が 異なるかもしれない)、④「一次情報を確かめる」(情報が引用や伝聞だった場合オリジナルの情報源を確かめる)などです[1)]。

第３の対策は、場合によってはSNSの投稿情報を無視することがあります。能登半島地震での住所入りの救援要請などは、先の総務省の方法でも偽情報と見抜くことは容易ではありません。それで混乱が生じるとすれば、法政大学の藤代裕之教授もいうように[12)]、消防・警察はSNS に基づいた通報を受けてもすぐには出動しない、というルールを作っておくことも有用でしょう。

他方、被災地から生じる自然発生的な流言には様々な方策がとられてきました。中村は原理的には人々の不安心理を低減し、必要とされる情報を提供すれば流言はなくなるが、それは現実的には難しいとしたうえで、これまで行われてきた対策を次のように整理しています[13)]。第１は最も古典的な対策なのですが、流言を否定することです。関東大震災時の朝鮮人流言や、東日本大震災時の窃盗団流言に対して、警察署は否定するチラシを配布していました。また北海道胆振東部地震でも本震が来るという流言について、苫小牧市役所はネットで否定しています。しかし現実にはうまくいかないことが多いようです。それは、流言を否定しても住民の情報ニーズに応えたことにならないからです。また否定が逆に流言を広めたり確信させたりする危険もあります。第２に正確な情報を潤沢に流す方法があります。しかし大地震がいつ再来するのかなど、そもそも正確な情報がわからないことも多く、また正確な情報は偽情報にくらべてインパクトがなく、広まりにくいということがあります。第３の方法は、よくある災害流言の例やメカニズムを啓発することで、流言を広がらないようにあるいは無効化することです。これまで述べてきたように、災害が再来するという流言や窃盗団流言は繰り返し発生してきました。そうした話を耳にしたときは流言の可能性を疑うべきです。そしてそれを聞いた時、善意から人に教えてあげようとか、人に話して安心しようとはせず、黙って無視する態度が重要です。昔から「流言は知者に止まる」と言われてきましたがそうした姿勢を広く涵養することが重要となります。

もっとも、いずれの対策にしても一つだけで万能なものはありません。今後も災害流言とは様々な手段で戦い続けることが必要となるでしょう。

●引用・参考文献

1) 総務省:「令和６年能登半島地震に関するインターネット上の偽・誤情報にご注意ください 」 (https://www.soumu.go.jp/use_the_internet_wisely/special/fakenews/)2024a. [2024 年 8 月 15 日確認]

2) 朝日新聞「注意喚起　気づけばデマ拡散」2024 年 2 月 24 日朝刊 p29.

3) 中日新聞「うその救助要請で救急車出動『助かる命あったはず』要救助者いない現場も多数」2024 年
7 月 25 日 (https://www.chunichi.co.jp/article/932957) [2024 年 8 月 15 日確認]

4) 橋元良明: 災害と流言, 東京大学新聞研究所編, 災害と情報, 東京大学出版会, 225-272, 1982.

5) 廣井脩: うわさと誤報の社会心理, 日本放送出版協会, 1988.

6) 澁谷遊野, 中里朋楓: 令和６年能登半島地震におけるデジタル空間の偽誤情報流通状況の報告, 総務省デジタル空間における情報流通の健全性確保の在り方に関する検討会用資料, 2024. (https://www.soumu.go.jp/main_content/000930877.pdf)[2024 年 8 月 15 日確認]

7) Festinger, L.: A Theory of Cognitive Dissonance, Row, Peterson and Company, US, 1957. (末広俊郎監訳, 認知的不協和の理論, 誠信書房,1965.)

8) Allport, G. W. and Postman, L.; The Psychology of Rumor,1947. (南博訳, デマの心理学, 岩波書店, 1952.)

9) 警察庁: 平成 7 年警察白書, 1995.

10) 中村功, 中森広道: 2018 年北海道胆振東部地震と災害情報, 災害情報調査研究レポート 17, 217-253. 2020. (http://nakamuraisao.a.la9.jp/report17.pdf) [2024 年 8 月 15 日確認]

11) Shibutani, T.: Improvised News - A Sociological Study of Rumor, The Bobbs-Merrill Company, 1966. (廣井脩他訳, 1985, 流言と社会, 東京創元社)

12) 藤代裕 SNS を災害時の情報インフラとして位置づけるのをやめるべきではないか, Yahoo News,
https://news.yahoo.co.jp/expert/articles/1070818c140f6e9006229a5845bb3f2feea0b7ec

13) 中村功: 災害情報と避難-その理論と実際-, 晃洋書房　2021.

14) 荻上チキ: 東日本大震災の流言・デマ, 光文堂新書, 2011.

15) 総務省: 令和 6 年度情報通信白書, 2024

※本稿は中村功「災害時の情報との向き合い方　-被災地流言とネット流言-」『看護』2024 年 11 月臨時増刊号 pp118-123.の原稿を転載したものである。

「令和６年能登半島地震」における緊急地震速報・災害情報などに関する対応と評価
―金沢・富山・新潟の住民を対象とした調査から―

中森広道（日本大学文理学部）

2024（令和 6）年 1 月 1 日 16 時 10 分に発生した「令和 6 年能登半島地震」（本震）では、警報の緊急地震速報が発表された。震源に近い地域にいる人々は、強い揺れを感じる前に緊急地震速報を受け取ることは難しいが、震源からある程度距離がある地域にいる人々は、強い揺れを感じる前に緊急地震速報を受け取ることが可能となってくる。そこで、この地震（本震）で、震源から一定の距離があり、強い揺れ（震度 5 強）を記録した金沢市・富山市・新潟市の住民を対象に、この地震における緊急地震速報への対応や評価について調査を行った。また、この調査で、あわせて「令和 6 年能登半島地震」などに関する災害情報や報道についての評価などについても質問を行った。

調査時期は 2024 年 2 月下旬、調査対象は原則として金沢市・富山市・新潟市に居住している 20 代以上の男女で、2024 年 1 月 1 日 16 時 10 分に発生した「令和 6 年能登半島地震」（本震）が発生した際に屋内で緊急地震速報を見聞きした人、調査方法は WEB によるモニター調査（クローズド・パネル調査）、回答者数は 150 人（金沢市 50 人・富山市 48 人・射水市（富山県）1 人・滑川市（富山県）1 人・新潟市 50 人）、調査主体は日本大学文理学部社会学科・中森広道研究室である。なお、本稿における「富山市」の回答は、射水市・滑川市の回答も含まれている。

2. 緊急地震速報を受け取った場所

まず、緊急地震速報を受け取った場所について尋ねた。「あなたは、今年の 1 月 1 日 16 時 10 分に発生した能登半島地震で発表された緊急地震速報を、どこで見聞きしましたか」と質問したところ、最も多かった回答が、「自宅」の 86.0%、次いで、「自宅以外の住宅」の 5.3%、以下、「百貨店・ショッピングモール・スーパーマーケット・量販店など大規模な商業施設」の 4.7%、「事業所・オフィス（自宅は含まない）・学校」の 3.3%であった（表１）。

表１　緊急地震速報を受け取った場所（%）　n=150

自宅	86.0
自宅以外の住宅	5.3
事業所・オフィス（自宅は含まない）・学校	3.3
自治体・公共機関の庁舎・建物	0.0
百貨店・ショッピングモール・スーパーマーケット・量販店など大規模な商業施設	4.7
商店・コンビニエンスストアなどの比較的小規模な店舗	0.0
劇場・ホール・イベント会場・体育館などの多数の人々を収容する施設	0.0
その他	0.7

3. 緊急地震速報を受け取った手段

次に、緊急地震速報を受け取った手段について、複数回答で尋ねた。その結果、最も回答が多かったものが「携帯電話・スマートフォンなどから得られる緊急速報メール」の 66.7%で、次いで「テレビ」の 62.7%、以下「携帯電話・スマートフォンなどの Web サイト・SNS・アプリ」の 6.7%、「携帯電話・スマートフォンなどから得られる地元の市町村が伝えるエリアメール」の 6.0%、「パソコンの Web サイト・SNS・ソフトウェア」の 4.7%の順であった（表 2)。

この結果を年齢別にみると、緊急地震速報を「テレビ」から受け取ったと回答した人は、30 代が 60.0%、40 代が 63.3%、50 代が 73.3%、60 代以上が 73.3%だったのに対して 20 代は 43.3%であった。若い世代のテレビ離れが、この結果からも窺える。

表２　緊急地震速報を受け取った手段（%）　M. A.　n=150

テレビ	62.7
ラジオ	1.3
携帯電話・スマートフォンなどから得られる緊急速報メール	66.7
携帯電話・スマートフォンなどから得られる地元の市町村が伝えるエリアメール	6.0
携帯電話・スマートフォンなどのWebサイト・SNS・アプリ	6.7
パソコンのWebサイト・SNS・ソフトウェア	4.7
館内放送	0.0
防災無線	2.0
専用受信機	0.7
住宅のセキュリティサービスや管理者から発信される情報	1.3
職員・従業員などの肉声による指示	0.0
その他	0.0

4. 緊急地震速報を受け取った際の対応

次に、緊急地震速報を受け取った際の対応について、複数回答で尋ねた（表 3)。最も多かった回答は「強い揺れに翻弄されていた」の 50.7%で、次いで「身構えた」の 46.0%、以下、「様子を見た」の 28.0%、「すでについていたテレビ・ラジオの情報に注意した」の 24.7%、「倒れそうなものなどを、倒れないようにおさえた・おさえようとした」の 21.3%、「テレビをつけた」の 20.7%、「しゃがみこんだ」の 19.3%の順であった。「机やベッドの下にもぐった」(13.3%)、「倒れてくる・落ちてくると思われるものから離れた」(11.3%)、「ヘルメット・座布団・そのほか何かで頭を守った」(3.3%)、「火の始末をした」(14.0%) といった、緊急地震速報を受け取った際に、または、強い地震の揺れを感じた際に望ましい対応と

されている行動をとった人は比較的少ない。その一方で、「倒れそうなものなどを、倒れないようにおさえた・おさえようとした」（21.3%）といった、地震時において危険となる行動をとる人が少なくなかった。緊急地震速報を受け取った場合や地震が発生した際における対応についての啓発や教育が、あらためて必要ではないかと思われる結果である。

一方、「すでについていたテレビ・ラジオの情報に注意した」（24.7%）や「テレビをつけた」（20.7%）の回答が一定数あった。地震時にはテレビ・ラジオといった旧来からのマス・メディアから情報を得たいと考える人が少なくないようである。これに関連して「民間放送テレビを見ていたが NHK に替えた」と回答した人が 10.0%いた。地震の際は、災害の際は民間放送よりも NHK を信頼している人が一定数いることがわかる。

表３　緊急地震速報を受け取った際の対応（%）　M.A.　n=150

強い揺れに翻弄されていた	50.7
様子を見た	28.0
身構えた	46.0
しゃがみこんだ	19.3
机やベッドなどの下にもぐった	13.3
倒れてくる・落ちてくると思われるものから離れた	11.3
ヘルメット・座布団・そのほか何かで頭を守った	3.3
倒れそうなものなどを、倒れないようにおさえた・おさえようとした	21.3
火の始末をした	14.0
ガスの元栓を閉めた	5.3
戸や窓を開けた	5.3
屋内の安全と思われる場所・エリアに移った	0.7
屋外に出た	7.3
テレビをつけた	20.7
ラジオをつけた	0.7
すでについていたテレビ・ラジオの情報に注意した	24.7
民間放送テレビを見ていたがNHKに替えた	10.0
テレビ・ラジオ以外の方法で情報を得ようとした	4.7
周りの人に注意を呼びかけた	8.7
近くにいる人を守った・守ろうとした	9.3
館内放送や人の指示に従った	1.3
地震の様子を撮影した・撮影しようとした	0.7
その他	2.7
何をしてよいのかわからず、何もできなかった	0.7
何もしなかった	2.0

これらの結果を年齢別にみると、「火の始末をした」と回答した人が全体では 14.0%であったが、60 代以上でこの回答をした人は 33.3%いた。地震を感じた際の対応として「無理に火を消さなくてもよい」ということが近年言われるようになってきているが、以前、「地震を感じたら、まず火の始末」という対応を徹底して教えられてきた高齢層では、やはり、火を消す行動をとる人が多いようである。また、「すでについていたテレビ・ラジオの情報に注意した」と回答した人は全体では 24.7%であったが、20 代は 6.7%であったのに対し 60 代以上は 46.7%であった。災害時に何を情報源にするのかということに関する世代の差が感じられる点である。

5. 緊急地震速報は役に立ったのか

次に、「このたびの能登半島地震における一連の活動（相次いだ地震）で、緊急地震速報は役に立ったと思いますか。役に立ったとすれば、どのように役に立ちましたか」という質問を行った（複数回答。表 4）。

最も多かった回答は「自分自身や家族の身の安全を守ることができた」の 41.3％で、次いで、「心構えができた」の 40.7％、以下、「揺れる前の段階で、これから揺れが来ることがわかった」の 39.3％、「緊急地震速報が相次いで発表されることで、地震対策の重要性をあらためて認識することができた」の 28.7％、「『緊急地震速報が出されればある程度の強い揺れになる』『緊急地震速報が出されなければそれほど強い揺れにならない』といった、揺れの強さの、ある種の基準になった」の 26.0％の順で、「特に役には立たなかった」と回答した人は 6.7％であった。これらの結果を年齢別にみると、「揺れる前の段階で、これから揺れが来ることがわかった」と回答した人は全体では 39.3％であったが、50 代では 60.0％であった。また、「心構えができた」と回答した人は全体では 40.7％であったが、50 代では 60.0％であった。

表 4　緊急地震速報は役に立ったのか（％）　M.A.　n=150

自分自身や家族の身の安全を守ることができた	41.3
揺れる前の段階で、これから揺れが来ることがわかった	39.3
「緊急地震速報が出されればある程度の強い揺れになる」「緊急地震速報が出されなければそれほど強い揺れにならない」といった、揺れの強さの、ある種の基準になった	26.0
心構えができた	40.7
車を安全に運転することができた	1.3
あわてることが少なくなった	8.7
緊急地震速報が相次いで発表されることで、地震対策の重要性をあらためて認識することができた	28.7
揺れている状況などを映像に記録することができた	0.7
その他	0.0
わからない	4.0
特に役には立たなかった	6.7

6. ＮＨＫの津波警報の伝え方に対する評価

災害情報や災害報道についても、この調査で質問をしている。まず、津波警報を伝える際のＮＨＫの対応についてである。ＮＨＫは、2011 年の「東日本大震災」の経験などから、津波警報が発表された場合などには、警報を伝えるアナウンサーが声を張りあげて放送するようになった。今回の「能登半島地震」でも津波警報（大津波警報）が発表されたため、アナウンサーは声を張りあげて警報を伝えた。そこで、「このたびの能登半島地震で津波警報が発表された際、ＮＨＫのアナウンサーは、声を張りあげて、語気を強めて津波警報を伝えました。あなたは、この伝え方をどのように思いましたか」という質問をしたところ、「この伝え方でよか

ったと思う」と回答した人が最も多く 71.3%、「ある程度はよかったとは思うが、もう少し声のトーンや調子を落として伝えた方がよいと思う」と回答した人は 16.0%、「あまりよいとは思わない。普通の話し方で伝えてほしいと思う」と回答した人は 2.0%であった。ちなみに、「NHK のテレビ・ラジオの放送を見聞きしていなかったので、わからない」と回答した人は 10.0%であった（表５）。この回答を地域別でみると、「この伝え方でよかったと思う」と回答した人は全体では 71.3%であったが、富山市は 64.0%、新潟市は 68.0%であったのに対し、金沢市は 82.0%であった。

表５　NHK の津波警報の伝え方（アナウンス）についての評価（%）　n=150

この伝え方でよかったと思う	71.3
ある程度はよかったとは思うが、もう少し声のトーンや調子を落として伝えた方がよいと思う	16.0
あまりよいとは思わない。普通の話し方で伝えてほしいと思う	2.0
NHKのテレビ・ラジオの放送を見聞きしていなかったので、わからない	10.0
その他	0.7

7. 情報を得るために役に立った手段・方法

次に、「このたびの能登半島地震に関してあなたが知りたかった情報を得るために、役に立ったものは何ですか」という質問をしたところ（複数回答）、最も回答が多かったものは「NHK テレビ」の 76.7%で、次いで「民間放送テレビ」の 55.3%、以下、「インターネットのニュースサイト（ネットニュース）」の 30.7%、「X（旧 Twitter）」の 19.3%、「地震情報・災害情報のアプリ・Web サイト」の 18.0%、「地元紙の新聞」の 12.7%の順であった（表６）。

この回答を年齢別にみると、「NHK テレビ」は全体では 76.7%であるが、60 代以上は 90.0%であった。また、「地元紙の新聞」は全体では 12.7%であるが、20 代は 3.3%であったのに対し 60 代以上は 26.7%であった。そして、「地震情報・災害情報のアプリ・Web サイト」は全体では 18.0%であるが、20 代は 3.3%であった。ほかにも、「X（旧 Twitter）」は全体では 19.3%であるが、20 代では 36.7%、「防災無線」は全体では 1.3%であるが、６０代以上では 6.7%であった。

表６　情報を得るために役に立った方法・手段（%）　M.A.　n=150

NHKテレビ	76.7
民間放送テレビ	55.3
NHKラジオ	3.3
民間放送ラジオ	2.0
コミュニティFM放送	0.7
ケーブルテレビ	0.0
全国紙の新聞	1.3
地元紙の新聞	12.7
インターネットのニュースサイト（ネットニュース）	30.7
YouTubeなどの動画サイト	9.3
地震情報・災害情報のアプリ・Webサイト	18.0
国の機関のWebサイト	2.7
県・市町村のWebサイト	8.7
報道機関のWebサイト	2.0
その他のWebサイト 具体的に：	0.0
X（旧Twitter）	19.3
LINE	8.0
Instagram	4.7
Facebook	1.3
Tik Tok	0.7
その他のSNS	0.7
電話（通話）	4.0
FAX	0.0
Eメール	1.3
防災無線	1.3
広報紙	0.0
自治会・町内会の広報	0.7
口コミ	1.3
その他	0.0
役に立ったものはない	3.3

8.「能登半島地震」における報道・情報に関する評価

今回の「能登半島地震」に関する報道・情報に関する評価について、16 の選択肢を設けて複数回答で質問をした（表７）。

最も回答が多かったものが、「日本には地震に安全な場所はない・大きな地震が来ない場所がない、ということをあらためて認識した」の 29.3%で、次に多かったものが「石川県能登地方以外の地域の被害や地震の影響についても、もっと伝えてほしいと思う」の 28.7%、以下、「報道する地域が偏っていて、支援や救援に影響が出たと思う」の 16.7%、「南海トラフの巨大地震や首都直下地震だけでなく、他の地域で起こるかもしれない大規模な地震についても、もっと取り上げてほしいと思う」の 16.0%、「もっと生活に関する情報を伝えてほしいと思う」の 14.7%の順で、「特に何も思わなかった」と回答した人は 20.0%であった。

表７　「能登半島地震」に関する報道・情報に関する評価（%）　M.A.　n=150

報道する地域が偏っていて、不公平感だと思う	11.3
報道する内容・話題・テーマが偏っていて、不満に思う	10.0
石川県能登地方以外の地域の被害や地震の影響についても、もっと伝えてほしいと思う	28.7
報道する地域が偏っていて、支援や救援に影響が出たと思う	16.7
被害の情報が多かったので、被害以外の情報も伝えてほしい	14.0
もっと生活に関する情報を伝えてほしいと思う	14.7
具体的な地震対策・対応の方法や工夫について、もっと伝えてほしいと思う	11.3
「災害について必要な情報をどのように得ればよいか」という情報を、もっと伝えてほしい	11.3
被災者への配慮が足りない報道が多いと思う	10.0
いわゆる「お涙ちょうだい」のような報道が多く、不快に思うことがある	14.0
南海トラフの巨大地震や首都直下地震だけでなく、他の地域で起こるかもしれない大規模な地震についても、もっと取り上げてほしいと思う	16.0
東京からの視点での報道が多く、災害の実態や実情が伝わっていないように思う	10.7
発表される震度と実際に感じた揺れの強さに違いがあるのでは、と思うことがあった	10.0
日本には地震に安全な場所はない・大きな地震が来ない場所がない、ということをあらためて認識した	29.3
その他	0.7
特に何も思わなかった	20.0

9.「能登半島地震」に関する考えや思い

石川県能登地方では、以前から比較的強い地震が相次いでいた。そして、2024 年 1 月 1 日にマグニチュード 7.6 の地震が発生した。このことについて、人々は、どのように考えたり思ったりしていたのであろうか。アンケート調査の中で「以前から、石川県能登地方では地震が相次いでいました。そんな中で、今年１月１日に大きな地震が発生しました。このことについて、あなたの考えや思いに最も近いものを次の中から１つ選んでください」という質問を設けた。その結果、最も多かった回答が、「石川県能登地方で被害が生じる地震が発生するかもしれないが、自分の住んでいる地域がここまで大きな揺れになるような地震が発生するとは思わなかった」の 25.3%、次に多かったものが「近いうちに、このたびのような大きな地震が起こるかもしれないと思っていた」の 24.0%、以下、「いつかは、このたびのような大きな地震が起こるかもしれないと思っていた」の 23.3%、「まさか、ここまで大きな地震が起こるとは思わなかった」の 20.0%、「地震のことなど、全く考えていなかった。」の 7.3%の順であった（表８）。

この回答を地域別にみると、「石川県能登地方で被害が生じる地震が発生するかもしれないが、自分の住んでいる地域がここまで大きな揺れになるような地震が発生するとは思わなかった」と回答した人は全体では 25.3%であったが、新潟市では 12.0%、富山市では 24.0%、そして金沢市では 40.0%であった。

表８　石川県能登地方で地震が相次いでいたことについての考え・思い（%）　n=150

近いうちに、このたびのような大きな地震が起こるかもしれないと思っていた	24.0
いつかは、このたびのような大きな地震が起こるかもしれないと思っていた	23.3
石川県能登地方で被害が生じる地震が発生するかもしれないが、自分の住んでいる地域がここまで大きな揺れになるような地震が発生するとは思わなかった	25.3
まさか、ここまで大きな地震が起こるとは思わなかった	20.0
地震のことなど、全く考えていなかった	7.3

表９　自分の住んでいる地域が大きな地震に襲われるかもしれないという不安（%）　n=150

近いうちに大きな地震に襲われてもおかしくないと思う	58.7
いずれはまた大きな地震に襲われるかもしれないが、まだ、しばらく先のことだと思う	25.3
自分の住んでいる地域では、建物が壊れるような大きな地震は起こらないと思う	6.7
わからない	9.3

また、「あなたは、このたびの能登半島地震を経験し、今後、自分の住んでいる地域において建物が壊れるような大きな地震に襲われるのではないかという不安はありますか」という質問をしたところ、最も多かった回答が「近いうちに大きな地震に襲われてもおかしくないと思う」の 58.7%、次に多かった回答が「いずれはまた大きな地震に襲われるかもしれないが、まだ、しばらく先のことだと思う」の 25.3%、そして、「自分の住んでいる地域では、建物が壊れるような大きな地震は起こらないと思う」が 6.7%で、「わからない」が 9.3%であった（表 9）。

10. 流言・うわさ・デマ・フェイクニュースなど

今回の「能登半島地震」において、流言・うわさ・デマ・フェイクニュースなどを見聞きしたかについて、自由記述で回答を求めた。その結果、何らかの流言・うわさ・デマ・フェイクニュース・誤情報といったものを見聞きしたと回答した人が、150 人中 45 人いた（1 人が複数の事例を挙げているものもある）。

最も回答が多かったものが「偽りの救助要請」の 18 人、次いで「犯罪」「津波や被害に関するフェイクニュース」「人工地震・陰謀説」が同数で 6 人、以下、「震度誤情報」が 3 人、「原子力発電所の火災・事故」「地震再来」が同数で 2 人、「その他」が 5 人であった。

具体的に回答を例示すると、次のようになる。

＜偽りの救助要請＞

「X に流れていた架空の住所での救助要請」「倒壊した家に閉じ込められている」「建物の下敷きになっているっているって言うデマ」「救助を待つインプレッション稼ぎの投稿」「その場にいないにもかかわらず、救援指示を X で流して救助隊を混乱させていた」「架空の住所で救

出を乞うゴミみたいなツィートを見かけた」「建物が倒壊したから助けてほしいと住所とともにＳＮＳに投稿→存在しない住所だった」「瓦礫に挟まって動けない、助けてほしいという真偽不明なツィートがあり、他者の拡散要請に応じて自分も拡散したが、確実な情報とは言えず、後で悩んだ」「Twitter で脱出不能で助けて欲しいというツイートをみた」「被災地で SOS を求める投稿で存在しない住所を記載」「『自分の母親が家屋の下敷きになっている』という 1 人の女性の SNS での発信を、たくさんの人々が引用して、自分の投稿のようにしていた」

＜犯罪＞

「火事場泥棒」「強盗が自販機を壊したというデマ」「外国人窃盗団がいるというデマ」「県外ナンバーの車が、空き巣に入っている」

＜津波や被害に関するフェイクニュース＞

「津波のフェイク画像を見ました」「X 等による被害状況のフェイクがあった」「3.11 の際の津波動画を今起きている津波とした投稿」「フェイクニュースと言えるか微妙であるが、東日本大震災の時の津波の映像を悪用してインプレッション数を増やそうとしている X のアカウントが複数見られた」

＜人工地震・陰謀説＞

「内容迄はあまり覚えていないが陰謀論のようなものが多いと思う」「人工地震」「人工地震みたいな陰謀説」

＜震度誤情報＞

「震度の誤報」「震度〇〇の地震がありました、、、との情報がありましたが、私自身は全く揺れを感じなかった」「震度 6 の地震が来たとなっていたが実際は 3 だった」

＜原子力発電所の火災・事故＞

「志賀原子力発電所での火災」「原発が壊れた」

＜地震再来＞

「震度 9 クラスの地震がくるかもしれない」「佐渡地震が来る」

＜その他＞

「報道する TV 局によって、被害された人数や亡くなられた人数が、バラバラな時があった。各局、我先という報道のあり方も、どうかとおもいました」「まるで能登でリアルタイムで被災しているような振りをして X にポストしている人を見た」

資料・調査票（単純集計付）

能登半島地震における緊急地震速報・災害情報等に関する調査

令和６（2024）年２月

日本大学文理学部　中森研究室

調査の目的とお願い

令和 6（2024）年 1 月 1 日の能登半島地震により大きな被害が生じました。被害に遭われた方々に、あらためてお見舞いを申し上げます。

このアンケートは、能登半島地震において発表された緊急地震速報や災害情報等について、住民の方々がどのように感じ、どのように評価しているのか、について調査をするために行うものです。そして、この調査結果から得られる知見から、今後の災害情報を、より有効なものにしていくための提言をしようと考えております。

なお、回答した方々のお名前やご住所などが、表に出ることはありません。

ご協力のほど、よろしくお願いいたします。

・調査対象者：

金沢市・富山市・新潟市に居住し、今年１月１日 16 時 10 分に発生した能登半島地震で発表された緊急地震速報を、金沢市・富山市・新潟市の屋内で見聞きした 20 歳以上の男女。

・対象者数：150

性　別　男 75・女 75

年　齢　20 代：30　30 代：30　40 代：30　50 代：30　60 代以上：30

地　域

金沢市　50　男 25・女 25

富山市　50　男 25・女 25（射水市　男 1・滑川市　男 1　を含む）

新潟市　50　男 25・女 25

・調査方法：

WEB モニター調査（クローズド・パネル調査）

Q１　あなたは、今年の１月１日 16 時 10 分に発生した能登半島地震で発表された緊急地震速報を、どこで見聞きしましたか。次の中から、１つ選んでください。

1	自宅	86.0
2	自宅以外の住宅	5.3
3	事業所・オフィス（自宅は含まない）・学校	3.3
4	自治体・公共機関の庁舎・建物	0.0
5	百貨店・ショッピングモール・スーパーマーケット・量販店など大規模な商業施設	4.7
6	商店・コンビニエンスストアなどの比較的小規模な店舗	0.0
7	劇場・ホール・イベント会場・体育館などの多数の人々を収容する施設	0.0
8	その他　具体的に：	0.7

Q2　あなたは、この時の緊急地震速報を、何から得ましたか。次の中から、あてはまるものをすべて選んでください。

1	テレビ	62.7
2	ラジオ	1.3
3	携帯電話・スマートフォンなどから得られる緊急速報メール	66.7
4	携帯電話・スマートフォンなどから得られる地元の市町村が伝えるエリアメール	6.0
5	携帯電話・スマートフォンなどのWebサイト・SNS・アプリ	6.7
6	パソコンのWebサイト・SNS・ソフトウェア	4.7
7	館内放送	0.0
8	防災無線	2.0
9	専用受信機	0.7
10	住宅のセキュリティサービスや管理者から発信される情報	1.3
11	職員・従業員などの肉声による指示	0.0
12	その他　具体的に：	0.0

Q3　あなたは、この時の緊急地震速報を見聞きした際、どのようなことをしましたか。あてはまるものをすべて選んでください。

1	強い揺れに翻弄されていた	50.7
2	様子を見た	28.0
3	身構えた	46.0
4	しゃがみこんだ	19.3
5	机やベッドなどの下にもぐった	13.3
6	倒れてくる・落ちてくると思われるものから離れた	11.3
7	ヘルメット・座布団・そのほか何かで頭を守った	3.3
8	倒れそうなものなどを、倒れないようにおさえた・おさえようとした	21.3
9	火の始末をした	14.0
10	ガスの元栓を閉めた	5.3
11	戸や窓を開けた	5.3
12	屋内の安全と思われる場所・エリアに移った	0.7
13	屋外に出た	7.3
14	テレビをつけた	20.7
15	ラジオをつけた	0.7
16	すでについていたテレビ・ラジオの情報に注意した	24.7
17	民間放送テレビを見ていたがNHKに替えた	10.0
18	テレビ・ラジオ以外の方法で情報を得ようとした	4.7
19	周りの人に注意を呼びかけた	8.7
20	近くにいる人を守った・守ろうとした	9.3
21	館内放送や人の指示に従った	1.3
22	地震の様子を撮影した・撮影しようとした	0.7
23	その他　具体的に：	2.7
24	何をしてよいのかわからず、何もできなかった	0.7
25	何もしなかった	2.0

Q4　このたびの能登半島地震における一連の活動（相次いだ地震）で、緊急地震速報は役に立ったと思いますか。役に立ったとすれば、どのように役に立ちましたか。あてはまるものをすべて選んでください。

1	自分自身や家族の身の安全を守ることができた	41.3
2	揺れる前の段階で、これから揺れが来ることがわかった	39.3
3	「緊急地震速報が出されればある程度の強い揺れになる」「緊急地震速報が出されなければそれほど強い揺れにならない」といった、揺れの強さの、ある種の基準になった	26.0
4	心構えができた	40.7
5	車を安全に運転することができた	1.3
6	あわてることが少なくなった	8.7
7	緊急地震速報が相次いで発表されることで、地震対策の重要性をあらためて認識することができた	28.7
8	揺れている状況などを映像に記録することができた	0.7
9	その他：	0.0
10	わからない	4.0
11	特に役には立たなかった	6.7

Q5　このたびの能登半島地震で津波警報が発表された際、ＮＨＫのアナウンサーは、声を張りあげて、語気を強めて津波警報を伝えました。あなたは、この伝え方をどのように思いましたか。次の中から１つを選んでください。

1	この伝え方でよかったと思う	71.3
2	ある程度はよかったとは思うが、もう少し声のトーンや調子を落として伝えた方がよいと思う	16.0
3	あまりよいとは思わない。普通の話し方で伝えてほしいと思う	2.0
4	NHKのテレビ・ラジオの放送を見聞きしていなかったので、わからない	10.0
5	その他　具体的に：	0.7

Q6　このたびの能登半島地震に関してあなたが知りたかった情報を得るために、役に立ったものは何ですか。あてはまるものをすべて選んでください。

1	NHKテレビ	76.7
2	民間放送テレビ	55.3
3	NHKラジオ	3.3
4	民間放送ラジオ	2.0
5	コミュニティFM放送	0.7
6	ケーブルテレビ	0.0
7	全国紙の新聞	1.3
8	地元紙の新聞	12.7
9	インターネットのニュースサイト（ネットニュース）	30.7
10	YouTubeなどの動画サイト	9.3
11	地震情報・災害情報のアプリ・Webサイト	18.0
12	国の機関のWebサイト	2.7
13	県・市町村のWebサイト	8.7
14	報道機関のWebサイト	2.0
15	その他のWebサイト　具体的に：	0.0
16	X（旧Twitter）	19.3
17	LINE	8.0
18	Instagram	4.7
19	Facebook	1.3
20	Tik Tok	0.7
21	その他のSNS　具体的に：	0.7
22	電話（通話）	4.0
23	FAX	0.0
24	Eメール	1.3
25	防災無線	1.3
26	広報紙	0.0
27	自治会・町内会の広報	0.7
28	口コミ	1.3
29	その他　具体的に：	0.0
30	役に立ったものはない	3.3

Q7　あなたは、このたびの能登半島地震に関する報道・情報についてどのように思いますか。あてはまるものをすべて選んでください。

1	報道する地域が偏っていて、不公平感だと思う	11.3
2	報道する内容・話題・テーマが偏っていて、不満に思う	10.0
3	石川県能登地方以外の地域の被害や地震の影響についても、もっと伝えてほしいと思う	28.7
4	報道する地域が偏っていて、支援や救援に影響が出たと思う	16.7
5	被害の情報が多かったので、被害以外の情報も伝えてほしい	14.0
6	もっと生活に関する情報を伝えてほしいと思う	14.7
7	具体的な地震対策・対応の方法や工夫について、もっと伝えてほしいと思う	11.3
8	「災害について必要な情報をどのように得ればよいか」という情報を、もっと伝えてほしい	11.3
9	被災者への配慮が足りない報道が多いと思う	10.0
10	いわゆる「お涙ちょうだい」のような報道が多く、不快に思うことがある	14.0
11	南海トラフの巨大地震や首都直下地震だけでなく、他の地域で起こるかもしれない大規模な地震についても、もっと取り上げてほしいと思う	16.0
12	東京からの視点での報道が多く、災害の実態や実情が伝わっていないように思う	10.7
13	発表される震度と実際に感じた揺れの強さに違いがあるのでは、と思うことがあった	10.0
14	日本には地震に安全な場所はない・大きな地震が来ない場所がない、ということをあらためて認識した	29.3
15	その他：	0.7
16	特に何も思わなかった	20.0

Q8　以前から、石川県能登地方では地震が相次いでいました。そんな中で、今年１月１日に大きな地震が発生しました。このことについて、あなたの考えや思いに最も近いものを次の中から１つ選んでください。

1	近いうちに、このたびのような大きな地震が起こるかもしれないと思っていた	24.0
2	いつかは、このたびのような大きな地震が起こるかもしれないと思っていた	23.3
3	石川県能登地方で被害が生じる地震が発生するかもしれないが、自分の住んでいる地域がここまで大きな揺れになるような地震が発生するとは思わなかった	25.3
4	まさか、ここまで大きな地震が起こるとは思わなかった	20.0
5	地震のことなど、全く考えていなかった	7.3

Q9　あなたは、このたびの能登半島地震を経験し、今後、自分の住んでいる地域において建物が壊れるような大きな地震に襲われるのではないかという不安はありますか。次の中から１つ選んでください。

1	近いうちに大きな地震に襲われてもおかしくないと思う	58.7
2	いずれはまた大きな地震に襲われるかもしれないが、まだ、しばらく先のことだと思う	25.3
3	自分の住んでいる地域では、建物が壊れるような大きな地震は起こらないと思う	6.7
4	わからない	9.3

Q10　このたびの能登半島地震において、流言・うわさ・デマ・フェイクニュースなどを見聞きしましたか。見聞きしたとすれば、どのような内容でしたか。具体的にお書きください。

何らかの「流言・うわさ・デマ・フェイクニュースなど」を見聞きしたと回答した人　45

◎偽りの救助要請　18

・X に流れていた架空の住所での救助要請
・倒壊した家に閉じ込められている
・建物の下敷きになっているっているって言うデマ
・人工地震・虚偽の緊急要請
・救助を待つインプレッション稼ぎの投稿
・その場にいないにもかかわらず、救援指示を X で流して救助隊を混乱させていた。
・コンプレッション（ママ）稼ぎの嘘の生き埋め情報
・埋まっているからと特定の住所を投稿していた
・架空の住所で救出を乞うゴミみたいなツィートを見かけた
・建物が倒壊したから助けてほしいと住所とともにＳＮＳに投稿→存在しない住所だった
・瓦礫に挟まって動けない、助けてほしいという真偽不明なツィートがあり、他者の拡散要請に応じて自分も拡散したが、確実な情報とは言えず、後で悩んだ。
・Twitter で脱出不能で助けて欲しいというツイートをみた。
・被災地で SOS を求める投稿で存在しない住所を記載
・X で救済情報（ママ）が流れたがデマだと後でわかったのもあった
・「自分の母親が家屋の下敷きになっている」という 1 人の女性の SNS での発信を、たくさんの人々が引用して、自分の投稿のようにしていた。
・生き埋めに合っているというデマ
・建物の下敷きになってる
・「被災しています助けて下さい」と書き込みながらも全く違う写真や動画が添付された X のポストでイン

プレッション数を稼ぐもの・被災者を嘲るもの・自販機を破壊して中身を出した経緯についてのデマ

◎犯罪　6

・火事場泥棒
・強盗が自販機を壊したというデマ
・外国人窃盗団がいるというデマ
・県外ナンバーの車が、空き巣に入っている。
・自販機の件
・「被災しています助けて下さい」と書き込みながらも全く違う写真や動画が添付されたXのポストでインプレッション数を稼ぐもの・被災者を嘲るもの・自販機を破壊して中身を出した経緯についてのデマ

◎津波や被害に関するフェイクニュース　6

・以前の津波の映像
・津波のフェイク画像を見ました
・X等による被害状況のフェイクがあった
・3.11の際の津波動画を今起きている津波とした投稿
・フェイクニュースと言えるか微妙であるが、東日本大震災の時の津波の映像を悪用してインプレッション数を増やそうとしているXのアカウントが複数見られた。
・「被災しています助けて下さい」と書き込みながらも全く違う写真や動画が添付されたXのポストでインプレッション数を稼ぐもの・被災者を嘲るもの・自販機を破壊して中身を出した経緯についてのデマ

◎人工地震・陰謀説　6

・内容迄はあまり覚えていないが陰謀論のようなものが多いと思う
・人口（ママ）地震であるという内容をXで見た
・人工地震・虚偽の緊急要請
・人工地震
・人工地震みたいな陰謀説
・人工地震

◎震度誤情報　3

・震度の誤報
・震度〇〇の地震がありました、、、との情報がありましたが、私自身は全く揺れを感じなかった。
・震度6の地震が来たとなっていたが実際は3だった

◎原子力発電所の火災・事故　2

・志賀原子力発電所での火災
・原発が壊れた

◎地震再来　2

・震度9クラスの地震がくるかもしれない
・佐渡地震が来る

◎その他　5

・報道するTV局によって、被害された人数や亡くなられた人数が、バラバラな時があった。各局、我先という報道のあり方も、どうかとおもいました。
・SNS
・まるで能登でリアルタイムで被災しているような振りをしてXにポストしている人を見た
・とにかく、怖いと感じた。
・怖いから

南海トラフ地震臨時情報とそれへの反応
ー全体的傾向および愛媛県下の状況について—

東洋大学　　中村功
松山大学　森岡千穂
松山大学　市川虎彦

1.　はじめに

2024 年 8 月 8 日 19 時 15 分、気象庁は、「南海トラフ地震臨時情報(巨大地震注意)」を、運用開始以来、初めて発表した。テレビでは一斉に報道特別番組を放送するなど、社会に大きな関心を呼び起こした。本論では、この情報に社会はどう反応したのか、そして今後どう対応していくべきなのかについて考えたい。方法としては、まず報道等の各種資料から全体の傾向を概観した後に、当該地震の被害想定エリアの 1 つである愛媛県下の自治体に聞き取り調査を行い、その対応と課題について詳細に検討する。

(1)南海トラフ地震臨時情報とは

南海トラフ地震臨時情報とは、今後発生が予想される南海トラフ沿いの大地震が発生する可能性の高まりについて、気象庁が発表する情報である。2017 年から始まったものだが、それまでにあった東海地震の「予知情報」や「警戒宣言」は事実上、発表されないこととなった。この情報の発出パタンにはいくつかのものがある。第 1 は南海トラフ地震の想定震源域でマグニチュード 6.8 以上の地震が起きた場合である。するとまず「南海トラフ地震臨時情報(調査中)」という情報が発出される。さらにその地震がマグニチュード 8.0 以上の大地震であった場合には「南海トラフ地震臨時情報(巨大地震警戒)」が出される（図 1 左下）。これは断層の

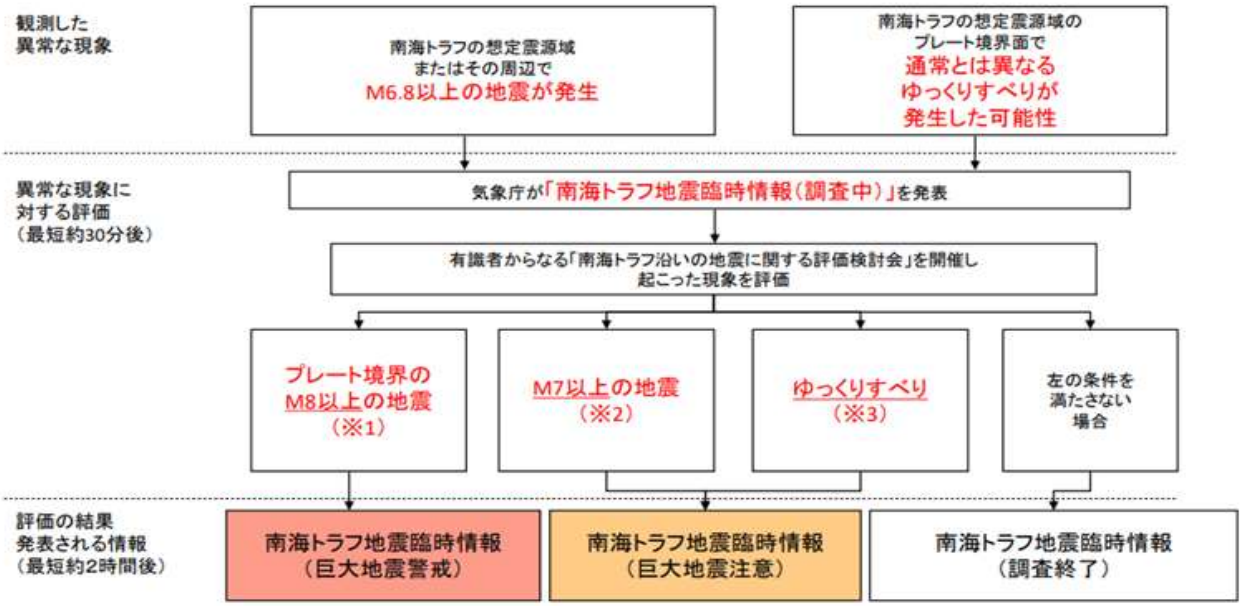

図 1　南海トラフ地震臨時情報の発表パタン　（内閣府，2021）

かなりの部分がずれ動いたことを指すため「半割れ」状態などと呼ばれるが、ずれ残った断層が後発地震をもたらす危険性が高まった可能性がある。他方、この地震がより規模の小さいマグニチュード 7.0 以上だった場合には「南海トラフ地震臨時情報(巨大地震注意)」が出される(図 1 中下)。第 2 は、想定震源域内で異常な「ゆっくりすべり」とよばれる現象が観測された場合である。南海トラフ地震はプレートの境界が激しくずれ動くことにより発生すると考えられているが、「ゆっくりすべり」とは、その前兆として小規模にずれ動く現象を指す。これは地中に設置した「ひずみ計」が異常な地殻の変動をとらえたときに判定される。この時もまず「南海トラフ地震臨時情報(調査中)」が出され、ゆっくりすべりが確認されると「南海トラフ地震臨時情報(巨大地震注意)」が発表されることになっている(図 1 中下)。

このなかで「巨大地震警戒」の発表は、巨大地震が発生する可能性が高まっていることを意味し、一部地域の事前避難を含む警戒が呼びかけられる。他方「巨大地震注意」の場合は、日頃からの地震の備えを確認するなどの地震への注意が呼びかけられることとなっている。

(2) 発表の経緯

今回の発表は、2024 年 8 月 8 日 16 時 42 分に、日向灘を震源とするマグニチュード 7.1 の地震が発生したことに端を発している。この地震で宮崎市日南市では震度 6 弱の揺れを観測し、気象庁では宇和海沿岸等に津波注意報を発出した。そして地震の 18 分後の 17 時 00 分に、気象庁は「南海トラフ地震臨時情報（調査中）」を発表している。その後 17 時 30 分に「南海トラフ沿いの地震に関する評価検討会」が開催され、19 時 15 分に「南海トラフ地震臨時情報（巨大地震注意）」が発表されたのである(表 1)。

表 1　8 月 8 日当日の政府の動き　（内閣府，2024 より）

16:42 地震発生
17:00 南海トラフ地震臨時情報（調査中）発表
17:28 官房長官会見
17:30 南海トラフ沿いの地震に関する評価検討会
17:45 気象庁会見（日向灘の地震について）
19:15 南海トラフ地震臨時情報（巨大地震注意）発表
政府としての「特別な注意の呼びかけ」開始
19:32 官房長官会見
19:45 気象庁会見（臨時情報について）
20:00 防災担当大臣からの呼びかけ

この日の 19 時 45 分から気象庁で行われた記者会見では、気象庁地震火山部の東田課長と評価検討会の平田会長が会見に臨んだ。そこで気象庁からは、マグニチュード 7 以上の地震が発生したあと、7 日以内にマグニチュード 8 以上の大規模地震が発生する確率は数百回に 1 回程

度だが、異常な現象が観測される前の状況に比べて確率は数倍高くなっている、との説明があった。続けて平田会長は、数倍というのは地震学的には極めて高い確率となるが、それでも数百回に１回くらいの出来事で、特定の地域でいつ巨大地震が起きるかということをいうことはできないので、これまでどおり地震が起きたときの備えを確認してほしい、と呼びかけた。また注意する期間は１週間を考えているが、危険性は直後が最も高いが時間がたっても尾を引くので１週間で完全に安全ということはないとした。さらに帰省をしてもよいのかという記者の質問に対して同会長は、津波は早い所では５分で来るところもあるが、避難先や経路を確認していれば海水浴をしても問題はないだろうと答えている。

図２　気象庁記者会見の様子(8 月 8 日 19 時 45 分) NHK テレビより

2. 各所の反応―全体的傾向

(1) マスコミの反応

各放送局では、17 時 00 分に「南海トラフ地震臨時情報(調査中)」が発表された直後からその旨を字幕で速報した。福島 (2024)によると、たとえば NHK では 17 時１分に字幕を出し、同時にスタジオで特別番組を始めている(表 2)。日本テレビ、TBS テレビ、フジテレビも同様に

表 2　テレビ局各局の対応　（福島，2024）

	速報対応	NHK（Ch.1）		日本テレビ（Ch.4）		テレビ朝日（Ch.5）	
「臨時情報（調査中）」17:00発表	速報（字幕）	17:01	特別番組	17:01	news every.	17:03	五輪特別番組
	速報（スタジオ対応）	17:01		17:01		-	
気象庁会見（先発地震）	中継	17:45		17:45		-	
放送（特番）終了		-		19:00		-	
「臨時情報（巨大地震注意）」19:15発表	速報（字幕）	19:15		19:15	バラエティ	19:16	
	速報（スタジオ対応）	19:15		19:16	特別番組	19:20	特別番組
気象庁会見（巨大地震注意）	中継	19:45		19:45		-	
放送（特番）終了		20:55		19:56		19:30	

	速報対応	TBSテレビ（Ch.6）		テレ東（Ch.7）		フジテレビ（Ch.8）	
「臨時情報（調査中）」17:00発表	速報（字幕）	17:01	Nスタ	17:05	ゆうがたサテライト	17:04	news イット！
	速報（スタジオ対応）	17:01		17:29	特別番組	17:01	
気象庁会見（先発地震）	中継	17:45		17:45		17:45	
放送（特別番組）終了		19:00		18:14		19:00	
「臨時情報（巨大地震注意）」19:15発表	速報（字幕）	19:15	CM（バラエティ）	19:15	バラエティ	19:15	バラエティ
	速報（スタジオ対応）	19:15	特別番組	-		-	
気象庁会見（巨大地震注意）	中継	19:45		19:45	特別番組	19:45	特別番組
放送（特別番組）終了		20:00		19:54		19:57	

17 時 01 分から 17 時 04 分の間にスタジオから速報を伝え始めた。またテレビ東京も 17 時 29 分から特別番組を放送している（ただしテレビ朝日だけは、速報の後も五輪特別番組の放送を続けている）。その後 NHK では 20 時 55 分までずっと特別番組を放送し、その中で気象庁の会見も中継している。民放では 19 時からバラエティ番組等をはさんでいるが、19 時 15 分から 45 分の間に再び特別番組を開始し、「南海トラフ地震臨時情報(注意)」の発表を伝えた。そして 19 時 45 分からの気象庁の記者会見は全放送局が中継で伝えている。このように、「南海トラフ地震臨時情報(調査中)」の発表以降、各局とも「南海トラフ地震臨時情報」（以下「臨時情報」）一色となっていった。

翌日 8 月 9 日新聞各紙でもこの情報は大きく報道された。そこでは日向灘の地震で南海トラフ地震が発生する可能性が高まったとする「臨時情報」が初めて発表されたことや、1 週間は注意が必要で、日ごろの地震対策を再確認することなどが呼びかけられた。各紙の 1 面から注目される記事をピックアップすると、たとえば朝日新聞では「過度に恐れず備え点検を」と過剰反応を抑えようとしており、同時に、東海道新幹線が減速運転することを報じている（図 4）。あるいは日本経済新聞では「一週間を基本として自主的な避難を含め備えを再確認」と自主的な避難まで視野に入れるように図入りで解説している（図 5）。いずれにしても、ただならぬ情報が発せられたことがわかる紙面といえる。

南海トラフ 臨時情報

「巨大地震注意」

初の発表 宮崎 震度6弱

1週間 備え再確認を

12人が負傷

図３　読売新聞８月９日１面

南海トラフ巨大地震注意

沖縄から茨城今後1週間

宮崎 震度6弱

過度に恐れず備え点検を

解説

図４　朝日新聞８月９日１面

南海トラフ巨大地震注意

初の臨時情報 宮崎 震度6弱

リスク「平時より高い」

図５　日本経済新聞８月９日１面

(2) 鉄道会社の対応

「臨時情報」の発表を受けて迅速に動いたのは鉄道会社である。なかでも JR 東海が、東海道新幹線の三島－三河安城間で最高速度を 285 キロから 230 キロに減速運転する措置をとったのは話題となった。そのほか JR では、サンライズ瀬戸・出雲、南紀、伊那路、ふじかわ、くろしお(和歌山-新宮間）といった特急列車が運休となり、紀勢本線の一部区間（新宮-紀伊勝浦および周参見-紀伊田辺)でも普通列車が運休となった。さらに東海道線、伊東線、中央線、紀勢本線などの一部区間では徐行運転が行われた。期間はいずれも８月８日からの１週間である。その結果、東海道新幹線などでは 10 分程度の遅れがでたようである。

枝久保（2024）によれば、JR 東海は 2017 年に「臨時情報」発表時の運行計画を検討しはじめ、2021 年３月に防災業務計画の社内ルールを整備した。それによれば、東海道新幹線は「臨時情報（巨大地震注意）」が発表された場合は、三島―三河安城間で 230km/h への減速運転を行い、「臨時情報（巨大地震警戒）」の発表では、名古屋―三島間の運転を見合わせる方

針を決定したという。今回、迅速な決定がなされたのは、こうした社内ルールがあったためと考えられる。

林（2024）によると、新幹線が 285km/h から 230km/h まで速度を落とすのには約 20 秒かかり、その間に 1.3km 進む。これは最高速度から停止するまでの距離の 1/3 に相当する。その距離分は線路上の障害に突入する危険性が減少するので、一定の評価ができる措置だったという。

(3) 自治体の対応

各地の自治体としては警戒本部等を設置して監視体制を整えるとともに、住民に対して広報を行っている。広報の内容としては、「臨時情報」が発表されたので、避難路の確認・家具の固定・非常持ち出し品の確保など、日ごろからの災害対策を再確認するようにと呼びかけるものであった。さらに自治体によっては避難所を開設したところもあった。たとえば高知県内では南国市・黒潮町・高知市など 9 市町村が避難所を開設し、合計 28 人が避難したという(NHK, 2024a)。

(4) 海水浴場の閉鎖・イベントの中止

今回は「臨時情報」の発表がお盆の行楽シーズンと重なったため、各地で海水浴場や花火大会などのイベントが中止・延期になった。特徴的なのは和歌山県白浜町で、町は安全のため町内の全ての海水浴場を閉鎖し、花火大会も中止している。海水浴場は、白浜町から大紀町にかけての紀伊半島一帯の市町で閉鎖となり、神奈川県の平塚市でも閉鎖となった。また花火大会は、那智勝浦町、新宮市、太地町、すさみ町、焼津市など紀伊半島や駿河湾沿岸で延期になった。

その一方で熊野町では、避難場所のチラシを配布するなどして、例年約 17 万人を動員する大規模な花火大会が予定通り開催されている。また、高知市のよさこい祭り（9-12 日）や徳島市の阿波踊り（11-15 日）も例年どおり開催された。ちなみにその後取りまとめられた徳島市の対応計画では、「巨大地震警戒」が出された場合には阿波踊りは中止を要請することになっている(日本経済新聞,2025)。このようにみると、今回のような「巨大地震注意」では、大規模なイベントほど通常通り開催される傾向があるようである。

(4) 宿泊キャンセル

「臨時情報」の発出により不安を感じた利用者が旅行を取りやめ、多くの宿泊キャンセルが出た、という報道が相次いだ。たとえば NHK(2024b)は愛媛県松山市、高知県高知市、和歌山県白浜町、宮崎県宮崎市のホテルを取材し、多数のキャンセルが出ていることを報じている。その売り上げ減少額は、高知県旅館ホテル生活衛生同業組合では約 1 億 7500 万円、和歌山県白浜町の組合で約 5 億円、宮崎県では約 3 億円だったといわれる(東京新聞,2024）。

(5) 水・食料の需要急増

「臨時情報」を受けて、日ごろの防災対策を見直す住民が多くなり、ペットボトルの水、パックご飯、カップ麺などの需要が急増した。各地のスーパーではそれらが品切れになる事態も生じている。食品新聞（2024）の取材によると、イオンやサミットでは「臨時情報」発表後、たしかに水とパックご飯の売り上げが伸びたといい、イトーヨーカドーでは飲料水の販売を１家族２ケース（12 本）に制限したという。実際 POS データによると、全国のスーパーでの水の販売実績は、「臨時情報」発表前の１週間は前年比で金額 2.3%減、数量 5.1%減と消費が低迷していたのが、発表後の５日間では金額で 128%増、数量で 93.3%増と、前年同期の約２倍に急増したという(食品新聞，2024)。

またパックご飯の売り上げも急増し、前年比で東海では 449%、四国では 343%、近畿では 274%に急増した(図 6，NHK,2024c)。

図 6　パックご飯の売り上げ　（NHK，2024c）

ただ、食品新聞（2024）によれば、「商品がない空っぽの店頭棚を強調して報じる向きもあるが、飲料・食品はおおむね安定供給が保たれている。」としており、「買いだめパニック」とまではいかなかったのかもしれない。

いずれにしても既述のように政府は「臨時情報」で日ごろの防災対策の再確認を呼びかけている。一般の住民が日ごろの防災対策としてまず思い浮かべるのは水や食料の備蓄と思われるので、再確認によりそれらの購入が増えることはある意味当然のことである。その一方で水や食料の買いだめを控えるようにとも呼びかけられているが、２つの要請は互いに矛盾しており、ややマッチポンプ的な状況であったといえよう。

6)住民の対応

では一般住民はこの情報に対してどう反応したのか、関谷(2024)は南海トラフ地震で大きな被害が想定される地域(防災対策推進地域)を含む全国を対象にアンケート調査をしている。それによると、この情報を聞いた人は 83.1%で、そのうち、水や食料の備蓄を確認した人は 21.3%、家族との連絡方法を確認した人は 9.8%、水を購入した人は 8.7%、家具の転倒防止を確認した人は 8.6%、避難経路を確認した人は 6.0%であった(数値はいずれも防災対策推進地域内のもの， 図 7)。同調査では対策推進地域内で自分の地域で被害が出るのではないかと危機感を持った人は 54.4%とかなり多かったが、実際に防災的行動をおこした人はそれほど多くなかったようである。

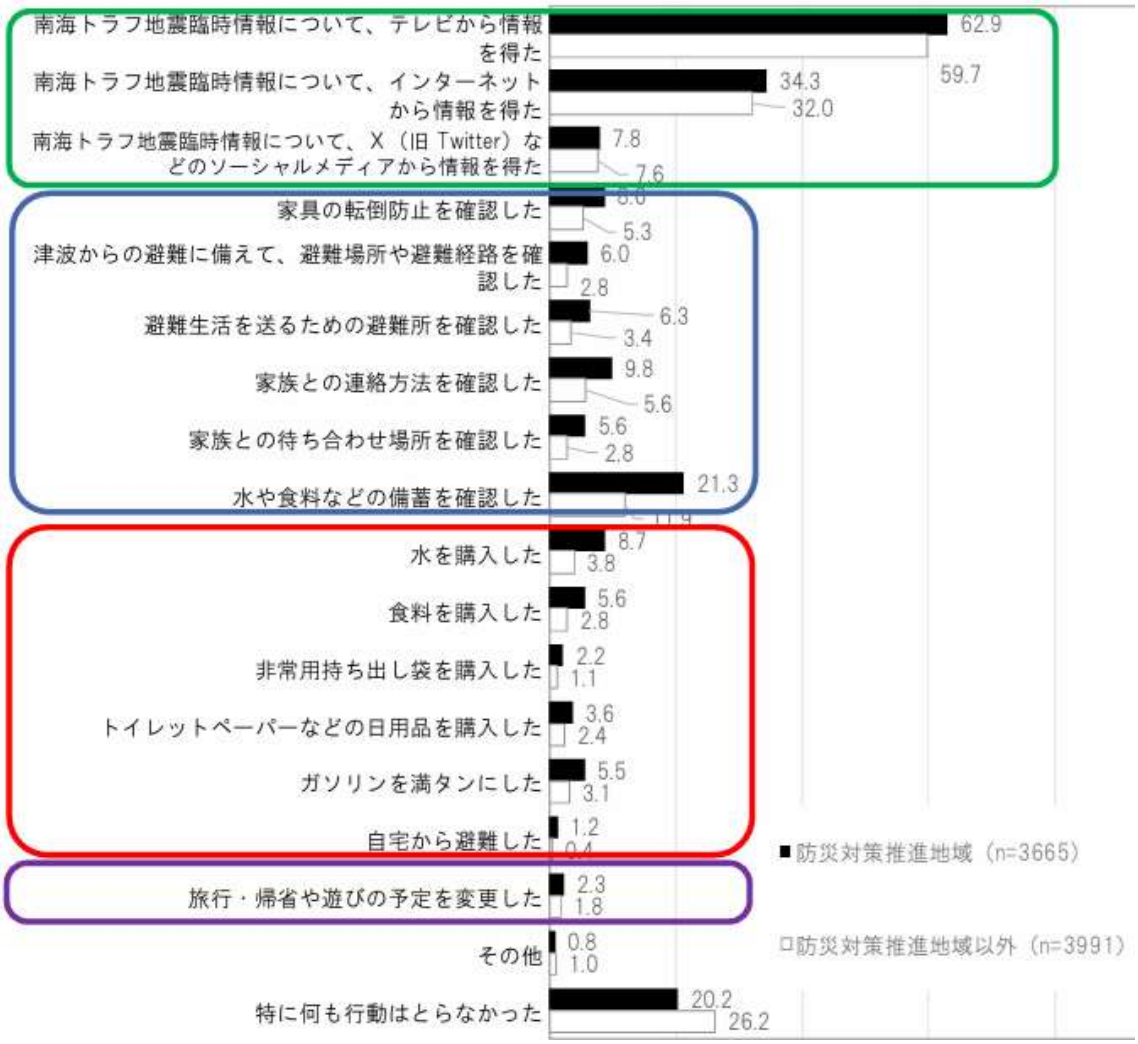

図 7　南海トラフ地震臨時情報を認知した住民の反応　（%）（関谷，2024）

3. 各所の反応—愛媛県下の状況

(1) はじめに

愛媛県では南海トラフ地震によって、最大で震度 7 の揺れや 20 メートル以上の津波が想定されており、全域が「南海トラフ地震防災対策推進地域」に指定されている。そこでここでは、愛媛県における「臨時情報」への反応状況を、地元紙の報道から概観したうえで、多くの被害が予想される南予地域と観光被害が報道された松山市道後温泉の状況を自治体等への聞き取りをもとに明らかにする。

(2) 愛媛新聞に見る県内の反応

まずは愛媛県の地方紙である愛媛新聞の報道から県内の反応を概観する。自治体の対応としては、たとえば愛媛県知事は「臨時情報」発表直後、避難場所・経路や家族との安否確認の見直しとともに、デマの拡散や必需品の買い占めをしないよう呼びかけを行っている。宇和島市でも 1 週間は市民への備えの呼びかけを行い、同市の 30 の高齢者施設（指定福祉避難所）と被災状況やサービス提供可否を情報共有しており、16 日まで災害発生時の運用を続けたという。

他方、津波浸水想定区域内の高齢者施設・病院では入所者を 3 階以上に上げることが想定されているものの、夜間の人手が足りないことや、連絡体制が不十分であるといった問題提起もなされた。

その後 8 月 22 日の紙面では、西予市では家具固定の需要の急速な高まりに備え、一般の家具固定補助制度に電化製品や大型楽器・ガラス飛散防止を加え上限 1 万 5 千円（従来の 1 万円より増額）の補助を行うための予算を専決処分したことが報じられた。その後国土交通省松山港湾・空港整備事務所が上島町弓削港で医療搬送や飲料水の海上輸送訓練をした様子が報じられ、離島を多く抱える県ならではの対応がクローズアップされた。

観光面では、道後温泉の宿泊キャンセルの多さへの危機感がしばしば報道された。また愛南町は町主催のイベントは中止するものの、レジャー施設等は通常営業を継続すると 8 月 9 日に発表している。その一方、松山市では 8 月 9 日に「第 59 回松山野球拳おどり」が通常どおり開催されていた。

また愛媛新聞では県下の伊方原子力発電所に「臨時情報」に関する規定がないことが問題視されていた。伊方原発の地盤は想定最大津波高よりも高いものの、四国電力の担当者は「立地自治体からの要請や規制委の指示があれば稼働可否の検討はありうる」と述べている。また 16 日には、伊方町の環境監視委員会での質疑において四国電力の担当者は「従来から緊急時対応要員や運転員を常時配置し、事故が起きても初動対応できる体制を取っている」話していた。

住民については、「初めて聞いた」と混乱する住民が多く、特にお盆の移動を中止すべきか懸念されているなどと報道された。8 月 10 日の紙面では、県内で 2 ℓ 飲料水が売り切れ、携帯トイレ・保存食・非常持ち出し袋・家具固定の突っ張り棒が品薄になっていると報じられた。

各地で避難訓練や緊急時生活用水確保の動きが広がったが、「瀬戸内海側と太平洋沿岸地域とは意識の差がある」（四国中央市）「何をどう備えたらいいか分からないので、結局何もしない」（松山市）などの意見も紹介された。他方、宇和島市大浦２区自主防災会では、10 日に高台に設置した防災倉庫の発電機や投光器の緊急点検をしたり、避難呼びかけ用拡声器の音声を出した点検を行ったりしている。

（３）南予地域の自治体の対応

次に、愛媛県南部（南予地域）の４自治体（宇和島市、愛南町、西予市、伊方町）の防災部局に、「臨時情報」発表当時の市の対応、住民の様子、「臨時情報」への計画、その後の対応などについて、聞き取り調査を行った結果を報告する。調査した自治体は、いずれも宇和海沿岸に位置し、大きな津波の危険性があるところである（図 8）。

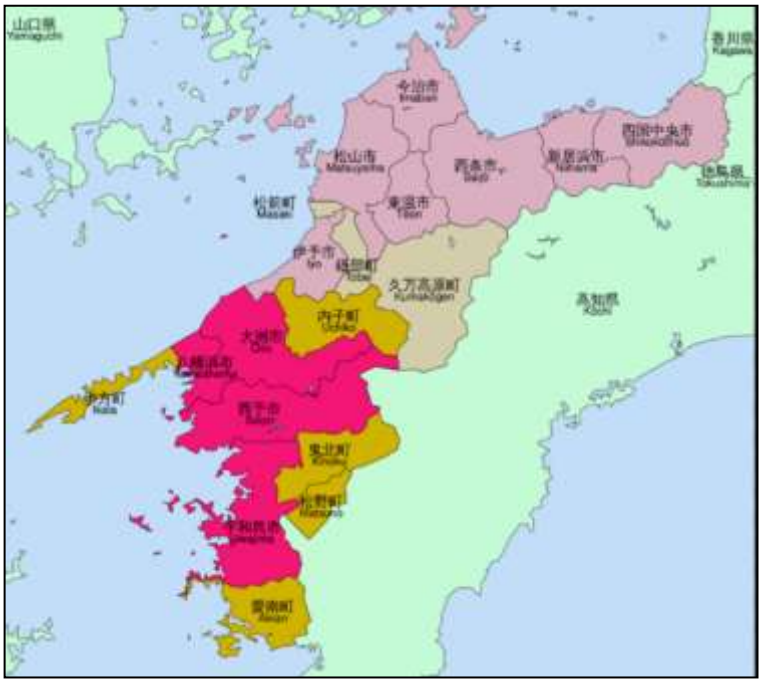

図 8　愛媛県の各自治体

①宇和島市

宇和島市は 6 万 3000 人を擁する、南予地域の中心的な自治体である。市内では所により最大 10.1m の津波が想定されている。

「臨時情報」が発表された 8 月 8 日は、地震直後の 16 時 52 分に宇和海沿岸に津波注意報が出されたので、市はＪアラートと連動した防災無線で海岸にいた人に避難を呼びかけている。それにより海岸でキャンプをしていた 15 人ほどが避難している。注意報なので本来は堤防から海側の人だけが避難すればよいのに、庁舎にいた市職員には避難しようした人もいて、職員の認識不足があったという。

市では津波注意報と連動して災害対策本部を設置し、避難所の開設準備を行った。

そんな中 19 時 15 分に南海トラフ地震臨時情報が発表された。担当者はこのとき「巨大地震警戒」ではなくてほっとした、と感じたという。

同日 21 時になると、災害対策本部から、災害警戒本部に市の体制を縮小している。警戒本部になると各課の課員は自宅に戻り、常駐しているのは危機管理課の課員のみとなった。しかし市のマニュアルでは「臨時情報」発表の際には全課に連絡員を置くことになっていた。これに

ついて担当者は、常駐とまではいかなくても各課にいつでも連絡を取れる「災害対策本部」のままにしておけばよかったかもしれないと述べていた。

一方、市では市民への呼びかけをかなり丁寧におこなっている。すなわち、8月9日から15日まで毎日、市長が自ら録音した音声で防災無線等を通して、南海トラフ地震への注意喚起を行ったという。

住民の対応としては、この情報で避難した市民はいなかったという。市では避難所の開設準備はしたが、開設はしなかった。市内のレジャーやイベントもそのまま行われた。

「臨時情報」に対する計画としては、市では「臨時情報」への対応マニュアルを作成していた。それによると、「臨時情報」の際に開設する避難所は、実際に地震が発生した時の避難所とは異なるという。すなわち、「臨時情報」発表時の避難は、通常授業への支障を避けるために小学校・中学校での避難所開設はしないことになっている。さらに避難対象地区ごとに避難先を指定し、海岸沿いの住民は内陸の三間町地区に避難するように工夫していた。これは「臨時情報」発表時には時間的余裕があるので、より安全な内陸部に事前避難者を収容し、実際に地震が起きた時には海沿いにいる人を海から近い所に避難してもらうようにするためである。

他方、計画には課題もあった。第1は臨時情報による避難所の問題である。臨時情報による避難は長期にわたることが考えられる。「避難先は親戚・知人宅が基本」ということは市の啓発パンフレットにも入れてあるが、市の避難所の水や食料などの備蓄品が1週間ももつのか、という心配があるという。その点について、内閣府が出している「ガイドライン」(内閣府, 2019, p65)では、「臨時情報」の時は災害は起きていないので、食料や寝具などは住民自身が用意することが基本となる、とあるので、今後はそのあたりを啓発していきたいということであった。

第2は土砂災害に対する警戒である。宇和島市では急傾斜地が多く、かねてより土砂災害が多い地域だが、「臨時情報」による注民への注意喚起には、土砂災害への警戒は入っていなかった。その点についても内閣府の「ガイドライン」には呼びかけるべき内容として記述があるので、今後入れておきたいとのことであった。

市では今回の「臨時情報」のあと、地震対策を強化している。すなわち新たに啓発パンフレットを作り全戸に配布したり、家具の固定補助金を上乗せし1万円にしたり、避難路整備(街灯など)に200万円までは全額出すようにしたりしている。

②愛南町

愛南町は、愛媛県の最南端に位置する人口1万9000人の自治体である。南海トラフ地震では最大で16.7mの津波が想定されている。

「臨時情報」後、町では職員が1週間 24時間待機状態となった。しかし愛南町では防災対応をしているのが消防本部なので、「臨時情報」による体制の変化はなかった。またその間、職員が何をしてよいかわからない、ということもなかったという。

「臨時情報」に伴う住民への注意喚起は、発表当日だけ注意喚起の放送を行っている。担当者によれば、振り返ってみると、その後も繰り返し放送をした方がよかったかもしれないという。もっとも注意情報の警戒期間が１週間続いたことは長いと感じていた。

イベント・海のレジャー(釣り)などについては通常通り行っていた。

住民の対応としては、特に危機感はなかったようだという。町への問い合わせもなかったし、避難した人もいなかった。ただ町内のスーパーでは水やラーメンなど備蓄品が売り切れていた。

担当者によれば、今回の「臨時情報」はよい勉強になったのではないかという。というのは、防災について住民の間に緊張感が出てきた感があるからである。また町では今回を契機に、住民が行う防災対策への補助額を１万円から 1.5 万円に増額している。

市の地域防災計画には「臨時情報(注意情報)」に関する記載があり、暫定版の「臨時情報」への対応マニュアルもあったが、今後、宇和島市等のマニュアルを参考にして暫定版を更新していく予定であるという。

③西予市

西予市は愛媛県の南端から数えて３番目に位置する自治体で、人口は３万 4000 人である。市の西部には宇和海に面した海岸地域があり、中部には市庁舎が立地する宇和盆地が、そして東側には標高 1400m に達する山地が広がっている。その多様な地形から市全体が「四国西予ジオパーク」に認定されている。南海トラフ地震では沿岸で最大 9.31m の津波が想定されている。

「臨時情報」の発表当日、市ではまず津波警報への対応として災害警戒本部を設置し、避難指示を行うとともに避難所の開設準備している。津波警報では明浜地区で避難者があった。しかしその後の「臨時情報」では避難者はいなかったという。

市では、「臨時情報」の発表を受け、警戒本部を設置し、庁内の連絡体制を確認した。

住民向けには防災無線で警戒を呼びかけている。その内容は、情報が発表されたことと、日ごろの防災対策（家具の固定・備蓄の確認、避難準備、安否確認方法の確認）を確認することであった。こうした放送はその後も毎日朝８時に行っている。ただし土砂災害への警戒は呼びかけてはいなかった。

当市では８月 13 日に夏祭りのイベントがあったが、その開催に制限はつけず、通常通り行われた。また８月 15 日には隣接する八幡浜市でも花火大会（観客約５万人）を開催していたという。イベントの開催には特に問題は感じられなかった。というのは、当市に南海トラフ地震で津波が到達するのは地震の約 80 分後と予測されているので、イベントを開催しても大丈夫と考えられるからだという。

また当市でも「臨時情報」での避難は、実際の災害時の避難とは違うと認識されていた。そのため「臨時情報」時の避難所は内陸部の宇和地区に設定しており、さらに国の指針を基本に、「臨時情報」時に避難する際には各自が寝具や食料を用意するよう呼びかけているという。

「臨時情報」に対する市のマニュアルは令和 4 年に制定しており、今回ほぼその内容を実行したという。

住民の対応としては、「臨時情報」発表の後、防災意識が高まり、自治会から「防災講話」(防災講演会)を実施してほしいとの要請が多くなったという。また゛州民からの防災対策補助金の申請も増えて、申請件数は年間 3 件だったのが半年で 63 件に増えている。補助額は愛媛県の補助負担額が増えたために本市でも増額している（購入額の 3/4 まで、最大 15,000 円限度）。

担当者は今後、国等は日ごろからの備蓄をもっと呼びかけてほしいと考えていた。その一方で、買い出しの引き金となるおそれがあるので、「臨時情報」後に物資が不足しているという報道は控えてもらいたいとも話していた。

④伊方町

伊方町は四国の西部に突き出した佐多岬半島にある自治体で、半島の付け根付近には四国電力の伊方原子力発電所がある。人口は 7,931 人で、南海トラフ地震では最大 21.3m の津波が予想されている。

「臨時情報」の発令後、町は危機管理部門のみが 24 時間待機する災害警戒態勢をとっていた。他方、住民に対しては防災無線(サイレンなし)で警戒を呼びかけている。

「臨時情報」については、特に町のマニュアルはなく、地域防災計画にもそれに関する記述はなかった。

町内のイベントについては、町内に海水浴場はあるが、来訪者も少ないため、特に閉鎖はしなかったという。

一方、住民の対応だが、町への問い合わせはなく、買い出し現象もみられなかった。先端の三崎地区などは平時からしばしば断水するので、各戸に井戸があるからかもしれないという。

伊方町が他の自治体と異なるところは、南海トラフ地震の震源域近傍で唯一、稼働中の原子炉を持つ原子力発電所が存在する

図 9　伊方原発の立地と避難エリア（内閣府，2015）

ことである。通常時に原発事故が起きた際の避難計画によると、原発から先の半島先端部は、避難が困難なので、原発 5 km 圏内の「PAZ」区域と同様の対策をとる「予防避難エリア」に指定されている(図 9)。半島には整備された国道 197 号線が貫通しており、原発事故の際にはバスが用意され、原発の脇を通るこの国道を使って松山市に隣接する松前町まで避難することに

なっている(内閣府，2015)。しかし、もしこの国道が原発事故や自然災害によって通行できなくなると、「予防避難エリア」の住民約 4000 名が孤立することになる。町では孤立対策として、備蓄品（冷凍庫・発電機）の整備やヘリポートの強化を考えており、今後ヘリポートを新たに８か所整備する予定だという。町の支所などには防災無線と衛星携帯電話があるものの、孤立集落との通信手段が貧弱であることも課題であるという。

今回伊方町では、「臨時情報」に関して原発関係の出来事はほとんどなかった。担当者によると、地震と原発の複合災害についての住民への周知はできていない、ということであった。南海トラフ地震が起きたとき、住民はまず津波から避難することを考えなくてはならないが、担当者によれば、住民は津波より原子力災害の方を強く意識しているかもしれない、ということであった。ハザードマップによると、半島先端部の三崎地区では津波避場所として屋外の高台が複数指定されているが、それらは屋外ゆえに原発事故を考えると安全な避難場所とはいえない。逆に原発事故時の避難先としては原発避難時の「一時集結所」である三崎総合体育館があるが、そこは海抜 3m で津波危険エリアにある。そこで大地震が起きた時には住民はどちらのリスクを重視して避難するかが課題となるかもしれない。また津波を警戒して高台に避難した住民であっても原発事故のことが気になって低地の市街地に戻ったりすれば、それも問題である。とはいえ、市の担当者によれば、津波の避難所としては高台にある三崎高校があるし、福祉施設の「つわぶき荘」も津波危険地域外にあるので、大丈夫ではないかとのことであった。

一方、町役場本庁舎は海沿いに建つ６階建ての立派なものだが（図 10）、津波危険地域内にあり、職員は津波が引いてから参集することになっているという。
いずれにしても伊方町において、複合災害を想定した計画づくりや、孤立対策は喫緊の課題であるといえるだろう。

図 10　伊方町役場本庁舎

⑤道後温泉旅館組合

松山市の道後温泉はお盆の行楽シーズンだったこともあり、「臨時情報」で多くの宿泊キャンセルが出たと報じられた。南海トラフ地震で松山市はところにより最大震度 7 の揺れが想定されているが、道後温泉は海から遠く、津波のおそれはない地域である。今回、道後温泉の宿

泊施設から構成される道後温泉旅館組合に対して、「臨時情報」の影響についての聞き取りを行った。

それによると、道後温泉では「臨時情報」により 1 週間で 2,655 人のキャンセルがあったという。通常 8 月は約 8 万人の宿泊客があり、1 週間にすると宿泊客は 2 万人である。つまりキャンセルの割合は通常宿泊者数の 1 割強である。幸いなことに今回は交通機関が動いていたのでキャンセル料収入が入り、それにより派遣従業員の人件費がカバーできたので、ずいぶん助かったという。それに対して台風の時などは交通機関が止まるのでキャンセル料ももらえないことが多いという。一方宿泊者の約 1/8 を占めるインバウンド客は交通機関が動いていれば来訪するのでキャンセルの影響はなかった。

「臨時情報」発表後、観光案内所には「旅行しても大丈夫か」という問い合わせが多くあった。近年は直前に予約する客が多く、減った客数はキャンセル客だけでないので、宿泊を取りやめた客は合計すれば 3,000 人を超えたのではないかという。問い合わせに対しては、耐震補強や新築などで震度 7 の地震への対応ができている施設を勧めたという。

「臨時情報」後は、関係者の防災意識が高まり、「臨時情報」発表の後に行われた防災訓練には、これまでにない多くの人が参加している。

今回の教訓としては、①問い合わせには耐震性を満たした施設の一覧を用意しておき知らせればよかった、②県の協定で入浴施設や避難所の提供などを計画しており、それをアピールすることで安心してもらえばよかった、③各施設では備蓄を強化しておく必要がある、などがあるという。

4. まとめ

今回「臨時情報」は初めての発表とあって、マスコミでは調査中の段階から大々的に報道していた。しかしその一方で、気象庁および政府は、「通常よりも巨大地震が起きる可能性は高いが、すぐに起きるというわけでもない、住民は通常の生活を送り地震対策の再確認をするように」と、なんとも微妙な呼びかけをしていた。

それに対して、JR はマニュアルに従って新幹線の減速運転をするなど迅速な対応をしていた。住民としては、水や食料を買い増しした人が若干いたほかは、防災行動の再点検など特段の行動を起こした人は少なかったようである。また高知県などで自主避難した人が若干いたほかは避難した住民はほとんどいなかった。

対応が分かれたのは、海水浴場の閉鎖や花火大会などのイベントの開催である。紀伊半島では海水浴場の閉鎖および花火大会の中止・延期をしたところが多かったが、熊野大花火大会やよさこい祭りなど、大きなイベントは予定通り開催されたところが多かった。

その一方で「臨時情報」で宿泊施設のキャンセルが相次ぎ、経済的な被害を受けた事業者もいた。ただし、事業者に話を聞くと、台風の時などには宿泊施設のキャンセルというのはよくあることで、今回はキャンセル料が取れたので台風時ほどの損害ではなかったいう声もあった。

また今回の情報で南海トラフ地震のことがより身近なものとなり、防災意識が高まったり、自治体の予行演習となったりした側面もあったようだ。

このように全体としてみると、今回の南海トラフ臨時情報の発表は大きな混乱なく無事に行われた、と評価することができるだろう。

しかし、この情報をより有効に生かすことを考えると、いくつかの課題が明らかになったと思われる。第 1 は住民への呼びかけ内容である。今回はあくまで通常生活を送り、日ごろの防災対策の再点検をするようにと呼びかたが、実際に行動した人は少なかった。注意情報の段階だとしても、もう一歩進んだ対応をするような、具体的な呼びかけをすることはできないだろうか。

たとえば図 10 は、「臨時情報」発表時の住民の行動を記した内閣府の啓発リーフレットである。そこでは「注意情報」の発表時には「日ごろからの地震への備えを再確認する」と基本的な姿勢が記されているが、その上で、「常に家族の所在場所を確認」「非常袋やヘルメットを玄関に」「寝る時は枕元にはきなれた靴をおいておく」など、いつもより一歩進んだ行動を例示している。あるいは著者が今回の情報発出の後、三重県の熊野灘沿いの地区を訪問すると、ハザードマップで示された津波避難場所が草だらけですでに閉鎖されていたり、ある津波避難タワーは中学生がたむろするという理由から鍵がかかっていたりしたことがあった。したがって「臨時情報」が出た時には、実際に最寄りの津波避難場所に行ってみるとか、津波避難タワーのカギは常時開けておくなど、負担の少ない範囲で一歩進んだ対応を呼びかけることもできたのではないだろうか。

図 11　南海トラフ地震臨時情報発表時の対応（内閣府リーフレット「南海トラフ地震その日が来たら」）https://www.jma.go.jp/jma/kishou/books/nteq_manga/manga_east_02.pdf

第 2 は海水浴場やイベント開催の判断基準についてである。基本的には、予想される集客数、安全な避難場所への距離、地震から津波が来るまでの時間などを勘案して、安全に避難・誘導できるかを判断の基準にするべきである。またそれらが十分とはいえない場合は、台風などの荒天時と同様の対応をすればよいのではないだろうか。夏場のイベントなら台風は数年に一回程度は来る可能性がある。「臨時情報」の発表頻度もおそらくその程度、あるいはそれ以下だと思われるので、台風並みの対応なら頻度的にも社会的に許容できる範囲なのではないだろうか。

第 3 は自治体の対応である。現在、自治体によっては「臨時情報」発表時の対応マニュアルが十分整備されていないところがある。そのようなところでは内閣府のガイドライン（内閣府, 2019)や他自治体のマニュアルを参考にしながら、整備をするべきである。その際取り入れたいポイントとしては、①「臨時情報」時の避難所は通常の避難所とは異なり遠くてもより安全な場所を選定すること、②「臨時情報」の避難は平常時により長い期間行われるために生活物資等は住民自身が用意するよう啓発しておくこと、③津波や揺れだけでなく、土砂災害への

警戒も忘れずに呼びかけること、というようなことがあるだろう。
そして第4に、伊方町では原発事故との複合災害について検討しておくことが重要である。南海トラフ地震が起きると、住宅が倒壊し、津波が発生し、国道が寸断され半島部の住民は孤立する可能性が高い。住民がまず行わなければならないのは倒壊家屋からの脱出と高台への避難だが、その際、原発事故を恐れて高台への避難が阻害されないように、原発の安全性に関する十分な情報提供が必要であろう。

そうした中でもし原発事故が発生したとすると、住民の屋内退避や圏外への避難がいっそう困難になる。さらに原発付近への立ち入りが難しいとなれば道路の修復や物資の搬入もできない。町では孤立対策として、ヘリポートを整備しようとしている。ただし、町内には全部で55の集落があるうち、現在41か所のヘリ発着場所しかなく、全集落への設置は空き地がないため難しい(毎日新聞愛媛県版,2025.3.14)。また愛媛県では地震による原発事故避難を想定して、大型船舶より小回りの利くゴムボートによる避難を取り入れているという(毎日新聞前出記事)。しかしそれだけでは4000人もの住民を移動させるのはなかなか困難であろう。そこで、たとえば「臨時情報(巨大地震警戒)」が出た時などには、半島先端部の住民はあらかじめ孤立のおそれのない他自治体の親戚宅などに避難しておくことを推奨し、孤立救援の負担を少しでも軽減するように考えておいてもよいかもしれない。

このように今回の「臨時情報」の発出は様々な防災上の問題を浮き彫りにしてくれている。今後発生する南海トラフ地震に備えて、せっかくの「臨時情報」を活かしていくことが重要で、社会的反応の実態を踏まえながら、各課題を解決していくことが望まれる。

文献

枝久保達也,2024, 南海トラフ地震で「新幹線が緊急停車する区間」をご存じか…「たった10分の遅延」で悪夢を見たJR東海の一手, PRESIDENT Online, 2024.11.3. https://president.jp/articles/-/87659 (2025.5.1参照)

福島隆史, 2024, 「南海トラフ臨時情報」はどう伝わるか　２－放送訓練の成果と初の発表から見えた課題-, 日本災害情報学会 第29 回学会大会予稿集, 161-162.

林能成, 2024, 東海道新幹線の徐行対応への評価, 日本災害情報学会News Letter, 99号,p4

内閣府,2015, 伊方地域の緊急時対応（全体版）, https://www8.cao.go.jp/genshiryoku_bousai/pdf/02_ikata_0304s1.pdf (2025.5.1参照)

内閣府, 2019, 「南海トラフ地震の多様な発生形態に備えた防災対応検討ガイドライン（第1版)」

内閣府, 2021, 南海トラフ地震の多様な発生形態に備えた防災対応検討ガイドライン 【第1版】改訂版, http://www.bousai.go.jp/jishin/nankai/pdf/honbun_guideline2.pdf (2025.5.1参照)

内閣府, 2024, 令和６年８月８日に発生した日向灘を震源とする地震に伴う南海トラフ地震臨時情報の発表を踏まえた政府の対応等について,

https://www.bousai.go.jp/jishin/nankai/taisaku_wg_02/18/pdf/shiryo1_1.pdf (2025.5.1 参照)
NHK, 2024a, 海水浴 甲子園 よさこい祭り 地震臨時情報で各地の対応は…, NHK NEWS WEB, 2024 年 8 月 9 日 18 時 24 分, https://www3.nhk.or.jp/news/html/20240808/k10014542951000.html (2025.5.1 参照)
NHK, 2024b, 観光地 備え進むもキャンセル相次ぐ 南海トラフ情報の影響は, NHK NEWS WEB, 2024 年 8 月 10 日 18 時 56 分, https://www3.nhk.or.jp/news/html/20240810/k10014545131000.html (2025.5.1 参照)
NHK, 2024c, コメ不足に地震の影響は？売り上げデータから背景を分析, NHK NEWS WEB,2024 年 8 月 21 日 18 時 52 分, https://www3.nhk.or.jp/news/html/20240821/k10014554661000.html (2025.5.1 参照)
日本経済新聞, 2024, 南海トラフ「警戒」なら阿波踊り中止要請　徳島市, 2025 年 4 月 3 日 19:00, https://www.nikkei.com/article/DGXZQOCC024XZ0S5A400C2000000/ (2025.5.1 参照)
関谷直也, 2024, 発表資料「南海トラフ地震臨時情報における住民の反応」, https://www.bousai.go.jp/jishin/nankai/taisaku_wg_02/18/pdf/shiryo2_1.pdf (2025.5.1 参照)
食品新聞, 2024, 南海トラフ地震臨時情報 水や米飯が伸長 お盆商戦には冷や水か, 2024 年 8 月 16 日, https://shokuhin.net/104261/2024/08/16/topnews/ (2025.5.1 参照)
東京新聞,2024, 南海トラフ「臨時情報」騒ぎの経済損失、調べもしない政府　宿泊キャンセルや運休…「迷惑の額」は隠したい？, 2024 年 10 月 8 日 06 時 00 分, https://www.tokyo-np.co.jp/article/359020 (2025.5.1 参照)

※なお、本稿中の「3.各所の反応―愛媛県下の状況」は、日本災害情報学会第 30 回学会大会(2025 年 3 月 16 日)における発表、「南海トラフ地震臨時情報に対する愛媛県下の状況」(森岡千穂、中村功)をもとに加筆・修正したものである。